

医家先哲肖像集

藤 浪 剛 一（1936）

謹みて医学博士・文学博士富士川游先生の坐右に本書を捧呈す

目 次

一 序文

二 図像

奈良平安時代

- 第一 僧 行基
- 第二 僧 観勒
- 第三 僧 鑒真

藤原時代

- 第四 丹波康頼
- 第五 丹波康頼（別個）
- 第六 丹波雅忠
- 第七 出雲広貞

鎌倉足利織豊時代

- 第八 僧 忍性
- 第九 越後丹介
- 第十 安芸守定
- 第十一 田代三喜
- 第十二 曾谷慶裕
- 第十三 曲直瀬道三
- 第十四 施薬院全宗
- 第十五 曲直瀬正琳
- 第十六 曲直瀬正純
- 第十七 御国意齋

徳川時代

- 第十八 曲直瀬玄朔
- 第十九 堀 杏庵
- 第二十 岡本玄治
- 第二十一 施薬院宗伯
- 第二十二 野間三竹
- 第二十三 戴 曼公
- 第二十四 向井霊蘭
- 第二十五 山脇玄心
- 第二十六 井上玄徹
- 第二十七 井上玄徹（木像）
- 第二十八 今大路玄淵
- 第二十九 嵐山甫安
- 第三十 杉山和一
- 第三十一 本木良意

- 第三十二 鳩野宗巴（初代）
- 第三十三 松下見林
- 第三十四 檜林鎮山
- 第三十五 寺井玄溪
- 第三十六 吉田自庵
- 第三十七 貝原益軒
- 第三十八 稻生若水
- 第三十九 越智平庵
- 第四十 山脇玄脩
- 第四十一 後藤艮山
- 第四十二 香月牛山
- 第四十三 松岡恕庵
- 第四十四 香川修庵
- 第四十五 野呂元丈
- 第四十六 奥村良竹
- 第四十七 山脇東洋
- 第四十八 井上稚川
- 第四十九 御園中渠
- 第五十 膏木昆陽
- 第五十一 吉益東洞
- 第五十二 賀川玄悦
- 第五十三 賀川玄廸
- 第五十四 平賀源内
- 第五十五 瀬丘長圭
- 第五十六 山科厚安
- 第五十七 惠美三白
- 第五十八 建郎清庵
- 第五十九 松平君山
- 第六十 山脇東門
- 第六十一 浅井凶南
- 第六十二 三浦梅園
- 第六十三 田中張海
- 第六十四 賀川有齋
- 第六十五 本本仁太夫
- 第六十六 檜林岨山
- 第六十七 宇田川玄髓
- 第六十八 吉雄耕牛
- 第六十九 本居宜長
- 第七十 前野蘭化
- 第七十一 和田東郭
- 第七十二 柚木太淳
- 第七十三 橘 元周
- 第七十四 畑 黄山

第七十五 南蹊 (宮川春暉)
第七十六 小石元俊
第七十七 小野蘭山
第七十八 緒方春朔
第七十九 多紀安長
第八十 海上随鷗
第八十一 竹内新八
第八十二 山本封山
第八十三 吉益南涯
第八十四 村井椿寿
第八十五 池田瑞仙
第八十六 杉田玄白
第八十七 杉田玄白 (木像)
第八十八 三輪東朔
第八十九 原 南陽
第九十 本木蘭汀
第九十一 片倉鶴陵
第九十二 片倉鶴陵 (木像)
第九十三 大槻玄沢
第九十四 多紀柳洲
第九十五 華岡鹿城
第九十六 川越衡山
第九十七 伊沢信恬
第九十八 各務文獻
第九十九 畑柳泰
第百 中神琴溪
第百一 賀川蘭齋
第百二 宇田川榛齋
第百三 山脇東海
第百四 奥 劣齋
第百五 華岡青洲
第百六 華岡青洲 (還曆賀像)
第百七 橋本宗吉
第百八 竹中南峰
第百九 最上徳内
第百十 江馬蘭齋
第百十一 百々漢陰
第百十二 山脇東圃
第百十三 岩崎灌園
第百十四 小森桃塙
第百十五 平田篤胤
第百十六 宇田川榕菴
第百十七 高 良齋
第百十八 小川沺庵
第百十九 岡 節齋
第百二十 宇津木昆台
第百二十一 宇津木昆台 (木像)
第百二十二 小石元瑞
第百二十三 齋藤方策
第百二十四 高野長英
第百二十五 高野長英
第百二十六 中川修亭
第百二十七 石坂蕙圃

第百二十八 帆足万里
第百二十九 河津省庵
第百三十 檜林宗建
第百三十一 堀内忠亮
第百三十二 土生玄碩
第百三十三 新宮涼庭
第百三十四 新宮涼庭 (木像)
第百三十五 原 老柳
第百三十六 水原三折
第百三十七 多紀元堅
第百三十八 吉益北洲
第百三十九 賀来佐一郎
第百四十 杉田梅里
第百四十一 難波立愿
第百四十二 山本亡羊
第百四十三 館 玄龍
第百四十四 緒方洪庵
第百四十五 大槻俊齋
第百四十六 箕作阮甫
第百四十七 鳩野宗巴 (七代)
第百四十八 賀川蘭台
第百四十九 花野井有年
第百五十 飯沼慾齋
第百五十一 三宅艮齋
第百五十二 桑田立齋
第百五十三 日高涼台
第百五十四 塩田順庵
第百五十五 広瀬元恭
第百五十六 伊東玄朴
第百五十七 川本幸民
第百五十八 本間棗軒
第百五十九 竹内玄同
第百六十 森 立之
第百六十一 権田直助
第百六十二 今村了庵
第百六十三 林 洞海
第百六十四 浅田宗伯
第百六十五 小島尙質

図像一覧*

* 本表ならびに表中の「概要」は原書にはないが、便宜上追加した。

			生没年	享年	概 要*
奈良平安時代					
1	僧 行基	ぎょうき	668-749	81	東大寺を建立。貧民を救済
2	勧 勒	かんろく	7世紀初頭		百済の渡来僧
3	僧 鑑真	がんじん	688-763	75	唐の渡来僧。本草学に精通
藤原時代					
4	丹波康頼	たんばの やすより	912-995	83	医心方を編纂
5	丹波康頼 (別個)				
6	丹波雅忠	たんばの まさただ	1021-1088	67	日本の扁鵲
7	出雲広貞	いずもの ひろさだ	9世紀初頭		大同類聚方を編纂
鎌倉室町時代					
8	僧 忍性	にんしょう	1217-1303	86	貧民医療に尽くした鎌倉時代の僧医
9	越後丹介	えちご たんすけ	13世紀頃		獣医の祖
10	安芸守定	あき もりさだ	14世紀頃		婦人科医療の祖
11	田代三喜	たしろ さんき	1465-1537	72	明にわたって李朱医学を輸入
12	曾谷慶祐	そだに けいゆう	16世紀頃		安土桃山時代の医師
13	曲直瀬道三	まなせ どうさん	1507-1595	88	田代三喜に学んだ僧医、道三流医学の祖
14	施薬院全宗	せやくいん ぜんそう	1526-1599	73	豊臣秀吉の侍医
15	曲直瀬正琳	まなせ しょうりん	1565-1611	46	秀吉、家康に仕えた医師
16	曲直瀬正純	まなせ しょうじゅん	1559-1605	46	道三の後継者
17	御蘭意齋	みその いさい	1557-1616	59	打鍼法を発明
江戸時代前期					
18	曲直瀬玄朔	まなせ げんさく	1549-1632	83	曲直瀬道三の養嗣子
19	堀杏庵	ほり きょうあん	1585-1643	58	江戸時代初期の医師、儒学者
20	岡本玄治	おかもと げんや	1587-1645	58	曲直瀬玄朔の女婿、後継者
21	施薬院宗伯	せやくいん そうはく	1576-1663	87	豊臣秀吉、徳川家康、秀忠の侍医
22	野間三竹	のま さんちく	1615-1676	61	江戸時代初期の医師、儒学者
23	戴曼公	たい まんこう	1596-1671	75	明の医師。渡来して天然痘治療法を伝えた
24	向井霊蘭	むかい れいらん	1609-1677	68	独学で医学を学んだ京都の名医
25	山脇玄心	やまわき げんしん	1594-1678	84	五代の天皇の侍医をつとめた名医
26	井上玄徹	いのうえ げんてつ	1602-1686	84	徳川家光の侍医
27	井上玄徹 (木像)				
28	今大路玄淵	いまおおじ げんえん	1636-1686	50	江戸時代前期の医師
29	嵐山甫安	あらしやま ほうあん	1633-1693	60	江戸時代前期の蘭方医、外科医
30	杉山和一	すぎやま わいち	1610-1694	84	管鍼術を創始した盲人医師
31	本木良意	もとぎ りょうい	1628-1697	69	オランダ語通訳。解剖学書を翻訳
32	鳩野宗巴 (初代)	はとの そうは	1641-1697	56	南蛮に密航して医学を学んだ蘭医
33	松下見林	まつした けんりん	1637-1704	67	医師、国学者
34	橋本鎮山	はらばや ちんざん	1649-1711	62	蘭方医。橋本流外科の祖
35	寺井玄溪	てらい げんけい	1622-1711	89	赤穂藩医。赤穂事件にも関与
36	吉田自庵	よしだ じあん	1644-1713	69	南蛮外科医
37	貝原益軒	かいばら えきけん	1630-1714	84	本草学者、「養生訓」を著す
38	稲生若水	いのうえ じゃくすい	1655-1715	60	本草学者
39	越智平庵	おち へいあん	1633-1726	93	奥医師
40	山脇玄脩	やまわき げんゆう	1654-1728	74	山脇家二代目医師
41	後藤艮山	ごとう こんざん	1659-1733	74	古方派を代表する医師。温泉医学の祖
42	香月牛山	かげつ ぎゅうざん	1656-1740	84	後世派の医師
43	松岡恕庵	まつおか じょあん	1668-1746	78	稲生若水の学問を発展させた本草学の大家
44	香川修菴	かがわ しゅうあん	1683-1755	72	儒医一本説を唱えた
45	野呂元丈	のろ げんじょう	1694-1760	66	本草学者、蘭学者
46	奥村良竹	おくむら りょうちく	1686-1760	74	江戸時代中期の医師。独自の吐方を創案
江戸時代中期					
47	山脇東洋	やまわき とうよう	1706-1762	56	古方派。初の人体解剖を行う
48	井上稚川	いのうえ ちせん	?-1764		古方派。徳川吉宗の侍医
49	御園中渠	みその ちゅうきょ	1706-1764	58	江戸時代中期の鍼医
50	青木昆陽	あおき こんよう	1698-1769	71	儒学者、蘭学者
51	吉益東洞	よします とうどう	1702-1773	71	古方派。万病一毒論を唱えた
52	賀川玄悦	かがわ げんえつ	1700-1777	77	産科医の祖。産科鉗子を発明
53	賀川玄廸	かがわ げんてき	1739-1779	40	賀川流産科学を確立
54	平賀源内	ひらが げんない	1728-1780	52	江戸時代中期の本草学者、蘭学者、発明家
55	瀬丘長圭	せおか ちょうけい	1728-1780	52	古方派。腹診術を研究
56	山科厚安	やましな こうあん	1729-1781	52	光格天皇の侍医
57	恵美三白	えみ さんぱく	1707-1781	74	吉益東洞と並ぶ古方派。吐方に優れた
58	建部清菴	たてべ せいあん	1712-1782	70	奥州の蘭医。杉田玄白と書簡で論を交わした
59	松平君山	まつだいら くんざん	1697-1783	86	地理学者、本草学者
60	山脇東門	やまわき とうもん	1736-1782	46	初の女性死体を解剖した
61	浅井図南	あさい となん	1706-1782	76	古方医、尾張藩医
62	三浦梅園	みうら ばいえん	1723-1789	66	医師、哲学者

63	田中張海	たなか ちょうかい	1732-1792	60	古方派。弁斥医断で吉益東洞を擁護した
64	賀川有齋	かがわ ゆうさい	1733-1793	60	賀川玄悦の子、産科医
65	本木仁太夫	もとき じんだゆう	1735-1794	59	オランダ通詞、地動説を初めて紹介
66	榎林岨山	ならばやし きょさん	1737-1797	60	鎮山の子、佐賀藩の蘭医
67	宇田川玄随	うだがわ げんずい	1756-1798	42	蘭医、初の内科書西説内科撰要を著した
68	吉雄耕牛	よしお こうぎゅう	1724-1800	76	吉雄流外科の祖
69	本居宣長	もとおり のりなが	1730-1801	71	医師、国学者
70	前野蘭化	まえの らんか	1723-1803	80	蘭学者、解体新書を編纂
71	和田東郭	わだ とうかく	1744-1803	59	折衷派医師
72	柚木太淳	ゆのき たいじゅん	1762-1803	41	眼科医、眼の解剖を行った
73	橋元周	たちばな げんしゅう	1728-1745	17	眼科医
74	畑黄山	はた こうざん	1721-1804	83	古方医。京都に医学院を開いた
75	橋南蹊 / 宮川春暉	みやがわ はるあきら / たちばな なんけい	1753-1805	52	医師。全国を漫遊して旅行記を著した
76	小石元俊	こいし げんしゅん	1743-1809	66	京都の蘭方医
77	小野蘭山	おの らんざん	1729-1810	81	本草学者「日本のリンネ」と称される
78	緒方春朔	おがた しゅんさく	1748-1810	62	初の人痘を行った
79	多紀安長	たき やすなが	1755-1810	55	考証派の医師
80	海上随鷗	うみがみ ずいおう	1758-1811	53	蘭学者。初の蘭和辞典を編纂
81	竹内新八	たけうち しんぱち	1735?-1811	76	眼科医、眼科四大家のひとり
82	山本封山	やまもと ほうざん	1742-1813	71	古方医、儒学者
83	吉益南涯	よします なんがい	1750-1813	63	父東洞の万病一毒論を補説、気血水薬微を著す
84	村井椿寿	むらい ちんじゅ	1733-1815	82	吉益東洞に学び、熊本再春館で講じた
85	池田瑞仙	いけだ ずいせん	1735-1816	81	大阪、京都で開業した痘医
86	杉田玄白	すぎた げんぱく	1733-1817	84	蘭方医。解体新書を著す
87	杉田玄白 (木像)				
88	三輪東朔	みわ とうさく	1747-?		刺絡医
89	原南陽	はら なんよう	1753-1820	67	古方医、水戸藩医
90	本木蘭汀	もとき らんてい	1767-1822	55	蘭仏英露語の通訳
91	片倉鶴陵	かたくら かくりょう	1751-1822	71	産科医
92	片倉鶴陵 (木像)				
93	大槻玄沢	おおつき げんたく	1757-1827	70	蘭学者、解体新書を改訂した
江戸時代後期					
94	多紀柳泚	たき りゅうはん	1789-1827	38	考証派漢方医。医籍考を著した
95	華岡鹿城	はなおか ろくじょう	1779-1827	48	古方派。外科も良くした
96	川越衡山	かわごえ こうざん	1758-1828	70	古方医。中西深齋の高弟
97	伊沢信恬	いざわ のぶさだ	1777-1829	52	江戸後期の古方医、福山藩医
98	各務文献	かがみ ぶんけん	1755-1819	64	整骨医。骨格模型を製作した
99	畑柳泰	はた りゅうたい	1765-1832	67	古方医
100	中神琴溪	なかがみ きんけい	1744-1833	89	古方医
101	賀川蘭齋	かがわ らんさい	1771-1833	62	産科医。産科鉗子を発明した
102	宇田川榛齋	うだがわ しんさい	1770-1835	65	蘭方医。稲村三伯と和蘭辞書を編纂
103	山脇東海	やまわき とうかい	1757-1834	77	山脇家五代目
104	奥劣齋	おく れっさい	1780-1835	55	産科医。初めてカテーテルを使用した
105	華岡青洲	はなおか せいしゅう	1760-1835	75	外科医。世界初の全身麻酔に成功した
106	華岡青洲 (還暦賀像)				
107	橋本宗吉	はしもと そうきち	1763-1836	73	蘭方医、蘭学者。天文学、静電気も研究した
108	竹中南峰	たけなか なんぼう	1766-1836	70	池田瑞仙に学んだ痘医
109	最上徳内	もがみ とくない	1754-1836	82	農民出身、蝦夷地の探検家
110	江馬蘭齋	えま らんさい	1747-1838	91	晩学の蘭方医
111	百々漢陰	どど かんいん	1774-1839	65	折衷派医師
112	山脇東圃	やまわき とうほ	1781-1842	61	山脇玄心六代目
113	岩崎灌園	いわさき かんえん	1786-1842	56	本草学者、本草図譜を著す
114	小森桃塙	こもり とう	1782-1843	61	京都の蘭方医
115	平田篤胤	ひらた あつたね	1776-1843	67	国学者、和方医
116	宇田川榕菴	うだがわ ようあん	1798-1846	48	蘭方医、化学者
117	高良齋	こう りょうさい	1799-1846	47	蘭方医、眼科医
118	小川汶庵	おがわ ぶんあん	1782-1847	65	古方医、奥医師。傷寒貫珠集を校訂
119	岡節齋	おか せっさい	1764-1848	84	漢方医、奥医師
120	宇津木昆台	うつき こんだい	1779-1848	69	古方医。古訓医伝を著す
121	宇津木昆台 (木像)				
122	小石元瑞	こいし げんずい	1784-1849	65	蘭漢折衷医
123	齋藤方策	さいとう ほうさく	1771-1849	78	蘭方医
124	高野長英	たかの ちょうえい	1804-1850	46	シーボルト事件に連座して逃亡した
125	高野長英 (別個)	たかの ちょうえい			
126	中川修亭	なかがわ しゅうてい	1771-1850	79	蘭漢折衷医。華岡青洲の初の門弟
127	石坂蕙圃	いしざか けいほ	1786-1851	65	蘭漢折衷医
128	帆足万里	ほあし ばんり	1778-1852	74	儒学者、経世学者、蘭学者
129	河津省庵	かわづ せいあん	1800-1852	52	漢蘭折衷医
130	榎林宗建	ならばやし そうけん	1802-1852	50	蘭方医。牛痘に初めて成功、種痘の祖
131	堀内忠亮	ほりのうち ただよし	1801-1854	53	蘭方医。初の小児科書を翻訳

132	土生玄碩	はぶ げんせき	1762-1848	92	眼科医，西洋眼科の祖
133	新宮涼庭	しんぐう りょうてい	1787-1854	67	蘭方医，順正書院で後進を育てた
134	新宮涼庭（木像）				
135	原老柳	はら ろうりゅう	1783-1854	71	大阪で緒方洪庵と並び称された名医
136	水原三折	みずはら さんせつ	1782-1864	82	産科医．産科鉗子を改良
137	多紀元堅	たき もとかた	1795-1857	62	考証派漢方医，奥医師
138	吉益北洲	よします ぼくしゅう	1786-1857	71	古方医，吉益家三代目
139	賀来佐一郎	かく さいちろう	1799-1857	58	蘭方医，本草学者，島原藩医
140	杉田梅里	すぎた ばいり	1817-1859	42	蘭方医，杉田玄白の孫
141	難波立願	なんば りゅうげん	1791-1859	68	蘭方医
142	山本亡羊	やまもと ぼうよう	1778-1859	81	本草学者
143	館玄龍	たち げんりゅう	1795-1859	64	華岡青洲に学んだ富山藩の外科医
144	緒方洪庵	おがた こうあん	1810-1863	53	大阪の蘭方医，適塾，大坂除痘館を開いた
145	大槻俊齋	おおつき しゅんさい	1806-1862	56	幕末の蘭方医，西洋医学所初代頭取
146	箕作阮甫	みつくり げんぽ	1799-1863	64	幕末の蘭学者，蕃書調所首席教授
147	鳩野宗巴（七代）	はとの そうは	1815-1863	48	幕末の外科医，熊本藩医
148	賀川蘭台	かがわ らんだい	1796-1864	68	産科医
149	花野井有年	はなのい ありとし	1799-1865	66	皇国医方（和方）の医師
150	飯沼慾齋	いいぬま よくさい	1782-1865	83	本草学者，初めてリンネ分類を採用
151	三宅良齋	みやけ ごんさい	1817-1867	50	蘭方医．英国人医師の医学書を翻訳
152	桑田立齋	くわた りゅうさい	1811-1868	57	蘭方医，小児科医，7万人以上に種痘を行った
153	日高涼台	ひだか りょうだい	1797-1868	71	広島蘭方医
幕末・明治期					
154	塩田順庵	しおだ じゅんあん	1805-1871	66	函館の医療に尽力した儒医
155	広瀬元恭	ひろせ げんきょう	1821-1870	49	蘭学者．兵書の著作も多い
156	伊東玄朴	いとう げんぼく	1800-1871	71	初めて奥医師にあがった蘭方医
157	川本幸民	かわもと こうみん	1810-1871	61	蘭方医，日本の化学の祖
158	本間棗軒	ほんま そうけん	1804-1872	68	蘭方医，水戸徳川齊昭の侍医
159	竹内玄同	たけのうち げんどう	1805-1880	75	蘭方医，奥医師
160	森立之	もり りっし	1807-1885	78	幕末の漢方医
161	権田直助	ごんだ なおすけ	1809-1887	78	幕末明治期の和方医，国学者
162	今村了庵	いまむら りょうあん	1814-1890	76	漢方医，明宮の侍医
163	林洞海	はやし どうかい	1813-1895	82	蘭方医，奥医師，陸軍軍医総監
164	浅田宗伯	あさだ そうはく	1815-1894	79	最後の漢方宮中侍医
165	小島尙質	こじま なおかた	1797-1849	52	医学館の考証派医師

索引

あおき こんよう	青木昆陽	50
あき もりさだ	安芸守定	10
あさい となん	浅井囃南	61
あさだ そうはく	浅田宗伯	164
あらしやま ほあん	嵐山甫安	29
いいぬま よくさい	飯沼悠齋	150
いけだ ずいせん	池田瑞仙	85
いざわ のぶさだ	伊沢信恬	97
いしざか けいほ	石坂蕙圃	127
いずもの ひろさだ	出雲広貞	7
いとう げんぼく	伊東玄朴	156
いのうえ げんてつ	井上玄徹	26
いのうえ げんてつ	井上玄徹(木像)	27
いのうえ じゃくすい	稲生若水	38
いのうえ ちせん	井上稚川	48
いまおおじ げんえん	今大路玄淵	28
いまむら りょうあん	今村了庵	162
いわさき かんえん	岩崎灌園	113
うだがわ げんずい	宇田川玄随	67
うだがわ しんさい	宇田川榛齋	102
うだがわ ようあん	宇田川榕菴	116
うつき こんだい	宇津木昆台	120
うつき こんだい	宇津木昆台(木像)	121
うみがみ ずいおう	海上随鷗	80
えちご たんすけ	越後丹介	9
えま らんさい	江馬蘭齋	110
えみ さんぱく	恵美三白	57
おおつき げんたく	大槻玄沢	93
おおつき しゅんさい	大槻俊齋	145
おか せっさい	岡節齋	119
おがた こうあん	緒方洪庵	144
おがた しゅんさく	緒方春朔	78
おかもと げんや	岡本玄治	20
おがわ ぶんあん	小川汶庵	118
おく れっさい	奥劣齋	104
おくむら りょうちく	奥村良竹	46
おち へいあん	越智平庵	39
おの らんざん	小野蘭山	77
かいばら えきけん	貝原益軒	37
かがみ ぶんけん	各務文献	98
かがわ げんえつ	賀川玄悦	52
かがわ げんてき	賀川玄迪	53
かがわ しゅうあん	香川修菴	44
かがわ ゆうさい	賀川有齋	64
かがわ らんさい	賀川蘭齋	101
かがわ らんだい	賀川蘭台	148
かく さいちろう	賀来佐一郎	139
かげつ ぎゅうざん	香月牛山	42
かたくら かくりょう	片倉鶴陵	91
かたくら かくりょう	片倉鶴陵(木像)	92
かわごえ こうざん	川越衡山	96
かわづ せいあん	河津省庵	129
かわもと こうみん	川本幸民	157
がんじん	僧 鑒真	3
かんろく	勧勅	2
ぎょうき	僧 行基	1
くわた りゅうさい	桑田立齋	152
こいし げんしゅん	小石元俊	76
こいし げんずい	小石元瑞	122
こう りょうさい	高良齋	117
こじま なおかた	小島尚質	165
ごとう こんざん	後藤艮山	41
こもり とうう	小森桃塙	114
ごんだ なおすけ	権田直助	161
さいとう ほうさく	齋藤方策	123
しおだ じゅんあん	塩田順庵	154
しんぐう りょうてい	新宮涼庭	133
しんぐう りょうてい	新宮涼庭(木像)	134

すぎた げんぱく	杉田玄白	86
すぎた げんぱく	杉田玄白(木像)	87
すぎた ばいり	杉田梅里	140
すぎやま わいち	杉山和一	30
せおか ちょうけい	瀬丘長圭	55
せやくいん ぜんそう	施薬院全宗	14
せやくいん そうはく	施薬院宗伯	21
そだに けいゆう	曾谷慶祐	12
たい まんこう	戴曼公	23
たかの ちょうえい	高野長英	124
たかの ちょうえい	高野長英(別個)	125
たき もとかた	多紀元堅	137
たき やすなが	多紀安長	79
たき りゅうはん	多紀柳泮	94
たけうち しんぱち	竹内新八	81
たけなか なんぼう	竹中南峰	108
たけのうち げんどう	竹内玄同	159
たしろ さんき	田代三喜	11
たち げんりゅう	館玄龍	143
たちばな げんしゅう	橘元周	73
たてべ せいあん	建部清菴	58
たなか ちょうかい	田中張海	63
たんばの まさただ	丹波雅忠	6
たんばの やすより	丹波康頼	4
たんばの やすより	丹波康頼(別個)	5
てらい げんけい	寺井玄溪	35
どど かんいん	百々漢陰	111
なかがみ きんけい	中神琴溪	100
なかがわ しゅうてい	中川修亭	126
ならばや ちんざん	榎林鎮山	34
ならばやし きよさん	榎林崑山	66
ならばやし そうけん	榎林宗建	130
なんば りゅうげん	難波立愿	141
にんしょう	僧 忍性	8
のま さんちく	野間三竹	22
のろ げんじょう	野呂元丈	45
はしもと そうきち	橋本宗吉	107
はた こうざん	畑黄山	74
はた りゅうたい	畑柳泰	99
はとの そうは	鳩野宗巴(初代)	32
はとの そうは	鳩野宗巴(七代)	147
はなおか せいしゅう	華岡青洲	105
はなおか せいしゅう	華岡青洲(還曆賀像)	106
はなおか ろくじょう	華岡鹿城	95
はなのい ありとし	花野井有年	149
はぶ げんせき	土生玄碩	132
はやし どうかい	林洞海	163
はら なんよう	原南陽	89
はら ろうりゅう	原老柳	135
ひだか りょうだい	日高涼台	153
ひらが げんない	平賀源内	54
ひらた あつたね	平田篤胤	115
ひろせ げんきょう	広瀬元恭	155
ほあし ばんり	帆足万里	128
ほり きょうあん	堀杏庵	19
ほりのうち ただよし	堀内忠亮	131
ほんま そうけん	本間棗軒	158
まえの らんか	前野蘭化	70
まつおか じょあん	松岡恕庵	43
まつした けんりん	松下見林	33
まつだいら くんざん	松平君山	59
まなせ げんさく	曲直瀬玄朔	18
まなせ しょうじゅん	曲直瀬正純	16
まなせ しょうりん	曲直瀬正琳	15
まなせ どうさん	曲直瀬道三	13
みうら ばいえん	三浦梅園	62
みずはら さんせつ	水原三折	136
みその いさい	御蘭意齋	17
みその ちゅうきよ	御園中渠	49

みつくり げんぼ	箕作阮甫	146
たちばな なんけい	橘南蹊	75
みやがわ はるあきら	宮川春暉	75
みやけ ごんさい	三宅良齋	151
みわ とうさく	三輪東朔	88
むかい れいらん	向井靈蘭	24
むらい ちんじゅ	村井椿寿	84
もがみ とくない	最上徳内	109
もとおり のりなが	本居宣長	69
もとき じんだゆう	本木仁太夫	65
もとき らんてい	本木蘭汀	90
もとき りょうい	本木良意	31
もり りっし	森立之	160
やましな こうあん	山科厚安	56
やまもと ほうざん	山本封山	82
やまもと ぼうよう	山本亡羊	142
やまわき げんしん	山脇玄心	25
やまわき げんゆう	山脇玄脩	40
やまわき とうかい	山脇東海	103
やまわき とうほ	山脇東圃	112
やまわき とうもん	山脇東門	60
やまわき とうよう	山脇東洋	47
ゆのき たいじゅん	柚木太淳	72
よしお こうぎゅう	吉雄耕牛	68
よしだ じあん	吉田自庵	36
よします とうどう	吉益東洞	51
よします なんがい	吉益南涯	83
よします ほうくしゅう	吉益北洲	138
わだ とうかく	和田東郭	71

序文

西洋の書肆の店頭、医家の肖像画或は手術、或は診察、或は研究室の光景を描いた板画などを描いているなどは日本に見られない学界の小景である。帰朝の折、此等の絵画を求め置けば好箇の記念にもなり、又土産にもなる。ミュンヘン医事週報が比較的近代の大家肖像を付録として読者に頒っているなどは、学者の面影を偲ぶ上に、良い資料となるものである。

西洋でも、日本でも、学者は多く重厚の態度を持っている。随って世間も亦た篤く、これに遇するものであるが、唯泰西に於ては、社会にユーモアの気分が富んで居るから、学者を尊重する一方、巧みに学者の性癖を捉えて、これを写し、能く天真爛漫たる半面を世に紹介する。しかも、それが決して学者に対する礼を欠くに至らないのである。我国に於ては、この点とかく生一本の調子に陥り易く、学者を見るに、動もすれば超世間の態度となるの傾向がある。それでは学者気質の半面観を描き得るが、未だ全貌に渡らないの憾が有つて、如何にも窮屈である。

学者の伝記、學術の歴史に関する著書は、泰西には可なり多分に在る、我が国に於ても、高僧、武将、偉人、学者、名匠の伝記、逸話を纏めた書籍は多い。今さし当り、我が記憶を辿つても、日本高僧伝、元享釈書、近世偉人伝、常山紀談、近世叢語、近世畸人伝等が、すぐ頭に浮ぶ。又肖像を図録したものには千徳図録、先哲像伝、前賢故実等を数え上げることが出来る。

我が国に於ては、古くから世代の寿像を作らしめて、これを子孫後昆に伝うるの風がある。そしてこれは必ずしも武家、寺家などに限らず、弘く行われた風がある。殊に大名、重臣、高僧、学者、画家等の肖像画は、家門の縁故から、又画家の関係から、割合に世間に知られているものが多い。而して、能くその子孫に伝承せられ、或は由縁ある寺院等に保管されているものは、何かの機会に於て展覽せられ、触目することも出来るが、その画像を纏めた肖像集の如きは、或一部の外、概して公刊せられていないようであり、それも真影を集めたものは乏しいようである。

二

先哲の伝記^{ひもと}を繙き、或は名家の遺墨を観るときは、その人の風格その人の雅趣、その人の気品^{なつ}を懐い、愛慕尊崇の念そぞろに禁じ難きを覚えるのである。しかし、これだけでは、まだその人物の全貌を窺知するに足りないのを遺憾とする。しかも、若しそこに、その人物の影像^{むか}があつて、親しく之れに對うことゝなれば、ま

た格別の感情が新たに湧き来つて、真にその人に接するが如き思いあらしめるのである。而して、嘗てその人の行状記から想像した面影は、写真によれば案外の風姿であつたことに驚くこともあり、或は輕妙洒脱の筆蹟から考へた先哲は、^{おも}意わぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰うこともある。おもうに、行状記、筆蹟などから、その人の風^{ふう}豊^{ほう}を偲ぶは、恰も烟雨の懸つた山容を見るが如く、^{とうろ}罩^{ほうりょう}露一たび晴れて、山景の真を現わせば、峯嶺更に別様の觀あつて、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき伝記は、未だ真にその人の人格風姿の全貌を伝えざる低調の非難を免れがたいのである。

三

我が医学の發達の歴史を、回溯的に明治初代の洋医翻譯時代から、江戸幕府の末期に於ける蘭医流行、蘭藥の輸入、同中期頃の漢医学の爛熟期、それより江戸初期の南蛮医藥の片鱗に触れた洋医搖藍時代、慶長・天正時代の漢医学の勃興期、足利・鎌倉時代の民間藥療法、藤原・平安時代に於ける呪術治療、奈良期に於ける僧医時代と回顧すれば、その間に幾多の傑出したる医星が燦然としてその座位を占むるを看取するのである。云う迄もなく、此等先哲は何れも時代の先覚者である。そして、その修習したる学説と経験したる博大の知識を以て、医学の進歩に一歩づつその足跡を留めて、次代への指針を遺し、我が医学の誇として当時の杏林に陸離たる光彩を放つたのである。かくて時代を画したる學術も、次代には更に精微となり、周密となり、尽くることなき我が医学の進歩は、源淵たる支那医学よりも遙に發達進展して、見るべき業績の顕揚せることは、実に著大なるものである。又更に蘭医学を咀嚼消化して、漢蘭折衷學が新たに唱えらるゝに至るなど、我が先哲の底知れぬ學問の深さと苦心の大いさとは、まことに痛切に感ぜられるのである。そうして、この力はやがて明治の洋医勃興に於ける原動力となつたのである。今日我が医学が泰西諸国と比肩して、毫も學術的進歩に劣らざるものは、畢竟先哲^{ひつきょう}の學問が捨石となり、その苦心が遺伝したからである。茲にそれ等を思い廻らせば、先哲の鴻大なる學恩に對して、限りなき敬慕の情に堪え難いのである。

四

我が医家先哲の伝記書は必ずしも少くはない。指を屈すれば、山本善美の海内医林伝、宇津木昆台の日本医譜、畑惟龍の皇国医林伝、賀島近信の皇朝医史、山科元幹の本朝医蹟、万年純の皇国医系、安芸道恕の歴世尚藥略伝、浅田宗伯の皇朝名医伝、松尾耕三の近世名医伝などが数えられるのであるが、更に寛永医家系図

伝、寛政重修諸家医譜の如き官撰のものをも加え得るのである。而して、明治大正の時代に至りては、医学の研究頼みに、その歩を進め、鑽^{けんかく}鑽^{けんかく}の学人相集^{いまいよ}り会するの氣運益盛なると共に、先哲の伝歴所関の著述愈々多からんとするは、聖^{せいだい}代学界の為に慶賀に堪えざる所である。かくて刀圭家伝記の研究は隆盛を致しているが、遺憾に思われるのは、此等医家先哲の肖像を集めて剗^{きけつ}剗^{きけつ}に付したものが未だ曾て見当らない事である。自分は曩^{ささ}に松平樂翁公が、谷文晁^{たにぶんちやう}に命じて描かしめた知友画像集を、東京帝室博物館に覽て、心私かに公の友情篤き遺徳を偲^{しの}びつゝ、その書を繙^{ひもと}き、当代知名の先覺の風姿に対して、飽かぬ情懷に耽^{ひた}つたことがある。

先にも述べた如く、我が国には古くから、画像を家に伝える慣わせがあり、医家に於ても同じく寿像を作ったものが相当に多いのであった。医家は一つには社会的位置が比較的良かった為め、又他には生活も豊かであったことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかった訳である、乃ち医家にありては、随分世代に亘^{わた}つて描かしめた肖像が伝わっているのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携えて家に歸り、その家に伝えるというようなこともあるから、医を業とするものゝ多いだけ、他に比すれば医伯の像は世間に流布したものの^{やや}も稍多いのであった。然し「石碑不及口碑存」(石碑は口碑に及ばずして存す)底の高踏主義から、画像などに無頓著であった名家もある、例えば、蘭医の大家桂川甫筑^{ほちく}の一家、又は奈須玄盅^{げんちゆう}、坪井誠軒^{せいけん}などが画像を遺さなかつたことは、周く知られている所である。さりながら、後世からいえば、医史考證の上から、又尊崇の情を満たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。随つて到底それに接し得ざるものがあれば学界にとつての憾事の極みである。

五

今日医家先哲の画像の遺されている数は、しかし余り多くはない。嘗て、富士川游先生は中外医事新報に名医伝を執筆せられたことがあるが、それには先生が遺族からの寄贈による写真を添えられている。そして、更に又、同先生が一々遺族を訪ねられて、家蔵の肖照から複製せられた画幅もあるが、それ等は決して多数ではないのである。富士川先生の蒐集当時、即ち明治の中頃には、医門旧家が相当に門戸を張つて家業を継いでいたから、家伝の肖像も見る事が出来、又伝写も出来た。既に明治維新による改革と共に没落した医家も相当に在つて、それ等の家蔵品は夙^{つと}に失われて居つた。然し、時と共に凋落し來つた家も、尚明治中頃には微かながらも存したのであったが、今日に至りては、その没落一段激しく、富士川先生が当時訪れられた旧

家も、最早や跡かたさえ残らないのを知つて、自分は少からぬ失望を抱かしめられた。またよし訪ね当て得た処で期待した資料は絶無となり、予て聞き及んでいる画像すら不明になっているのも多いのであった。殊に大正十二年九月に於ける東京大震火災の厄は、幾多医学界の旧家を焼いた。栗本家、喜多村家、杉田家、片倉家、今村家等名門の家は失くなり、家蔵の什具は悉く烏有^{うゆう}に歸した。このことは、資料に乏しき画像の益々少くなつた大きな原因である。杉田玄白の画像、木像、片岡鶴陵の木像、岡勁齋等の画像は余の記憶に依るも、この災厄を以て失われたものである。

医家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、画像を展^のべて、自ら像前に酒瓶を供え、少年の自分にも共に礼拝せしめられたことを覚えている。そして、その時は何時も、祖父の師に当る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た関係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた為か、自分は何となく画像に対して、こよなき尊重愛惜の情念を持つことゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機縁を醸成したのである。大正の大火災に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに壹百六十余种の画像を蔵するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この医家先哲肖像集の一編である。

大正の火災に遭つた自分の辛い経験から、失われ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思い立ちながら、荏^{じん}苒^{ぜん}歲月が徒らに経過するのみで、遂に今日に及んだのであった。もとより自分の蒐集は、決して満足すべきものでなく、尚集成と称するには余地が甚だ多いからである。即ち鷹取秀次、中條帶刀、栗崎道喜、古林見宜、味岡三伯、岡本一抱、名古屋玄医、黒川道祐、後藤椿庵、永富独嘯、北山友松、岑少翁、中西淡齋、望月鹿門、山田図南、三宅意安、戸田旭山、丹羽正伯、河口信任、荻野元凱、目黒道琢、田村元雄、太田長元、服部玄広、栗本瑞見、小川筌船、衣関順庵、蛭田克明、奈須玄盅等主挙すべきものさえ百余を算えるのである。しかし、それ等は到底容易に蒐め得るものではない、偶々^{たまたま}その人に擬すべき肖像を発見することもあるが、それが果して信すべきものかの真否の鑑識は洵に覺束ないのである、又名門の遠裔^{えんえい}にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝医道から觀て大切な先哲の肖像若干を収め得ざることは恰も齒の抜けたようなものであるが、さあれ、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの医家先哲肖像集一編を刊し、若し、他日機あれば拾遺^{しゅうい}の編を出すを可なりとし、一先ず茲にこれを上版することにしたのである。

六

泰西に於ても、医家先哲の肖像は多く遺って居り、伝記書も相等に出版されている。泰西の画像は、近世に至っては余り象徴的の装飾を加えないが中世紀頃には寓喩を加えた画像の多くを観たのである、そしてそれがその時代の特色であった。即ちその先哲を飾るべく、その先哲の履歴に因んだ表象を以て画像の周辺を装うのである。故に若しその寓喩の意味、表象の事実を知るときは、その先哲の面目を一層躍如たらしめるものもあるのである。絢爛にして豪華なるルネサンス芸術期に至りては、画像は人間的現実よりは寓喩の象現による連想の観念に重きを置くの傾向を長じ、主体よりも付属物に重要性を有せしむるものがあった、その場合主客顛倒の譏を免れないのであった。而してまた、寓喩的の象現は、時に画像の人物を偶像化せしめる嫌いを生じたのであった。かゝる寓喩の象現とは、例えば病者を看護する意味から鶏を以て臨床家を現わし、又昔の強心薬であったから、鈴蘭を以て本草を意味せしめ、龍が疫病を祓うの意を寓し、蝶が世を去る靈魂を表象し、蛇が「蛇の如く賢かれ」の語の如く賢明を意味するの類である。又医神アスクレピオスの象徴動物であることから、転じて医学の象現となり、又モーゼがイスラエルの民を蛇禍から救い出した古典によって禍災を表示するが如き色々の場合もある。また、鳩は病院の標章であり、鶴は保健の表示であった。此等の寓喩を理解して中世期の画像に対する時は、一段の親しみを持つことが出来るのであるが、然し、近世に至りては、その反動思想から、画像は単一化して描かるゝことになった。それは他の芸術と同様である。

七

我が国に存する画像には、時代を画すべき表示的描法はなかった。常に全幅唯その人を飛躍せしむるの余裕を残す手法で、東洋芸術の純味を持っているから、付属的の装飾は殆んど無いのであった。若しまた装飾のものがあった処で、それは画像の即興的の手法であり、余興的の仕草であり、画面の釣合から施された配置に過ぎないから、泰西の画に示すが如き象現の意味は無いのである。然しながら、我が画像には讃詞の題せられたものが多い。これは泰西画に見る銘記とは全く意味の異ったもので、之れも東洋芸術に副う一異彩である。

今試みに、医家の自署した讃詞の二三を拾って見よう。

曲直瀬翠竹院道三は、元亀、天正の頃、輦轂の下に在って、李朱の医学を正統に伝え、これを天下に弘めて、我が医学中興の祖とせられた人である。そして、その方術には雲上の御帰依深く、典薬頭の榮を荷うに至つ

た。しかのみならず、彼はまた豊公始め幾多の武将から一世の崇仰を受けたのであった。その道三が七十歳の時に画かした像に題したのは、



一今門下生、幼而学、自少至壮侍予局傍。以玄朔為諱、以東井為字也。功嗟以授普救之德、琢磨而付講読之業。故今也欲使啓迪後人而令宮陋屋。竊以不遠千里而負笈索師、縑素盈席、香輪茅鞋、而告病受療養、貴賤競門。是即有朋自遠方來、亦不樂乎。德不孤心有隣之謂也。莫倦莫懈時因丹青名工狩野貞延、図予頑像、以責俗偈。不得默止。

説脈談治術日新。生涯手卷跋風塵。姪孫博施求奇効。徑授靈方影動唇。

天正第五丁丑年、臘月 一溪叟道三、書于翠竹庵中。[1]



という讃詞であった。道三既に大に名を成したるも、尚医道を守り、仁を施して驕らず、読書工夫、奇効を求めて倦まざるものがあった。この気概は天下の名医たるの品位存する所である。而して、一たび是を誦すれば、無限の教訓、吾人の怠惰を戒むるに足るのである。

1. 一今門下の生、幼にして学び、少より壯に至るまで、予が局傍に侍す。玄朔を以て諱と為し、東井を以て字とす。功を嗟むて普救の徳を授け、琢磨して講読の業を付す。故に今や後人を啓迪使んと欲し、而して陋屋を営む。竊かに以うに、千里を遠しとせず、而して笈を負いて師を索め、縑素席に盈ち、香輪茅鞋、而して病を告げて療を受け、貴賤門に競う。是れ即ち、朋あり遠方より來たる、亦た樂しからずや。徳は孤ならず心に隣ありの謂なり。倦むこと莫く、懈ること莫く、時に丹青の名工狩野貞延に因りて、予が頑像を図せしめ、以て俗偈を責む。黙止するを得ず。

脈を説き治を談じ術日に新たなり。生涯の手卷風塵を跋む。姪孫博く施し奇効を求む。徑に靈方を授け、影に唇を動かす。

天正第五丁丑の年、臘月、一溪叟道三、翠竹庵の中に書す。

→ 一今は私の門下となり、幼いころから學問を修め、若いころから壯年になるまで、私のもとに仕えてきた。

本名を玄朔、字を東井という。その働きは功績を積み重ねて、人々を広く救う徳をもたらし、努力を重ねて講義や読書の業に励んだ。そして今、彼は後進を導くため、小さな学舎を営もうとしている。思うに、千里の道のりを遠いともせず、荷物を背負って師を求めて来るものがある。僧侶も俗人も集まり、香を焚き草鞋を履いて(礼を尽くして)訪れ、病を訴えて治療を受ける。身分の上下を問わず、門前に人が押し寄せる。まさに論語にいう「友達が遠方から訪ねてくる。なんと楽しいことではないか」ということであり、また「徳を持つ者は孤立せず、必ず心を寄せる人が現れる」という言葉の通りである。彼は倦むことも怠けることもなく、時に狩野貞延という絵の名人に私の愚像を描かせて、それを俗世への贈り物として託してくれた。私は黙って断ることはできなかった。

脈を診て治療を語り、その術を日々新しくした。その生涯に残した巻物は、苦難を乗り越えた証である。その子孫は広く施療して、特別な効き目を求めてきた。彼はすぐに靈妙な処方を受け、患者は息を吹き返したものである。

天正五年十二月 一溪叟道三、翠竹庵にて書す。

曲直瀬玄朔は道三の孫であった、そして、祖父の遺業を継いで、益々その道に精進し、子弟門人、その麾下に聚るもの無慮五百に達し、一家医流の旺盛当代の誉とせられた。彼は自らの肖像に、



辛勤医業救天傷。意在衆人自己忘。老去得願神妙術、安心是藥更無方。嫡孫典藥頭玄鎮、命画工模写予悴像、求贊語。不克辞讓。以汚楮上云爾。

寛永八辛未歳、孟夏吉辰、東意隻玄朔 八十三歳 [1]



と題した。

玄朔年若きとき豊臣秀次の事に座し、常陸に流適し、辛勤すること数年、後ち京都に遷り、道三の教を守りて倦まず、その間に多くの著述を遺した。後ち江戸幕府に召されて寵任甚しく、姓を今大路と改め、世代医官の筆頭となり、大名格を以て遇せらるゝに至った。玄朔毫も驕らず益々医道に精進し、妙術を体験し、遂に老去得願神妙安心是藥更無方と喝破せし所到底庸医の想いも及ばざる心境であって、思趣清爽、腋下に涼風の颯々たるを覚える。

越智平庵は名門の出である。彼の祖父正淋が家には数千巻の医書が蔵せられた。養安院蔵本として世に喧伝せられるのは是れである。しかし、正庵は徒らに蠹魚の間に空理を求めんよりは、早く出でて救療の術を修むるを良しとし八王子在にあってその道に努めた、そして後ちに法印となった。



伝真是非真。写照何所照。只覺添眼華。堪發他一咲。 [2]



はその肖像の題詩である。

平庵は淡白な性質で、得る所の金帛は手に随いて散じ尽し、毫もこれを惜まないのあった。題詩も乃ち一味の禅意を帯び輻達高潤の性格を表し、脈々たる生気を発している。

貝原益軒は、自ら書して曰く、



平生心曲有誰知。常畏天威欲勿欺。存領没寧雖不克。朝聞夕死豈不悲。幼求斯道在孤懷。徳業無成夙志乖。八十五年為曷事。読書独樂是生涯。 [3]



と、益軒先生にして始めて謂い得べき所である。その意よく徹し、穢心忽ち消尽し邪思を浄化す、真に教訓の逸品であり、朗々誦すべきものである。

吉益東洞は一世の豪傑である。豪邁の氣宇、その篤く信ずる所に向って主張を枉げず、三十余年の努力、遂に医界をして、その風に靡かしむるに至った。彼は門人の乞うがまゝにその照影に題した



死生有命。救疾之慎。万病一毒。毒去無疾。 [4]



まことに自説を述べて余蘊なきもの、簡素瀟洒、よく東洞の風格を躍然たらしめている。

田中張海は吉益東洞の高足である。東洞が万病一毒の学説を吐いてから、学者の論議は沸いて尽きざるものがあつた。蓋し徳川時代漢医学の爛熟期を之れによって一画したのである。張海は吉益派の驍将として反東洞派を駁し、論旨を徹底せずんば已まなかつた英姿は、今日医界の論争と、その趣を同じうしている。此闘争に燃えつゝ張海が自ら肖像に題した。

1. 医業に辛勤して天傷を救う。意は衆人に在りて自己を忘る。老い去りて願を得る神妙の術、安心は是れ薬にして、更に方無し。嫡孫、典藥頭玄鎮、画工に命じて予が悴像を模写せしめ、贊語を求む。辞讓するを克わず。以て楮上を汚すところに爾か云う。

寛永八年辛未歳、孟夏の吉辰、東意隻玄朔、八十三歳。

→ 医業に専心し、夭折する者、怪我人を救ってきた。心は常に人々のためにあり、自分自身のことは忘れていた。老いてなお健康を保つ秘訣は、安心こそが薬であり、それ以上の処方はない。嫡孫である典藥頭玄鎮が、画工に命じて私の肖像を模写させ、贊辞の言葉を求めてきた。辞退もできないので、紙を汚す拙文ながらこう記す。

寛永8年(1631年)初夏吉日、東意隻玄朔、83歳。

2. 真真を伝えるは真にあらず。写照何の照す所ぞ。只、眼華を添うるを覚ゆ。他に一咲を發するに堪えたり。

→ 真を伝えるというのが、それは本当の真ではない。写し描いて照らすというのが、いったい何を照らしているのか。ただ、見た目は華やかに見えるだけであるが、それでも他人を笑わせるには十分だ。

3. 平生心曲、誰か有りて知らん。常に天威を畏れ、欺く勿からんと欲す。存領して没するは寧ろと雖も、克くせず。朝に聞いて夕に死す、豈に悲しまずや。斯の道を幼にして求め孤懷に在り。徳業成ること無く、夙志乖く。八十五年、曷の事か為す。読書し独り楽しむは生涯なり。

→ ふだんの私の心の奥を、誰が理解してくれるだろうか。いつも天の威光を畏れ、天を欺くことのないようにしてきた。平素から抱いてきた心の奥底を、いったい誰が理解してくれるだろうか。常に天の威を畏れ、欺くまいと心がけてきた。天命を保ち、死を迎えることが安らかであるとはいえ、思うようにはできない。朝に道を聞いて夕に死すとも、それはやはり悲しいことではないか。幼いころからこの道を求めたが、ひとり胸の内に秘めてきた。徳も業も成し遂げることなく、若き日の志は果たせなかった。八十五年の人生、何をしたのか。ただ読書してひとりで楽しむことこそが、私の生涯であった。

4. 死生に命有り。疾を救うこれ慎む。万病は一毒なり。毒去りて疾無し。

→ 生死は天命に定まっている。病を救うには慎重であるべきである。あらゆる病もその根は一つの毒にある。その毒が除かれれば病はなくなる。



旅館窮陰燈陰寒。疾医方術樂瓢箪。放曠奇士泣途極。反復人情奈路難。冀北幾年期伯顧。豐城何日遭雷看。壯心未去皆堪笑。箕踞空歌伏櫪歎。年年為客滯三津。況復今春遇誕辰。雪讓衰容雙白鬢。梅哈瘦骨半紅唇。齡同伯玉不能化。志学越人難得真。小子誤比千載樹。願將貞節護斯身。[1]



の長詩を看れば、その志節の剛強なる、その識見の卓絶なる、想うに余りありというべきである。彼が鬱然として一世の冠冕たりしもの、また所以なきではない。

村井椿寿は、吉益東洞門四天王の一人とも称すべき学者である。彼は業を修めて熊本に帰り、父見朴に継いで、その帷を垂れ東洞の学派を汲んで毫も他に譲らず、衆医を屏息せしめて、九州を風靡し、吉益派の探題職と称すべきものであった。椿寿は、しかし一面では音曲の愛好者であった。彼は別に琴山と号し、襟懷清逸そるるに雅趣を弄んだのである。晩年脱俗の境に入った彼は、自ら肖像に、



迂貌拙形。似焉似焉。天下後世。笑焉咲焉。[2]



の語を題した。先言論堂々筆戦鋭く敵の心胆を寒からしめた当年の椿寿と同人かと疑わしめる。彼れと張海とを比すれば、実に面白い対象である。

百々漢陰は豪邁耿介の士である。彼は我が医方の漢土医学の糟粕に過ぎず、未だ純然たる本朝医道の本体を見ざるを慨し、又常に医道の顔姿を戒めた。



画虎模龍終不就。志高才劣歳空徂。回思六十年来跡。紙故堆中一白魚。形軀委土作塵虚。神向冥々翔有余。仏閻王与非我友。烟霞佳处別謀居。三句絶殺命如綫。旦暮定去歸九泉。要認余吟魂所在。祇園長樂翠微辺。[3]



は肖像の自題である。仏閻王与非我友の詞、結句と併せ見て、その風懷を想うべきである。

橘元周は江戸幕府の医官、世々法印に叙せられた名門の出である。彼は頗る温厚篤実の人であった。その自ら肖像に題して、



克己復礼。近取我門。非医勿視。非医勿謂。[4]



といいしものは、蓋し医家の格言として上乘の所作、日常之を守らば誤なしとすべきである。

華岡青洲は仏心鬼手の化身である。一たび刀を取って腕を揮へば病魔を断ずる春妙術の技は、我が外科学の誇である。彼の発明したる全身麻醉薬は、世界に向つて今猶万丈の気焰を吐き得るのである。



竹屋蕭然鳥雀喧。風光自適臥寒村。唯思う起死回生術。何望輕裘肥馬門。[5]



1. 旅館の窮陰、燈陰寒し。疾に医方の術、瓢箪を楽しむ。放曠の奇士は途極に泣き、反復の人情は路の難きを奈せん。冀北幾年か伯顧を期し、豊城の何れの日か雷看に遭わん。壮心いまだ去らず、皆笑うに堪えたり。箕踞して空しく歌う、伏櫪の歎。年年客と為りて三津に滞る。況やまた今春も誕辰に遇う。雪は讓る衰容雙白の鬢。梅は哈う瘦骨半紅の唇。齡は伯玉と同じくして化する能わず。志は越人に学びても真を得がたし。小子、誤り千載の樹に比す。願わくは貞節を將ちて斯の身を護らん。

→ 旅館の一隅で、寒さが身に染みる。病を得て医者にかかり、瓢箪酒に慰めを求める。自由奔放な奇人も、旅路の果てに涙し、人情の移ろいを思い返して、道の困難にどうすることもできない。冀北で幾年も友人との再会を期してきたが、(豊城の劍の雷看の故事のように)いつ突然に邂逅できるのだろうか。若い志はまだ消えず、周囲には笑われるばかりである。脚をのばして座り、空しく歌い、小屋に繋がれた馬のように歎息する。年ごとに旅人として三津に滞在している。今年の春もまた誕生日になった。衰えた容貌には雪もその白さを譲るほどみあげが真っ白になっている。梅が瘦せた骨を笑い、唇だけがわずかに紅を残す。年齢は伯玉と同じだが、そのように変化することもできない。志の高い越人(昔の学者)のようになるのは難しい。若輩者の自分は、千年の大樹と比較することはできない。願わくは、この身を清く正しく守りたいものである。

2. 迂貌拙形なり。焉に似たり、焉に似たり天下後世。焉を笑う、焉を咲う。

→ のんびりと不器用な外見。まさしくそれに似ている、本当にその通りだ。天下の人も、後の世の人も、これをあざ笑い、あるいは微笑む。

3. 虎を画き、龍を模して終に就らず。志高く才劣り、歳空しく徂く。回して思ふ六十年来の跡。紙故きを堆くする中、一つの白魚あり。形軀土に委ね土に塵と作りて虚し。神は冥々に向かいて翔けて余り有り。仏と閻王我が友にあらず。烟霞の佳なる処に別に居を謀らん。三句殺を絶ちて命綫の如し。旦暮に定めてりて九泉に帰り去らん。認むるを要す、余が吟魂の在る所。祇園、長樂、翠微の辺。

→ 虎を描き、龍を模そうとしたが、ついに完成しなかった。志は高かったが才能が伴わず、歳月は空しく過ぎた。振り返れば、六十年の足跡。古紙の山の中に、ただ一枚の詩文があるばかりである。肉体は土に還つて塵となり、精神は虚空に向かって翔び、なお力が余っている。仏も閻魔も私の友ではない。美しい烟霞の地に、別の住まいを求めよう。三十日間、穀物を絶ち、命は糸のように細くなった。朝夕を定めて、いよいよ黄泉の国へと歸ろう。どうか覚えておいてほしい、私の詩魂がある場所をそれは、祇園、長樂、翠微のあたりである。

4. 己に克ちて礼に復る。近く我が門に取れ。医に非ざれば視ること勿れ。医に非ざれば謂うこと勿れ。

→ 自分に打ち勝ち、礼の道に立ち戻れ。身近ではまず私の門下を選べ。医者以外は患者を診るな。医者以外は医学を語るな。

5. 竹屋蕭然として鳥雀喧し。風光自ら適いて寒村に臥す。唯起死回生の術を思ふ。何ぞ輕裘肥馬の門を望まん。

→ 竹で建てた家は草深く静かにたたずみ、小鳥たちがにぎやかに鳴いている自然の景色は心に適い、寒村に身を横たえる。ただ起死回生の医術を思い求める。贅沢な暮らしや立派な家門などどうして望もうか。

は彼が肖像の題詩であった。

青洲は紀州平山の僻村に門戸を構えたが、百里の途を遠しとせず、診を求め療を乞うもの常に門戸に満ち、又華岡流の外科術を修得せんと欲して、^{きゅう}笈を負い來った医生は、其数幾千たるを知らない程であった。華岡は即ち正に日本外科学の本山であったのである。彼れ青洲が門外より一步も出でず^{ひたすら}只管發明したる外科手術に精進して止まなかった学者的良心には、今日尚吾人の襟を正さしむるものがある。想うに此題詩を三唱し、自ら省みて、我が行徑を恥じざるもの果して幾人かある。利達^{しんべん}栄華は何人も欲する所のもの、転結の両句、真に凡俗の針砭である。

本間玄調は、華岡青洲の門人中傑出した優物である。自ら肖像に題して曰く、



吾所主張亦活物窮理。尚軒岐、而未必尽信其書。惡蠻貊、而未必尽排其術。博採諸五大州中、日試月驗一次、歸于活人。即是神州之医道耳。[1]



と。玄調は実験科学者であり、自説の主張者でもあったが、又愛国者でもあった。一世の大家たりし彼の学識思想は、尚今日青年学者の眷々服膺すべきものを含蓄することを感ず。一にも二にも泰西の垂流を以て甘んずる拝欧学者には、胸に三尺の秋水を擬せらるゝの趣があるであろう。識者此人を称するに単なる外科医者を以てせざるは、正に故ありというべきである。その識見、その情熱、永く後世に範を垂れるものと仰がねばならない。

^{しんぐうりょうてい}新宮涼庭は、名儒齋藤拙堂から「医而儒、山人而士丈夫」と評せられたが、この評は至当である。決して一定の規矩を以て律することの出来ない人物であった。彼の家業は大に行われ、彼の家益々^{いんぶ}殷富となり蓄財は数万に至った。しかし、彼は自ら奉ずること儉素で、^{いむしろ}蘭席蔽るゝとも年を経て換えないという風であった。しかも時偶々連年の凶作に遭い、四民困弊するを見て、涼庭は救助の策を諸侯に献じ、又私財を抛って国用を援けたのであった。彼はまた順正書院を東山南禅寺畔に建てゝ四方志学の徒を迎えた。彼が肖像に題した



逸居恰似坐低篷。天出奇才忌大功。医国忠言嫌苦烈。呈文氣脈欠流通。芙蓉不及松柯勁。蚯蚓却哈蛛網工。痴也頑乎任笑。散人只合老山中。[2]



の含蓄ある詩趣は、側々として人の肺腑を衝くの概があるものと謂わねばならない。鬼国山人の面目躍然たるを見るのである。

^{みつくりげんぼ}箕作阮甫は、西医学者として江戸幕府末期に異彩を放った一人である。自らその像に題書して曰く、



病骸不復惹閑愁。絶望功名心自休。憐殺雙肱似蟹腕。幸欣兩眼辯繩頭。雲烟低作菰浦雨。霜露結成天地秋。尚友古人無日夕。泰西之國每相求。[3]



と。箕作家はその後多くの洋学に通じた鉅材を出した。阮甫の志成れりというべきである。一詩学者の気格崇高なるを感じて止まないのである。

以上僅かに自ら題したものを挙げて見たが、各自の面目それぞれ躍々として詞表に溢れ、吟誦するに従って、極らない高風清趣を覚えるのである。

八

更にまた他の画像に^{さん}賛語を題せんとするは、一層難事である。賛者よく、彼の生涯に熟通し、彼の人物を洞察し、彼の手腕を精知したるものに非ざれば、彼の真面目の一端にだに触れ得るものではない。唯その人を得る時は能く生氣を伝え面目を活す絶妙の趣があるのである。

^{げんちゅう}奈須玄盅は一世の曲物であった。江戸幕府医官多紀家の権勢にも屈せない高踏脱俗の学者であった。彼の祖は初代

1. 吾の主張する所は、亦^{かつぶつきゅうり}活物窮理なり。軒岐を尚びて、未だ必ずしも^{けんき}其の書を尽く信ぜず。蠻貊を惡むといえども、未だ必ずしも其の術を尽く排せず。博く諸を五大州の中に採り、日に試みに験する、一次、活人に歸す。即ち是れ、神州の医道なり。

→ 自分が主張するところも（華岡青洲が説く）活物窮理である。古典医学を尊重するが、その書物をすべて信じるわけではない。南蛮夷狄の医学を嫌うが、すべて排除するわけではない。広く世界中に知識を求め日々試験し月々検証を重ね、人を生かすことに帰着するこれこそが我が国の医道である。

2. ^{いつきよ}逸居は恰も^{あたか}低篷に坐するがごとし。天は奇才を出して、大功を忌む。国を医する忠言苦烈を嫌う。文を呈すれども^{いん}氣脈の流通を欠く。芙蓉、^{しょうか}松柯の勁きに及ばず。蚯蚓却^{きゅういん}却^{かえつ}蜘蛛網の工を^{ちゅうもう}哈う。痴なるか頑なるか、^{さんじん}相い笑うに任す。散人、只山中に老いて^{てう}合す。

→ 世を離れて暮らすことは、まるで低い屋根の小屋に座っているようなものだ。天はすばらしい才能を生み出しても、大きな功績を立てるのを嫌う。国を正す忠告は、厳しいと嫌がられる。文書を差し出しても、思いはうまく伝わらない。美しい芙蓉の花も、松の枝の力強さには及ばない。ミミズは、かえってクモの巣づくりの巧みさを笑うが、愚かでも頑固でも、好きなように笑われて構わない。世を離れた自分は、ただ老いて山中で暮らすのがふさわしい。

3. ^{びやうがい}病骸、^ま復た^{かんしゅう}閑愁を惹かず。功名を絶望して、心自ら^{しゅう}休む。憐殺するは^{うんけん}雙肱の蟹腕に似たる。幸いに欣ぶ、^{しやうせき}兩眼の繩頭を弁ず。雲烟低く作す菰浦の雨。霜露結んで成す天地の秋。古人を尚友して日夕無し。泰西の国毎に相い求む。

→ 病んだこの身は、もはや閑居の寂しさを思うこともない。功名を望む気持ちは絶え、心も自然と静まっている。哀れなことに、兩腕は力二の脚のように曲がってしまったが、幸いに兩眼は今も繩の撚り目が見えるほどよく見える。低く垂れ込めた雲とけむりは、菰が茂る入り江に雨を降らせ、霜や露が結んで天地に秋が訪れた朝も夕も古典に学び、西洋の国々とも流を求めている。

曲直瀬道三に就いて医学を修めた、道三は足利末代の医田代三喜より李・朱の医学を受けた学者であった。玄盅は夙にその三喜の学徳に傾倒して居ったのである。一日野州古河に遊んで三喜の木像を一向寺に拝し、之を写して、



拯濟短折、躋之寿域、儼然遺像、永仰隱徳 [1]



と賛した。三喜の薬方は、弘く関東に伝えられている。医人にして祀られたものは僧鑑真と三喜のみであろう。三喜の知るべきである。

井上^{れいそう}靈叟は玄朔の門人である。彼は幕府に召されて法印に叙せられ、交泰院と称した。その学、その技、当時彼に比すべきものなかったのである。師玄朔は乃ち彼の像に、



医業辛勤八十年。骨清神爽貌天全。陰功那直満千数。却去蓬萊作地仙。

右

前典拳頭道二先生、題我小影之辭也。褒揚難当。小子玄億屢請予書。此因弗揣老醜。漫塗抹与之。於乎汝不視我形貌、而視我精神。不学我軌轍而学、先生之活法則庶乎獲十全矣。

天和壬戌之歳冬之孟

九々老翁呵手書于交泰院中 [2]



と賛した。靈叟の風格を伝えて、正に余りなきものである、この師ありて、この弟子ありと謂うべきである。

^{はとのそうは}鳩野宗巴は、一代の風雲児であった。彼は南蛮の密航船に乗り、外国に赴きて医学を修め、後飄然として帰国し、九州を漂遊する間に細川侯に召され、外科医の腕を揮うに至った。長仙濤師は、彼の肖像に



医得覺神農。道縁深参宗。相顔雖減去、心月照尊容。

元禄十丁丑年、閏二月八日之早朝。然後而逝、寿世五十七歳。覺峰道葉老居士。大雲山僧長仙濤謹讃 [3]



と賛した。仏僧の讃としては或は佳ならんも、一代の風雲児に対する著語としては模糊たる雨山を見るが如く、物足りない感がないでもない。

東洞は医傑である。門人村井椿寿はその肖像に、



憶昔南陽子。哀憫濟蒼生。洋洋述嘉言。旧章誰復賡。離照若天經。成緯自光瑩。亦似警軍帥。凜凜列霓旌。相敵欲

決雄。龍劍匣中鳴。執之威颯颯。持之計衡平。哀哉千余載。天下失權衡。嗟我日東邦。碩偉出人英。東洞夫子賢。弘道守其貞。厥姑生中国。駕輶入帝京。游洛恩波洽。身老在王城。玉帛不招俊。独主四方盟。崑岡生玉髓。麗水出金精。睥睨千載上。目睫一堂堂。驅逐和緩儔。欣慕扁張名。經方述不作。竊比我老彭。雖有靈方貴。何必問滄瀛。邈矣炎炎世。恬憺無所營。唯存鍼与艾。足以養真情。靈蘭久不声。斯事遂粉更。策隱且行怪。後人各力争。人何不鼎食。塩梅失和美。偉哉經方策。玉振与金声。一辯金匱訣。独手得奇贏。皎如懸玉鏡。長亘万古明。吾生西僻邑。私淑存寸誠。昔曾踏東海。淒然拌墳塋。乃是医門傑。既為王者氓。其人与骨朽拊胷淚盈。吾儕尚方士。懷古寸心傾。

壬寅暮春於東都龍邸。東肥邨井炳書時年七十 [4]



と讃した。時に椿寿は高齢七十歳であった。自像に飄逸の語を題した高踏的の風格の持主も、師の像には端嚴壯重、恩情の切々身に逼るものあるを寄題し、人をして襟を正しうせしめるのである。東洞の学説はもとより炳焉たるものであったが、しかし未だ円熟せざりし所もあった。しかも、その門下に俊髮輩出し、よく

1. 短折を済して拯い、これを寿域に躋す。儼然たる遺像、隱徳を永く仰ぐ。

→ 夭折しようとする命を救い、長寿の世界へと導いた。嚴かなその遺像をみて、隠された徳を永く仰ぎ敬う。

2. 医業辛勤すること八十年。骨清く神爽やかにして、貌は天の全し。陰功 那ぞ直ちに千数に満るのみならん。却って蓬萊を去り地仙と作る。

右

前典藥頭道三先生、我が小影に題するの辭なり。褒揚は^{ほうよう}当り難し。小子玄億、屢予に書を請う。此に因りて老醜を^{はか}揣らず。漫りに塗抹して之に与う。於あ、汝我が形貌を視ずして、我が精神を視よ。我が軌轍を^{きでう}学ばずして、而して先生の活法を学べば、則ち庶くは十全を獲ん。

天和壬戌の歳、冬の孟、九々老翁呵手して書す、交泰院の中。

→ 医業に励むこと八十年。骨は清らかで、精神は爽やかで、容貌は天与のまま完全である。人知れぬ陰徳は、千を超えるほどである。もはや蓬萊（仙境）へ行かず、地上で仙人となったような存在である。以上は、かつて典藥頭を務められた道三先生が、私が自分の肖像に添えてくださった文である。賞賛の言葉は過分である。若者の玄億がたびたび私に文を書いてほしいと頼むので、年老いて醜くなった姿をいわず、思いつくままに筆をとって与えた。ああ、あなたは私の容姿でなく、私の精神を見なさい。

私の足跡や形をまねるのではなく、先生の生きる真の法則を学んでこそ、完全に近づけるのである。

天和壬戌の年、冬の初め、老翁が手をかじかませながら交泰院で記す。

3. 医として神農を覺るを得たり。道縁深くして宗に参ず。相顔減去すと雖も、心月尊容を照らす。元禄十年丁丑の年閏二月八日の早朝然る後而して逝く。寿世五十七歳。覺峰道葉老居。大雲山僧仙濤謹んで讃す。

→ 医師として（古代の名医）神農の悟りを得た。道との縁が深く宗門に参じてなお修養している。顔の形は衰えても、清らかな尊い容貌をなお照らしている。元禄 10 年（1697 年）丁丑の年閏 2 月 8 日の早朝逝去。享年 57 歳。法名は覺峰道葉老居。大雲山の僧仙濤が謹んで記す。

師説を紹述して世の疑惑を解き、東洞の学名、かくて
顕揚せらるゝに至った。

賀川玄悦の肖像に、皆川淇園は題書して、



民之頼全、何唯兆億。噫嘻大矣。翁之功德。[5]



と賛称した。

我が国、支那医学を伝えてから、流通既に久しいので
あったが、その学ぶ所多くは漢土医方の糟粕に過ぎない
ものであった。享保以来人物輩出し、医道も大に面目
を改めたが、賀川家の産術、華岡流の外科術を除いた
ならば、果して真の本朝医道の面目を発揮したもの
があったであろうか。賀川子玄の功德は、日本医学の
あらん限り忘れることが出来ない。民之頼全何唯兆億
嘻大矣翁之功德とは真を得た讃語である。

佐倉侯堀田正衡は自ら大槻玄沢の肖像を描き、侯の父
正敦は、これに



敷島のやまとにはあらぬ蘭の花 国の香さへや 世に
ほふらむ [6]



の讃歌を副えて贈った。そして、時の人々は、いたく
之を玄沢の光栄とした。

帆足万里は、その師三浦梅園の像に、



峨有之山。高峰軼雲。降生先生。英儁超羣。洞覽天地。
殫極鬼神。條理之説。数充滿言。闡發幽頤。以覺斯民。屢
辭聘生命。抗志守玄。遺像肅然。想見其人。

戊辰二月 帆足万里 拝撰 [7]



と賛した。三浦梅園は医にして條理学を創した学者で、
群儒と夔然其見を異にし、儼として一家の説を建てた
傑出した学者である。帆足万里は梅園の学理を承けて

4. 敵に相し、雄を決せんと欲す。龍劍、匣中に鳴る。之を執れば魍魎
を威し、之を持てば計衡平らかなり。哀しき哉、千余載、天下権衡を
失う。嗟我が日東の邦、醜倭として人英を出す。

→ 敵と向き合えば、雄略を決しようとし、龍の劍は鞘の中で鳴り響く。
それを執れば魍魎魍魎(妖怪)をも制圧し、それを手にすれば物
事の均衡を安らかに保たれる。哀しいことに千余年の間天下は均衡
を失ってしまった。ああ我が日出ずる国にも立派な人物が現れている。

東洞夫子の賢。道を弘めてその貞を守る。厥姑中国に生れ頼に駕して
帝京に入る。洛に遊び、身老いて王城に在り。玉帛もって
俊を招かず。独り四方の盟を主る。

→ 東洞先生は賢者である。道を広めその節操を守った。その祖先は中
国に生まれ、車に乗って帝都へ入り、洛陽に遊び、その恩恵は広く行
き渡った。老いてもなお王城にとどまり、財や地位で俊才を招くこと
なく、ただひとりて天下の盟主を務めた。

崑岡に髓を生じ、麗水に金精を出す。睥睨して千載の上、一に堂堂た
るを目撃す。和緩の儔を駆逐し、扁鵲の名を欣慕す。経方を述べて作
らず、竊かに我が老彭に比す。

→ 崑岡山は美しい玉精を産し、麗水は黄金を産する。千年の歴史を見
渡し、立派なものを間近に見る。軟弱な者を退け、扁鵲や張仲景のよ
うな名医の名を慕う。病の処方述べるが新たに著すことはなく、ひ
そかに自分を(長寿の仙人)老彭に比した。

靈方の貴き有りと雖も、何ぞ必ずしも滄瀛に問わん。邈かなり炎炎の
世、恬憺として営む所無し。唯だ鍼と艾を存して、以て真情を養うに
足る。靈蘭久しく声無く、斯の事遂に粉更す。

→ 優れた靈薬があっても、必ずしも海外に求める必要はない。遠い乱
世のただ中でも、静かに、営利を求めることなく暮らした。ただ鍼灸
の術だけを持って、真の心を養うに十分とした。靈蘭(高貴な薬草)
も長くは続かず、この事業もやがて途絶えてしまった。

策を隠し且つ怪を行う。後の人各力を争う。人、何ぞ鼎に食せざらん、
塩梅、和美を失う。偉なり経方の策、玉を振って金声を与う。一たび
金匱の訣を弁じ、独手に奇贏を得たり。

→ 方策を隠して、奇妙な術を行い、後の人々は互いに力を競い合った。
なぜ人は調和の取れた料理をしないのか、そのために味付けや調和が

失われてしまう。昔の経方(処方)は偉大であった、玉の音、金の響
きのようであった。ひとことで「金匱要略」の秘訣を語り、独力で比
類ない成果を得たのであった。

皎として玉鏡を懸けるが如く、長く万古に亘りて明らかなり。吾れ西
僻の邑に生れ、私淑し寸誠を存す。昔、曾て東海を踏み、凄然として
墳塋を拝す。乃ち是れ医門の傑、既に王者の氓となる。

→ それは高く懸けられた玉の鏡のように、永遠に輝き続ける。私は西
の辺境の村に生まれ、遠方から誠意をもって私淑してきた。かつて東
海の地にわたり、寂しくその人の墓を拝した。その人こそ医門の英傑
であったが、すでに王者の民(庶民に尽くす高貴な人)となっていた。

其の人と骨は朽つれども、胸を拊ちて涙盈つ。吾儕なお方士なり。古
を懐い寸心傾く。

→ その人の骨は朽ち果てたが、私の胸を打ち、涙があふれる。われら
はなお方術を志す者として、古をしのび、真心を傾けるのである。

5. 民の全きを頼むは、何ぞ唯だ兆億ならん。噫嘻大なるかな。翁の功德。

→ 人々の健康が先生に頼っていることは、ただ多くの人々だけではな
い。ああ、なんと偉大なことか、先生の功德は。

6. 日本の国ではない異国の蘭の花とともに、その国の香りまでもが、
この世にただよってくるのだろうか。

7. 峨たる山有り、高峰は雲を軼ゆ。先生を降生す。英儁羣を超ゆ。天
地を洞覧し、鬼神を殫極す。條理の説、数言に充滿す。幽頤を闡發し、
以て斯の民を覺ます。屢聘命を辞し、志を抗げて玄を守る。遺像肅
然として、其の人を想見す。

→ そびえ立つ高い山があり、高い峰は雲を越すほどであった。そこに
先生は生まれた。その才能と人物は群を抜いて優れ、天地の道理を見
通し、さらには鬼神の理まで極め尽くした。説く内容は常に筋道立っ
ており、言葉の隅々に満ちていた。深い真理を明らかにし、世の人々
を目覚めさせた。たびたび官職への招きを断り、高遠な志を掲げて真
理を守り続けた。遺された肖像は厳かで、人柄がありありと偲ばれる。
(戊辰二月 帆足万里 謹んで記す)

更に窮理学を講じ、泰西學術に出入した。蓋し梅園に
繼いで其学を大成したのである。万里は梅園を尊崇し
て措かざりし人、梅園に讃詞を寄するもの始めて真人
を得たりと謂うべきである。

伊達宗光は高野^{ちやうえい}長英の像に、



學術走西域、雙眸略五洲。看吾業就後、天下仰余流。高
野長英先生作、題真影上。辛卯六月 南洲書 [1]



と贊した。長英のことは今更謂うまでもない。讃詞の
至当なる、何人もまた異議ない所であろう。

九

伝記と肖像とは車の兩輪の如くである。兩者相待ちて、
始めてその人物を躍動せしめ、その風格を思慕せしむ
るに足るのである。我が国に肖像集公刊の少ないのは、
国情から来たものであろう。しかも、その肖像画に依っ
て、如上本質的の真意義の外に、時代の姿相を知り、
又画風の時潮を知ること出来るのである。吾人は世
間博達之士が種々なる方面に於ける肖像画集を出され
んことを望んで止まない。なおこゝに刊行する肖像集
は、専ら真本から伝えたものであることを付言して置
きたい。

また、前述せる如く、医家先哲の肖像は今後猶努めて
搜索しなければならない。若しこれに関して教えらるゝ
所あらば、実に著者の至幸とする所である。冀わくは
遺を拾い闕を補って、後篇を出す日の遠からずして来
らんことを。編者は足を翹てゝ切にこれを望むもので
ある。

本書の装画は結城素明^{ゆうきそめい}画伯の彩筆を辱^{かたじけの}うし、また
題簽^{だいせん}の文字は岡麓^{おかふもと}大人の揮毫を煩わした。尚肖像画の
伝写については、東京帝室博物館の鷹巢豊治君の筆労
を惜しまれざりし芳志と、写真撮影板には菅保男氏の
多大の犠牲を払われし情誼とを特記し、併せて共に深
甚なる感謝を捧げる。

昭和十一年初夏五月

藤浪剛一 しるす

1. 學術、西域を走り、雙眸五洲を略む。看よ吾が業の就の後、天下に
余流を仰ぐ。

→ 自分の學問は西方まで広がり、その兩眼は世界の見渡す。自分の業
績が成った後に、人々はその流れを仰ぐだろう。

第一 僧行基(ぎょうき)

668-749 東大寺を建立. 貧民を救済



泉州大鳥郡の人, 天智天皇御宇七年に生まる, 年十五出家す, 天平二十一年二月二日寂す年八十二.

泉州大鳥郡(現大阪府堺市付近)の出身. 天智天皇の御代7年(674年)生. 15歳で出家し, 天平21年(749年)2月2日没. 享年82歳.

第二 勸勒(かんろく)

7世紀初頭. 百済の渡来僧.



百済の人, 推古帝^{ぎょう}御宇十年十月我が朝に貢来し方術天文地理の書を献ず, 留て僧正に選ばれる.

百済の出身. 推古天皇の御代10年(601年)10月に渡来し, 方術(医術, 呪術), 天文, 地理に関する書物を献上し. 日本に留まり, 僧正に任命された.

第三 僧 鑒真 (がんじん)

688-763 唐の渡来僧。本草学に精通。



唐の楊州江陽県の人。年十四大雲寺の僧智満禪師に付し出家し、後ち長安實際寺に戒を受け天宝元年大明寺に在りて衆徒の為に律を講ず。天平五年我国の榮叡^{ようえい}、普照^{ふしょう}等、遣唐使丹墀真人広成に従い唐に留学し鑒真に従遊す。因て励めて東遊せしむ、颺^{たじま}に遇いて僅に身を以て免れ、後ち再び東発するも漂流す、更に三次東遊の志を得ず。天平勝宝五年十月、我国使藤原清河^{ふじわらのきよかわ}、大伴胡麻呂^{おおとものこまろ}の船に上り弟子法進等八人^{はつにん}之に従う、六年正月二十六日大宰府に入り、二月一日難波に到る、東大寺を館とす。八年五月勅して和上に拝し、和上鑒真禪師と称す、宝宇二年大和上の号を賜い僧綱の任を

唐の楊州江陽県の出身で、14歳のときに大雲寺の僧智満禪師のもとで出家した。その後長安の實際寺で戒律を受け、(唐暦)天宝元年(742年)には大明寺で多くの僧に戒律を講義していた。天平五年(733年)、日本から榮叡^{ようえい}、普照^{ふしょう}らが遣唐使丹墀真人広成に従って唐に留学し、鑒真のもとを訪れた。彼らは来日を強く願ひ、鑒真もそれに応えて渡航を決意した。しかし、最初の渡航では嵐に遭い、命からがら助かった。再度の渡航も漂流して失敗し、さらに三度目も東航を果たせなかった。天平勝宝5年(753年)10月、日本の使節藤原清河^{ふじわらのきよかわ}と大伴胡麻呂^{おおとものこまろ}の船で、弟子の法進ら8人が同

停め新田部親王の旧宅を戒院とす、則ち後の唐招提寺なり、七年五月六日物化す、年七十七。鑒真ぶつ学問該博、志行高潔にして一時の師表たり、聖武天皇以下戒を受くるもの甚だ多し。鑒真両目明を失すれども、強記人に絶す、其背誦するを以て雌黄を下す。天下其書に信賴すと云う。鑒真又医薬の事に通じ殊に本草に精し、本朝の諸薬物其真偽を知らざるもの多し、鑒真に勅して真偽精粗を弁定せしむ、鑒真鼻を以て之を別ち一も錯誤する所なし。韓広かんこう足就いて学び薬物の真贋を分弁するの術に通ず。後皇太后弗予鑒真薬を献じ大に効驗あり、因りて大僧正を授けらる。当時我邦已に本草の学あり而して未だ西土の薬品に精うすること能わず、鑒真べんじょう為めに之を弁定するに及びて邦人之に倣い斯道益ひら闢けたり、世に鑒上人秘方を伝う。又其像まつを祀る、像祀ぞうしせらるゝもの鑒真と田代三喜あるのみ。

行した。翌年正月26日に大宰府に到着し、2月1日には難波に着き、東大寺に滞在した。同8年(756年)5月、勅命によって和上の称号を授かり、鑒真和上わじょう禪師と呼ばれた。宝字2年(758年)に大和上だいわじょうの号を賜り、僧綱そうどうの任を辞して、新田部親王の旧宅を修行の場とした。これが後の唐招提寺である。同7年(763年)5月6日、77歳で没した。鑒真は学識が広く、志と行いが高潔で、当時の僧侶たちの模範とされた。聖武天皇はじめ多くの人々が彼から戒律を受けた。晩年には両眼とも失明したが、記憶力は人並外れており、経典を暗唱して誤りを正した。人々は彼の書物を深く信賴したという。また鑒真は医薬にも通じ、とくに本草学に精通していた。当時の日本では薬の真偽がよく分からないものが多く、鑒真に命じてそれらの真偽や品質を判定させた。彼は鼻で薬を嗅ぎ分け、一度も間違えることがなかったと伝えられる。弟子の韓広かんこう足はその術を学び、薬の真贋を見分ける術に通じた。後に皇太后が鑒真に薬を献上させたところ、大きな効果があり大僧正の位を授けられた。当時の日本にはすでに本草学があったが、西方の薬品にはまだ詳しくなかった。鑒真がそれを判定したことで、日本人もそれに倣い、この方面が大きく開けた。世に鑒上人秘方として伝えられる。また、鑒真の像まつが祀られているが、像が祀られている人物は鑒真と田代三喜のみである。

第四 丹波康頼（たんばのやすより）

912-995 医心方を編纂.



丹波^{やだの}矢田郡^{あちのおう}の人、其先は漢靈帝に出ず、靈帝五世の孫^{あちのおう}を阿智王^{あちのおう}と曰う、応神天皇の時歸化す、天皇之を大和国^{ひのくま}檜隈郡^{おみ}に封じ以て使主とす、其子都賀に二子山木、志努あり、志努別に家を成し出でて丹波国に居る。康頼はその五代の孫なり、特に医術に精進し、丹波宿禰^{すくね}（すくね）の姓を賜い、累進して鍼博士^{さえもんのすけ}、左衛門佐^{さえもんのすけ}（さえもんのすけ）、兼丹波介^{たんばのすけ}に至る。天元五年医心方三十巻を撰す、其書随唐方書を摺摭し、称して本邦方書の府庫となす、永観二年書成りて奏進す。医心方は稀世の珍なるのみならず、其中に支那には既に佚亡せる逸書遺典を収めたるを以て、之により当時随唐医学の真相を窺うべき絶世^{こつほう}の鴻宝なり。又以て諸生^{かし}を課試す、長徳元年四月十九日歿す、享年八十四。

丹波国^{やだの}矢田郡^{あちのおう}（現京都府の一部）の出身。その祖先をたどると中国後漢の靈帝にまで遡る。靈帝五世の孫にあたる阿智王^{あちのおう}は、応神天皇の時代に日本へ歸化した。天皇は阿智王を大和国^{ひのくま}檜隈郡^{おみ}に封じ、使主の姓を与えた。阿智王の子都賀には二人の息子があり、山木、志努という。志努は別家を立てて丹波国に移住した。康頼はその五代目である。特に医術に励み、丹波宿禰^{すくね}という姓を賜った。次第に昇進して鍼博士^{さえもんのすけ}、左衛門佐^{さえもんのすけ}、丹波介^{たんばのすけ}などを歴任した。天元5年（982年）に医心方全30巻を編纂した。これは中国唐代の医学書を広く集めて整理したもので、日本の医学書の集大成となった。永観2年（984年）に完成し、朝廷に献上された。医心方は、当時としても非常に貴重な書物であるだけでなく、中国で既に失われた医学書や典籍も収録されているため、唐代の医学の実態を知るための比類なき宝物とされる。医学生^{いしんぼう}の試験にも用いられた。長徳元年（995年）4月19日没、享年84歳。

第五 丹波康頼（別個）

912-995 医心方を編纂.



史伝. 前に出ず.

第六 丹波雅忠(たんばの まさただ)

1021-1088 日本の扁鵲.



康頼の子重明^{てんやくのかみ}, その子忠明^{えもん}, 雅忠を生む^{のすけ}, 長元七年典薬頭に試し, 右衛門佐に補す, 永承中丹波介^{たんばのすけ}となる, 任満ちて還る. 時に後冷泉天皇不予^{ごんのかみ}, 雅忠に命じて薬を上らしむ効あり, 丹波権守に遷る. 又関白藤原某の病を治して効ありて, 施薬院使に補せらる, 専ら施薬院当道に任ずることは雅忠より始まると云う. 承暦四年高麗王妃病む, 王書を太宰府に送り厚幣を以て良医を求む, 時の人雅忠を以て選に擬したれども, 朝廷其書辞の礼を失うを咎めて之を却^{しりぞ}け, 太宰府をして報牒せしむ, 内に雙魚難達鳳池之月, 扁鵲何入鶏林之雲の語あり. 之れより世に雅忠を日本扁鵲と称す. 永保元年, 雅忠晋唐方書に就いて救急方を摘録し医略抄を著わす, 寛治二年二月年六十八にして歿す.

康頼の子が重明, その子が忠明, 忠明の子が雅忠である. 雅忠は長元7年(1034年)に典薬頭の試験を受け, 右衛門佐^{えもん}に任命された. 永承年間(1046-53年)には丹波介^{たんばのすけ}となり, 任期を終えて帰京した. その頃後冷泉天皇が病に伏し, 雅忠に薬の調合を命じたところ効果があり, 丹波権守^{たんばのごんのかみ}に昇進した. また関白藤原某の病も治療して効果があり, 施薬院使に任命された. このように施薬院の実務を専門的に担うようになったのは雅忠が初と言われる. 承暦4年(1080年), 高麗の王妃が病にかかり, 王から太宰府に書簡と厚い贈り物が送られ, 優れた医者を求められた. 当時の人々は雅忠を候補に推したが, 朝廷はその書簡が失礼であるとしてこれを退け, 太宰府に返答させた. その返書の中には, 「雙魚鳳池の月に達し難く, 扁鵲鶏林の雲に入る何ぞ」^{そうぎょ} (書簡が王宮の貴人にたどり着くことは難しい, 名医扁鵲が異国の林の貴人にたどり着くことは難しい)とあった. 以降世間では雅忠を「日本の扁鵲」と称した. 永保元年(1081年), 雅忠は晋, 唐の医学書をもとに, 救急医学の方法を抜粋して医略抄を著した. 寛治2年(1088年)2月, 68歳で没した.

第七 出雲広貞(いずものひろさだ)

9世紀初頭、大同類聚方を編纂。



校注：この図像は「丹波雅忠」と書かれた札を手にしていることから、前項の丹波雅忠の図像の誤りである可能性があるが、前項の画像は他の資料の比較からも丹波雅忠のものとして正しいと思われる。

摂津の人なり、侍医にして中外記、典薬助、美作権掾を兼ね、延暦二十四年天皇弗予、広貞御薬を奉じて効あり、爵一等を進めらる。大同三年勅を奉じて安部真直と共に大同類聚方一百巻を撰ぶ。又別に命を蒙り、唐制によりて薬升大小の量を定む。広貞後ちに内薬正に挙げられ、宿禰の姓を賜わる。貞観十二年歿す。著す所に難経開委あり。

摂津(現大阪府、兵庫県)の出身で、侍医を務め、中外記、典薬助、美作権掾を兼任した。延暦24年(805年)、[桓武]天皇が病に臥した折、広貞が薬を献上して効果があり、一階級昇進した。大同3年(808年)勅命を受けて安部真直とともに大同類聚方百巻を編纂した。また別命を受けて唐の制度に倣い、薬の容器の大きさの規格を定めた。その後内薬正に任命され、宿禰の姓を賜った。貞観12年(870年)没。著書に難経開委がある。

第八 僧忍性(にんしょう)

1217-1303 貧民医療に尽くした鎌倉時代の僧医.



^{あざな}字は良観，建保五年大和^{しきしま}磯城島に生まる．年十六額安寺に入り出家す，悲田院を修して貧人を救い病者を憐み，奈良^{はんによざか}般若坂に病舎を建て、癩人を收容す．又鎌倉に錫を留め病者を集め^{ふかつ}撫活す．北條時宗，上人の為に桑谷に療病舎を作る．二十年間その救済憐施するもの五万七千二百五十人に及ぶ，時の人医王如来と呼べり，嘉元元年七月十二日寂化す，法齡八十七．

^{あざな}字は良観，建保 5 年 (1217 年) に大和国^{しきしま}磯城島 (現奈良県桜井市付近) に生まれた．16 歳にして額安寺に出家した．悲田院を修復して貧者助け，病者を世話した．奈良の^{はんによざか}般若坂に病舎を建て，癩患者を收容した．また鎌倉に一時滞在して病人を集めて手厚く看病した．北条時宗は，良観上人のために^{くわがや}桑谷に病舎を建てた．20 年間の活動で救済した者は 57,250 人に及ぶ．当時の人々は彼を医王如来と呼んだ．嘉元元年 (1303 年) 7 月 12 日没，法齡 87 歳．

第九 越後丹介(えちご たんすけ)

13 世紀頃. 獣医の祖.



鎌倉時代の人, 不詳, 馬医を以て著わる.

鎌倉時代の人, 不詳, 馬医として知られている.

第十 安芸守定 (あき もりさだ)

14 世紀頃. 婦人科医療の祖.



其祖^{あき へいし}安芸平氏に出ず、因て氏とす。延文三年足利義詮^{よしあきら}の室紀良子^{きのりようこ}娠す、之を療して男を挙げ是を義満とす、因て其邑^{ゆ う}を割て封じ、又尚薬^{くすりのかみ}に奏し、喜慶^{きけい} [校注：嘉慶の誤] 中従四位上に叙し、大膳亮^{だいぜんのすけ}に任ぜらる。子孫業を継ぐ、宮中産を治する皆安芸氏に属す。初め守定二條家^{いゑのつかさ}の家司たり、春日神社に詣し通夜祈る所あり、時に一女子来り治を求む、守定為に鍼^{はり}を施し薬^{くすり}を与う、女の病頓^{とみ}に除かる、喜んで恩を謝し曰う、妾^{わらわ}は猿沢の龍女なり、厚恵を受けて報いる所なし、妾に靈方あり以て贈らんと一巻を遺して去る、治産方なり。旁に龍鱗三片を留む。守定之て異とし、其方を試みるに驗あり、遂に女科^{じょか}の名を得る、之を婦人科専門家の始とす。その子貞守、亦女科を以て名あり。

その祖先は安芸国^{あきのくに} (現広島県の一部) の平氏の出身。それに因んで安芸氏を名乗った。延文 3 年 (1358 年)、足利義詮^{よしあきら}の側室紀良子^{きのりようこ}が懐妊した際、これを治療して男子を出産させた。後の足利義満である。この功により、領地を与えられ、さらに尚薬^{くすりのかみ}に任ぜられ、嘉慶年間 (1387-89 年) には中従四位上に叙され、大膳亮^{だいぜんのすけ}に任命された。その子孫も医業を継ぎ、宮中の出産については安芸氏の担当となった。もともと安芸守定は二條家^{いゑのつかさ}の家司で、春日神社に参詣して夜通し祈願をしていた。ある時一人の女が現れて治療を求めた。守定は彼女に鍼^{はり}をうち、薬を与えたところ、病はたちまち治った。女性は謝して言った。「自分は猿沢池の龍女だが、厚い恩を受けながら報いる術がない。自分には靈妙な治療法があるのでそれを贈りたい」と言っ一巻の書を残して去った。それは産科の治療法であった。さらに龍の鱗を三枚を残していった。守定は不思議に思い、その治療法を試してみたところ、効果があった。こうして女科の名声を得た。これが婦人科専門医の始まりとされる。その子、貞守もまた女科の医師として知られる。

第十一 田代三喜(たしろさんき)

1465-1537 明にわたって李朱医学を輸入



田代三喜。名は導道^{どうどう}、字は祖範^{あざな}、範翁^{しさんじん}、支山人^{いそくけん}、意足軒^{ぜんどう}、江春庵^{おごせ}、善道の号あり、父は兼綱と曰う、寛正六年四月八日武州川越(又は越生)に生まる。年十五にして方伎^{ほうぎ}に志し、妙心寺に入り浮屠となり、又足利校主利陽^{りよう}に就て医を学ぶ。長享元年明に渡り李東垣^{りとうえん}、朱丹溪^{しゅたんけい}の術を月湖^{げつこ}及び恒徳^{こうとく}の孫に受け、留学十二年、業成て明応七年十四歳、医書を携えて帰朝し鎌倉江春庵に居り、後下総古河に移る、時に永正六年なり。三喜の名声益々四方に宣揚し、世古河三喜^{ふるかわさんき}と称す。天文六年二月十九日歿す、年七十三(或は七十九と云う)。古河長谷村一向寺に遺像ありしが、明治年間焼失す。像祀せらるもの古来鑑真と三喜とあるのみ。著す所に、捷術大成印可集、諸薬勢揃、当流和極集直指篇、夜談義、薬種穩名医案口訣、三喜十卷書あり。

田代三喜の本名は導道^{どうどう}、字は祖範^{あざな}、また範翁^{しさんじん}、支山人^{いそくけん}、意足軒^{ぜんどう}、江春庵^{おごせ}、善道など。父は兼綱^{かねつな}という。寛正6年(1465年)4月8日、武蔵国川越(または越生、現埼玉県川越市付近)に生まれた。15歳で医術を志し、妙心寺で僧侶となった。その後、足利学校の校長利陽^{りよう}に師事して医学を学んだ。長享元年(1487年)、明に渡り、李東垣^{りとうえん}、朱丹溪^{しゅたんけい}の医学を、孫弟子の月湖^{げつこ}および恒徳^{こうとく}から学んだ。12年間の留学を経て、明応7年(1498年)、34歳で医書を携えて帰国し、鎌倉の江春庵に住んだ。その後、下総国古河(現茨城県古河市付近)に移った。永正6年(1509年)のことである。三喜の名声はますます広まり、世間では古河三喜^{ふるかわさんき}と呼ばれた。天文6年(1537年)2月19日没、享年73歳(あるいは79歳とも言う)。古河の長谷村にある一向寺に、かつて三喜の肖像が安置されていたが、明治時代に焼失した。祀られていた像は、古来より鑑真と田代三喜の二人のみだったという。著作には以下のようなものがある。捷術大成印可集、諸薬勢揃、当流和極集直指篇、夜談義、薬種穩名医案口訣、三喜十卷書。

第十二 曾谷慶祐（そだにけいゆう）

安土桃山時代の医師。



はんかんけんりょう
半閑軒閻翁と称す、世々瘍科を業とす。慶祐に至り、
なからいしゆらんけん 半井春蘭軒に従い、だいほうみやく 大方脈を学び内外の治を善くす。

はんかんけんりょう
半閑軒閻翁と称した〔生没年不明。安土桃山時代。曾
我とする文献あり〕。代々外科を業とした。慶祐の代
なからいしゆらんけん に、半井春蘭軒に入門してだいほうみやく 大方脈〔内科〕を学び、内科、
外科ともに治療にあたった。

第十三 曲直瀬道三(まなせ どうさん)

1507-1595 田代三喜に学んだ戦国時代の僧医、道三流医学の祖



名は正盛(又正慶とも云う), 字は一溪, 雖知苦齋, 又壺静院こうじょういんと号す, 永正四年九月十八日京都柳原に生まる. 年十三相国寺に入り喝食かつしきとなり等皓とうこうと称す, 年二十二東遊しもつけし下野足利学校に入る, 時に田代三喜武毛の間に往来し, 李朱の医法を説く. 先生享禄四年十一月始めて三喜と柳津やないづに会し, 其説を与聞し講究十年にして京都に還れり, 時に天文十四年なり. 先生学舎けいてき啓迪院を洛下に立て後進を誘拔す, 其名知らざるものなし. 天正二年啓迪集八巻を脱稿し叡覧えいらんに供す, 天皇大に嘉賞し玉い, 翠竹院の号を賜い, 又僧策彦さくげんに勅して其書に序せしめ玉う, 時人之を榮とす. 晩年享徳院と改む, 文禄四年一月四日病んで歿す, 年八十九, 京都十念寺に葬る. 御陽成天皇の時, 慶長十三年四月正二位法印を贈られ, 道山の字を賜う. 著す所に全九集, 授蒙聖切方, 医燈藍墨, 医工指南針灸集要, 須慎類集, 試験神術類, 養生論, 仮字素女論, 事林警古凶, 自他充溢論, 可有録老師雜話記, 切紙, 針灸穴解正心集, 宣弁類, 増補炮灸論, 自諫袖鏡, 神代記録, 夜談記, 小乗覚自養録, 修意撮要, 永日九九茶話, 本草能毒あり.

名は正盛(または正慶), 字は一溪, 雖知苦齋, 壺静院こうじょういんとも称した[道三は別号]. 永正4年(1507年)9月18日, 京都柳原(現京都市の一部)に生れ. 13歳のときに相国寺に入り, 喝食かつしき[禪寺の下働き]となり, 等皓とうこうと名乗った. 22歳にして東国へ旅し, 下野(現栃木県)の足利学校に入学した. その頃, 田代三喜[→第十一]が武蔵, 下野の間を行き来して李朱の医術について説いていた. 享禄4年(1531年)11月, 先生は初めて柳津で三喜と対面し, その学説を聞いて深く研究した. 10年の研鑽を経て, 天文14年(1545年)に京都へ戻った. その後, 洛中に啓迪院けいてきいんという学舎を開き, 後進を育成した. その名声は広く知られ, 知らぬ者はいないほどであった. 天正2年(1574年)に啓迪集全8巻を完成させ, 天皇に献上した. 天皇はこれを大いに賞賛し翠竹院の号を授け, さらに僧策彦さくげんに命じて序文を書かせた. これは当時の人々にとって大きな栄誉であった. 晩年には享徳院と号を改め, 文禄4年(1595年)1月4日に病没した. 享年89歳. 京都十念寺に葬られた. 御陽成天皇の時代, 慶長13年(1608年)4月に正二位法印の位を贈られ, 道山どうざんの字を賜った.

著作は以下の通り. 全九集, 授蒙聖切方, 医燈藍墨, 須慎類集, 医工指南針灸集要, 試験神術類, 養生論, 仮字素女論, 事林警古凶, 自他充溢論, 可有録老師雜話記, 切紙, 針灸穴解正心集, 宣弁類, 増補炮灸論, 自諫袖鏡, 神代記録, 夜談記, 小乗覚自養録, 修意撮要, 永日九九茶話, 本草能毒.

第十四 施薬院全宗（せやくいん ぜんそう）

1526-1599 豊臣秀吉の侍医



徳運軒と号し、又薬樹院法印と称す、幼にして叡山に入り僧となる、後ち還俗して曲直瀬道三の門に入る。豊臣秀吉の信重し、後ち法印に叙し、施薬院使に任ず。薬局を開き普く四方の民人の疾病に苦むものを治療す。全宗従五位下侍従となり正四位に進み、又昇殿を許さる。慶長四年十二月十日病んで歿す、年七十四又曰く六十九、京都十念寺に葬る。先生秀吉に謀り請うて施薬の所を禁闕きんけつの南門に建て、許さる。

徳運軒とを名乗り、また薬樹院法印とも呼ばれた。幼くして比叡山に入り僧となったが、のちに還俗して、曲直瀬道三門下に入った。豊臣秀吉からの信頼厚く、後に法印の位を授けられ、施薬院使せやくいんしに任命された。薬局を開いて、広く病に苦しむ世民を治療した。全宗は従五位下侍従となり、さらに正四位に昇進し、昇殿を許された。慶長4年(1599年)12月10日病没。享年74歳あるいは69歳とも言われる。京都の十念寺に葬られた。秀吉に願い出て、施薬の施設を宮中の南門に建てることを許された。

第十五 曲直瀬正琳(まなせしょうりん)

1565-1611 秀吉，家康に仕えた医師



幼名を又五郎と云う、字^{あざな}養庵、玉翁と号す。本姓一柳、若冠にして翠竹院正慶に贅をとりて学ぶ、正慶妻すに女孫を以てし、曲直瀬を名乗らしむ。文禄元年十二月二十八日法印に敍せらる、同四年浮田秀家の室奇病を得、先生薬を処して験あり。秀家朝鮮の役に会し、秀吉彼に命じ、医書を獲て之に贈るべしと、秀長、朝鮮に於て収獲する所の書数十^{うゆう}冊を以て悉く先生に与う。先生の家世々奇書に富めるを以て名あり。享保二年の大火に遭い其大半を烏有に歸せり。慶長五年後陽成天皇不予、先生召されて薬を上り殊効あり、院号を賜う、依て子孫に至るまで養安院と称す。同十年徳川家康の召す所となり、同十三年隔年東上す。慶長十六年八月九日遂に病んで其家に歿す、年四十七、紫野大徳院塔中玉林院に葬る。

幼名前は又五郎、字^{あざな}は養庵、玉翁と号した。もと姓はひとつやなぎ^{しやうけい}一柳。若くして翠竹院正慶〔→第十三 曲直瀬道三〕に入門して、学問を修めた。正慶は孫娘を妻として与え、彼に曲直瀬姓を名乗らせた。文禄元年(1592年)12月28日、法印の位を授けられた。同4年浮田秀家の妻が奇病にかかり、先生が処方して効果があった。秀家の朝鮮出兵に際して秀吉は彼に命じて、現地で医書を手に入れ先生に贈るように命じた。秀長は朝鮮で得た数十箱の書物をすべて先生に与えた。先生の家は代々奇書を多く所蔵することで知られていたが、享保2年(1717年)の大火でその大半が焼失した。慶長5年(1600年)、後陽成天皇が病に臥した際、先生が召されて薬を献上し、特に効果があったため院号を賜った。これにより子孫に至るまで養安院と称するようになった。慶長10年(1605年)に徳川家康に召し出され、同13年から隔年で江戸に上った。慶長16年(1611年)8月9日、自宅で病没、享年47歳。紫野の大徳院塔中玉林院に葬られた。

第十六 曲直瀬正純(まなせ しょうじゅん)

1559-1605 道三の後継者



本姓岡野井，父を徳安と曰う，医を曲直瀬道三に学び，後其女婿たり，故に曲直瀬氏を冒す．印に敘せられ，享徳院の号を賜う，年四十七にして歿す，歿年詳ならず．

本姓は岡野井，父は徳安．医術を曲直瀬道三〔→第十三〕に学び，後にその娘婿となり，曲直瀬の姓を名乗った．法印に任じられ，享徳院の号を賜った．47歳にして没したが，没年不詳である〔最近の資料では1559-1605〕．

第十七 御菌意齋(みそのいさい)

1557-1616 打鍼法を発明



名は常心，通称源吾，意齋^{いさい}は其号なり。打鍼^{だしん}の術を以て知らるゝ名家にして，意齋は実に其流中興の祖と称せらる。正親町，後陽成の両天皇に奉仕して鍼博士となる。元和二年十二月病んで其家に歿す。著す所に，医家珍宝，鍼灸秘穴，鍼灸全論，神華秘伝あり。

名前は常心，通称は源吾，意齋^{いさい}は号。打鍼^{だしん}の術 [1] を以て知られる名門で，意齋はその流派の中興の祖とされる。正親町天皇と後陽成天皇の二代に仕え，鍼博士の位を授かった。元和2年(1616年)12月自宅で病没。著作に，医家珍宝，鍼灸秘穴，鍼灸全論，神華秘伝などがある。

1. 打鍼法. 太い鍼を鎚で打ち込む独自の方法. このほか杉山和一の管鍼法 [→第三十], 中国古来の撚鍼法がある。

第十八 曲直瀬玄朔(まなせ げんさく)

1549-1632 曲直瀬道三の養嗣子



名は正紹^{しょうじょう}，通称道三^{どうさん}，東井^{とうせい}と号す，天文十八年京都に生まる。幼にして父母に離る，故に正慶^{しょうけい}養うて己が子となす，天正九年昇殿を聴され，翌十年正月法眼に敍せられ，同年十一月勅旨を奉じて道三と改む，同十四年十二月法印に進み，延命院の号を賜う，後ち延寿院と改む。後ち関白秀次に仕う，秀次自殺するに方りて常陸国に配流せられ，佐竹義宣の許に在りて常山方^{じょうざんほう}を著す。慶長三年後陽成天皇不予，諸医治すること能わず，因て召されて上洛し薬を献じて立に愈ゆ。慶長四年屠蘇白散^{とそはくさん}を幕府に献ず，以後毎年以て佳例とす。寛永八年十二月十日病で歿す，年八十二，渋谷広尾祥雲寺に葬る。著す所に，新旧雑方，薬性能毒，伝心方法，医方繩墨常山方あり。

名は正紹^{しょうじょう}，通称は道三^{どうさん}，東井^{とうせい}と号した。天文^{1549年}18年に京都に生まれた。幼くした両親を失い，正慶^{しょうけい}〔→第十三 曲直瀬道三〕の養子となった。天正9年(1581年)，昇殿を許され翌年正月には法眼に叙せられた。同年11月，勅命によって道三と改名した。天正14年(1586年)12月に法印に昇進し，延命院の号を賜ったが，後に延寿院と改めた。その後関白豊臣秀次に仕えたが，秀次の自害にともなって常陸国へ流され，佐竹義宣のもとに身を寄せて常山方^{じょうざんほう}を著した。慶長3年(1598年)，後陽成天皇が病に臥して諸医が治療できなかったため道三が召されて上洛し，薬を献上したところ直ちに快復した。翌4年に屠蘇白散^{とそはくさん}を幕府に献上し，それ以後毎年の恒例となった。寛永8年(1631年)12月10日に病没，享年82歳。渋谷広尾の祥雲寺に葬られた。著作には新旧雑方，薬性能毒，伝心方法，医方繩墨，常山方がある。

第十九 堀杏庵(ほり きょうあん)

1585-1643 江戸時代初期の医師，儒学者



名は正意^{しょうい}，字は教夫^{あざな}，杏庵と号す，又杏隱とも云う。
近江の人，曲直瀬正純^{まなせしょうじゆん}に医業を受け，又藤原惺窩^{せいかわ}に従
うて経書を学び，藤門四偉^{とうもんしゐ}に数えらる。尾張徳川源敬
に聘せらる，法眼^{ほうげん}に進む。寛永中江戸に來り將軍秀忠
に謁す。弘文院に入り諸家系譜を編修す。寛永十九年
十一月二十五日卒す，享年五十八。

本名は正意^{しょうい}，字は教夫^{あざな}，号は杏庵，また杏隱ともいわ
れた。近江（現滋賀県）の出身。医術を曲直瀬正純^{まなせしょうじゆん}〔→
第十六〕に学び，また藤原惺窩^{せいかわ}のもとで経書^{けいしよ}を学んだ。
「藤門四偉^{とうもんしゐ}」〔1〕の一人とされる。尾張徳川源敬^{げんけい}に招か
れ法眼^{ほうげん}に昇進した。寛永年間（1624-44）に江戸に上り，
將軍徳川秀忠に謁見した。その後，弘文院で諸家の系
譜の編纂にあたった。寛永19年（1642年）11月25
日没，享年58歳。

1. 藤門四偉。儒学者藤原惺窩の門下。堀杏庵の他，林羅山，竹内式部，
谷秦山。

第二十 岡本玄治（おかもと げんや）

1587-1645 曲直瀬玄朔の女婿，後継者．



初めの名は宗什^{そうじゆう}，後ち諸品と改む，玄治は其通称なり．京都の人，年十六曲直瀬玄朔の門に入り方術を学ぶ，学寮の裁となる，玄朔その女を以て妻す．元和四年法眼^{ほうげん}に叙せらる，九年徳川秀忠^{けいてきいん}の医官となり隔年東下す．寛永五年法印に進み啓廸院と号す．寛永十三年朝鮮国使に接し談論大に美譽^{びよ}せらる，十四年家光病み先生の薬により治す，采地千石を賜う．正保二年四月二十日病んで歿す，年五十九，渋谷広尾祥雲寺に葬る．著す所に，燈下集，玄治配剂口解，玄治方考，家伝預薬集，増補済民記，通俗医海腰舟，傷寒衆方規矩あり．

もとの名は宗什^{そうじゆう}，その後諸品と改め，玄治^{げんや}は通称．京都の人で，16歳のときに曲直瀬玄朔〔→第十八〕に入門し，医術を学んだ．学寮では指導的な立場となり，玄朔は自分の娘を玄治に嫁がせた．元和4年（1618年）法眼^{ほうげん}に叙せられ，同9年には徳川秀忠の医官となり，隔年で江戸に下った．寛永5年（1628年）法印に昇進し，啓廸院を名乗った．寛永13年（1636年）に朝鮮通信使を接遇し，議論を交わして大いに称賛された．翌14年徳川家光が病に臥した際，玄治の処方によって治癒し，千石の采地を賜った．正保2年（1645年）4月20日没，享年59歳．渋谷広尾の祥雲寺に葬られた．著作に燈下集，玄治配剂口解，玄治方考，家伝預薬集，増補済民記，通俗医海腰舟，傷寒衆方規矩などがある．

第二十一 施薬院宗伯(せやくいん そうはく)

1576-1663 豊臣秀吉, 徳川家康, 秀忠の侍医.



江州の人、^{みくもさぶろうざえもんすけたか}三雲三郎左衛門資隆の子なり、施薬院秀隆夭死し嗣なきを以て、宗伯出でて家業を継ぐ、豊太閤の侍医となり法眼となる。慶長四年法印に叙し施薬院使に任ず。寛文三年七月二十七日其家に歿す、年八十八、京都寺町十念寺に葬る。著す所に、撮要集あり、宗鑑の著すもの先生之を増補修正して世に公にせり。

近江の出身で、^{みくもさぶろうざえもんすけたか}三雲三郎左衛門資隆の子である。施薬院秀隆[第十四 施薬院全宗の子]が夭折し、跡継ぎがないため家業を継いだ。豊臣秀吉の侍医となり、法眼^{ほうげん}の位を授けられた。慶長4年(1599年)、法印に叙せられ施薬院使に任じられた。寛文3年(1663年)7月27日、自宅にて没した。享年88歳。京都寺町の十念寺に葬られた。著作には撮要集がある。宗鑑^{そうかん}の著作を、先生が増補修正して公刊したものである。

第二十二 野間三竹(のまさんちく)

1615-1676 江戸時代初期の医師, 儒学者.



名は成大^{せいだい}, 字は子苞^{あざな}, 柳谷^{しほう}, 又静軒と号す, 玄琢^{げんたく}の子なり. 慶長十三年に生まる, 父の蔭を以て法橋^{ほっけい}に敍し, 寛文初年御医となり法眼^{ほっげん}に進み, 寿昌院の号を襲ぐ. 延宝四年八月十七日病んで歿す, 享年六十九歳. 著す所に, 北溪合毫, 古今考, 沈静録, 古今逸士伝, 学医通論, 医学類篇, 修養篇四時幽賞, 俗語録, 病余反古録, 竹窓漫筆, 席上談, 桑華紀年, 本朝言行録, 本朝詩英, 群馬考望海録, 孤燈録, 備忘録, 読書得閑編, 覆醬集類書あり

名は成大^{せいだい}, 字は子苞^{あざな}, 柳谷^{しほう}あるいは静軒と号した. 玄琢^{げんたく}の子である. 慶長13年(1608年)に生まれ, 父の功績による恩典で法橋^{ほっけい}の位に敍された. 寛文元年(1661年頃)に御医となり, 法眼^{ほっげん}に昇進し, 寿昌院の号を継いだ. 延宝4年(1676年)8月17日に病没. 享年69歳. 著作に北溪合毫, 古今考, 沈静録, 古今逸士伝, 学医通論, 医学類篇, 修養篇四時幽賞, 俗語録, 病余反古録, 竹窓漫筆, 席上談, 桑華紀年, 本朝言行録, 本朝詩英, 群馬考望海録, 孤燈録, 備忘録, 読書得閑編, 覆醬集類書がある.

第二十三 戴曼公(たい まんこう)

1596-1671 明の医師。長崎に渡来、天然痘治療法を伝えた。



名は竺^{じく}、杭州仁和県の人、万曆丙申二月十九日生まる。少して拳子業を学び、雲林龔廷賢^{ぎようていけん}に従い尽く其術を伝う、後明乱るるや我が長崎に到る。時に承徳二年にして公年五十なり。周防吉川侯^{きつかわ}の請に応じて長防の間に往来す、其臣池田嵩山^{すうざん}書を曼公に学ぶ、曼公其為人を審にし勸めて痘治の術を授く、承応二年隱元(いんげん)和尚東来し大に法威を振う、曼公乞て出家を求め、和尚の坐下に歸し難染^{ちせん}し、名を性易^{しやうえき}と改め、字を独立^{どくりゆう}と曰う、天外一間人、又天外老人と号す、而して医をなすこと旧の如し。云く物を済は是れ仏心、道本広大、在らざる所なし、其治成方に規々たらず、而も驗を得ること多しと云う。寛文十二年十一月初六日遂に寂す、春秋七十七、長崎聖寿山中に火き、弟子慧明^{けいめい}其骨を護送して、宇治黄檗山^{おうぼくさん}に葬る。著す所に、痘疹治術伝、婦人治痘伝、痘疹百死形状伝、痘科鍵口訣、方論、正面定位図、面部四位八隅図、面色順逆図、三十六面図、唇舌常候、病唇十八品、病舌三十六品五死舌図あり。

本名は竺^{じく}、出身は杭州の仁和県。万曆丙申年(1596年)2月19日生れ。若いころから医術を学び、雲林の龔廷賢^{ぎようていけん}に師事して、その技術を余すところなく受け継いだ。後に明が乱れたため、長崎に渡来した。時に承徳2年(1645年)、50歳であった。周防藩主吉川侯^{きつかわ}の招きに応じて、長門と防州の間を行き来するようになった。その家臣池田嵩山^{すうざん}が曼公に学問を学び、曼公は彼の人柄を見極めて、天然痘の治療法を授けた。承応2年(1653年)、隠元和尚が来日し、大いに仏教の威光を振るった。曼公は出家を願い、隠元の弟子となって仏門に入り、名を性易^{しやうえき}と改め、字を独立^{どくりゆう}と号す、号を天外一間人または天外老人と称した。医業は以前と変わらず続けた。曼公が云うには、人を救うことこそが仏の心である、道の本質は広大で、どこにでも存在する、自分の治療法は標準的ではないが、それでも多くの効果を上げてきたと。寛文12年(1672年)11月6日、ついに没した。享年77歳。長崎の聖寿山で火葬され、弟子の慧明^{けいめい}が遺骨を宇治の黄檗山^{おうぼくさん}に送り葬った。著作には以下のようなものがある。痘疹治術伝、婦人治痘伝、痘疹百死形状伝、痘科鍵口訣、方論、正面定位図、面部四位八隅図、面色順逆図、三十六面図、唇舌常候、病唇十八品、病舌三十六品五死舌図。

第二十四 向井靈蘭 (むかい れいらん)

1609-1677 独学で医学を学んだ京都の名医.



始の名は玄松^{げんしょう}、晩年元升^{げんしょう あらた}と更む、字は素柏^{あざな}又以順、自ら観水子と号す、其堂を靈蘭と名く。慶長十四年二月二日、肥前神崎郡酒村に生まる、父高甫^{こうぼ}病あり長崎に移る。先生年二十二、始て書を読み遂に医を以て業となし、俗に従て薙髪^{ちはつ}す。先生独学刻苦、遂に其蘊奥^{うんおう}を窮む、筑前黒田候病あり招て治せしめ効あり、俸七百石を以て召すも応せず。四十六歳其姑を失い、万治元年先生五十歳妻子を携て京都に入り家す、直ちに伊勢大廟に詣て廟前に於て髪を束ね又俗服雅ならざるを以て羽徳衣^{うとくい}を創て自ら礼服となす。京都に在ること日久して其術大に行わる、先生年六十。加賀に赴き家臣の病を治す、侯招かんとするも老衰事に堪えざるを以て辞して受けず。延宝五年十一月朔日病を以て家に卒す、享年六十九、越て十一日京都洛東^{れいしやうざん}鈴声山に葬る、元禄六年故ありて其南に改め葬る。著す所に、和名本草、広求経験秘方あり。

もとの名は玄松^{げんしょう}、晩年には元升^{げんしょう}と改めた。字は素柏^{あざな}あるいは以順と称し、自ら観水子と号した。自宅を靈蘭と名づけていた。慶長14年(1609年)2月2日、肥前国神崎郡酒村(現佐賀県神埼郡)に生まれる。父高甫^{こうぼ}が病を患い長崎に移住した。22歳のときに初めて書を学び、ついには医学を生業とした。世俗に従って仏門に入った。独学で苦学し、ついに医学の奥義を極めた。筑前の黒田藩主が病に臥した折、先生を招いて治療させたところ効果があり、七百石の俸禄で召し抱えようとしたがこれを辞退した。46歳で姑を亡くし、万治元年(1658年)50歳で妻子を伴って京都に移住した。すぐに伊勢神宮に参拝し、神前で髪を束ね、俗人の服装が礼になっていないと考え、自ら羽徳衣^{うとくい}という礼服を創案した。京都に長く住むうちに、その医術は大いに評判となった。60歳のとき、加賀に赴いて家臣の病を治療した。藩主は先生を召し抱えようとしたが、老衰のため仕事に耐えられないとして辞退した。延宝5年(1677年)11月1日自宅で病没、享年69歳。11日後、京都洛東^{れいしやうざん}の鈴声山に葬られたが、元禄6年(1693年)に事情によりその南側に改葬した。著作には和名本草、広求経験秘方がある。

第二十五 山脇玄心(やまわき げんしん)

1594-1678 5代の天皇の侍医をつとめた名医



道作^{どうさく}と称し、文禄三年近江、山脇村に生まる、後ち父松雪に従い京都に移り、慶長年中、今大路玄朔に入門し、医道を学び、後ち福知山有馬家に仕え、更に又美濃徳永家に仕う、又京都に医業を開く。元和六年^{きんり}禁裏に召され侍医となり、元和九年^{ほつきょう}法橋に、寛永十四年^{ほうげん}法眼に、同二十年法印に叙し、養寿院の号を賜わる。後水尾、明正、後光明、後西、霊元^{きゆうじょう}の五朝に奉仕す。後水尾天皇御譲位後も日々参内す、勅命により養寿録を著述して献上す、老年の節頭巾鳩杖を賜り、参内院参の節、宮中にて兩品使用を許さる。先是徳川南龍公疾あり道作を請んと欲す、上皇遣らず、曰く朕一日も道作無かる可らず、道作在らざれば朕が心安からずと。延宝六年十月八日歿す、寿八十二。著す所に、勅撰養寿録原病式集解医方捷徑あり。

道作^{どうさく}と称し、文禄3年(1594年)に近江国山脇村(現滋賀県長浜市付近)で生まれた[1]。後に父松雪に従って京都へ移り、慶長年間に今大路玄朔の下で医学を学んだ。その後福知山の有馬家に仕え、さらに美濃の徳永家に仕えた。やがて京都に戻って医業を開業した。元和6年(1620年)、宮中に召されて侍医となり、元和9年(1623年)に^{ほつきょう}法橋、寛永14年(1637年)に^{ほうげん}法眼、寛永20年(1643年)には法印に昇進し、養寿院の号を賜った。後水尾、明正、後光明、後西、霊元^{きゆうじょう}の五代の天皇に仕えた。後水尾天皇が譲位した後も、日々参内した。勅命により養寿録を著し献上した。老年になってからは、頭巾と鳩杖を賜り、参内や院参の際には宮中でその使用を許された。以前に徳川南龍公[紀伊徳川頼宣]が病に臥した際、道作を招こうとしたが上皇[後水尾院]はこれを許さなかった。朕は一日たりとも道作なしではいられぬ、道作がいなければ朕の心は安らがないと。延宝6年(1678年)10月8日没、享年82歳。著作に勅撰養寿録、原病式集解、医方捷徑がある。

1. 初代 山脇玄心、二代 山脇玄脩(→第四十)、三代 山脇東洋(→第四十七)、四代 山本東門(→第六十)、五代 山脇東海(→第百三)、六代 山脇東圃(→第百十二)

第二十六 井上玄徹 (いのうえ げんてつ)

1602-1686 徳川家光の侍医



霊叟^{れいそう}と号す、慶長七年六月四日周防山口に生まる。年十三出でて広島の人井上豊後の家を嗣ぐ、壮年京都に出て医業を曲直瀬玄朔に受け、精妙を得、正保四年十一月初めて家光将軍に京都に謁し、尋て侍医となり、俸三百苞を賜う。寛文四年十一月会津保科侯咯血を患う、玄徹命を受け方を処し、侯の病忽ち痊ゆ、五年十二月二十九日法眼に叙せらる。万治三年男玄快をして継がしめ、自ら老を告げて退く、宝暦五年東福門院不予、玄徹命を奉じて京都に入り薬を献じて効あり、天皇その労を賞し玉う。六年六月江戸に帰り法印に叙し、交泰院の号を賜う、古より一診の報酬銀三千挺^{ちよう}(ちょう)あるもの玄徹と井関常甫^{いげきじようほ}とあるのみ。玄徹又喜で子弟を教導し門弟千を以て数う。貞享三年四月十九日病んで其家に歿す、年八十五。地を渋谷広尾祥雲寺内師玄朔の墳側に相し、遺言して此地に葬らしむ。

霊叟^{れいそう}と号し、慶長7年(1602年)6月4日、周防国山口(現山口県)に生まれた。13歳にして家を出て広島の人井上豊後の家を継いだ。壮年期に京都へ出て、医業を曲直瀬玄朔[→第十八]に学び、精妙な技術を身につけた。正保4年(1647年)11月、初めて将軍徳川家光に京都で謁見し、まもなく侍医となり、俸禄三百苞を賜った。寛文4年(1664年)11月、会津藩主保科侯が咯血した際に命を受けて処方を行い、その病はたちまち快癒した。翌寛文5年(1665年)12月29日、法眼^{ほうげん}に叙せられた。万治3年(1660年)、息子玄快に家を継がせ、自らは老齢を理由に退いた。宝暦5年(1755年)、東福門院が病に臥した際、命を受けて京都に入り、薬を献じて効果があり、天皇はその功績を賞した。翌宝暦6年(1756年)6月、江戸に戻り、法印に叙せられ、交泰院の号を賜った。古くから一回の診察の報酬として銀三千挺^{ちよう}を受けた者は、玄徹と井関常甫^{いげきじようほ}のみである。玄徹はまた喜んで子弟を教導し、門弟は千人を数えた。貞享3年(1686年)4月19日、病を得て自宅で没した。享年85歳。墓所は渋谷広尾の祥雲寺内、師玄朔の墓の側にあり、遺言によりその地に葬られた。

第二十七 井上玄徹（木像）

1602-1686 徳川家光の侍医



史伝. 前に出ず.

第二十八 今大路玄淵（いまおおじ げんえん）

1636-1686 江戸時代前期の医師



名は親俊，諱は玄淵，字は静然，寛永十三年三月十日江戸に生まる，慶安四年十二月十九日典薬頭てんやくのかみに敘せられ兵部大輔ひょうぶたいふと称す，貞亨三年五月二十二日中風に罹り急死す，年五十一．著す所に，魚目明珠掌珠方，唐絶寄解，実篋方，入門私考，龍金方，時齊文抄，時齋日抄，一壺集，錦腕子，杜律膚見，素問考驚筵奇談，医小伝，読書漫筆，斗塵抄，蕉聰漫録，袖裏春，艸沢便方，拙菴日抄葵所筆録，茅山草筆，多聞奇方，尚友堂詩抄，古文後集考，歴史日本考，陸放翁詩抄，医戒，医淵あり．

名は親俊いみな，諱は玄淵あざな，字は静然，寛永13年(1636年)3月10日江戸に生まれる．慶安4年(1651年)12月19日典薬頭てんやくのかみに敘せられ兵部大輔ひょうぶたいふと称された，貞亨3年(1686年)5月22日中風に罹って急死．享年51歳．著作に，魚目明珠掌珠方，唐絶寄解，実篋方，入門私考，龍金方，時齊文抄，時齋日抄，一壺集，錦腕子，杜律膚見，素問考驚筵奇談，医小伝，読書漫筆，斗塵抄，蕉聰漫録，袖裏春，艸沢便方，拙菴日抄葵所筆録，茅山草筆，多聞奇方，尚友堂詩抄，古文後集考，歴史日本考，陸放翁詩抄，医戒，医淵がある．

第二十九 嵐山甫安 (あらしやま ほあん)

1633-1693 江戸時代前期の蘭方医，外科医



名は甫安^{ほあん}又春育，初め判田李庵と云う，平戸通詞判田三郎兵衛尉の二男なり．寛文元年二十九歳藩命により長崎に行き^{オランダ}阿蘭陀外科学を修むること二年にして平戸に帰り，寛文四年藩に召され延宝八年禄百石を受く．後病を得，摂州有馬に湯治し，京都に出でて貴紳の治療を施し，^{ほつきょう}法橋に叙せらる．姓を改めて嵐山甫安とす．蓋し，治療の巧妙^{たと}花を以て譬うべきとの勅旨によると，元禄六年十一月三十日歿す，享年六十一．著す所に，蠻国治方類聚あり．

名は甫安^{ほあん}，また春育とも称した．はじめは判田李庵と名乗った．平戸藩の通訳である判田三郎兵衛尉の次男．寛文元年(1661年)，29歳のとき藩の命令で長崎に赴き，^{オランダ}オランダ外科学を学んだ．2年間の修学を経て平戸に戻り，寛文4年(1664年)に藩に召され，延宝8年(1680年)に百石の俸禄を受けた．その後病を患い，摂津国有馬温泉で湯治を行い，さらに京都に出で^{ほつきょう}貴族高官の治療にあたった．その功績により法橋の位を授けられた．嵐山甫安と改名したのは，その治療が花にたとえられるほど巧みであるという勅旨によるものである．元禄6年(1693年)11月30日没，享年61歳．著作に蛮国治方類聚がある．

第三十 杉山和一(すぎやま わいち)

1610-1694 管鍼法を創始した全盲鍼医師



伊勢の人、慶長十五年生る、目盲の故を以て家を義弟重之に譲り、江戸に出て山瀬琢一たくいちに学ぶ、先生鈍性にして技進まず、遂に其師に逐おわる。後ち相州江の島弁天神社に詣う、断食祈ること三十七日夢に神あり、一物を授く、熟視すれば管と鍼なり、之によって創めて管鍼かんしんを造り其術を施す、後ち京都に赴き入江豊明うんおうに師事し、斯術の蘊奥を窮む。偶々綱吉公病あり、和一を召して鍼を進めしむ効あり、時に貞享二年正月八日なり。元禄五年五月九日関東総録けんぎょう検校となる。同七年五月十八日、病んで其家に歿す、享年八十五、本所林町彌勒寺に葬る。著す所に、療治三大概集、医学節要集、選鍼三要集あり、之を杉山三部書と称す。

伊勢の出身。慶長15年(1610年)生れ。盲目のため、家督を義弟重之に譲り、江戸に出て山瀬琢一たくいちに師事した。しかし鈍重な性格で技術も進歩せず、ついには師から破門された。その後、相模国江の島(現神奈川県藤沢市江ノ島)の弁天神社に参詣し、37日間の断食祈願を行った。すると夢の中に神が現れ、ある物を授かった。よく見るとそれは管と鍼であった[1]。これをきっかけに管鍼法[2]を創案し、施術するようになった。後に京都へ赴き、入江豊明うんおうに師事して管鍼術の奥義を極めた。ちょうどその頃、五代将軍徳川綱吉公が病に臥し、和一が召されて鍼治療を施したところ効果があった。貞享2年(1685年)正月8日のことである。元禄5年(1692年)5月9日、関東総録けんぎょう検校に任ぜられた。元禄7年(1694年)5月18日、自宅で病没、享年85。本所林町の彌勒寺に葬られた。著作に療治三大概集、医学節要集、選鍼三要集があり、これを杉山三部書という。

1. 石に躓いてころび、体に竹筒と松葉が刺さった、あるいは管状の椎の葉と松葉だったなどの言い伝えがある。

2. 金属管の中に鍼をいれ、その頭を軽く叩いて刺入する方法。日本独自の方法で、正確、痛みが少ない利点があり、現在も広く行われる。

第三十一 本木良意(もとき りょうい)

1628-1697 オランダ語通訳. 解剖学書を翻訳



名は^{えいきゆう}栄久, 庄太夫と通称す, 平戸の人, 早くより蘭語に通ず. 寛永十七年蘭人の長崎に移るや, 共に赴き万治二年平戸に帰る. 当時長崎には未だ通詞なきを以て奉行黒川与兵衛の依頼により寛文四年更に長崎に居を定む, 同八年大通詞となり, 三十二年間の精励よく其責を尽し, 元禄八年辞職すると共に新たに通詞目付に召出され, 剃髪して良意^{りょうい}と改名す. 元禄十年十月十日病んで歿す, 時年七十.

名は^{えいきゆう}栄久, 通称は庄太夫. 平戸の出身で, 若いころからオランダ語に通じていた. 寛永 17 年 (1640 年), オランダ人が長崎に移住した際に同行し, 万治 2 年 (1659 年) に平戸へ戻った. 当時の長崎にはまだ通詞がいなかったため, 奉行黒川与兵衛の依頼を受けて, 寛文 4 年 (1664 年), 再び長崎に居を構えた. 同 8 年 (1668 年) には大通詞となった. その後 32 年間に精励し職責を良く果たした [1]. 元禄 8 年 (1695 年) に通詞を辞したが, 新たに通詞目付として召し出され, 剃髪して良意^{りょうい}と改名した. 元禄 10 年 (1697 年) 10 月 10 日, 病没, 享年 70 歳.

1. 本木良意は医師ではないが, ドイツの解剖学書の蘭語訳版をオランダ人医師の指導の下に翻訳し, 没後の 1772 年, この草稿を医師鈴木宗雲が「和蘭全軀内外分合図」として出版した. 原書と同じく臓器の形に切り抜いた紙片を貼り合わせてめくることができる立体的な切り紙細工が施されている. 杉田玄白の解体新書に先立つこと 2 年であった.

第三十二 鳩野宗巴 (初代)(はとの そうは)

1641-1697 密航して医学を学んだ蘭方医.



長州の人、中島を姓とす、武を棄て医となり、長崎に寓す、万治の初年竊に和蘭船に投じ南蛮に航し、ボストウの門に入り医を学ぶこと三年、帰朝するや名を諸国巡覧に托して潜匿す。偶々南蛮医アルマンス蘭医カスパルの二人幕府の許可を得て医業を長崎に開くに会す、宗巴往て弟子となる。此際肥前侯愛飼する所の鳩足^{きずつ}を傷く、之を治す効あり、侯賞し姓を鳩野とせんことを勧告す。地方の人鳩の宗巴と呼ぶ、遂に自ら鳩野を冒す。細川公客礼^{かくれい}を以て聘す、大阪藩邸に在りて傍ら業を開く。元禄十三年歿す、学峰道楽老法師^{おくりな}に諡す、俗にして老法師を称するは多くは人を救いたるを彰するなり。

長州(現山口県)の出身、姓は中島。武士の身分を捨てて医師となり、長崎に住んだ。万治年間(1658-61)の初め、密かにオランダ船に乗り込み、南蛮へ渡航。ボストウの下で医学を3年間学んだ。帰国後は、諸国を巡って身を隠していた[1]。ちょうどその頃、南蛮医アルマンスとオランダ医カスパルの二人が幕府の許可を得て長崎で医業を開業し、宗巴はその弟子となった。その折、肥前藩主が愛玩していた鳩が足を傷めたのを治療した。藩主はその功績を称え、鳩野を名乗るよう勧めた。地元の人々は鳩の宗巴と呼び、彼もついに自ら鳩野を名乗るようになった[2]。後に細川公[熊本藩]に客礼をもって招かれ、大阪藩邸で医業を営んだ。元禄13年(1700年)没[最近の資料では元禄10年(1697年)]。学峰道楽老法師の法号を贈られたが、俗人でありながら老法師と呼んだのは、多くの人々を救ったことを称えるためである。

1. オランダへの密出国は、明治期まで伏せられていた。

2. 初代から8代までいずれも鳩野宗巴を名乗る熊本藩医であった(→第百四十七 鳩野宗巴(七代))。

第三十三 松下見林(まつした けんりん)

1637-1704 医師, 国学者.



名は慶けい摂しょう, 字は諸生あざな, 西峰山人さいほうさんじんと号し, 見林けんりんと通称す, 浪華なになわの人, 寛永十四年一月元旦に生まる. 年十三, 古林見宜ふるばやしけんぎに贅しを執り医学を修む, 京都に在りて医を業とする傍けいしよ経書ぜいしを講ぜり. 後ち高松侯に筮仕せいしす, 延宝年間, 尸田越前守忠昌, 朝廷に奏して法印の位を授けんと欲す, 先生辞して受けず. 元禄十六年十二月七日歿す, 年六十七. 著す所に, 運氣論疏鈔, 習医規格, 古林見宜翁伝あり.

名は慶けい摂しょう, 字は諸生あざな, 号は西峰山人さいほうさんじん, 通称は見林けんりん. 浪華なになわの出身で, 寛永14年(1637年)1月1日生れ. 13歳のとき, 古林見宜ふるばやしけんぎに入門して医学を学んだ. 京都で医業を営むかたわら, 経書けいしよを講じた. その後, 高松藩主に仕えた. 延宝年間(1673-81年), 加賀藩主の松平忠昌が朝廷に上奏して法印の位を授けようとしたが辞退した. 元禄16年(1703年)12月7日没, 享年67. 著書に, 運氣論疏鈔, 習医規格, 林見宜翁伝がある.

第三十四 榎林鎮山(ならばやし ちんざん)

1649-1711 蘭方医. 榎林流外科の祖



名は時敏^{ときとし}、通称新吾兵衛、鎮山は其号なり、慶安元年十二月十四日長崎に生まる。幼にして和蘭人^{オランダ}に就て其文字を学ぶ、年十八、挙げられて小通詞となる、貞享二年六月大通詞に擢せらる。元禄元年蘭医ホツフマンの来朝に遭い、医学の疑義を質し、同五年八月年五十一、通詞の業を子栄理^{えいり}に譲り剃髪して栄休と改め、外科を以て業とす、榎林流外科茲に興る。宝永八年三月二十九日病んで歿す、享年六十九。

名は時敏^{ときとし}、通称は新吾兵衛、鎮山は号である。慶安元年(1648年)12月14日、長崎に生まれた。幼時よりオランダ人についてオランダ語を学んだ。18歳のとき、小通詞に抜擢された。貞享2年(1685年)6月、大通詞に昇進した。元禄元年(1688年)、オランダ医師ホツフマンの来日にあたっては、医学に関する疑問を問いただした。同5年(1692年)8月、51歳で通詞の職を子の栄理に譲り、自らは剃髪して栄休と改名し、外科を業とした。ここに榎林流外科が興った。宝永8年(1711年)3月29日病没、享年69歳。

第三十五 寺井玄溪(てらい げんけい)

1622-1711 赤穂藩医. 赤穂事件にも関与.



元禄十三年、赤穂^{あこう}城主浅野^{なかのり}長矩に仕う、江戸の変起るに及び、大石良雄^{よしとか}に従い江戸に赴かんと請う、良雄喜ばず、医人の君^かを交うれば、後世、僚輩^{くそつ}を駆率し以て方技の徒に及ぶと謂わん、而して軍伍の間医官未だ嘗て従わざる所なりと、玄溪遂に止む。子玄達を江戸に送り諸士の疾を護らしむ。正徳元年歿す。

元禄 13 年 (1700 年)、赤穂^{あこう} (現兵庫県赤穂市) 藩主浅野^{なかのり}長矩に仕えた。江戸に事件が起こると、大石良雄^{よしとか} [内蔵助] に従い、江戸に赴くことを願い出た。しかし大石は喜ばなかった。医者であるあなたを連れて行けば、後世の人々は僚友^{くらのすけ}を率いて医家まで戦いに参加させたと言うであろう、しかも戦陣に医師を伴うことはかつて例のないことであると。玄溪はついに断念した。代わりに、子の玄達を江戸に送り、諸士 [赤穂浪士] たちの病を診させた。

第三十六 吉田自庵(よしだ じあん)

1644-1713 江戸前, 南蛮外科医, 奥外科医師



名は昌全^{しょうぜん}, 自庵は其号なり, 筑前太宰府の人, 本姓坂田, 幼にして, 長崎に赴き, 吉田自休^{じきゅう}に就て南蛮外科を学ぶこと多年, 自休己れが子とし, 其業を嗣がしむ, 依て吉田氏を冒^{おか}す. 元禄四年六月江戸に仕う, 時に年四十八, 同六年十二日法眼^{ほうげん}(ほうげん)に叙せらる, 奥外科となる, 宝永七年七月仕を致し, 正徳三年四月病んで歿す. 著す所に, 三国流外科伝書, 外科真伝あり.

名は昌全^{しょうぜん}, 自庵は号. 筑前国太宰府(現福岡県太宰府付近)の出身で, 本姓は坂田. 幼いころ長崎に赴き, 吉田自休^{じきゅう}に師事して南蛮外科を長年学んだ. 自休は昌全を養子として医業を継がせ, 昌全は吉田姓を名乗った. 元禄4年(1691年)6月, 江戸幕府に仕官した. ときに48歳であった. 元禄6年(1693年)12月, 法眼^{ほうげん}に叙せられ, 奥外科医師となった. 宝永7年(1710年)7月に辞職, 正徳3年(1713年)4月に病没. 著書には三国流外科伝書, 外科真伝がある.

第三十七 貝原益軒(かいばら えきけん)

1630-1714 本草学者,「養生訓」を著す



名は篤信^{あつのぶ}, 字は子誠^{あざな}, 通称久兵衛, 益軒と号し, 又損軒と号す, 筑前の人, 寛永七年十一月十四日生まる. 先生年十九武州河崎宿にて祝髪し, 柔齋と号し, 医とならんとして向井靈蘭^{れいらん}に学ぶ. 寛文八年三十九歳束髪して久兵衛と云う. 恒に済生に意を傾け, 後生の裨益とし, 著する所の書多くは国字を以てし, 田夫隸卒^{でんぶれいそつ}に便とす. 先生年七十九, 大和本草を撰す. 之れより先き元禄十三年先生年七十一, 老を告げて仕を致す, 猶月俸を賜いて其老を優す. 正徳四年, 手足麻痺して八月二十七日家に歿す年八十五, 荒津金龍寺に葬る. 明治四十四年六月正四位を追賜せらる. 著す所に, 大和本草, 日本釈名本草綱目, 和名目録, 養生訓等あり.

名を篤信^{あつのぶ}, 字(あざな)は子誠, 通称は久兵衛, 号は益軒また損軒. 筑前(現福岡県)の出身で, 寛永7年(1630年)11月14日に生まれた. 19歳のとき, 蔵国河崎宿で剃髪して柔齋と号し, 医者になるべく向井靈蘭^{れいらん} [→第二十四]に学んだ. 寛文8年(1668年)39歳にして再び髪を結び, 通称を久兵衛と改めた. 常に衆人の命を救うことに心をくばり, 後世の役に立つよう多くの著作を著した. その多くは仮名交じり文で書かれ, 農夫や下級武士にも読みやすいようにした. 79歳にして大和本草を著した. これに先立つ元禄13年(1700年), 71歳で老齢を理由に官職を退いたが, なお月俸を与えられて老後を優遇された. 正徳4年(1714年), 手足が麻痺し, 8月27日に自宅でした. 享年85歳. 荒津の金龍寺に葬られた. 明治44年(1911年)6月, 正四位を追贈された. 主な著書には大和本草, 日本釈名, 本草綱目和名, 和名目録, 養生訓などがある.

1655-1715 本草学者



名は宣義^{のぶよし}、字は彰信^{あざな}、木下貞幹^{ろそうせき}を師とし、儒医を以て金沢候に仕う、初め長崎の盧草碩^{ろそうせき}本草を講究し、薬惟集要^{やくいしゅうよう}を作り、同邑福山徳潤に授く、徳潤大阪に往き其学を唱う、若水従て之を受く。庶物類纂^{しよぶつるいさん}一千巻を著わす、又正徳年間本草綱目を校正し、其誤脱を補入し、付するに結髦居別集^{けつぼうきべつしゅう}を以てす。正徳五年七月五日、京都北小路の家に歿す、年六十一。著す所に庶物類纂、詩経小識、左伝名物考、本草図画、本別集、物産目録我土産目録、採薬独断皇和物産品目、炮炙全書、孝女伝、結髦居別集非本草綱目指南、食物本草、胡枝録あり。

名は宣義^{のぶよし}、字は彰信^{あざな}。木下貞幹^{ろそうせき}を師に学び、儒医として金沢藩に仕えた。はじめ長崎にて盧草碩^{ろそうせき}の本草学を研究し、薬惟集要^{やくいしゅうよう}を著して同郷の福山徳潤に供した。徳潤は大阪に赴いてその学問を広めた。若水は徳潤に従ってその学を受け継いだ。宣義は庶物類纂^{しよぶつるいさん}(^{しよぶつるいさん}一千巻を著した。また正徳年間(1711-16)には本草綱目の校正を行い、誤字脱字を補って結髦居別集^{けつぼうきべつしゅう}を付録として加えた。正徳五年(1715年)7月5日、京都北小路の自宅で没。享年61歳。著作には庶物類纂、詩経小識、左伝名物考、本草図画、本別集、物産目録我土産目録、採薬独断皇和物産品目、炮炙全書、孝女伝、結髦居別集非本草綱目指南、食物本草、胡枝録がある。

第三十九 越智平庵(おち へいあん)

1633-1726 江戸時代中期の奥医師



名は正球せいきゅう(一に正理せいりに作る), 無方居士と号す, 同齋は其別号なり。寛永十年正月十九日江戸に生まる, 寛文七年父玄理歿し, 先生其家を嗣ぐ, 年二十八。近郊に行き, 田野医薬に乏しきものに其業を施して練習し, 八王子に三年留れり。延宝元年召されて帰り, 二年直医となり, 七年法眼に敘し, 天和二年十一月十八日侍医となり, 元禄元年法印に敘せらる, 采地千九百石に至る。享保六年十一月先生老を以て其職を辞するに当たり, 黄金一千枚を賜わる, 同九年七月家を其子に譲る, 同十一年十二月十三日歿す, 年八十五, 麻布天真寺に葬る。

名は正球別せいきゅうに正理せいりとも書く。号は無方居士, 同齋は別号。寛永10年(1633年)正月19日に江戸で生まれ, 寛文7年(1667年)に父玄理が亡くなり, その家督を継いだ。28歳であった。その後, 江戸近郊で, 田舎で医薬に乏しい人々に医術を施して修練を積み, 八王子に3年間滞在した。延宝元年(1673年)に召されて江戸に戻り, 翌年に奥医師となった。同7年(1679年)には法眼ほうがんの位に叙せられ, 天和2年(1682年)11月18日に將軍の侍医となった。元禄元年(1688年)には法印に叙され, 禄高は1900石に達した。享保6年(1721年)11月, 老齡を理由に職を辞するにあたり, 黄金1000枚を賜った。享保9年(1724年)7月には家督を子に譲り, 享保11年(1726年)12月13日没, 享年85歳[校注: 生没年と享年不一致]。麻布の天真寺に葬られた。

第四十 山脇玄脩 (やまわき げんゆう)

1654-1728 山脇家 2 代目医師



^{どうりつ}道立と称し、三宅宗理の男なり、承応三年に生まる、山脇玄心に養わる、由て山脇氏を冒す。延宝四年法橋に、享保十二年十月二日歿す、年七十四京都誓願寺に葬る。翌五年法眼に叙せられ、同六年十二月家督を襲ぐ。著す所に本草付方分類医方聰鑑あり。

^{どうりつ}道立と称し、三宅宗理の子である。承応3年(1654年)生まれ、山脇玄心[→第二十五]に養育され、山脇姓を名乗った。延宝4年(1676年)に^{ほつきょう}法橋の位を受け、享保12年(1727年)10月2日没、享年74歳。京都の誓願寺に葬られた。翌享保13年(1728年)、^{ほうげん}法眼の位を追贈され、享保14年(1729年)12月に家督を継承した。著作に本草付方分類医方^{そうひん}聰鑑がある。

第四十一 後藤艮山(ごとう こんざん)

1659-1733 古方派を代表する医師。温泉医学の祖



名は達^{あざな}、字は有成、俗称左一郎、一に養庵と号す。万治二年七月二十三日江戸常磐橋^{きようきよ}の僑居に生まる、艮山幼にして聰明、性至孝にして父母に仕えて忻歆を尽す。是の時江戸頻年火災あり、十一年間に七たび焼かる、父京都に移り安居を求めんと欲す、艮山乃ち父母を奉じて京都に来る、時に二十七。艮山、慨然として歎じて曰く、我れ儒たんか伊藤仁齋^{じよう}に上たり難し、我れ僧たんか隠元^{けい}に兄たり難し、已むなくんば即ち医乎、豪傑の士先鞭^しを著くるものあるなしと。茲に於て、銭一貫文^{そし}を贄として名古屋玄医の門を訪う、玄医其贄の薄く、家規に合わざるを以て見えず、艮山憤懣門を出で

名は達^{あざな}、字は有成、俗称は左一郎、また養庵も号した。万治2年(1659年)7月23日、江戸常磐橋(現東京都千代田区)の仮寓で生まれた。幼いころから聡明で、大変親孝行で父母に仕えて大いに喜ばせた。当時の江戸では大火が立て続き、11年間に7回も焼けた。父は安全を求めて京都への移住したいと欲したため、艮山は父母を連れて京都に移住した。27歳であった。艮山は嘆じて言った。儒者として伊藤仁齋に及ばず、僧としても隠元に匹敵できない。ならば、まだ偉大な人物が現れていない医術の道に進もう。そこで、手持ちの銭一貫文を入門の礼として名古屋玄医を訪ねた。しか

玄医^{そはい}鼠輩人を知らずと罵る、艮山之より奮起勤勉、医を業とし、廿年間盛にその術行れ、診を乞うもの其門に満ち、弟子凡そ二百人に及べり。

之より先き、医人皆髪を剃り僧衣を着け僧官を拝す、艮山之を憎み、幡然^{はんぜん}髪を束ねて縫春を服し、旧姓に復し、後藤佐一郎と称す、後ちその風儀を慕うもの多く、医人の束髪するものを後藤流と称せらる。艮山の学は古方学にして、一氣留滞論を唱え、順氣に因るべきを治法の綱要とせり。又艮山の病を治するに灸を用い、温泉を利し、熊胆^{ゆうたん}を好めり、世俗呼^{よん}で湯熊灸庵^{ゆのくまきゆうあん}と曰えり。

し玄医は、礼が少なく家のしきたりに合わないとして会わなかった。艮山は憤って門を出て、玄医のようなつまらない人間は人を見る目がないと罵った。以後奮起して学問に励み、医術を業とし、20年間大いに活躍し、診察を求める者が門前を溢れ、弟子は200人にも達した。それ以前の医師たちは皆、髪を剃って僧衣を着け、僧の位を受けていたが、艮山はそれを嫌い、きっぱりと髪を束ね普通の服を着て、旧姓に服して後藤佐一郎を名乗った。

後にこれを慕って髪を束ねる医者が多くなり、これを後藤流と呼ぶようになった。艮山の医学は古方派で、一氣留滞論を唱え、氣のめぐりを順調にすることを治療の要とした。また治療に灸を好んで用い、温泉を活用し、熊胆^{ゆうたん}(くまのい)を愛用した。そのため世間の人は、彼を湯熊灸庵^{ゆのくまきゆうあん}と渾名した。

第四十二 香月牛山(かつき ぎゅうざん)

1656-1740 後世派の医師



名は則真^{あざな}，字は啓益，筑前の人，少くして貝原益軒に学び，又鶴原玄益に従うて方伎の書を受く．壮なるに及びて中津侯に仕う，居ること十四年，後京都に遊ぶ，居を二條に卜し，刀圭を業とす．先生妻妾を蓄えず，子なし．門人則道^{あざな}を嗣とす．元文五年歿す，年八十五．著す所に，蛭雪余話，牛山方考，医学鉤玄，国字医叢婦人寿草，小兒必要記，老人養草，習医先入あり

名は則真^{あざな}，字は啓益，筑前(現福岡県)の出身．若くして貝原益軒[→第三十七]に学び，また鶴原玄益のもとで医学を学んだ[1]．壮年にして中津藩に仕え，その地で十四年間勤めた後，京都に出て二条に住まいを構え，医業を行った．妻や側室を持たず，子どもはいなかった．弟子の則道^{あざな}が学問と技術を継いだ．元文5年(1740年)85歳で没．著書に，蛭雪余話，牛山方考，医学鉤玄，国字医叢婦人寿草，小兒必要記，老人養草，習医先入がある．

1. 李朱医学を信奉する後世派の代表であるが，貝原益軒に学んだ臨床試験の術も活用して实际的な臨床を行った．

第四十三 松岡恕庵(まつおか じょあん)

1668-1747 稲生若水の学問を発展させた本草学の大家



名は玄達^{あざな},字は成章^{いがんさい},別に怡顔齋^{いがんさい}と号す,平安に生まる,初め山崎闇齋^{あんさい}に従い,伊藤仁齋^{いのうじやくすい}に学ぶ,稲生若水^{いんじやくすい}に就て本草綱目を問い,該通せざるは無し.当時物産家後藤常之進^{ぶっさんか}あり時に鳴る,而して先生の声誉遙に其上に出ず,当時服部南郭^{ふくべなんかく}の儒名一時に播き生徒甚だ多し,而して先生の本草を講ずるや南部の講筵に匹敵して門外市を成せりと云う,時人推して本草の大家となす.

先生^{てんびん}天稟^{てんべん}淳朴,儉素自ら処す,其男善吾^{ぜんご}幼より長ずるまで絹衣を用いず,其袴は麻布を用う.門生見るに忍びず好袴を贈る,先生之を見て曰く吾れ仁齋先生の講席に侍する時^{とうがい},東涯猶幼にして白木綿を衣,白綿袴を着く,善吾の染衣を着くるも猶且奢なりと,終に之を着せしめざりき.延享四年病で其家に歿す,其子善吾嗣く.

名は玄達^{あざな},字は成章^{いがんさい},別号を怡顔齋^{いがんさい}という.平安(現京都府)に生まれ,まず山崎闇齋^{あんさい}に師事し,その後伊藤仁齋^{いのうじやくすい}に学んだ.また稲生若水^{いんじやくすい}[→第三十八]に師事して本草綱目を学んだが,理解できないことは一つもなかった.当時,物産学研究家[1]の後藤常之進という者があり世評を得ていたが,先生の名声はそれをはるかに凌いだ.その頃,儒者の服部南郭も有名で,多くの門弟を集めていたが,先生の本草学の講義は南郭の講義にも劣らず,門前市を成したという[2].こうして世の人は,本草学の大家と仰いだ.

先生は天性が純朴で,つねに儉約を心がけた.息子の善吾^{ぜんご}は,幼時から成人するまで一度も絹の衣服を着ず,袴も麻布を用いていた.見かねた門弟たちが立派な袴を贈ったところ,先生はこれを見て次のように述べた.

先生の著す所多し、千金方薬註五卷、本草一家三卷、用薬須知三卷、用薬須知後篇四卷用薬須知続篇三卷、食療正要四卷日用食性捷徑一卷、本草彙言摘要四卷結託録三卷、桜品一卷、梅品一卷、広参品一卷、竹品一卷、苔品一卷、菌品一卷、詹々言二卷毛詩名物参解四卷あり。

自分が仁斎先生の講義に出ていたころ、その息子の東涯はまだ幼く、白木綿の着物に白い木綿の袴を着けていた。それに比べれば、善吾が染め物の袴を着るのは、まだまだ贅沢であると。そしてその袴を息子に着せることは遂になかった。延享4年(1747年)、自宅で病没。そ息子の善吾が跡を継いだ。

その著作は多い。千金方薬註五卷、本草一家三卷、用薬須知三卷、用薬須知後篇四卷用薬須知続篇三卷、食療正要四卷日用食性捷徑一卷、本草彙言摘要四卷結託録三卷、桜品一卷、梅品一卷、広参品一卷、竹品一卷、苔品一卷、菌品一卷、詹々言二卷毛詩名物参解四卷がある。

1. 物産学。江戸時代中期以降、本草学から派生した学問で、動植物、鉱物を広く扱い、西洋の博物学に近い。松岡恕庵の関心は、本草学にとどまらず物産学に及んだ。

2. 日本最大の本草学者とされる小野蘭山(→第七十七)は晩年の門弟のひとり。

第四十四 香川修菴 (かがわ しゅうあん)

1683-1755 儒医一本説を唱えた



校注：この肖像は、実際には山県大貳 (1725-67) らしい。

名は修徳^{あざな たいちゆう}、字は太沖、修菴は其号なり、播州姫路の人、後ち籍を京都に占む、業を伊藤仁齋に受くること五年業大に進み、門下推しを高等となす。又医を後藤^{こんざん}良山に学び、其奥義を窮む、夫の素霊の説を廃し以て一家の言を立つ。其意以謂^{なづ}らく聖道医術其本を一にして二致なしと、遂に其堂を名けて一本と曰う。葉選、行余医言^{きゆうへい}を著して以て師説^{すいえん}を推衍し、医道益々闢く、温泉及び灸炳の治効に於て最も詳に致す。修庵儼恪至性あり、幼にして父を喪い朝起毎に躬ら祠堂を洒掃し、^{はいき}拝跪一に生に事^{つかう}るが如く、老に至るまで変らざりき。宝暦五年播州に赴き、京に還らんとし、二月十三日病^{ふるいちむら}んで丹波古市邑に歿す、年七十三。

名は修徳^{あざな たいちゆう}、字は太沖、号は修庵。播州姫路の出身、その後を京都に移った。伊藤仁齋のもとで5年間学び、大いに学業を進めて門下で高く評価された。医術を後藤^{こんざん}良山〔→第四十一〕に学び、その奥義をきわめた。従来の素霊の説を捨て、自らの学派を立てた〔1〕。彼の考えは、聖人の道（儒学）と医術は根が同じであり、その至るところも別々ではないというものであった〔儒医一本論〕。そしてその流派を一本堂と名付けた。葉選、行余医言^{こうよいげん}などの著作を通じて師の学説を広め、医道はますます発展させた。温泉療法や灸治療の効果について詳しく研究した。修庵は厳格な性格で、幼くして父を亡くしてから毎朝自らその祠を掃き清め、拝礼を欠かさず、生前と同じように仕え、これは老年になるまで変わらなかった。宝暦5年（1755年）、播州へ赴き、^{ふるいち}帰京の途に就こうとして2月13日、丹波の古市で病没した。享年73歳。

〔1〕古方派であるが、傷寒論も批判の対象とし、完全に信頼に足る古典は存在しないと、自我作古（^{よ いにしえ}我自り古を作る）と述べた。

第四十五 野呂元丈(のろ げんじょう)

1694-1760 本草学者, 蘭学者



名は実夫^{あざな}, 字は元丈, 連山と号す, 字を以て称す。元禄六年伊勢に生まる。本姓高橋氏, 出でて野呂三省の嗣となる, 山脇玄修を師とし, 旁ら並河天民^{なみかわてんみん}, 稲生若水^{いのうじゃくすい}に就く, 尤も本草を好む, 若水門下出藍^{しゅつらん}の目なり。後ち江戸幕府医官となる, 又石薬を長石の二州に探り其探討^{かいだい}海内に遍し, 更に清国に遊ばんと請う許されず, 居常快々たり。頭瘍^やを疾んで宝暦十年三月十四日歿す, 芝高輪泉岳寺に葬る。著す所に狂犬咬傷治方, 仏石石碑考, 和蘭陀本草和解あり。

名は実夫^{あざな}, 字は元丈, 号は連山。ふだんは字で呼ばれていた。元禄6年(1693年), 伊勢に生まれた。もとの姓は高橋であったが, 野呂三省の養子となった。山脇玄修に学び, 並河天民, 稲生若水[→第三十八]にも師事し, とくに本草学を得意とした。その博識は師の若水をも超えるとされた。後に江戸幕府の医官となり, 石薬を長州(現山口県), 石州(石見国, 現島根県)で探し, その調査は全国にも及んだ。さらに清国への渡航を願い出たが許されなかった。常日頃から快活で朗らかな性格であった。頭の腫瘍を患い, 宝暦10年(1760年)3月14日没。墓は芝高輪の泉岳寺にある。著書に, 狂犬咬傷治方, 仏石石碑考, 和蘭陀本草和解[1]がある。

1. 1720年, 徳川吉宗は1630年以來の禁書例を緩和してキリスト教以外の蘭書研究を許可し, 青木昆陽[→第五十], 野呂元丈に蘭語の修得を命じ, ここに江戸の蘭学が始まった。1750年刊, 和蘭陀本草和解はドドネウス「草木誌」の抄訳で, 最初期の蘭医書とされる。

第四十六 奥村良竹(おくむら りょうちく)

1686-1760 独自の吐方を創案



名は直^{なお}、南山と号す、貞享元年越前府中に生まる。良竹年十三、山崎良伯に就きて医を学び、居ること四五年、後ち去て大阪に赴き豪商に客たり居ること八年、良伯の子某歿す、良伯齡老い孫幼なり、乃ち書を寄せ良竹を招て歸らしめ、其孫良弾^{りょうだん}を教育せしむ。良竹既に医家の大義に通ず、是に於研鑽益々力め名大に籍り、

府中本多侯三女あり、俱に痘に罹り勢頗る危し、良竹薬を進めて効あり、既にして良伯歿して良弾既に弱冠、良竹乃ち家有する所を推して悉く之に与え、単身出でて居る、府中侯祿せんとす、良竹謝す。良竹の父年老ゆ、良竹に謂て曰く、男叟四方の志ありと、然れども負米^{ふべい}捧檄^{ほうげき}亦皆親の為にすと、貴人の礼命する所豈終に辞すべけんやと、良竹乃ち其命を拝す。府中侯の女岩倉源

名は直^{なお}、号は南山。貞享元年(1684年)に越前府中(現福井県越前市付近)に生まれた。13歳のとき、山崎良伯のもとで医術を学び、4、5年修業した。その後大阪に行き、大商人の家に8年間滞在した[1]。良伯の息子が亡くなったが、良伯は高齢で孫はまだ幼かったため、良伯は手紙で良竹を呼び戻し、孫の良弾^{りょうだん}の教育を託した。良竹はすでに医学の大義に通じ、ますます研鑽を重ねてその名は大いに知られた。

府中藩主の三女が天然痘にかかり、命が危ぶまれたことがあった。良竹が薬を与えたところ奏効した。しばらくして良伯が亡くなり、良弾は20歳になっていた。良竹は所有の家財をすべて良弾に譲り、自分は一人で家を出て暮らした。府中藩主は良竹に祿を与えようと

公に適く^ゆ, 良竹従て京に入る, 既にして帰国す, 治効益々著しく声名遠く走せ, 四方より来り学ぶもの, 診を乞うもの日に頗る多し. 良竹著書を好まず, 人或は勧むるに書を著わす^{そなわ}を以てす, 良竹微笑して曰く医家道先達論じて具れり, 挙げて之を行うのみ, 何ぞ名に拘ることをなさんと.

宝暦七年の春, 良竹卒然^ひ痲を病み, 常に床蓐^{しょうじよく}に在り, 而して子弟と方を講じ^{こうこう}噂々として已まず. 十一年八月暴冷に傷み^{いた}, 九月三日遂に逝く, 年七十五, 平吹村先塋^{せんえい}の傍に葬る

したが, 良竹は辞退した. その後, 良竹の父が高齢となり, 良竹に言った. 老いてなお高い志を持つというが, 重い米俵を運ぶのも顕職を受けるのもみな親のためにやることだ [2]. 殿の厚意をどうして辞退できようか. そして良竹はその命を拝した. 後に府中藩主の娘が岩倉源公に嫁ぐこととなり, 良竹もそれに従って京へ上った. その後, 帰国して診療を再開するとますます評判を呼び, 名声は遠くまで響いた. 全国各地から, 学びに来る者や診察を求める者が多く訪れた. 良竹は著作を好まなかった. 人は本を書いたらどうかと勧めたが, 良竹は微笑して答えた. 医学は先人たちがすでに充分論じている. あとはそれを実行するだけだ. 名声にこだわる必要はない [3].

宝暦7年(1757年)の春, 中風を患い, 床に伏せるようになった. それでも弟子たちと論じ, 呻きながらもやめなかった. 宝暦11年(1761年)8月, 急な冷病にかかり, 9月3日没. 享年75歳. 平吹村の先祖の墓のそばに葬られた

1. 貧困のため商家に奉公に出たが, 良伯の求めで帰郷, 医家を継いだ.
2. 毛義^{もうぎ}捧^{ほう}檄^{げき}, 子路^{しろう}負^ふ米^{まい}. 親のために力を尽くす孝行者の例え. 後漢の毛義は, 顕職に推挙され喜んだが, それは親の暮らしのためで, 親が死ぬと即辞職した. 孔子の高弟子路は, 親のために遠路はるばる重い米袋を抱えて運んだ.
3. 吐方を研究, 発展させたとされるが著作はなく, 門人永富独嘯庵の「吐方考」により知られる. 吐方は, 催吐剤により嘔吐を促す治療法. 漢方医学の「汗吐下」三方のひとつ. 刺絡: 皮膚に小さな傷をつけて少量の血液を除去する治療法. 鍼灸治療のひとつ.

第四十七 山脇東洋(やまわき とうよう)

1706-1762 古方派. 初の人体解剖を行う.



諱^{いみな}は尚徳^{あざな}, 字は玄飛, 一字は子樹, 初め移山と号し, 後東洋と改む. 本姓清水氏, 年十三にして能く文を属し, 又始めて医を学び山脇玄修^{あさゆう}に朝夕す, 年十八のとき生父東軒歿す. 玄修老て子なし, 享保十一年先生を養うて嗣とす, 明年七月玄修歿す, 翌日其業を嗣ぐ, 時に年二十三. 先生専ら古医道を唱道せり. 宝暦四年二月七日, 刑を洛^みの西郊^みに行うあり, 官に請うて之を解く, 先生就て其真^{まこと}を観^み, 図志^{ずし}を作り名けて蔵志^{ぞうし}と曰う, 実

諱^{いみな}は尚徳^{あざな}, 字は玄飛, またの字を子樹という. はじめ移山と号していた, のちに東洋と改めた. 本姓は清水である. 13歳にしてすでに文章をよく作り, また医術を学び始め, 山脇玄修^{あさゆう} [1] に朝夕仕えた. 十八歳の時, 父東軒が亡くなった. 玄修には子がなく, 老齢になったため享保十一年 (1726 年) に先生を養子にして跡を継がせた. 翌年 7 月, 玄修が亡くなり, その翌日に家業を継いだ. 時に 23 歳であった. 先生は専ら古医法

に観蔵の図志は先生を以て嚆矢とす。当時世医囂然(こうぜん)として之を難し、^{いえどもほうり} 刑囚の屍と雖屠て之を観るは惨酷とせり、先生敢て之を意とせず。更に同八年十月再び刑屍を解剖せり。

先生^{げだいひようほう}外台秘要方を校刊せんと志し、延享二年北野天満宮に詣でて祈り且つ誓う、翌年十月刻成る。先生の名^{かいだい}海内に満ち四方来り学ぶもの数百人、先生規則十條を作り養寿院医則を著し之を子弟に示せり。

宝暦十二年八月六日^{たかつかさ う ふ}鷹司右府の病を療せんがために其殿に宿し、夜に至り俄に病起り、翌七日輿^よして家に帰り一日を越えて歿す、享年五十八。

を唱えた。宝暦4年(1754年)2月7日、洛西で死刑が行われることになり、官許を得てその場で解剖を行い、その所見を図にまとめて蔵志と名付けた。人間の内臓の図解書は、先生を嚆矢とする。当時の医師は、たとえ罪人であれ解剖することは残虐として激しく非難したが、先生は少しも意に介さなかった。宝暦8年(1758年)10月にも再び刑死者の解剖を行った。

先生は中国の医書、^{げだいひようほう}外台秘要方の校訂を志し、延享2年(1745年)に北野天満宮に参拝して成就を祈願し誓いを立てた。翌年10月に刊行が成った。当時先生の名は国内に広まり、各地から学びに訪れる者は数百人に及んだ。先生は十ヶ条の規則を作り、養寿院医則を著して門弟に示した。

宝暦12年(1762年)8月6日、^{たかつかさ う ふ}鷹司右府の治療のためその邸に泊まったが、夜になって急に発病した。翌7日、輿に乗って自宅へ戻り翌日没した。享年58歳。

1. 山脇玄修・山脇玄心[→第二十五]の甥、養嗣子・山脇東洋の養父。

第四十八 井上稚川(いのうえ ちせん)

?-1764 古方派. 徳川吉宗の侍医



名は方正^{としなが}、俊良と称す、幕府医官法眼杉浦玄徳の子なり、井上交泰院玄徹に養れて嗣となる。寛保元年十二月法眼となり、寛延元年十二月法印に進み宝暦二年五月西城侍医となる。望月三英、博学精通を以て当時江都^{えど}医家^{きよはく}の巨擘たり、先生を称して曰く、俊良^{もと}素と英傑、学古義^{がくこぎ}を究め博覧強記^{けいせい}、凡そ天下の経籍事物、一たび目撃するに及べば終身遺忘することなしと、亦奇なる哉。其大人玄徳翁^{たいじん}夙に方術を以て鳴る、性秘方^{しつが}を嗜み、広く世に求め、其経験を取て之を試む、手に随て応ぜざるものなし、是に於て声名籍甚たり。翁もと眼を失い、終に明を失う、然も猶孜孜として休まず、即ち俊良をして相扶け相携えて、病家は故に俊良の揣摩鍛錬^{しまたい}、弱冠にして已に速く老医の上に出ずと。明和元年八月八日病んで歿す、年六十六、広尾祥雲寺に葬る。著す所に、医方精要あり、門人尾張医官竹田恭明刻して世に行う。

名は方正^{としなが}、通称は俊良^{ほうげん}。幕府医官で法眼の位にあった杉浦玄徳の子。井上交泰院玄徹の養子となり家を継いだ。寛保元年(1741年)12月、寛延元年(1748年)12月には法印に昇進。宝暦2年(1752年)5月西城の侍医となった。望月三英は、当時の江戸医界の大家であったが、先生についてこう評している。俊良は生まれながらの英傑で、古い医の理論を研究し、非常に博識で記憶力が抜群であった。一度目にした天下の経典や事物は、生涯決して忘れることがなかった、これは誠に驚くべきことであると。その父玄徳もまた早くから医術で名を高めた人物で、秘方収集を好み、世に医術を求めてその経験から取捨選択して試みた。手がけて効を奏さない治療はなかった。このため世間において非常に高い評判を得た。玄徳はもともと目を病んで、ついには失明したが、それでもたゆまず医業に励み続けた。そこで俊良を常に傍らに置き、互いに助け合い協力して診療にあたった。そのため俊良の経験はますます磨かれ、若くしてすでに老練な医師をしのぐほどになった。明和元年(1764年)8月8日病没。享年66歳。広尾の祥雲寺に葬られた。著書に医方精要がある。門人で尾張藩の医官竹田恭明が出版して世に広めた。

第四十九 御園中渠 (みその ちゅうきょ)

1706-1764 江戸時代中期の鍼医



名は常或^{じょうわく あざな ぶんけい}、字は文卿^{ぶんけい}、名は中渠^{ちゅうきょ}と号す、意齊流鍼術^{いせいりゅうしんじゅつ}常心^{じょうしん}五世の孫なり。宝永三年七月十五日京都に生まる。医方を浅井東軒^{あさいとうけん}に受け、鍼法を父常倫^{じょうりん}に学び、年二十三歳享保十三年鍼師六品を拜し、翌年主計権助^{かずえのすけ}となり、又偶髪を許さる、朝家医官偶髪^{あざいとうけん}の始なり。元文四年五品に擢げらる、宝暦十四年四品の位を受く。明和元年八月八日其家に歿す、享年五十九。

名前は常或^{じょうわく あざな ぶんけい}、字は文卿^{ぶんけい}で、別の名は中渠^{ちゅうきょ}。意齊流鍼術^{いせいりゅうしんじゅつ} [1] を興した御園常心^{じょうしん} [→第十七] の五代目の孫にあたる [2]。宝永3年(1706年)7月15日、京都に生まれた。医学を浅井東軒^{あさいとうけん}に学び、鍼術を父常倫^{じょうりん}に学んだ。享保13年(1728年)、23歳にして鍼師六品の位を授けられ、翌年には主計権助^{かずえのすけ}となった。また偶発^{じょうりん} (髪を結うこと) を許された。これが朝廷の医官で偶髪を許された最初の例となった。元文4年(1739年)、五品に昇進し、宝暦14年(1764年)には四品の位を授かった。明和元年(1764年)8月8日、自宅で没、享年59歳。

1. 打鍼法。

2. 初代御園意齋(常心)の5代目。詩文、絵画に通じ、竹の画を得意として、浅井園南[→第六十一]らとともに平安の四竹と言われる。

第五十 青木昆陽 (あおき こんよう)

1698-1769 儒学者, 蘭学者



名は敦書^{あつのり}, 字は厚甫^{こうほ}, 昆陽^{こんよう}と号し, 文蔵と通す. 元禄十一年に生まれ, 享保二十年(蕃薯考^{ばんしよこう}を著し将軍吉宗に知られ, 元文四年三月八日出仕して御書物御用達となり, 其翌年寺社奉行支配となれり, 延享元年長崎に赴き, 更に深く和蘭学^{オランダ}を学び之に精通せり. 明和六年十一月十二日病んで歿す, 時年七十二. 著す所に, 和蘭貨幣考, 和蘭話訳, 和蘭話訳後集, 和一角考, 和蘭文字略考, 和蘭文訳, 和蘭勸酒歌解, 蕃書考あり.

名は敦書^{あつのり}, 字は厚甫^{あざな}, 号は昆陽^{こうほ}, 通称文蔵^{こんよう}. 元禄 11 年 (1698 年) に生まれ, 享保 20 年 (1735 年), 蕃薯考^{ばんしよこう}著して将軍徳川吉宗の知るところとなった [1]. 元文 4 年 (1739 年) 3 月 8 日に仕出仕して御書物御用達となり, その翌年には寺社奉行支配となった. 延享元年 (1744 年) に長崎に赴き, さらに深く蘭学を学び精通した [2]. 明和 6 年 (1769 年) 11 月 12 日病没. 享年 72 歳.

1. 享保の大飢饉 (1732 年) にあたり, 昆陽は甘藷が救荒作物となることを書物で知り, 1734 年に徳川吉宗に上奏, 翌年蕃薯考を著し, 薩摩芋御用掛として甘藷栽培を奨励した. 後世「甘藷先生」と称された.

2. 1720 年, 徳川吉宗は 1630 年以來の禁書例を緩和してキリスト教以外の蘭書研究を許可し, 青木昆陽, 野呂元丈 [→第四十五] に蘭語の修得を命じ, ここに江戸の蘭学が始まった. 「和蘭文字略考」などを著した

第五十一 吉益東洞(よします とどう)

1702-1773 古方派, 万病一毒論を唱えた



名は為則^{ためのり}, 字は公言, 通称周助, 安芸広島の人, 元禄十五年五月某日を以て生まる. 年十九家を興すこと医にあるを悟り, 能津祐順に従い金瘡外科を学び刻苦研精日夜已まず素難^{そなん}以下百氏の書を爛^{らん}読せり. 偏陋^{へんりゆう}の地は志士の伏処すべき所に非らずとて, 父母女弟を従えて京師に徙り, 万里小路春日町南入に居り, 古医方を唱ふ, 時に元文三年春三月年三十七なり. 姓を吉益氏に改む, 先生抱負甚大なれども時流未だ信ぜず, 弟子の籍に入るものなく, 業行われず, 加之盗^{しかのみならず}に遇いて貨財略ぼ尽き貧困日に甚し, 紙泥木を以て偶人を造り市に鬻^{ひさ}ぎて僅に衣食を給す, 其友村尾氏之を憐み佐倉侯に薦めんとす, 先生曰く窮達^{うしな}は命なり, 何ぞ憂うるに足らん, 天斯道を喪わざらんとせば我をして飢死せしめじ, 貧困窮乏^あするも豈^{おろ}に吾志を降して祖先を汚辱せんや. 年四十三に至り貧益甚しく米櫃屢々空し, し^{つつし}かも先生の志少しも悛まらず, 一日憤然決する所あり,

名は為則^{ためのり}, 字は公言, 通称は周助. 安芸国広島の人である. 元禄 15 年 (1702 年) 5 月生れ. 19 歳のとき, 自らの生業は医にあると悟り, 能津祐順に師事して外科を学び日夜努力を重ね, また素難^{そなん}を初め多くの医書を読みあさった. やがて, 片田舎は志ある者が埋もれるべき場所ではないと考え, 父母や妻子を連れて京都に移り住んだ. 万里小路春日町に居を構え, 古医方を唱えた. 時に享保 18 年 (1733 年) 3 月, 37 歳であった. このとき姓を吉益と改めた. 抱負は大きかったが世の中にはまだ受け入れられず, 入門する者はなく, 医業も広まらなかった. さらに盗難にあつて財産を失い, ますます貧困に苦しんだ. やむなく紙や粘土で人形を作って売り, なんとか衣食を得ていた. 友人の村尾氏が彼を憐れみ, 佐倉藩に推薦しようとしたが, 先生は言った. 窮乏も出世も天命である. 何を憂えることがあろうか. 天がこの道を見捨てないのなら, 私を飢え

齋戒断食すること七日、五條の^{すくなひこ}少名彦の神社に詣づ。
適其友^{かお}賈翁、彼が窮を見て金を貽る、先生之を辞す、
賈人^{かじん}勃然として色を作して曰く先生の為に非らず、天下万人の為なりと、翁感激之を受け家資漸く給す。

後ち某病家に於て時の名医山脇東洋に会し共に処方を論じて、大に推服せらるる所となり、之れより世に出ず、年四十五。東洞院街に移る、東洞の号は蓋し此に取りしものなり。東洞は素霊傷寒に其説を選び、五行経絡温補の陋説^{ろうせつ}を排し、万病一毒論を立てたるも、其言少しく^{きようげき}驕激に失し、当時医の之を評するもの多し。宝暦の初め門人鶴元逸其説を集めて医断を著わして公にするや、海内一時之を是非するもの普ねかりき。宝延四年、年五十、^{るいじゆほう}類聚方を選び、又方極一卷を作りて其門の方鑑となし、又薬徴三巻を出版せり。東洞の医流天下に弘く行れ奥羽肥薩所として行われざるはなかりき。

安永二年九月病んで歿す年七十二、京都東福寺内莊嚴院に葬る。先生の門に俊傑の士多し、村井純、帆足通楨、中西惟忠、岑少翁、瀬丘延鶴元逸、田中栄信、山邊常卿、桃井安貞、稻垣弁蔵はその門の高足とす。

死にさせることはあるまい。貧乏故に志を曲げ、祖先を辱めるようなことはしないと。43歳となり貧困はさらに増し、しばしば食べる米もなかった。しかし志は少しも揺るがなかった。ある日、憤然として決意し、7日間の断食をして五條の^{すくなひこ}少彦名神社に参詣した。その折、友人の商人が窮状を見て金を差し出した。先生は辞退したが、その商人は声を荒らげて言った。これは先生のためではない。天下万民のためであると。その言葉に感じ入り、ついに受け取って生活を支えた。

その後、ある病家で時の名医山脇東洋〔→第四十七〕と出会い、処方を論じてその見識に大に感服され、これを機に世に知られるようになった。45歳のことである。それから東洞院通に転居し、東洞と号したのもこれにちなむ。東洞は傷寒論を重んじ、五行や経絡による温補の説を批判し、万病一毒論〔1〕を唱えた。しかしその言葉がやや激越であったため、医師たちの間で賛否が分かれた。宝暦年間の初め、門人の鶴元逸が師の説をまとめた医断を出版すると、全国で大きな論議を呼び、広く是非が論じられた〔2〕。宝暦4年(1754年)、50歳の時、類聚方を編纂し、さらに方極一卷を著して門下の指針とし、また薬徴三巻を著した。以後、東洞の説は全国に伝わり、奥羽から肥後、薩摩にいたるまで行われなかった。

安永2年(1773年)9月病没。享年72歳。京都東福寺の莊嚴院に葬られた。先生の門下には多くの俊才がいた。村井純、帆足通楨、中西惟忠、岑少翁、瀬丘延、鶴元逸、田中栄信、山辺常卿、桃井安貞、稻垣弁蔵が高弟として名を残している。

1. 万病一毒論。全ての病の原因は毒であり、薬も毒である、毒をもって毒を制すれば病気は治るとした。
2. 「医断」が公になると、畑黄山(→第七十四)が「斥医断」でこれを批判したが、田中張海(→第六十三)は「弁斥医断」で東洞を擁護してその説を発展させた。

第五十二 賀川玄悦 (かがわ げんえつ)

1700-1777 産科医の祖。産科鉗子を発明。



名は玄悦^{げんえつ}、一の名は光森^{あざな}、字は子玄、本姓三浦氏、世に彦根侯に仕う。先生庶子なり、藩法にては庶子は禄を襲ぐことを得ざるを以て七歳にして、母家賀川氏に養われて其姓を冒す。先生^{けんぼ}猷畝の間に老死するを欲せず、去りて京都に往き、按摩の技を売りて自給しつつ古医方を学ぶ。年四十余にして、隣家の婦婉し難きに遇い、構思^か反覆忽ち一法を得即ち提灯の柄の鉄鉤を以て胎を扼けて之を挽出し、妊婦^{けんぼ}為に免かる、更に之を数人に試み、皆其意の如きを以て益^{ますます}之を精思し、終に若干術を創唱し回生術とせり。先生産前七十五難産後百二十五難を著わして一家の言を立て名けて産論と云う、其説独創にして親歴せし所なり、時に六十七歳なり。

名は玄悦^{げんえつ}、別名を光森^{あざな}、字は子玄、本姓は三浦。代々彦根藩(現滋賀県彦根市付近)に仕えた。先生は庶子であったため、藩の定めにより家督を継ぐことができず、7歳の時、母方の賀川氏のもとに引き取られ、その姓を名乗った。先生は郷里の田畑で生涯を終えることを望まず、京都に出て、按摩の技で自活しながら古医方を学んだ。40歳を過ぎた頃、隣家で難産に苦しむ女性に出会い、さまざまに考えをめぐらすうちに一法を案じた。提灯の柄の鉄の鉤を使って胎児を引き出し、妊婦の命を救った[1]。その後も数例を試みて思い通りの結果となり、さらに研究してついに新たな手術方法を創案し、これを回生術と名づけた。さらに、出産に関

明和五年、阿波侯の聘に応じ土籍に入り秩百石を食む。安永六年九月十四日家に卒す、時に年七十八門人^{おくりな}諡して景定先生と云う。先生に二子あれども事を以て逐^{げんてき}い、岡本玄迪を養^{かいご}いて嗣とす、其子満貞に至りて大成す。先生人となり魁梧^{りよりよく}にして膂力人に過ぎ、手指至て細長之を用うること亦巧に、指頭甚力あり、其術従て絶妙なりと称す。皇后御産の時難娩にして諸医治する能わず遂に先生を召す。先生一診手術すべきを云う、奏者乃ち医案を徴す、先生元来目に一丁字なし、因て学文技術一にあらざるを論じ且つ曰く子宮口囲凡四寸五分、指を其中に入れ探究す、之を手術と云う。請う一竹片太さ四寸五分長さ一寸許のものを与えよと、奏者をして之を執らしめ、其指を以て筒中を過ぎ席上皿中の饅頭^{つまこ}を撮^めみ尽く之を収む、衆相顧みて肅然たり、終に治を先生に托せりと。先生初め産論を著わすとき、其友皆川淇園^{きえん}之を潤色して世に出し大に行わる、先生淇園を見る毎に泣拝して謝せりと。

する難題を産前七十五難産後百二十五難としてまとめ、独自の体系を打ち立て産論と名づけて著した。この説は独創的で、自らの経験に基づいたものであった。すでに67歳であった。明和5年(1768年)、阿波藩に招かれて士分に取り立てられ、百石の禄を受けた。安永6年(1777年)9月14日、自宅で没した。享年78歳。門人たちは「景定先生」とおくり名した。先生には二人の子があったが、事情があって追われ、岡本玄迪(げんてき)を養子とし、その子満貞の代に至って大成した。先生は体格が大きく、腕力にもすぐれていたが、手指は非常に細長く、これを巧みに用い、指先には大変な力があつたので、その術は絶妙と称された。ある時、皇后が難産にあい、諸医が治すことができず、ついに玄悦を召した。先生は一診して「手術すべきである」と言った。宮中の奏者は方法を問いただすと、先生はもとより文字も読めない人物であったが、文章と技術は別物であると論じ、さらにこう述べた。子宮口のおよその広さは4寸5分ほどである。そこに指を入れて探る。これを手術という。直径4寸5分、長さ1寸ほどの竹筒をひとつ用意してほしいと。奏者がにこれを用意させると、内側に指を通し、そのまま席上にあつた皿の饅頭をひとつ残らずつまみ取って見せた。居並ぶ者たちは互いに顔を見合わせ、肅然とした様子となり、ついに治療を先生に任せることとなった。先生が産論を著した時、友人の皆川淇園が文章を整えて世に出し、大いに広まった。先生は淇園に会うたび、涙を流すほど感謝を述べたという [2]。

1. この時の胎位は遷延横位であつたものと思われ、死胎を鉄鉤で引き出し、母体を救命した [賀川明孝・賀川玄悦の系譜とその周辺編著、1995]。以後、分娩鉗子の使用を発展させ、これは後の産論に詳述されている。産論の記述で特筆すべきは、正常胎位が頭位であること(上臀下首)を初めて明記した点である。欧米では英国の産科医 William Smellie の著書 A Treatise on the Theory and Practice of Midwifery (1752-64) の記載を以て産科鉗子の使用、正常胎位記載の嚆矢とされるが、賀川はほぼ同時期に全く独立にこれらを発明、発見した。

2. 賀川玄悦は無学で文を良くしなかった。「産前七十五難産後百二十五難」は臨床経験を口述したものであつたが、書物としての体裁を成していなかった。産論の刊行にあたっては友人の儒学者皆川淇園が漢文を書いた [杉立義一・賀川玄悦と「産論」「産論翼」、京古本や往来、14:4-5,1981]。

第五十三 賀川玄廸 (かがわ げんてき)

1739-1779 賀川流産科学を確立



あざな
字は子啓，秋田の人，本姓岡本氏．年二十西遊して京都に赴き賀川玄悦の門に入る，玄悦其才能を愛し子養し，女を以て之に配し家を嗣む．玄悦晩年阿波侯のしるし徴に遇いたるとき，先生をして己に代らしむ．先生能く家父の偉業を継承し，別に発明補翼する所多し．安永四年産論翼を著し，産論の説を詳にし，又その言わざる所を言い，賀川氏の学術復た余蘊ようんなしとす．安永八年十月病で歿す，年四十一．

あざな
字は子啓，秋田の人で，本姓は岡本．20歳のとき西に遊学して京都に赴き，賀川玄悦〔→第五十二〕に入門した．玄悦はその才能を愛して子のように養い，自分の娘を妻として与え，家を継がせた．晩年，玄悦が阿波藩に招かれたときには，代わりに派遣した．先生は養父の偉業をよく受け継ぐとともに，新たに発明し補足することも多かった．安永四年には産論翼を著し，産論の説を詳しく解説し，また記されていない部分を補った．これにより，賀川氏の学問にはもう不足はないと評された．安永8年(1779年)10月，病没．享年41歳．

第五十四 平賀源内(ひらが げんない)

1728-1780 本草学者, 蘭学者, 発明家



享保十四年^{さぬきしど}讃岐志度に生まる, 年十三藩医三好某に従て医を学び本草を好む. 年十九, 藩主の近侍に仕え休慧^{きゆうけい}と呼ばれ, 後ち鳩溪^{きゆうけい}に改む. 年二十四長崎に至り蘭学を学び年余にして大阪に出でて戸田旭山^{きよくざん}に就く, 明和七年年四十二, 再び長崎に遊ぶ, 電気器械を見て之を模造せり. 時の執政田沼意次に取り入り出身せんとせしも重用せらるることなく, 久しく市に在りて浪人となる. 安永八年十一月暴に其門人の一人を斬り, 翌年病んで獄中に死せり, 享年四十九. 友人杉田玄白私財^{てききやく}を擲却して墓を浅草橋場総泉寺内に建つ. 著す所に物類品隲, 火浣布図説, 五百介図, 食物本草, 神農本草経図註, 並和名考, 本草木石, 禽獸魚介蟲譜あり.

享保 14 年 (1729 年) に^{さぬきしど}讃岐志度 (現香川県さぬき市付近) に生まれた. 13 歳のときに藩医の三好某に師事して医術を学び, 本草学を得意とした. 19 歳で藩主の側近となり, 休慧^{きゆうけい}と呼ばれたが, のちに鳩溪^{きゆうけい}に改名した. 24 歳の時, 長崎に行き蘭学を学び, 1 年余りで大阪に移り戸田旭山^{きよくざん}に学んだ. 明和 7 年 (1770 年), 42 歳にして再び長崎を訪れ, 電気器械を見てそれを模倣した. 当時の執政田沼意次に取り入り出世しようとしたが, 重用されることなく長い間市中にいて浪人となった. 安永 8 年 (1779 年) 11 月に, 突然門人の一人を斬り殺し, 翌年獄中で病死した. 享年 49 歳. 友人の杉田玄白 [→第八十六] は私財^{おきつぐ}を投じて, その墓を浅草橋場の総泉寺に建てた. 著作に, 物類品隲, 火浣布図説, 五百介図, 食物本草, 神農本草経図註, 並和名考, 本草木石, 禽獸魚介蟲譜がある.

第五十五 瀬丘長圭 (せおか ちょうけい)

1728-1780 古方派. 腹診術を研究.



名は延,^{あざな}字は長圭,江戸の人,天明元年二月十四日歿す,年四十九. 艮山^{こんざん}囊^さきに^{あんぶく}按腹^{こうはい},候背の二法を説き,香川,吉益^{よします}益々腹候の術を恢弘^{かいこう}せり,先生出でて専ら力を腹診^{びし}に用い,益々其微旨^{せんめい}を闡明せり. 著す所に診極図説あり.

名は延,^{あざな}字は長圭. 江戸の人. 天明元年 (1781 年) 2 月 14 日没. 享年 49 歳. 後藤^{こんざん}艮山 [→第四十一] はかつて^{あんぶく}按腹^{こうはい},候背の二つの診察法 [1] を説き,その後香川修庵,吉益東洞 [→第五十一] がさらに腹診の術を広めたが,先生は専ら腹診を用い,その微妙な理論を明らかにした. 著書に診極図説がある.

1. 按腹は腹部の触診, 候背は背部の触診. いずれも圧痛, 緊張などを調べる.

第五十六 山科厚安 (やましな こうあん)

1729-1781 光格天皇の侍医



あざな
字は元温，南澗と号す，享保十四年京都に生まる。延享元年，年十六召されて宮廷に入り，翌年法橋の位を賜い，父宗安と共に朝に升る。寛延元年法眼に進み，宝暦五年二十七にして法印に叙せらる。光格天皇の尚薬を掌れり。天明元年八月病んで歿す，享年五十三。三十を踰ずして法印の位に陞るもの先生を以て初めとす。

あざな
字は元温，号は南澗。享保 14 年 (1729 年) に京都で生まれる。延享元年 (1744 年)，16 歳で宮廷に召され，翌年には法橋の位を授かり，父宗安 [1] とともに朝廷に出仕した。寛延元年 (1748 年) に法眼に昇進，宝暦 5 年 (1755 年)，27 歳にして法印に叙せられた。後には光格天皇の尚薬を務めた。天明元年 (1781 年) 8 月に病没，享年 53 歳。30 歳を待たずに法印の位に昇った者は，先生が初である。

第五十七 恵美三白(えみさんぱく)

1707-1781 吉益東洞と並ぶ古方派、吐方に優れた



名は貞栄^{あざな}，字は子幹^{ねいこ}，寧固は其号にして，三白は通称なり．本姓は堤氏，安芸広島の人，幼にして父母を失う，家貧乏資なきを以て伊予の人恵美良玄に養われて恵美氏を冒す．数年後玄良死す，三白既に長じ遺篋^{いぎよう}を啓き偏く医書を読み日夜研究す．当時吉益東洞京都に在り，万病一毒説を唱う，三白之れと所論し往々にして合す，東洞推して一俊人とし，相共に切劘^{せつま}し得る所少からざりき．三白喜んで奥村良筑^{おくむらりようちく}の吐方^{とほう}を用い大に行われ，安芸候数々謁見を賜う，後苞二百俵を下し世襲となさしむ．天明元年十月八日疾で卒す，年七十五，広島専勝寺に葬る．

名は貞栄^{あざな}，字は子幹^{ねいこ}，号は寧固，三白は通称，本姓は堤．安芸国の広島出身．幼時に両親を失い，家は貧しく資産もなかったため，伊予の恵美良玄に引き取られて養われ，恵美氏の姓を名乗った．数年後，良玄が亡くなったが，三白はすでに成人しており，遺された医書を広く読み，日夜研究に励んだ．当時，吉益東洞[→第五十一]が京都で万病一毒説を唱えていたが，三白はこれを議論してしばしば意見を同じくした．東洞は三白を優れた人物と評価し，二人は切磋琢磨し，互いに得るところが多かった．三白は好んで奥村良筑^{おくむらりようちく}[→第四十六]の吐法^{とほう}を用い，大いに広めた．安芸藩主からたびたび拝謁を賜り，その後扶持 200 石を与えられ，世襲の地位となった．天明元年(1781 年)10 月 8 日，病没，享年 75 歳．広島の特勝寺に葬られた．

第五十八 建部清庵(たてべ せいあん)

1712-1782 奥州の蘭方医. 杉田玄白と書簡で論を交わした



奥州一の関の医官にして、享保十五年江戸に出て小松寿哲の門に入り、父祖の業を嗣て外科を修めたり。杉田玄白の江戸に在りて蘭書翻譯を創始せしを聞き、其子由水及び門人大槻玄沢をして江戸に出し、杉田の門に入らしむ。玄沢大成して其師の偉業を恢弘せり。天明二年三月八日病で歿す、享年七十一。著す所に民間備荒録あり。

奥州一の関の医官。享保15年(1730年)に江戸に出て、小松寿哲に入門した。父祖の医業を継いで外科を修めた。杉田玄白[→第八十六]が江戸にいて蘭書の翻譯を始めた^{ゆうすい}と聞き、自分の子由水^{ゆうすい}[1]、門人大槻玄沢^{おおつきげんたく}[→第九十三]を江戸に出して杉田に入門させた。大槻玄沢は大成して、師杉田玄白の偉業を大いに広めた。天明2年(1782年)3月8日病没、享年71歳。著作に民間備荒録[2]がある。

1. 由水は次男。五男の由甫は、杉田玄白の養子(杉田伯元)となった。清庵と杉田玄白は往復書簡を通じて蘭医学に関する疑問を議論し合い、その一部は和蘭医事問答として知られる。

2. 東北地方はしばしば冷害、飢饉に襲われた。その対策としての救荒書で、代用植物栽培、食料備蓄法などが書かれている。

第五十九 松平君山(まつだいら くんざん)

1697-1783 独学，博覧強記の地理学者，本草学者



名は秀雲^{あざな}，字は土龍^{こうしんか}，君山は其号なり，別号に龍吟子，富春山人，壺簪窩主人あり，尾張の人。元禄十年三月二十七日生まる，本姓千村氏，長じて松平久忠に養われ嗣を襲ぎ，松平氏を冒す。先生別に学師承なく，一に独学力行に出ず。天明三年四月十八日病んで逝く，享年八十八。著す所に，本草正譌，孝経直解，三世唱和弊帝集初編あり。

名は秀雲^{あざな}，字は土龍^{こうしんか}，君山は号。ほかに龍吟子，富春山人，壺簪窩主人という別号がある。尾張の出身。元禄10年(1697年)3月27日生れ。本姓は千村，成長してから松平久忠の養子となって家を継ぎ，松平氏を名乗った。師について学んだことは特になく，一貫して独学で学問に励んだ。天明3年(1783年)4月18日に病没，享年88歳。著作としては，本草正譌^{ほんぞうせい} [1]，孝経直解，三世唱和弊帝集初編がある。

1. 博覧強記で地誌書をはじめ多方面の功績があるが，医学領域では本草正譌により中国本草書の誤りを正しながら，独自の本草学を記述，いわゆる尾張本草学の嚆矢となった。

第六十 山脇東門(やまわき とうもん)

1736-1782. 初の女性死体を解剖した



諱^{いみな}は陶^{あざな}，字^{たいちゆう}は大鑄^{げんかん}，東門^{とうもん}は其号なり，幼名を阿藤と云う，後ち玄侃と改む，東洋の第二子なり．延享三年十一歳のとき父に従い参内し，宝暦十二年十一月父の官職を襲い，明和三年六月法眼に進む．明和八年十二月獄舎に於て一婦人屍^{かばね}を解剖し，更に安永四年八月一婦人屍^{かばね}を，其翌年又男子屍^{かばね}を剖きて大に治療^{ひえき}に裨益せり．先生年十七のとき父翁の命により永富独嘯庵^{どくしょうあん}と共に越前府中に赴き，奥村良筑^{とほう}に就き吐方を学ぶ．先生後ち刺絡^{しらく}の説を唱導せり．天明二年七月二十九日病を以て其家に歿す，享年四十七．

諱^{いみな}は陶^{あざな}，字^{たいちゆう}は大鑄^{げんかん}，東門^{とうもん}は号である．幼名は阿藤，後に玄侃と改めた．山脇東洋〔→第四十七〕の次男．延享3年(1746年)11歳にして，父に従って参内した．宝暦12年(1762年)11月に父の官職を継ぎ，明和3年(1766年)6月に法眼^{ほうげん}に昇進した．明和8年(1771年)12月，獄舎でひとりの女性の遺体を解剖した．さらに安永4年(1775年)8月にも女性の，翌年には男子の遺体を解剖し，治療に大いに役立てた．17歳のとき，父の命によって永富独嘯庵^{どくしょうあん}とともに越前府中へ赴き，奥村良筑〔→第四十六〕について吐方^{とほう}を学んだ．その後，刺絡^{しらく}〔1〕の理論を広めた．天明2年(1782年)7月29日，自宅で病没，享年47歳．

1. 皮膚に小さな傷をつけ，少量の血液を排出して局所循環を改善する．

第六十一 浅井図南(あさい となん)

1706-1782 古方医, 尾張藩医



名は政直, 頼母たのもと称す, 字は維寅あざな, 図南これとらは其号なり, 又幹亭, 篤敬齋と号す, 宝永三年十一月十三日, 京都東洞しただちうり[校注: 東洞院の誤]下立売の家に生まる. 享保十一年先生年二十一, 父東軒尾張公の聘に応じ名古屋に赴かんとす, 先生随行を肯ぜず, 曰く吾祖策庵業を京都に起せしより茲に百年, 海内かいだいの医家来り学ばざるはなし, 今父子共に東せば孰だれか敢て其業を承つがんか,

名は政直, 通称は頼母たのも. 字は維寅あざな, 図南これとらは号. 別に幹亭, 篤敬齋とも号した. 宝永3年(1706年)11月13日, 京都東洞ひがしのとういん院下立売しただちうり(現京都市上京区)の家に生まれる. 享保11年(1726年), 21歳の時, 父東軒が尾張藩主に招かれ名古屋に赴こうとした. しかし政直は随行に同意せず, こう言った. 我々の祖先, 策庵が京都で医業を開いて既に百年, 諸国の医家がみなここ

幸に一妹あり婿を撰で嗣となさば後を承くるに足らんと。

先生はより独学勤苦、且つ弟子を率ゆ。年三十にして医業稍行われ、諸公卿の家に出入し皆待つに儒士を以てす。寛保二年金匱要略を校し、三年外科正宗を校し、延享四年山脇東洋が校刻せし外台秘要の誤謬を駁し砭脇録を著せり。

宝暦三年、東軒病で歿す、東軒の養嗣政度、年少にして無頼なり、尾張の執政竹腰氏先生を召す、先生辞すること能わず、其九月名古屋に移され父禄四百石を襲ぐ、医にして髪を蓄うことを許さる。明和三年扁倉伝割解二巻を著す。先生又画を善くす、宮崎筠圃、御蘭中渠、山科宗菴と共に平安四竹の称あり。明和九年四月、年七十五なるを以て致仕を乞い、長子正路を京師より招く、天明元年正路先ず歿す、十二月国候復た挙げて医官とす。二年八月五日喝を病で歿す年七十七。

に学びに来る。父子ともに東国に行けば、誰がその業を継ぐのか。幸いに一人妹がいる。婿を選んで嗣子とすれば、後を継ぐに足るであろうと。政直は京都に残り一人で学問に励み、さらに弟子を率いた。30歳になり医業がようやく盛んになり、公家の邸宅にも出入りしたが、人々は彼を医師というより儒者として遇した。寛保2年(1742年)に金匱要略を校訂し、翌3年に外科正宗を校訂した。延享4年(1747年)に、山脇東洋[→第四十七]の外台秘要に誤りを指摘して砭脇録を著した。

宝暦3年(1753年)、父東軒が病死した。養嗣子の政度は若くして素行が悪く、尾張藩政を担う竹腰氏が政直を召した。辞することができず、同年9月に名古屋に移って父の遺禄四百石を継いだ。このとき医師でありながら髪を結うことを許された。明和3年(1766年)には扁倉伝割解二巻を著した。また絵画にも秀で、宮崎筠圃、御蘭中渠[→第四十九]、山科宗菴と共に平安四竹と称えられた。明和9年(1772年)4月、75歳を機に隠居を願い出て、長子正路を京都から招いた。しかし天明元年(1781年)、正路が先に没し、同年12月尾張侯は再び政直を医官に任じた。天明2年(1782年)8月5日、暑気あたりで病没した。享年77歳。

第六十二 三浦梅園 (みうら ばいえん)

1723-1789 医師, 哲学者



名は晋^{あざな}, 字は安貞, 梅園と号す, 別に鸞山, 存山, 洞山, 季山の称あり. 豊後杵築^{さつき}の人, 祖父轍山^{てつざん}以来医を家業とす. 綾部綱齋^{あやべけいさい}に学ぶ, 年十七藤田教所^{けいしよ} [校注: 敬所の誤] に師事す, 年三十玄語十余万言を著し, 又贅語, 敢語を作る, 之を梅園三語と称す. 天明三年藩主より家老の礼を以て迎えらる. 寛政元年三月十四日病んで家に歿す, 享年六十七.

名は晋^{あざな}, 字は安貞, 梅園は号. 別に鸞山, 存山, 洞山, 季山とも呼ばれた. 豊後杵築^{さつき} (現大分県杵築市) の出身, 祖父轍山^{てつざん}以来, 医師を家業とした. 綾部綱齋^{あやべけいさい}に学び, 17歳で藤田敬所^{けいしよ}に師事した. 30歳で十余万語に及ぶ玄語を著し, この他贅語, 敢語も著した. これを梅園三語という [1]. 天明3年 (1783年), 藩主から家老の待遇で迎えられた. 寛政元年 (1789年) 3月14日病没, 享年67歳.

1. 医師として診療の傍ら, 条理学と言われる独自の哲学を唱えた. 万物は一對の物からなるという反観合一を基本とする.

第六十三 田中張海(たなか ちょうかい)

1732-1792 古方派. 弁斥医断で吉益東洞を擁護した



名は栄信^{ひでのぶ あざな げんちゆう}, 字は愿仲, 播州の人, 幼にして其父に従いて業を修め, 稍長ずるに及で吉益東洞の門に入り, 苦学多年, 郷に帰て業を開く. 後ち季子栄忠^{きし}及び門人数名を率て大阪に出ず声誉日に加れり. 寛政四年十一月十六日病んで浪華客館^{なにわ}に歿す, 享年六十一. 著す所に, 弁斥医弁, 温古堂医譚, 長沙證彙傷寒論逢原, 引経断古, 医語纂要あり.

名は栄信^{ひでのぶ あざな げんちゆう}, 字は愿仲. 播州(現兵庫県)出身. 幼い頃から父について学業を修め, やや成長すると吉益東洞[→第五十一]の門に入り, 長年にわたり苦学した. その後, 郷里に帰って医業を開いた. 後に末子の栄忠や数名の門弟を率いて大阪へ出て, 名声は日ごとに高まった. 寛政4年(1792年)11月16日, 大阪の客館で病没, 享年61歳. 著作に, 弁斥医弁[1], 温古堂医譚, 長沙證彙, 傷寒論逢原, 引経断古, 医語纂要がある.

1. 吉益東洞(→第五十一)の門人鶴元逸が, 東洞が唱えた万病一毒論などの医説を「医断」として著すと, 畑黄山(→第七十四)は「斥医断」でこれを批判したが, 田中張海は「弁斥医断」で東洞を擁護してその説を発展させた.

第六十四 賀川有齋 (かがわ ゆうさい)

1733-1793 賀川玄悦の子，産科医



げんご
玄吾と称し，諱は満卿，^{あざな}字は徳夫，^{ゆうさい}有齋は其号なり，父子玄の次子なり。偶儻^{てきとう}にして任侠奇節を好むこと酷だ父翁^にに肖たり，継母と和せざるの故を以て出でて別に家を成す。有齋先生初め家貧にして術亦未だ行れず，一日某家の婦難産たり，衆医手を束ねて為す所を知らず，先生を招く。先生乃ち衆医^{たんののかみ}を睥睨して大に救護の術を論ず，時に官医福井丹波守亦坐にあり，先生の言を聞て大に服し推奨措かずと。寛政五年三月二十一日病を以て其家に歿す享年六十歳。著す所に産科紀聞あり。

げんご いみな みつさと あざな ゆうさい
玄吾と称し，諱は満卿，^{あざな}字は徳夫，有齋はその号である。父子玄〔玄悦，→第五十二〕の次男である。気性は豪放で侠気に富み，節義を好むところは父に似ていた。継母と折り合いが悪く，家を出て別に一家を立てた。有齋先生は初めの頃は家が貧しく，医術もまだ広く認められていなかった。ある日のこと，某家の婦人が難産に陥り，多くの医者は皆手をこまねいて何もできなかったところに先生が招かれた。先生は集まった医者たちを見渡して，産科の救命の術^{たんののかみ}について大いに論じた。その場に居合わせた官医の福井丹波守は大いに感服し，強く称賛してやまなかったという。寛政5年(1793年)3月21日，病没，享年60歳。著書に産科紀聞がある。

第六十五 本木仁太夫(もとき じんだゆう)

1735-1794 オランダ語通訳, 地動説を初めて紹介



名は良永^{よしなが}, 字は士清^{あざな}, 初め榮之進と称す, 蘭^{らん}皐^{こう}と号す。良意の孫なり。寛延元年年十四, 通詞見習となり, 傍ら仏語, 羅^{ラテン}甸語を能くす。延享元年幕府西書を許せしより, 天文, 地理, 医学本草に互りて研究洞察尽さざるはなし。安永三年幕命により天地二球用法を訳す, 当時翻譯初期に属し訳解に甚だ苦むも遂に之を大成せり。寛政六年七月十七日歿す, 享年六十。

名は良永^{よしなが}, 字は士清^{あざな}, 若い頃は榮之進と称し, 号は蘭^{らん}皐^{こう}。本木良意[→第三十一]の孫。寛延元年(1748年), 14歳にして通詞の見習いとなり, 同時にフランス語やラテン語もよく学んだ。延享元年(1744年)に幕府が洋書の輸入を許して以来, 天文学, 地理学, 医学, 本草学にわたり, 幅広く研究して洞察を深め, 学問の探究に尽くした。安永3年(1774年), 幕命によって天地二球用法[1]を翻訳した。当時は翻訳の初期のため大変苦心したが, ついに成し遂げた。寛政6年(1794年)7月17日没。享年60歳。

1. オランダの地図出版社, 製作者 W. J. ブラウ著。同社が販売した天球儀, 地球儀に付属する解説書で, 本木が翻訳したのはラテン語版からの蘭訳版であった。これにより日本に初めて地動説が紹介された。惑星の語を初めて使ったことでも知られる。フランス語, 英語の語学書も著した。

第六十六 榑林嶺山（ならばやし きょさん）

1737-1797 鎮山の子，佐賀藩の蘭方医



名は高茂^{たかしげ}，字は伯由^{あざな}，通称栄哲^{きょさん}，嶺山は其号なり，元文二年長崎に生まる，九歳にして父を喪う。天明四年佐賀侯の医官となり，寛政八年老を以て其官を辞し，嗣栄建をして嗣がしむ。九年六月二十六日病で歿す，年六十一，浦上村聖徳寺先塋^{せんえい}の次に葬る。

名は高茂^{たかしげ}，字は伯由^{あざな}，通称は栄哲^{きょさん}，嶺山は号 [1]。元文二年（1737）に長崎で生まれ，九歳のとき父を亡くした。天明4年（1784年），佐賀藩の藩医となり，寛政8年（1796年），老齢を理由に職を辞して，栄建に跡を継がせた。同9年（1797年）6月26日，病没。享年61歳。浦上村の聖徳寺で先祖の墓の隣に葬られた。

1. 初代榑林鎮山[→第三十四]，二代永哲高茂，三代永哲高連，四代栄建，宗建[→第百三十]。

第六十七 宇田川玄随(うだがわ げんずい)

1756-1798 蘭方医，初の内科書西説内科撰要を著した



名は晋^{あざな}，字は明卿^{かいえん}，槐園と号す，津山侯の侍医なり。年十三未だ書を読まず，母其時に及ばざらんことを恐る，子潜^い曰く男子書を読ば自ら奮起^{いくぼく}すべし，強ゆるに呷^{えい}唔を以てするは乃翁の心に在らずと，幾もなくして玄随請て孝経の句読を受け精思日進す，年十五已に詩文を以て穎^{えい}を社友の間に露す。年二十五甫^{はじ}めて和蘭の学に従う，玄随の家三世儒医を以て君に仕う，既に儒学医方に精しく，又和蘭の学に通じ，業を務むること益々篤く，書を著すこと益々多し，名声大に起れり。

名は晋^{あざな}，字は明卿^{かいえん}，号は槐園。津山藩主に仕える侍医であった。13歳にしてまだ書物を読まなかった。母はそれを心配したが，玄随は，男子は学問を志せば自然と奮起するものだ。無理に音読を強いるのは，父の考えに反すると言った。その後しばらくして，師のもとを訪れ孝経を学び，熱心に思索して日ごとに進歩した。15歳にしてすでに詩文の才を仲間間に示した。25歳で初めて蘭学の研究を始めた。玄随の家は三代にわたって儒医として藩に仕えており，彼自身も儒学と

晩年日本橋茅場町に^{きょうきよ}僑居す、宅中槐樹あり蔭をなす、故に門人相称するに^{かいえん}槐園先生を以てせり。桂川^{ほしゅう}甫周、玄随の才を愛し、^{さたん}嗟嘆して曰く遠西の学今にして伝えるに足ると、又蘭人某所撰の内科書を取て之を玄随に授けて曰く、之を訳して公行せば、則ち東方未曾有の業なりと、玄随此言を聴て大に然りとなし、鑽研習読、殆んど十年を経て西説内科選要を著す、之れを和蘭内科書の嚆矢とす。晩年此書に重訂を加え平直を旨とし、務めて治療の準則を^{こうえん}揭示せんとし、既に稿を起せしも、未だ脱せずして^{さく}湍焉として^か簞を易く。其嗣玄真遺緒を嗣ぎ増補重訂内科選要を世に公せり。寛政九年十二月十八日病んで歿す、享年四十三。著す所に、遠西名物考、東西病考、遠西草木略、西洋医言、蘭畝俶載、蘭訳弁髦西文矩、槐塾文府、槐園文集あり。

医学に優れていたうえ、さらに蘭学にも通じ、学問に励むこといよいよ篤く、著述もますます多くなり、その名声は大きく高まった。晩年は日本橋茅場町に住み、家の庭に^{えんじゆ}槐の木があったことから、その門弟たちは先生を^{かいえん}槐園先生と呼んだ。桂川^{ほしゅう}甫周は玄随の才を評価して、今や西洋の学問を十分に伝えるに足る、と感嘆し、オランダ人が著した内科書を玄随に与えて、これを翻訳して世に著せば、東洋にかけてない偉業となる、と勧めた。玄随はその言葉に大いに同意し、研究と習読を重ねることおよそ十年余り、ついに西説内科選要 [1] を著した。これはオランダ内科学の嚆矢である。晩年、これを改訂し、平易な記述を旨として治療の規範を示そうと努め、すでに書き起こしたが、完成する前に突然病没した。その後は子の玄真がその遺志を継ぎ、増補重訂内科選要を著した。

寛政9年(1797年)12月18日病没、享年43歳。著書に、遠西名物考、東西病考、遠西草木略、西洋医言、蘭畝俶載、蘭訳弁髦西文矩、槐塾文府、槐園文集がある。

1. 西説内科撰要。桂川甫周が与えたヨハネス・デ・ゴルテル著「簡明内科書」の訳書。日本初の内科書とされる。

第六十八 吉雄耕牛(よしお こうぎゅう)

1724-1800 吉雄流外科の祖



名は永章，俗称幸左衛門後幸作と改む，耕牛はその号なり．長崎通事の旁ら外科の業を好み，西医に就て其方術を受け，以て名あり．能く子弟を教導し，四方より^{きゅう}笈を負うて其門に入る者数十百人に及ぶ．毎歳江戸来聘の和蘭使節に従いて都下に来れり．明和の初め前野良沢，長崎に至り専ら西学の一端を質問して其学の端を啓けたり．晩年職を辞し^{ちほつ}薙髮して耕牛を以て隠居の常の称とせり．寛政十二年庚申八月十六日，年七十七病を以て家に終り，禅林寺に葬る．著す所に因液発備二巻あり．

名は永章，俗称を幸左衛門，その後に幸作と改めた．耕牛は号．長崎通詞のかたわら，外科医術を良くして，西洋の医師についてその技術を学び，知られるようになった [1]．弟子の教育に熱心で，遠方から訪れて入門する者は数百人に及んだ．毎年江戸に参府するオランダ使節に随行して，江戸に赴いた．明和のはじめ，前野良沢 [→第七十] が長崎に来訪して蘭学についていろいろ質問し，それにより蘭学の端緒が開かれた．晩年には職を退いて髪を剃り，隠居後の号を耕牛とした．寛政 12 年 (1800 年) 庚申年 8 月 16 日，77 歳にて自宅で病没．禅林寺に葬られた．著作に因液発備二巻がある．

1. 吉雄流外科は，榎林鎮山 (→第三十四) の榎林流外科とならぶ，紅毛外科の双壁とされる．前野良沢 (→第七十) の他にも，青木昆陽 (→第五十)，野呂元丈 (→第四十五)，大槻玄沢 (→第九十三)，三浦梅園 (→第六十二)，平賀源内 (→第五十四)，緒方春朔 (→第七十八) らこの時代の蘭学者の多くがその門をたたいた．解体新書の著者に前野良沢の名前はないが，吉雄が寄せた序文にその名前が現れている．

第六十九 本居宣長(もとおりのりなが)

1730-1801 医師, 国学者



^{すずのや}鈴屋と号す, 始め小津富之助と云い, 彌四郎健蔵春庵と称し, 後ち中衛と改む, 伊勢松阪の人. 享保十五年六月七日に生まれ, 京都に留学して堀景山に師事し, 更に医学を武川法眼^{たけかわほうげん}に受く, 業成り帰郷, 治を施し, 併せて子弟を教授す. 享和元年九月二十九日病んで歿す, 享年七十二, 山室妙楽寺に葬る.

^{すずのや}号を鈴屋と称した. はじめは小津富之助といい, また^{ちゅうえい}中衛と改めた. 伊勢国松阪(現三重県松阪市)の出身. 享保15年(1730年)6月7日生. 京都に遊学して堀景山に師事し, さらに武川法眼^{たけかわほうげん}から医学を学んだ. 学業を修めて故郷に帰り, 医療を行うとともに門弟をも教授した[1]. 享和元年(1801年)9月29日病没, 享年71歳. 山室の妙楽寺に葬られた.

1. 古事記研究, 国学者として名高いが, 生涯にわたって日中は医師として診療にあたって生計を立て, 自身の研究は空き時間, 夜間に行った. その医学は師武川に学んだ後世派の漢方医学で, 小児科を得意とした[吉田悦之. 本居宣長の医業と学問. 日農医誌 65:1104, 2017].

第七十 前野蘭化(まえのらんか)

1723-1803 蘭学者, 解体新書を編纂



名は熹^{よみす}, 通称良沢^{りょうたく}, 字を子悦^{あざな しえつ}と云い, 楽山^{らくさん}と号せり。家世々医を以て中津侯に仕えて二百石を領せり。幼かして父母を失い外舅^{がいきゅう}淀侯宮田全沢に養われて成長せり。一日同藩の隠坂江鷗^{かくれざかこうおう}蘭書の残篇を先生に示したるに発憤して, 青木昆陽の塾に入り, 日夜孜々^{しし}其書を学びたり, 時明和六年にして其齡四十七なり。其翌年藩侯に従い中津に赴くことありしかば, 百日の暇を得て長崎

名は熹^{よみす}, 通称良沢^{りょうたく}, 字は子悦^{あざな しえつ}といい, 楽山^{らくさん}と号した。代々医師の家系で, 中津藩(現大分県中津市付近)に仕え, 家禄二百石を与えられていた。幼くして父母を失い, 母方の叔父淀侯の藩医, 宮田全沢に育てられた。ある時, 同藩の隠坂江鷗^{かくれざかこうおう}に蘭書の一部を見せられ, 大いに発奮して青木昆陽[→第五十]の塾に入門し, 日夜懸命にその書を学ぶようになった。ときに明和76年(1796

に遊び、昆陽より伝えられたる五百余言の外に又二百余言を誦して江戸に帰れり。其翌年明和八年三月四日、杉田玄白等と小塚原^{ふわけ}腑分を觀て、同志と力を戮^{あわ}せ解体新書を大成せり。

先生蘭学を以て終身の業となし、彼邦の言語に通じ其力を以て西洋の事態を知らんとの大望ありし故に、世間浮華の人と交ることを避け、戸を閉じて医学に潛むること終始一日の如くなりき。晩年退隱して居宅を根岸の貝塚に築きしが病起るに及びて、女甥小島春庵の家に移りて遂に歿す、享年八十一、享和三年十月十七日なり。先生出でて藩侯に侍せるとき、藩主先生を目して和蘭の化物と云いて、其名を呼ばれしことなかりければ遂に蘭化と称せり。

著す所に蘭訳大成、和蘭訳文略、蘭訳筌、助語参考蘭語隨筆、古言考、点例考、思々末通駁庸医、管蠡秘言、仁言私説、八種字考、慧星考、興地図篇、地学通、魯西亜本紀略、同大統略記、樂山堂記等あり。

年)、47歳であった。翌年、藩主に従って中津に赴いた際、百日の暇をもらって長崎に遊学し、昆陽から教わった五百余の単語の他に、さらに二百余の語を覚えて江戸に戻った。翌年、明和8年(1771)3月4日、杉田玄白らとともに小塚原で刑死者の解剖を見学し、同志と協力して解体新書を完成させた。

先生は蘭学を終生の学問とし、蘭語に通じ、その力によって西洋情勢を理解しようという大望を抱いていた。そのため世の一般の人々との交際を避け、戸を閉ざして医学に専念すること、一日たりとも変わらなかった。晩年は隱居して根岸の貝塚に居を構えたが、病を得て姪の小島春庵の家に移り、ついに世を去った。享年81、享和3年(1803年)10月17日であった。

かつて藩主に仕えていたころ、主君は先生を呼ぶ際、オランダの化け物と称して名を呼ばず、以来蘭化と呼ばれるようになったという。著作に、蘭訳大成、和蘭訳文略、蘭訳筌、助語参考蘭語隨筆、古言考、点例考、思々末通駁庸医、管蠡秘言、仁言私説、八種字考、慧星考、興地図篇、地学通、魯西亜本紀略、魯西亜大統略記、樂山堂記がある。

第七十一 和田東郭(わだ とうかく)

1744-1803 折衷派医師



名は璞^{はく}，字は韞卿^{あざな うんきょう}，一字泰純，東郭は其号にして，一に含章齋と号す。少うして大阪に遊び戸田旭山^{きよくざん}に業を受け，後京都に來り吉益東洞の門に入り古方を修む。寛政九年御医となり法橋^{ほつきょう}に叙せられ，十一年法眼^{ほうげん}に進み，享和三年病で歿す。著す所に，傷寒正文解，蕉窓方意解，蕉窓雜話，産家瑣言，導水瑣言，瘞家瑣言，幼家瑣言，青囊瑣言，徵瘡一家言，東郭雜記あり。

名は璞^{はく}，字は韞卿^{あざな うんきょう}あるいは泰純とも称し，東郭は号。また含章齋とも号した。若いくして大阪に遊學して戸田旭山^{きよくざん}に學び，のちに京都に出て吉益東洞〔→第五十一〕の門に入り，古方醫學を修めた〔1〕。寛政9年(1797年)に御医となり，法橋^{ほつきょう}に叙せられ，寛政11年(1709年)に法眼^{ほうげん}に昇進した。享和3年(1803年)，病没。著書に，傷寒正文解，蕉窓方意解，蕉窓雜話，産家瑣言，導水瑣言，瘞家瑣言，幼家瑣言，青囊瑣言，徵瘡一家言，東郭雜記がある。

1. 最初に學んだ戸田旭山は後世派の醫師で，その後吉益東洞に古方醫學を學んだ。東洞の死後，古方を主として不足は後世方で補う折衷派の醫學を行ひ廣く受け入れられた。

第七十二 柚木太淳(ゆのき たいじゅん)

1762-1803 眼科医, 眼の解剖を行った



^{あざな}字は仲素, 鶴橋と号す。又荻野台州に就き内科を修む, 解剖に志し, 解体瑣言^{かいたいさげん}を著せり。江州の人, 江村北海^{けいしやう}に経書を承け, 家学を嗣いで医となり, 父と共に眼科を以て立てり。享和三年二月十八日歿す。

^{あざな}字は仲素, 号は鶴橋。荻野台州に学んで内科を修め, 人体解剖を志し, 解体瑣言^{かいたいさげん}を著した [1]。近江 (現滋賀県) の出身で, 江村北海に経書を学び, 家学を継いで医師となった。父とともに眼科を家業として立身した。享和3年 (1803年) 2月18日没。享年72歳。

1. 解体瑣言。代々眼科医の家系で, 京都の刑死者の解剖を行った際に眼の解剖を担当してそれを記録した。

第七十三 橘元周(たちばな げんしゅう)

1728-? 眼科医



鉄蔵と通称し、^{あざな}字は元周，梅圀と号す。本姓吉田氏，延享二年橘元徳の養嗣となる。眼に進み，幕府奥医師となる。寛政年間に歿す。著す所に，脚氣説あり。

通称鉄蔵，^{あざな}字は元周，梅圀と号した。本姓吉田，延享2年(1745年)，橘元徳の養子となる。眼科を専門とし，幕府奥医師となる。寛政年間(1789-1801)に没。著書に，脚氣説がある。

第七十四 畑黄山(はた こうざん)

1721-1804 古方医. 京都に医学院を開いた.



名は惟和^{これかず あざな}, 字は厚生^{こうぜん}, 黄山と号す. 平安の人, 本姓安藤なり. 医官畑柳景養うて嗣となす, 因て畑氏を冒す. 弱齡にして医を以て京都に鳴る. 延享二年十月法橋^{ほつきょう}に敍せられ, 宝暦七年十二月法眼^{ほうげん}に進む, 明和四年八月 詔^{みことり}を奉じて太上天皇の病を診し, 遂に侍医となる. 安永五年初めて御脈を診し, 上皇の起居を候う, 天明七年一月尚藥奉御となり法印に敍し, 医学院の号を賜わる. 近衛街に新に学館を営み医学院と名け, 弟子を誘進し, 又儒士を延て六經四書を講ぜしむ. 天明八年京都火あり乗与に扈從し, 行宮に宿直すること三年, 享和の初め劇疾を患う, 已に愈るに及び特旨短袴^{とくしたんこ}を著せしめ, 又杖朝^{じょうちよう}を許さる, 且つ故あるに非ざれば召されず. 化元年五月十六日歿す, 年八十四. 著す所に, 斥医断, 学範あり.

名は惟和^{これかず あざな}, 字は厚生^{こうぜん}, 号は黄山. 平安(京都)の生まれで, 本姓は安藤. 医官畑柳景に養われてその跡を継ぎ, 畑姓を名乗った. 若くして医学の才を京都で知られ, 延享2年(1745年)10月に法橋^{ほつきょう}, 宝暦7年(1759年)12月には法眼^{ほうげん}に進んだ. 明和4年(1767年)8月には勅命を奉じて太上天皇の病を診察し, 以後侍医となった. 安永5年(1776年)に初めて御脈を診し, 以後上皇の日常につきそった. 天明7年(1787年)1月, 尚藥奉御となり, 法印に叙され, 医学院の号を与えられた. 近衛通りに新しく学館を設けて医学院と名づけ, 門弟を育成する一方, 儒学者を招いて六經四書を講義させた. 天明8年(1788年), 京都の大火の際には, 行宮に天皇に同行し三年間泊まり込んだ. 享和年間(1801-04)初めに重病を患ったが, 快復後は特別のはからいにより短袴^{たんこ}を着用することを許され, また杖をついて朝廷に出仕することを許された. 以後は特別の事情がなければ召されることはなかった. 文化元年(1804年)5月16日, 84歳で没. 著書に, 斥医断, 学範[1]がある.

1. 斥医断は吉益東洞の医説の批判書, 学範は開いた医学院の指導要領.

第七十五 橘南蹊(たちばな なんけい) 宮川春暉(みやがわ はるあきら)

1753-1805 医師, 全国を漫遊して旅行記を著した



あざな
字は恵風, 姓は橘, 因て自ら橘南蹊たちばな なんけいと号す, 又梅仙しゆんきてきてきと号す. 伊勢の人, 産れて七歳, 父孟子を読む, 春暉適々傍に在り, 父羊を以て牛に代ゆるの章を語る, 先生黙して其義を了す, 人之を奇とす. 年十四五歳にして父を失う, 家計豊ならざれば医業を職せんと志す, 十九歳京都に上る, 母恒に戒めて修業を励ましむ. 先生夙つとに香川太冲かがわたいちゆうに私淑し, 文質ふた両つながら備りて漢土に愧ぢざるは太冲あるのみと謂へり. 天明元年母歿し, 今は孝養の絆も断たれ, 繁累の煩もなきに至れば, 同年西遊を思いたちしが, 未だ其機を得ざりき. 翌二年秋, 門生文蔵を伴い九州に遊び, 天明三年秋再び京都に還りて西遊を遂げたれば, 更に天明四年の秋, 門生養軒を随えて東遊し, 翌五年三月仙台に到り, 九月より五

あざな
字は恵風, 姓は橘, それによって自ら橘南蹊, あるいは梅仙と号した. 伊勢に生まれた. 7歳のとき, 父が孟子を読んでいたところ, たまたま春暉(南蹊)が側におり, 羊を以て牛に代えるエピソード[1]を語ったところ, 先生は黙ってその意味を理解し, 周囲の人々は驚いた. 14, 5歳で父を亡くし, 家計が豊かではなかったため, 医者を目指した. 19歳のときに京都へ上り, 母はいつも厳しく戒め, 勉学を励ました. 先生は若いころから香川太冲かがわたいちゆうに深く私淑し, 文才も人柄も備わっていて, 中国の人にも劣らないのは太冲ただ一人であると語っていた. 天明元年(1781年), 母が亡くなり, 孝行を尽くす相手もいなくなり, しがらみもなくなったため, 西国への旅を思い立ったが機会を得られなかつ

年三月に至るまで奥羽北端より北越中越を巡れり。先生深雪征途に迷う時を選びしは医術修業の為めなりと、三月越後より佐渡に渡らんとし颶風ぐふうに遇いて止み、加賀を経て越前、近江を廻りて帰洛せり。

その西遊、東遊合せて五年、その他南紀の歴遊を併せて漫遊すること前後四度に及べり。その東遊を畢おえて帰京せし後、専ら医業を営み、又尚薬くすりのかみに任ぜられ、石見介いわみのかみに敍せられたり、後ち著述ちしに心勞せしが、偶々たま宿痼しゆくあに苦しみ、遂に致仕ちしして薙髪ちほつせり、年四十四。文化二年四月十日遂に歿す。其生年を詳せず。

著す所に、雑病記聞、橘氏医話、薬量考、読産論、方意弁、度量衡考弁意、漢語律呂考、北窓瑣談、東遊記、西遊記、国語律呂考、薬方小賤、痘疹玉環方、痘疹水鏡録、傷寒外伝傷寒論通言、傷寒論文註あり。

た。翌秋、弟子の文蔵を伴って九州へ旅し、天明3年(1783年)の秋に再び京都へ戻り、西国の旅を遂げた。その後天明4年(1784年)の秋には、弟子の養軒を連れて東国への旅に出て、翌年3月には仙台に到り、9月から翌年3月まで奥羽の北端から北越、中越を巡った。先生がわざわざ大雪の時期を選んで旅をしたのは、医術の修業のためだったという。3月には越後から佐渡へ渡ろうとしたが、暴風に遭って断念し、加賀を経て越前、近江を経て京都に戻った。

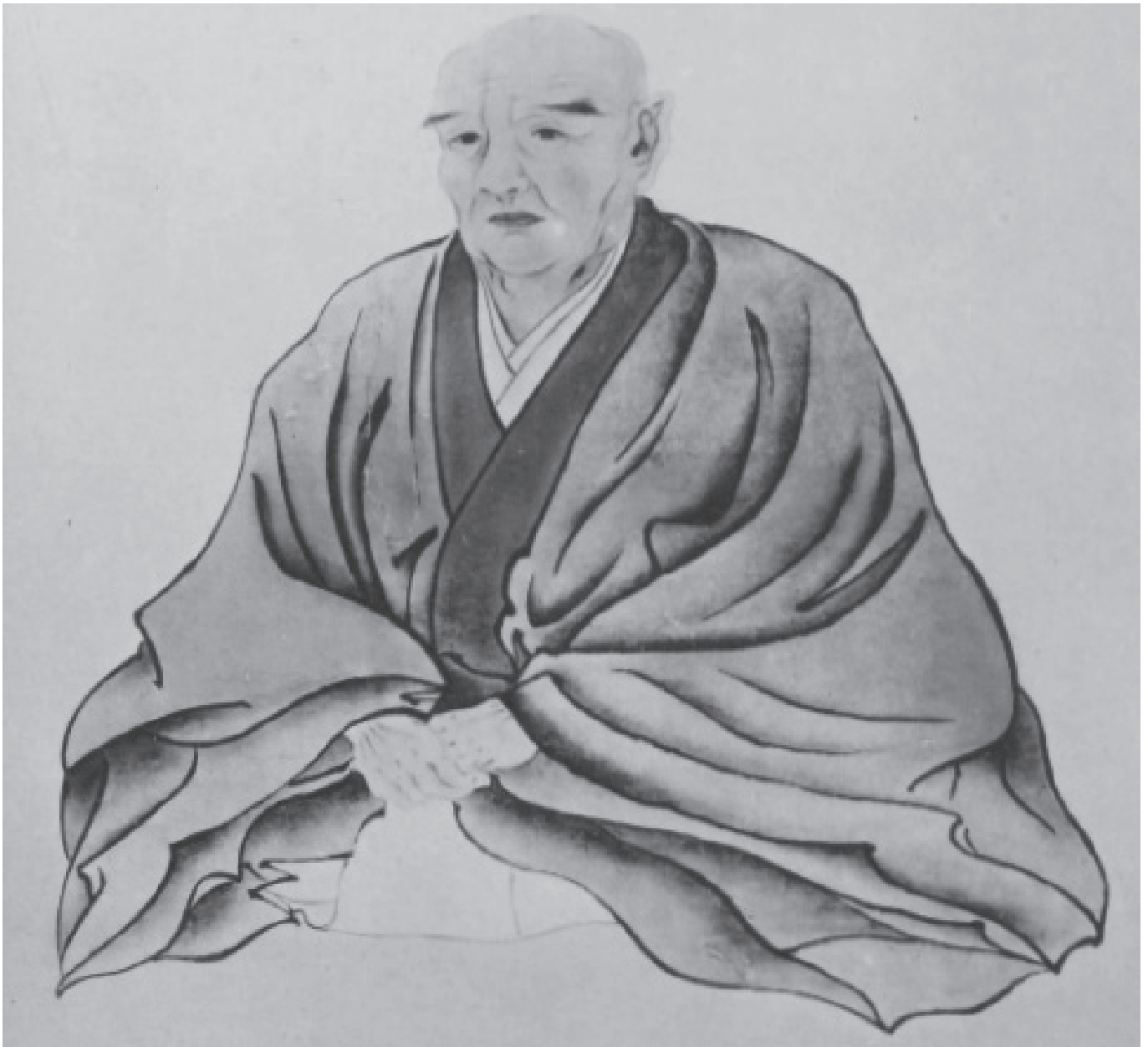
こうした西国、東国への旅を合わせて5年、そのほか南紀への旅も含め、漫遊は通算4回に及んだ。東国への旅を終えて帰京後は、医業に専念し、尚薬くすりのかみに任ぜられ、石見介いわみのすけに敍せられた。その後は著述に力を注いたが、しばしば持病に苦しみ、ついには官職を辞して髪を剃り、隠居した。44歳であった。文化2年(1805年)4月10日没。生年は不詳。

著書に雑病記聞、橘氏医話、薬量考、読産論、方意弁、度量衡考弁意、漢語律呂考、北窓瑣談、東遊記、西遊記、国語律呂考、薬方小賤、痘疹玉環方、痘疹水鏡録、傷寒外伝、傷寒論通言、傷寒論文註がある。

1. 羊以易牛(羊を以て牛に易る)[梁惠王章句上]。王が牛が殺されるのを哀れんで羊に代えた。庶民はその意図を訝しんだ。孟子は、庶民は王の小さな善を理解できない、より大きな善が必要であると説いた。

第七十六 小石元俊(こいし げんしゅん)

1743 -1809 京都の蘭方医



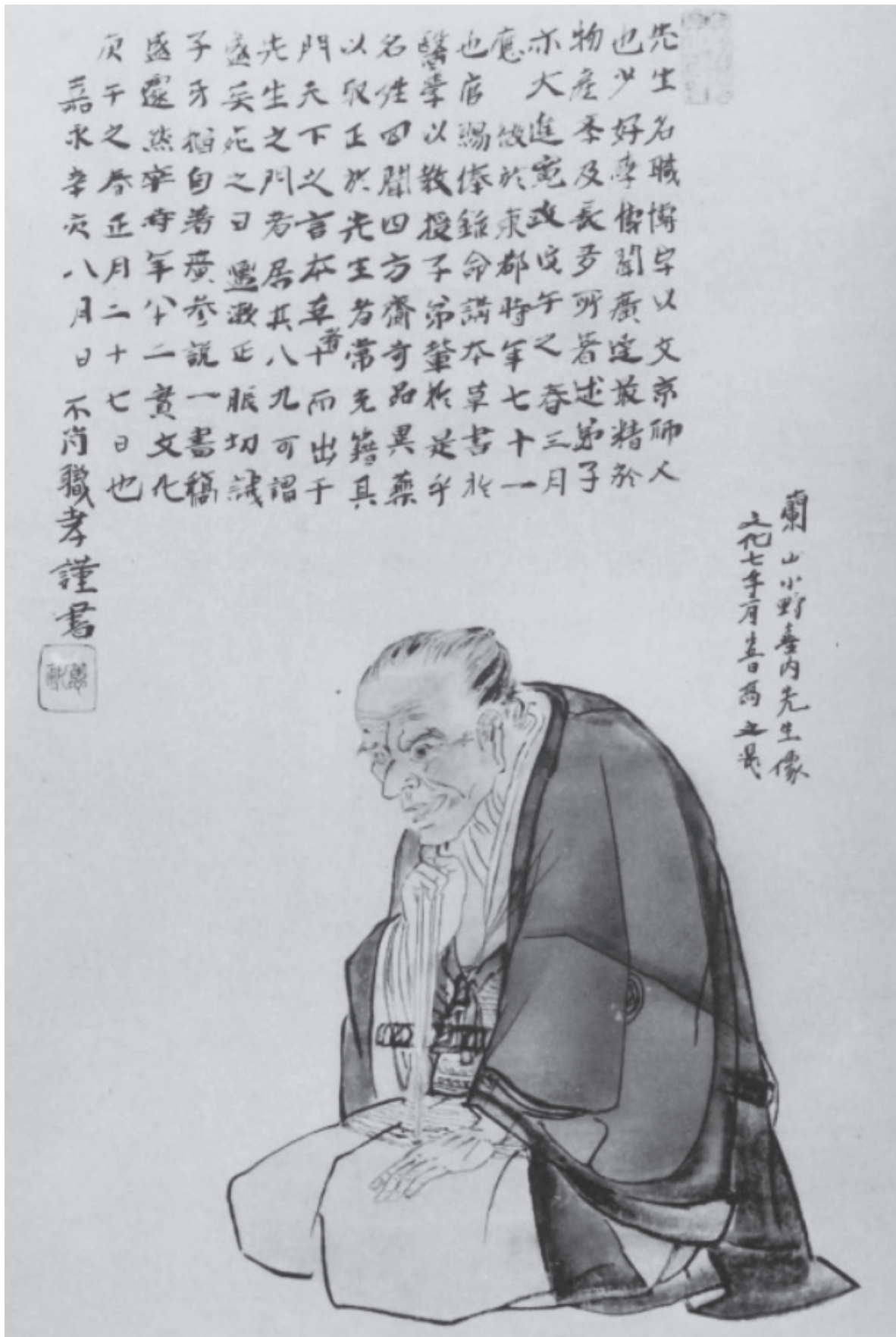
名は道^{あざな}，字は有素^{うす}，大愚^{だいぐ}，又碧霞^{へきか}と号す，元俊は其通称なり．寛保三年九月十六日に生まる，年八歳父に従い大阪に遷る，淡輪元潜^{たんわげんせん}，永富独嘯庵^{ながとみどくしょうあん}を師とし医術を学ぶ．年二十一父を失う，後ち母の称賛^{しょうさん}により西遊六年にて帰阪せり，年三十四，母も亦病死す．年四十一小関氏の女阿柔^{あな}を娶る，越て二年小関氏病で歿す，是歳九月児を他に托して江戸に遊び，踰年にして西歸し京都に復る，年四十八．再び小関氏の女を娶る，年五十二^{きのさき}，病ありて城崎温泉に遊ぶ，文化五年十二月二十五日歿す，年五十四．

名は道^{あざな}，字は有素^{うす}，号は大愚^{だいぐ}，また碧霞^{へきか}とも称した．元俊は通称．寛保3年(1743年)9月16日生．8歳の時，父に従って大阪に移る．淡輪元潜^{たんわげんせん}，永富独嘯庵^{ながとみどくしょうあん}を師として医学を学んだ[1]．21歳のときに父を亡くした．その後，母の勧めで西国に遊学し，六年後に大阪に帰った．34歳で母もまた病死した．41歳で小関氏の娘阿柔^{あな}を娶った．2年後，義父の小関が病死し，この年の9月，子を他家に預けて江戸に遊学し，翌年に帰西して京都に戻った．とき48歳．再び小関氏の娘を娶り，52歳^{きのさき}で病を得て城崎温泉で療養した．文化5年(1808年)12月25日，54歳で没．

1. 古医法を学んだ後，蘭医学も学び，京都における蘭方普及に功があった．

第七十七 小野蘭山(おの らんざん)

1729-1810 本草学者。「日本のリンネ」と称される



名は職博^{もとひろ}、字は以文^{あざな いぶん}、蘭山又朽匏子^{きゆうほうし}と号す、通称喜内と云う、後ち蘭山を以て通称とす。享保十四年八月二十一日京都に生まる、年十六松岡恕庵^{じょあん}に業を受く、未だ二年ならずして恕庵死す、爾来独学、年二十五、河原町夷川^{えびすがわ}の北に居をとし帷^いを下す。寛政十一年幕府先生を江戸に徴し、医学館に本草を講ぜしめ、月俸三十円歳銀二十枚を賜う。寛政十二年の春より文化三年の夏に至るまで諸国^{ばっしょう}を跋涉し、五旬或は十旬にして帰り、其採る所の品目を疏して編して一書を成し上進す。常野採薬志、採薬志の書これなり。寛政元年八月門人相集まりて先生の六秩^{りくちつ}の祝筵^{しゅくえん}を張る、同十年古稀^{がえん}の賀宴を開く、此時先生草木十種の新考を撰ぶ、門人百口^{ど ども}〔校注：百百の誤〕俊道模写して上梓す、題して十品考^{じっぴんこう}と曰う。文化五年八秩^{はっちつ}の賀筵^{がえん}を開く、耄筵小牘^{てつえんしょうとく}の著あり。文化七年一月二十七日朝湓焉^{こうえん}として逝く、年八十二。著す所に、本草綱目啓蒙、飲膳摘要、十品考、百品考、薬名考、笔筵小牘、広参説本草訳説、本草会識、本草紀聞、本草綱目弁談、格物徴、松軒愚筆衆芳軒雜録あり。

名は職博^{もとひろ}、字は以文^{あざな いぶん}、号は蘭山または朽匏子^{きゆうほうし}と称した。通称は喜内、後に蘭山を用いた。享保 14 年 (1729 年) 8 月 21 日、京都に生まれる。16 歳で松岡恕庵〔→第四十三〕に学んだが、2 年を経ずして師は亡くなり、その後は独学した。25 歳にして、河原町夷川^{えびすがわ}の北に居をかまえて学問所を開いた。寛政 11 年 (1799 年)、幕府に招かれて江戸に行き、医学館で本草学を講じ、月俸 30 匁、年俸銀 20 枚を賜った。寛政 12 年 (1800 年) 春から文化 3 年 (1806 年) 夏まで、諸国を巡り、50 日あるいは 100 日ほどで帰京しては、採集した標本を整理し書にまとめ、幕府に献上した。これが採薬志、常野採薬志である。寛政元年 (1789 年) 8 月、門弟たちが集まり還暦を祝った。さらに寛政 10 年 (1798 年) には古稀の祝いを開き、このとき先生は草木十種について新しい考察を著し、これを弟子の百百俊道が模写して刊行し、十品考^{じっぴんこう}と題した。文化 5 年 (1808 年) に 80 歳の祝宴が行われ、このとき耄筵小牘^{てつえんしょうとく}を著した。文化 7 年 (1810 年) 1 月 27 日朝急逝、享年 82 歳。著書に、本草綱目啓蒙 [1]、飲膳摘要、十品考、百品考、薬名考、耄筵小牘、広参説、本草訳説、本草会識、本草紀聞、本草綱目弁談、格物徴、松軒愚筆、衆芳軒雜録がある。

1. 本草綱目啓蒙^{ほんぞうこうもくけいもう}。李時珍の本草綱目をもとに、自ら収集した標日本固有の動植物、鉱物を加えた日本最大の本草書、全 48 巻。本草 1882 種が記載されている。これを見たシーボルトは蘭山をして「日本のリンネ」と賞揚したという。

第七十八 緒方春朔(おがた しゅんさく)

1748-1810 初の人痘を行った



名は維章[校注：^{これあき}惟章の誤]，洞雲軒，済庵，混郷の別号あり。本姓丸林氏，筑前秋月の人，長じて長崎に往き，吉雄氏の門に入り種痘法を修め，刻苦多年其術妙に達す。寛政元年，緒方元齋に養^{あまね}れて其姓を冒す，黒田侯に仕え，信任厚し。是より治く藩内に種痘を実施して人命を救済せり，その法創始に出ず。兼ねて天文推歩の学に通じ，天球，地球両儀を製して人を驚嘆せしむ，寛政六年江戸邸に祇役せし以来，種痘術を都に伝えて声名^{さくさく}噴々たり。文化七年一月二十一日歿す，享年六十三。

彼の名は^{これあき}惟章，号は洞雲軒。済庵，混郷の別号もあった。もとの姓は丸林。筑前国秋月(現福岡県朝倉市付近)の出身。成長してから長崎に赴き，^{よしおこうぎゅう}吉雄耕牛[→第六十八]の門下に入って種痘法を学び，長年の苦心の末，その術に精通した。寛政元年(1789年)，緒方元齋の養子となってその姓を継ぎ，黒田藩に仕えて信頼厚かった。その後藩内に広く種痘を行い，多くの人命を救い，種痘法の創始者となった[1]。また天文学，暦学にも通じ，天球儀や地球儀を制作して人々を驚かせた。寛政6年(1794年)，江戸の藩邸に勤めて以後，江戸にも種痘術を広め，名声は非常に高かった。文化7年(1810年)1月21日没，享年63歳。

1. 中国(清)の医書に書かれた種痘法を行った。粉末状の人痘痂皮を鼻腔内に入れる人痘法であるが，ジェンナーの牛痘法(1796年)に先立つものであった。種痘法を工夫した多くの医師と異なり，これを秘伝とせず広く伝授した。

1755-1810 考証派の医師



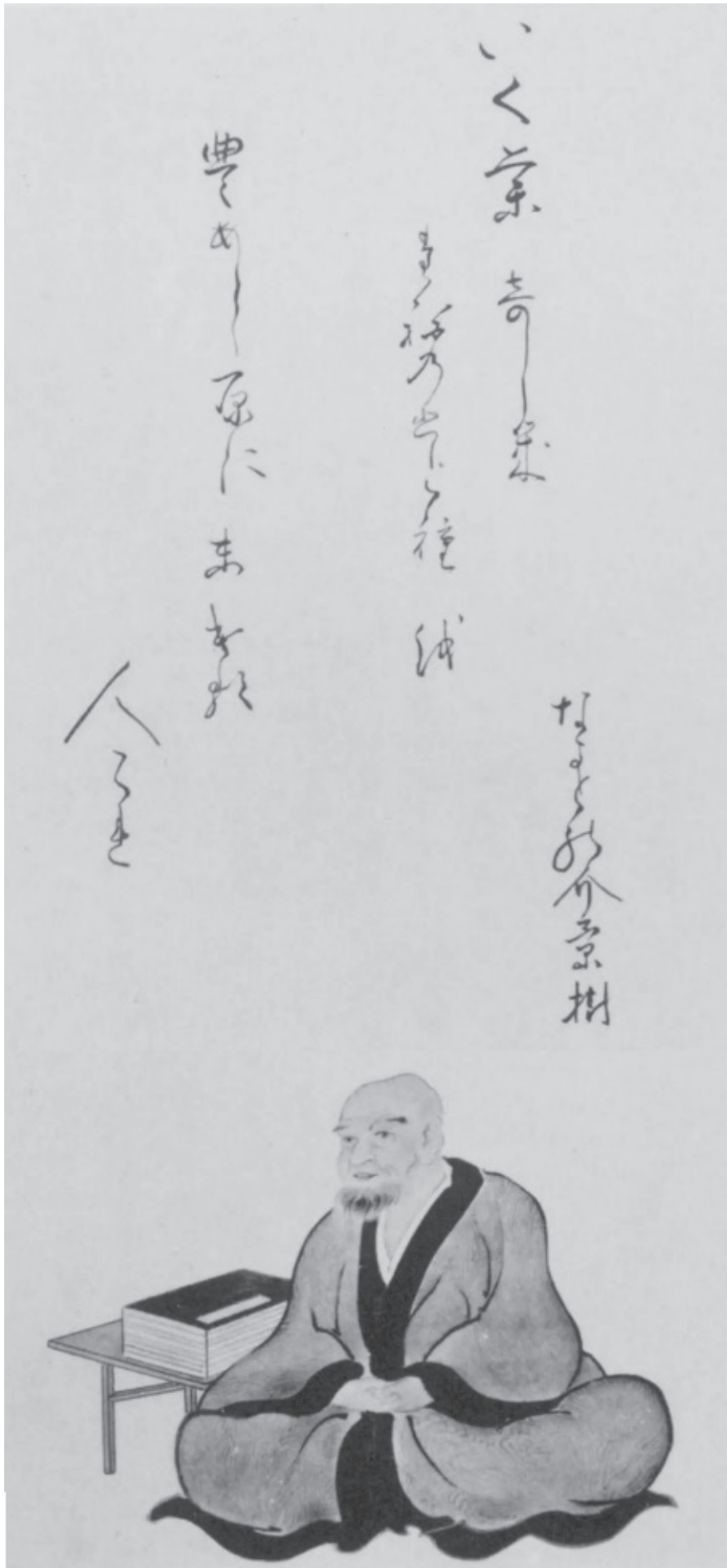
名は元簡^{もとやす あざな れんぶ}，字は廉夫^{れんぶ}，通称安長^{やすなが}，桂山は其号なり，別に櫟窓^{れきそう}と号す，其書齋^{いっしゅう}を聿修^{なづ}と名く。父の業を承けて甚だ医学を嗜み，専心力学精励人に過ぐ。寛政二年侍医となり，法眼^{ほうげん}に叙せらる，同十一年父藍溪^{らんけい}致仕せしを以て其禄秩^{ろくちつ}を襲うて侍医兼督医学事となる。享和元年上旨に悖い侍直を罷む，文化七年再び召さる，其年冬十二月二日俄^{にわか}に病んで歿す，享年五十六。著す所に，素問識，靈樞識傷寒論輯義，金匱要略輯義，扁倉伝彙考，脈学輯要医胆，櫟窓類抄，揆穴輯要観聚方，槍中鏡，素問解題，救急選方，聿修堂読書記，麻疹三書，本朝経験方，疑脚気弁惑論，日光親程見聞記，文集あり。

名は元簡^{もとやす あざな れんぶ}，字は廉夫^{れんぶ}，通称は安長^{やすなが}，桂山は号。櫟窓^{れきそう}とも号し，自らの書齋^{いっしゅう}を聿修^{なづ}と名づけた。父の学問を受け継ぎ，医学をたいへん好み，専心して学問に励み，その精力は人並みを超えていた。寛政2年(1790年)に藩医となり，法眼^{ほうげん}の位を授けられた。同11年(1799年)，父藍溪^{らんけい}が引退し，その家格と俸禄を継承し侍医兼監督医学事となった。享和元年(1801年)，君命に背いて罷免されたが[1]，文化7年(1810年)に再び召し出された。その年の冬，12月2日に急病で没した。享年56歳。著作に，素問識，靈樞識，傷寒論輯義，金匱要略輯義，扁倉伝彙考，脈学輯要，医胆，櫟窓類抄，揆穴輯要，観聚方，槍中鏡，素問解題，救急選方，聿修堂読書記，麻疹三書，本朝経験方，疑脚気弁惑論，日光親程見聞記，文集がある。

1. 1801年，医師選抜をめぐる異見を述べて罷免された。

第八十 海上随鷗（うみがみ ずいおう）

1758-1811 蘭学者，初の蘭和辞典を編纂



名は^{せん}箭，^{さんぼく}三伯と称す，本姓を^{らんがくかいてい}稲村と云う，因州侯の医員なり．嘗て蘭学階梯を見て感奮志を立て、江戸に來り，大槻^{らんがくかいてい}磐水の門に入り，能く其学^{うんおう}の蘊奥を極む．先生蘭学辞書の^{らんがく}拠るものなきを遺憾とし蘭人はるまの辞書を^{らんがく}訳し，漸く一部八万語余辞を完^{らんがく}翻し，寛政八年始めて活版となし，三十余部を社友に^{らんがく}頒つ，江戸はるまと呼ぶもの之なり，後ち門人^{らんがく}藤森晋山，同門の士^{らんがく}小森桃塙と謀り刪補して三万辞となし^{らんがく}訳鍵と題して世に行う．先生故ありて任を致し，下総^{うみがみずいおう}海上郡に浪遊し名を海上随鷗と更め後ち京都に來り，大に蘭学を^{らんがく}唱道す，その名大に^{らんがく}振い從遊するもの数百人に及ぶ．京都に蘭学あるは^{らんがく}實に先生より始まる．宇田川^{しんざい}榛齋，年壮なるとき放蕩不羈，素行修らず，既にして窮困自活すること能わず，先生之を憐み，蘭書を^{らんがく}傭訳し以て口を^{らんがく}餉せしむ．ハルマ字解の著は榛齋の功多きに在りとす．文化八年正月十六日病で歿す．

名は^{せん}箭，号は^{さんぼく}三伯，本姓は^{せん}稲村．因州藩（現鳥取県の一部）の医師であつた．かつて蘭学階梯〔校注：大槻磐水著〕を読み，深く感動して志を立て，江戸に出て大槻磐水〔→大槻玄沢，第九十三〕の門に入り，学問の奥義をよく極めた．日本に蘭和辞典の拠り所となるものがないのを残念に思い，オランダ人ハルマの辞書を翻訳した．そしておよそ8万語余りの語を訳し終え，寛政8年（1796年）に印刷，30部あまりを仲間に配布した．これが江戸ハルマと呼ばれるものである．のちに門弟の藤森晋山や同門の小森桃塙と協力し，語数を三万語に整理した^{らんがく}訳鍵を世に刊行した．先生は事情あつて職を辞し，下総国海上郡を放浪して海上随鷗と号を改めた．その後，京都に赴いて大いに蘭学を唱導し，名声は大いに広まり，門人は数百人にも及んだ．京都に蘭学が根付いたのは，實に先生から始まる．宇田川^{しんざい}榛齋〔→第百二〕は，若いころ遊び人で素行不良で，ついに困窮して自活できなくなった．先生はこれを憐れみ，蘭書の翻訳を請け負わせて生活の糧とさせた．ハルマ字解の著作は榛齋の功績が大きいといわれる．文化8年（1811年）1月16日病没．

第八十一 竹内新八(たけうち しんぱち)

1735?-1811 眼科医, 眼科四大家のひとり



諱^{いみな よしのり}は持規, 通称新八, 高巖院と呼ぶ。信州諏訪^よの人, 世々眼科を以て聞え, 江戸の土生玄磧^{はぶげんせき}, 尾張馬嶋の明眼院, 筑前恵美の田原養伯と並び称して眼科の四大家と謂れたり。文化八年三月四日を以て簀^{さく}を易う, 享年七十六。

諱^{いみな よしのり}は持規, 通称新八, 高巖院と呼ばれた。信州諏訪^よの出身。代々眼科の家系として知られ, 江戸の土生玄磧^{はぶげんせき}[→百三十二], 尾張馬嶋の明眼院, 筑前恵美の田原養伯と並び称して眼科の四大家といわれた。文化8年(1811年)3月4日没, 享年76歳。

第八十二 山本封山(やまもと ほうざん)

1742-1813 古方医, 儒学者



名は有香^{あざな}, 字は蘭卿, 一字中郎, 封山と号す. 越中高岡の人, 寛保二年生まる, 本姓日下氏, 幼にして業を室鳩巢^{むろきゆうそう}の門人に受く, 又曲直瀬道三の徒に従て方伎の術を学び, 年冠を躰^{おおい}えて京都に來り, 吉益東洞に就き学大に進む. 山本巨柳其才を愛して嗣となす, 由て山本氏を冒す. 諸侯聘すれども出でず. 毎旦鶏鳴, 乃ち起き手から古書^{うつつ}を膳し, 飯後徒弟を集めて經を講ず午後診療に従事す, 此の如きこと数十年一日の如し. 文化十年三月七日病を以て家に歿す, 年七十三.

名は有香^{あざな}, 字は蘭卿, また中郎とも稱し, 号は封山. 越中高岡の人で, 寛保2年(1742年)に生まれた. 本姓は日下. 幼少のころに室鳩巢^{むろきゆうそう}の門下に学び, また曲直瀬道三の門人に医学を学んだ. 成人してからは京都に出て, 吉益東洞に師事し, 学問が大いに進んだ. 山本巨柳がその才能を認めて後継者とし, 山本氏を名乗った. 諸侯の仕官の誘いを受けても応じず, 毎日早朝から自ら古書を書き写し, 食後に門弟を集めて經書^{けいしよ}を講義し, 午後は診療にあたる生活を数十年にわたり一日のごとく続けた. 文化10年(1813年)3月7日病没. 享年73歳.

第八十三 吉益南涯(よします なんがい)

1750-1813 父東洞の万病一毒論を補説, 気血水薬徴を著す



諱は猷^{いみな ゆう}, 字は修夫^{あざな}, 謙齋と号す, 幼名大助, 後周助と称す, 東洞の長子なり. 疾医の道を父東洞に受け大に進む, 年二十四のとき, 父東洞歿す, 乃ち箕裘^{ききゅう}の業を嗣ぎ二弟を育て諸生を教ゆ, 従遊の士多く, 門風大に振う. 年二十八にして方機を著し仲景薬方の活用を示す. 天明八年京都祝融の災に遇い家産を炎焦す, 乃ち移りて大阪船場伏見街^{きょうきよ}に僑居す, 時に年三十なり. 市民の来りて治を乞うもの日に数百人, 其業大に行わる. 其居る処の大阪は京都の南に位し水涯なるの故を以て南涯と号す, 年四十三のとき大阪の僑居を弟辰に譲り, 自ら京都に還り三條東洞院西に卜居せり. 東洞の万病一毒説の未だ全からざる所ありしを以て, 更に気血水の三物あり, 毒之に乗じて初めて證をなすの説を唱え, 仲景薬方を説き, 気血水薬徴^{ねいねい じゅんじゅん こんゆ}を著せり. 先生の子弟を教うるや, 寧寧反復, 諄々之を示し, 懇論倦む色なし.

諱は猷^{いみな ゆう}, 字は修夫^{あざな}, 号は謙齋. 幼いころは大助と呼ばれ, のちに周助と名乗った. 吉益東洞[→第五十一]の長男. 父東洞から医術を学んで大いに進み, 24歳のときに父が没すると学問を継ぎ, 2人の弟を育てながら門人を教えた. 門下に学ぼうと集まる者が多く, 一門は大いにふるった. 28歳で方機を著し, 張仲景の薬方の活用法を示した. 天明8年(1788年), 京都での大火[天明の大火]で家財を焼失し大阪船場の伏見町に移った. 30歳であった. 診察を求めて人々は毎日数百人にものぼり, その名声と医業は大いに広まった. 住居の大阪は京都の南にあり, 水辺に面していたことから, 自ら南涯と号した. 43歳で大阪の住まいを弟の辰に譲り, 京都に戻って三條東洞院西に居を構えた. 父東洞の唱えた万病一毒説にはなお不十分などころがあると考え, 気, 血, 水の三つがあり, そ

門人の籍にあるもの凡そ三千余人，名を成すもの少らず，賀屋恭安，中川修亭，大江広彦，横田元正，華岡青洲，華岡鹿城，山本永吉，武貞夫，和田元庵，賀川玄悦，難波抱節，赤石希範等その選なり。文化十年六月十三日病を以て其家に歿す。享年六十四。著す所に傷寒論精義，輯光傷寒論，医範，気血水薬徴，方機，方庸，方議弁，観症弁疑あり

れぞれ毒が乗じてはじめて病証となるとする説を立て，張仲景の処方をもとに説明し，気血水薬徴を著した。弟子の指導に当たっては，根気よく何度も繰り返して示し，丁寧に倦むことなく指導した。弟子は三千余人にのぼり，名を成した人物も数多い。賀屋恭安，中川修亭〔→第百二十六〕，大江広彦，横田元正，華岡青洲〔→第百五〕，華岡鹿城，山本永吉，武貞夫，和田元庵，賀川玄悦〔→第五十二〕，難波抱節〔→第百四十一〕，赤石希範などがいる。文化10年(1813年)6月13日，自宅で病没，享年64歳。著作に，傷寒論精義，輯光傷寒論，医範，気血水薬徴，方機，方庸，方議弁，観症弁疑がある。

第八十四 村井椿寿(むらい ちんじゅ)

1733-1815 吉益東洞に学び、熊本再春館で古方を講じた



字は枹^{あざな ほう}, 又大年, 椿寿と通称し, 琴山^{きんざん}と号す, 又原診館, 六清真人, 清福道人の別号あり. 早くより父見朴に就き方術を学ぶ, 父の歿後再春館の助講を命ぜられども辞して就かず, 京都に出て吉益東洞の塾に遊び, 留まること数旬にして還る, 後又往て教を受く. 東洞其才を偉とし関西古方の任を囑す, 歸るに及び傷寒論を講ず, 医名日に著わる, 専ら師説を継述し, 著書甚だ富む, 年五十余にして侍医となる, 年八十二にして致仕す, 文化十二年三月一日病んで其家に歿す, 享年八十三. 著す所に, 続藥徴, 医道二千年眼目篇, 方極刪定, 藥徴剛定, 類聚方刪定, 傷寒刪定, 傷寒講義, 扁鵲伝考和方一千方, 方極, 腹診録, 類聚方講義, 琴山劑記, 扁鵲年表, 診余漫録あり.

字は枹^{あざな ほう}, 大年, 椿寿とも通称され, 琴山^{きんざん}と号した. 原診館, 六清真人, 清福道人の別号もあった. 若いころから父見朴に医術を学んだ. 父の死後, 再春館の講師補佐を命じられたが辞退し, 京都に出て吉益東洞[→第五十一]に入門した. 数週間で郷里に帰り, その後もう一度京都に出向いて教えを受けた. 東洞は彼の才を高く評価し, 関西古方派の任を託した. 歸郷後は, 傷寒論を講義し [1], 医者としての名前は日ごとに広まった. もっぱら師の学説を受け継いで発展させ, 非常に多く著作を残した. 50 歳を過ぎて藩医となり, 82 歳で職を辞した. 文化 12 年 (1815 年) 3 月 1 日, 自宅で病没, 享年 83 歳. 著作に, 続藥徴, 医道二千年眼目篇, 方極刪定, 藥徴剛定, 類聚方刪定, 傷寒刪定, 傷寒講義, 扁鵲伝考, 和方一千方, 方極, 腹診録, 類聚方講義, 琴山劑記, 扁鵲年表, 診余漫録がある.

1. 1757 年, 熊本藩主細川重賢の命により父村井見朴(むらいけんぼく)が開いた医学校再春館で古方医学を講じ多くの門人を育てた. 再春館はその後北里柴三郎らを輩出し, 熊本大学医学部の前身となった.

第八十五 池田瑞仙(いけだ ずいせん)

1735-1816 大阪, 京都で開業した痘医



名は独美^{どくび}, 字は善卿^{あざな ぜんけい}, 錦橋と号す。先生八歳にして父を喪い, 母の為に育わる, 十二歳のとき岩国侍医桑原玄仲に従て大方及び^{あ か}啞科を受け傍ら外科を学び, 又阿蘭^{おらんだ}の方を知れり。自ら謂らく^{あまね}泛く雑科を学て衆病を療せんよりも, 寧ろ痘疹一術に留め, 家学を百世に伝うるに如かずと, 茲に於て戴氏の秘訣を修め大に發明する所あり。宝暦十二年安芸^{あまね}厳島に移る, 時に年二十八, 痘疾偶ま流行し, 家術を施し大に効あり, 十三年母死す。安永六年, 摂播二州に痘疫大に行れ, 先生を厳島より迎うるものあり, 乃ち浪華^{な に わ}に寓す, 時に年四十。浪華の大医, 齋藤幸庵, 小松久吾節を折て門に入り学ぶ, 先生其篤誠に感じて秘訣を授く。寛政四年, 京都に遊ぶ, 時に年五十五なり。寛政九年十二月幕命を蒙り, 翌年一月江戸に至る, 時に六十四, 新に痘科を建て先生を以て之に当らしめ, 禄二百俵を受く, 又痘書を医学館に講ず, 在官二十年, 文化十三年九月歿す, 年八十三。著す所に痘科辯要, 痘疹戒草, 痘科鍵刪正, 治験録あり。

名は独美^{どくび}, 字は善卿^{あざな ぜんけい}, 号は錦橋。8歳のときに父を亡くし, 母の手で育てられた。12歳のとき, 岩国藩の侍医桑原玄仲に師事し, 医学一般, 小児科, あわせて外科も学んだ。またオランダ流の医学も知った。先生は次のように考えた。広く雑多な医術を学んで諸病を治すよりも, 痘瘡ひとつに専念し, 家伝の^{たい}學術を長く後世に伝えるほうがよいと。そこで戴氏の秘法を研究し[1], 大きな發明に至った。宝暦12年(1762年), 安芸国の厳島に移った。当時28歳, たまたま痘瘡が流行した。ここで家伝の医術を施し, 非常に大きな効果を上げた。宝暦13年(1763年), 母が没した。安永6年(1777年), 摂津, 播磨の両国に天然痘が大流行した際, 厳島から招かれ, 大阪に滞在した。当時40歳。大阪の名医である齋藤幸庵や小松久吾が先生に入門を願った。先生は彼らの熱心な誠意に感じて秘伝を授けた。寛政4年(1792年), 京都に遊学した。当時55歳。寛政9年(1797年)12月, 幕府から召され, 翌年1月に江戸に赴いた。当時64歳。幕府は新たに痘科を設け, 先生をその担当として, 二百俵の禄を与えた。幕府の医学館で痘瘡の医書を講じた。在官20年の後, 文化13年(1816年)9月に死去, 享年83歳。著作に, 痘科弁要, 痘疹戒草, 痘科鍵刪正, 治験録がある。

1. 明の渡来医師戴曼公^{たいまんこう}(→第二十三)が, 岩国を訪れた際に, 吉川侯の家臣池田正直^{せいちよく すぐせん}(嵩山)に痘法を伝授し, 以来池田家は痘医を継いだ。瑞仙は正直の曾孫にあたる。

第八十六 杉田玄白(すぎた げんぱく)

1733-1817 蘭方医. 解体新書を著す



名は翼^{たすく}，字子鳳^{あざなしほう}，九幸又は鷗齋^{いさい}と号す。若州の人，江戸に生まる，年十七八歳の頃西玄哲^{にしげんでつ}に就て外科を学び，又宮瀧龍門に従て経史を学ぶ。年三十七，蘭学創始の業あり，前野蘭化と共に蘭医バブル及び通詞西吉雄^{しんしや}に親炙し益々和蘭医学を修む。明和八年三月四日一婦人の屍を千住駅外小塚原に解き，続いて同志と共にクルムスの解剖図譜を翻訳せんとし，年を経ること四年，稿を易^かゆること十回，安永三年秋八月に至りて解体新書を刊行せり。文化十四年四月十七日歿す，享年八十五。著す所に，瘍家大成，蘭学事始，形影夜話，狂医之弁，野叟独語あり。

名は翼^{たすく}，字は子鳳^{あざなしほう}，号は九幸または鷗齋^{いさい}。若狭国(現福井県の一部)の出身，江戸に生まれる。17, 8歳のころには，西玄哲^{にしげんでつ}に師事して外科を学び，また宮瀧龍門^{けいしよ}について経書，史書を学んだ。37歳のとき，蘭学の創始に携わり，前野蘭化[→第七十]とともに，オランダ人医師バブル，通詞の西吉雄に親しく接して，さらに蘭医学を修めた。明和8年(1771年)3月4日，千住小塚原で一人の女性の遺体を解剖し，その後同志とともにクルムスの解剖図譜の翻訳を企てた。4年がかりで草稿を書き直すこと十数度，安永3年(1774年)8月，ついに解体新書を刊行した。文化14年(1817年)4月17日没，享年85歳。著作に瘍科大成，蘭学事始，形影夜話，狂医之弁，野叟独語がある。

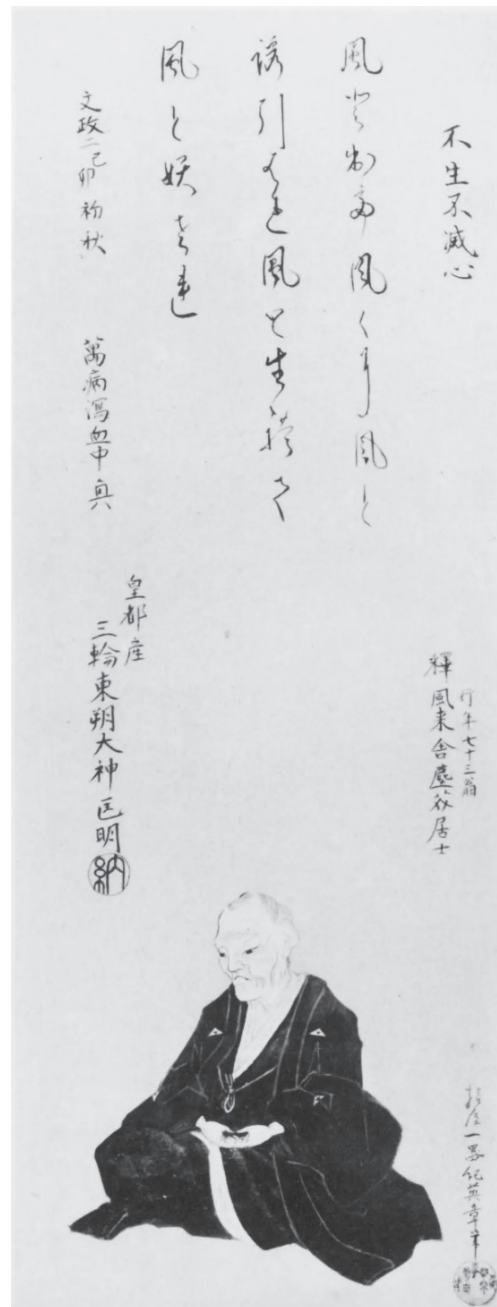
第八十七 杉田玄白(すぎた げんぱく)(木像)

1733-1817 蘭方医. 解体新書を著す



史伝前に出ず.

1747-? 刺絡医



名は東朔^{とうさく}、字は望郷^{あざな}〔校注：望卿の誤〕、浅草庵と号す。山城の人、医を志し、諸邦を遊歴す、北総銚子に足を停め、癆人を治せり。後江戸に移り門戸を張り業大に行る。嫡男^{おおみよしあき}大神能明^{しる}が文政二年に図像に書したる所によれば、大神医明^{まさあき}〔校注：匡明の誤〕は大和国三輪大明神^{もりとのつかさ}之社務高宮主水〔校注：主水司の誤〕の一族、山城国宇治郡南山科勸修寺住人にて、勸修寺宮観宝法親王に仕奉したる植田佐渡法橋の嫡男三輪弾と云う人なり。齢八十を越ゆ、著す所に刺絡聞見録あり。

名は東朔^{とうさく}、字は望郷^{あざな}、浅草庵と号した。山城国^{やましろのくに}(現京都府の一部)の出身。医術を志し、諸国を巡った。下総^{しもふさのくに}国(現千葉県の一部)の銚子に滞在し、患者の治療にあたった。その後、江戸に移って盛業した。嫡男^{おおみよしあき}の大神能明^{まさあき}が文政2年(1819年)に図像に記したところによれば、大神医明^{まさあき}は大和国三輪大明神^{もりとのつかさ}社の社務を務めた高宮主水司の一族であり、山城国宇治郡南山科の勸修寺に住み、勸修寺宮観宝法親王に仕えていた植田佐渡法橋^{ほつさきやう}の嫡男であるという。三輪弾と名乗り、80歳を超えていた[1]。著作に刺絡聞見録がある。

1. 没年不詳〔友部和弘他、三輪東朔の伝記考、全日本鍼灸学会雑誌50:167-173,2000〕

第八十九 原南陽(はら なんよう)

1753-1820 古方医, 水戸藩医



名は昌克^{しょうこく あざな}, 字は子柔, 通称玄興, 南陽と号す. 先生年壮にして京都に遊び, 山脇東門に医方を受け, 又産術を賀川氏に修む. 後ち江戸小石川^{きょうせきや}に僑居す, 業未だ行れず, 窮乏の余, 按摩針治を以て生業とす. 先生性酒を嗜むこと甚し. 時に水戸侯, 暑に中たり暴^あに病む, 侍医挙げて診療するも効なし, 侍臣某, 先生を薦^{すす}む, 先生診して侯の病愈ゆ, 遂に拔擢して侍医となし, 五百石を賜う. 先生の医経を治むるや, 章句を事とせず, 専ら適用を主とせり, 先生侍医の職に在ること三十余年, 文政三年八月十六日病で歿す, 享年六十八. 先生, 其先昌俊甲斐^{はじ しょうすい}の名称たるを以て, 其後を承け方伎に食するを耻ず, 其子昌綏^{しょうすい}禄を襲うに及び, 侯命じて改めて諸士の班に就かしめ以て其志を成す, 昌綏進んで軍師と成る. 著す所に, 医事小言, 経穴彙解, 叢桂偶記, 瘦狗傷考, 傷寒夜話, 痘瘡策, 脚氣編叢記, 薬語, 西遊雑記, 解毒奇功方, 寄々方記, 砒草あり.

名前は昌克^{しょうこく あざな}, 字は子柔, 通称は玄興, 南陽と号した. 壮年のころ京都に遊学し, 山脇東門[→第六十]に師事して医学を学び, また賀川氏[→第五十二]について産科術を修めた. のちに江戸の小石川に仮住まいしたが, まだ生計が立たず, 困窮のため按摩, 鍼を生業とした. 先生は著しく酒好きであった. その頃, 水戸藩主が暑気あたりで急病を患い, 侍医たちが総出で治療したが効なく, ある家臣が先生を推薦した. 先生が診察するとたちまち病は回復し, これをもって拔擢されて侍医となり, 五百石を賜った. 医経を学ぶにあたっては, 章句の解釈にこだわらず, もっぱら実際への応用を重視した[1]. 侍医を三十余年勤め, 文政3年(1820年)8月16日病没, 享年68歳. 先生は, 祖先の昌俊が甲斐国の名医であったことから, 自らもそのあとを継ぎ, 医術で身を立てることを厭わなかった. その子の昌綏^{しょうすい}は家禄を継ぐに当たって, 藩主は命じて正式に武士の身分としてその志を遂げさせた. 昌綏は進んで軍師となった. 著作に, 医事小言, 経穴彙解, 叢桂偶記, 瘦狗傷考, 傷寒夜話, 痘瘡策, 脚氣編叢記, 薬語, 西遊雑記, 解毒奇功方, 寄々方記, 砒草^{とりでぐさ}[2]がある.

1. 現在も使われている安中散, 乙字湯を作ったことでも知られる.
2. 砒草^{とりでぐさ}. 戦場衛生, 救急法などが扱われ, 日本初の軍陣医学書とされる.

第九十 本木蘭汀(もとき らんてい)

1767-1822 蘭仏英露語の通訳



名は正栄^{まさひで あざな}, 字は子光^{らんてい}, 蘭汀と号し, 又連芳軒の別号あり, 庄左衛門と呼ぶ, 仁太夫良永の子にして, 明和七年に生まる. 安永七年稽古通詞, 寛政五年小通詞並となり, 翌五年同助役となり, 文化二年大通詞に進み, 同五年ゾーフと共に江戸に来り, 天文台に出仕し, 十二月帰崎す. 同六年露語英語の修学を命ぜらる. 文政五年三月十五日歿す, 享年五十六.

名は正栄^{まさひで あざな}, 字は子光^{らんてい}, 号は蘭汀, また別号として連芳軒を称した. 通称は庄左衛門. 仁太夫良永[→第六十五]の子として, 明和7年(1770年)に生まれた. 安永7年(1778年), 稽古通詞(通詞見習い)となり, 寛政5年(1793年)に小通詞並に昇進, 翌年に小通詞助役となった. 文化2年(1805年), 大通詞に進み, 5年(1808年)にゾーフと共に江戸に赴き, 天文台に勤め, その年12月に長崎に帰った. 文化6年(1809年), ロシア語, 英語の修得を命じられた[1]. 文政5年(1822年)3月15日没, 享年56歳.

1. オランダ人ゾーフ(Hendrik Doeff, オランダ商館長)に仏語を学び, 日本初の仏語入門書「^{フランス}仏郎察辞範」, 対訳辞書「和仏蘭対訳語林」を, その後初の英和辞典「^{アンゲリク}諸厄利亜語林大成」を著した.

1751-1822 産科医



字は深甫^{あざな しんぽ}，元周と通称す，相州^{つくい}築井^{きよ}の人なり，世々医を以て業とす。年十二江戸に來り，多紀玉池^{た きぎよくち}，及び多紀藍溪^{た きらんけい}に学び，その子廉夫^{けんぷ}と共に文を井上金峨^{きんが}に学ぶ。年二十五居を白金街に卜し業を開く，治を請うもの頗る多く，家事頗る饒なり。天明八年火災に罹り家産蕩尽す，発憤して京都に遊び，産科を賀川氏^{かたがわ}に学び，其蘊奥^{うんおう}を窺う。東歸の後，其術を精究し以て後生を誘拔す，生徒の業を受くるもの，病者の治を請うもの共に戸外に盈つ。後庭妊婦あるに当り鶴陵を召して按腹せしめ，期に及びて達生す，乃ち白銀若干を賜わる。

鶴陵年六十に近きとき発脊^{ついで}未だ潰せざるに，相模門人某の病を聞き強行す，家人之を諫むれども聞かず，之を治して歸る。会津少將の疾むや，之を治して淡旬^{しやうじゆん}にして痊ゆ，後少將又国に在りて疾む，來治を乞う，時正に嚴冬に属し，沍寒積雪殆んど堪ゆべからず，鶴陵病已に篤きも，然も猶能く命に応ず，門人旧故皆之を

字は深甫^{あざな しんぽ}，通称を元周，相模国築井郡(現神奈川県津久井郡付近)の出身。代々医業を家業としていた。12歳のときに江戸へ出て，多紀玉池^{た きぎよくち} [元孝^{もとたか}] および多紀藍溪^{た きらんけい} [元徳^{もとりのり}] に師事し，その子廉夫^{けんぷ} [→第七十九，元簡^{もとやす}] と共に学問を井上金峨^{きんが}について学んだ。25歳のとき，白金に居を構えて開業し，診察を請う患者が数多く訪れ，繁盛して裕福になった。天明8年(1788年)の火災で家財を全て失ったが，奮起して京都へ赴き，賀川氏^{かたがわ} [→第五十二，玄悦^{げんえつ}] に産科を学び，その奥義を探究した。江戸へ帰った後は産科の技術を磨き，後進の指導にあたり，教えを請うもの，治療を請う者が多く訪れて，門前は人で溢れた。ある時，宮中に妊婦があり，召されて腹診を行い，無事に出産して銀若干を賜った。

60歳近くになったとき，まだ病が治っていなかったが，相模の門弟の一人が病に臥したと聞いて出向いた。

危まざるはなし、怡然^{いぜん}として行く。その会津にあるや、
寵^{ちやうぐう}遇^{くう}優渥^{あく}皆異数に出ず、人皆之を艶羨^{えんせん}せりと。文政五
年九月十一日病で、其家に歿す、年七十二。

著す所に、産科発蒙、徹癘新書、傷寒啓微あり。

家人は止めたが、聞き入れずに往診、治療して帰った。
また、会津少将が病気のときも治療を行い、十日余り
で治った。後に少将が国元に戻って再び病を患った際
にも、治療を求められた。真冬の厳寒と積雪でほとん
ど無理な状況で、鶴陵自身も病が重かったが、それで
も命に従って出発した。門人や旧知の者たちは皆危ぶ
んだが、彼は動じずに出かけて行った。会津に滞在し
たときは、異例の厚遇を受け、人々はみなこれを羨ん
だという。文政5年(1822年)9月11日、自宅で病没、
享年72歳。

著書に、産科発蒙、徹癘新書、傷寒啓微などがある。

第九十二 片倉鶴陵(かたくら かくりょう)(木像)

1751-1822 産科医



史伝前に出ず.

第九十三 大槻玄沢 (おおつき げんたく)

1757-1827 蘭学者，解体新書を再翻訳した



名は茂質^{しげかた}，字は子煥^{あざな}，陸奥^{しかん}の人，家世々磐井川上^{よよいわい}に居るを以て自ら磐水^{ばんすい}と号す。先生年十三，一の関藩建部清菴^{たてべせいあん}に従て医を学ぶ，後杉田玄白の門に入る，又長崎に遊び蘭学を修む。時に前野良沢の名一時に課し，玄沢亦従て業を受け，大に此学^{ひら}を闢く。著す所の蘭学楷梯^{らんがくかいてい}出るに及びて，世の蟹行文^{かいこうぶん}に志す者之を宗とせざるはなし。天明六年仙台侯聘して侍医となす，文化八年幕府命じて蘭書を翻訳せしむ，歳毎に銀二十錠を受く，九年侯又禄を加えて三百石となす。文政五年幕府又其訳述の勤労を録して俸五口を与う。文政十年三月晦日，疾を以て歿す，享年七十一。著す所に，蘭学楷梯，重訂解体新書，瘍医新書，蘭畹摘芳，六物新志，薦録，環海異聞あり。

名は茂質^{しげかた}，字は子煥^{あざな}，陸奥^{しかん}国の出身。代々磐井川のほとり〔現岩手県一関市付近〕に住んでいたことから磐水^{ばんすい}と号した。13歳のとき，一関藩の建部清菴^{たてべせいあん}〔→第五十八〕の下で医学を学んだ。そののち杉田玄白〔→第八十六〕の門に入り，さらに長崎に遊学して蘭学を修めた。その頃，前野良沢〔→第七十〕の名声^{なせう}が世に広まり，玄沢も同じく学業を受けて，学問を大いに広めた。蘭学楷梯^{らんがくかいてい}が出版されると，横文字を志す者は，皆これを手本とした。天明6年(1786年)，仙台藩に招聘されて藩医となり，文化8年(1811年)には幕府の命により蘭書の翻訳に従事した。毎年銀二十枚を支給され，9年には加増されて三百石となった。文政5年(1822)，幕府はその翻訳の功績を認め，禄五口を与えた。文政10年(1827)3月末，病没。享年71歳。著書に，蘭学階梯，重訂解体新書〔1〕，瘍医新書，蘭畹摘芳，六物新志，薦録，環海異聞がある。

1. 重訂解体新書(1826)。杉田玄白の命により解体新書を再翻訳した。

第九十四 多紀柳泚 (たき りゅうはん)

1789-1827. 考証派漢方医. 中国医書目録, 医籍考を著した.



校注: この肖像は, 実際には多紀元堅 [→第百三十七] らしい.

名は元胤^{もとつぐ}, 通称安元, 幼名は彌生之助, 又安良, 又安長^{あさな}, 字は紹翁, 柳泚は其号なり. 桂山多紀元簡^{もとやす}の第三氏にして, 多紀氏第八世となれり. 文化二年十二月二十二日初めて将軍文恭公に謁す, 八年正月父元簡^{もとやす}遽に病みて歿せしより, 三月その職を嗣^{もとやすにわか}ぎて医学督事となり, 医学会の事務を総裁し, 外班に列し, 俸三十人口を賜う. 文政五年十二月十六日法眼^{ほうげん}に叙せられ, 六年八月法親王に随従して日光に詣る, 同十年六月三日病で歿す, 年僅三十九, 平塚城官寺^{せんえい}先塋の次に葬むる, 長子元听^{もとあき}後を承く, 暁湖先生^{ぎょうこ}之れなり. 先生学問該博, 著述等身に及ぶ, 家人の生業を以て意となさず, 雨ふれば傘して机^{かか}に憑れりと云う. 著す所に, 八十一難經疏證, 体雅, 藥雅, 疾雅, 名医公案, 医籍考, 柳洗文集あり. 医籍考は朱錫鬯^{しゆせきちやう}の經義に倣い, 先ず書名を挙げ, 次ぐに卷数, 著作, 刊行の年代, 及び其存佚^{ぞんいつ}を以てし,

名は元胤^{もとつぐ}, 通称は安元, 幼名は彌生之助, また安良, 安長とも称した. 字は紹翁^{あさな しょうおう}, 号は柳泚^{りゅうはん}. 桂山の多紀元簡^{もとやす} [→第七十九] の第三子, 多紀氏の第八代である. 文化2年(1805年)12月22日, 初めて将軍文恭公 [校注: 徳川家斉] に拝謁した. 文化八年正月, 父元簡が急逝し, 同年3月にその職を継いで医学の医学督事となり, 医学館の事務全般を統括した. 外様武家として, 俸禄三十人扶持を賜った. 文政5年(1822年)12月16日^{ほうげん}, 法眼に叙せられ, 6年8月には法親王に従って日光に参詣した. 文政10年(1827年)6月3日, 39歳の若さで病没した. 墓所は平塚城下の官寺で祖先の墓の側に葬られ, 長男の元听^{もとあき}が家督を継ぎ, 後に暁湖^{ぎょうこ}と称された. 学問において非常に広く深い素養を持ち, 著作はその身の丈に及ぶほど多数にのぼった. 家業には頓着せず, 雨が降ると傘をさして机に向かっていた

次ぐに諸家の序跋^{じよばつ}及び例目録を以てして其書の由来及び書中の内容を詳細せり。全部百卷未だ梓^しに上らざるを以て世間に伝わるもの少しと雖、甚だ吾人に有益なり。

という。著書に、八十一難經疏証、体雅、藥雅、疾雅、名医公案、医籍考、柳洗文集がある。医籍考は朱錫鬯^{しゆせきちやう}の經義にならい、まず書名を挙げ、次に卷数、著者、刊行の年代、存失の別を記し、次いで諸家の序文、跋文、目録などを引いて、その書物の由来や内容を詳しく解説した [1]。全百卷に及ぶが、刊行されなかったため世間に広く伝わるものは少ない。しかしながら我々にもきわめて有益である。

1. 医籍考. 全80卷. 中国の医学書約3000冊の序文、書誌事項を整理、その内容を吟味した。当時未刊に終わったが、1935年に富士川游所蔵の写本をもとに8分冊で刊行された。

第九十五 華岡鹿城 (はなおか ろくじょう)

1779-1827 古方派. 兄青洲と同じく外科も良くした



名は文献^{あざな}，字は子徴^{ろくじょう}，鹿城と号す，青洲の弟なり．兄と共に吉益氏の門に在り，後ち大阪に居り盛名あり．華岡氏紀州大阪の二家あり，並に医を以て樹立す．

名は文献^{あざな}，字は子徴^{ろくじょう}，号は鹿城．華岡青洲 (→第百五) の弟である．兄と共に吉益東洞の門下で，その後大阪にで名を成した．華岡氏は紀州，大阪の二つの家系があり，いずれも医家を立てた．

第九十六 川越衡山(かわごえ こうざん)

1779-1827 古方医. 中西深斎の高弟

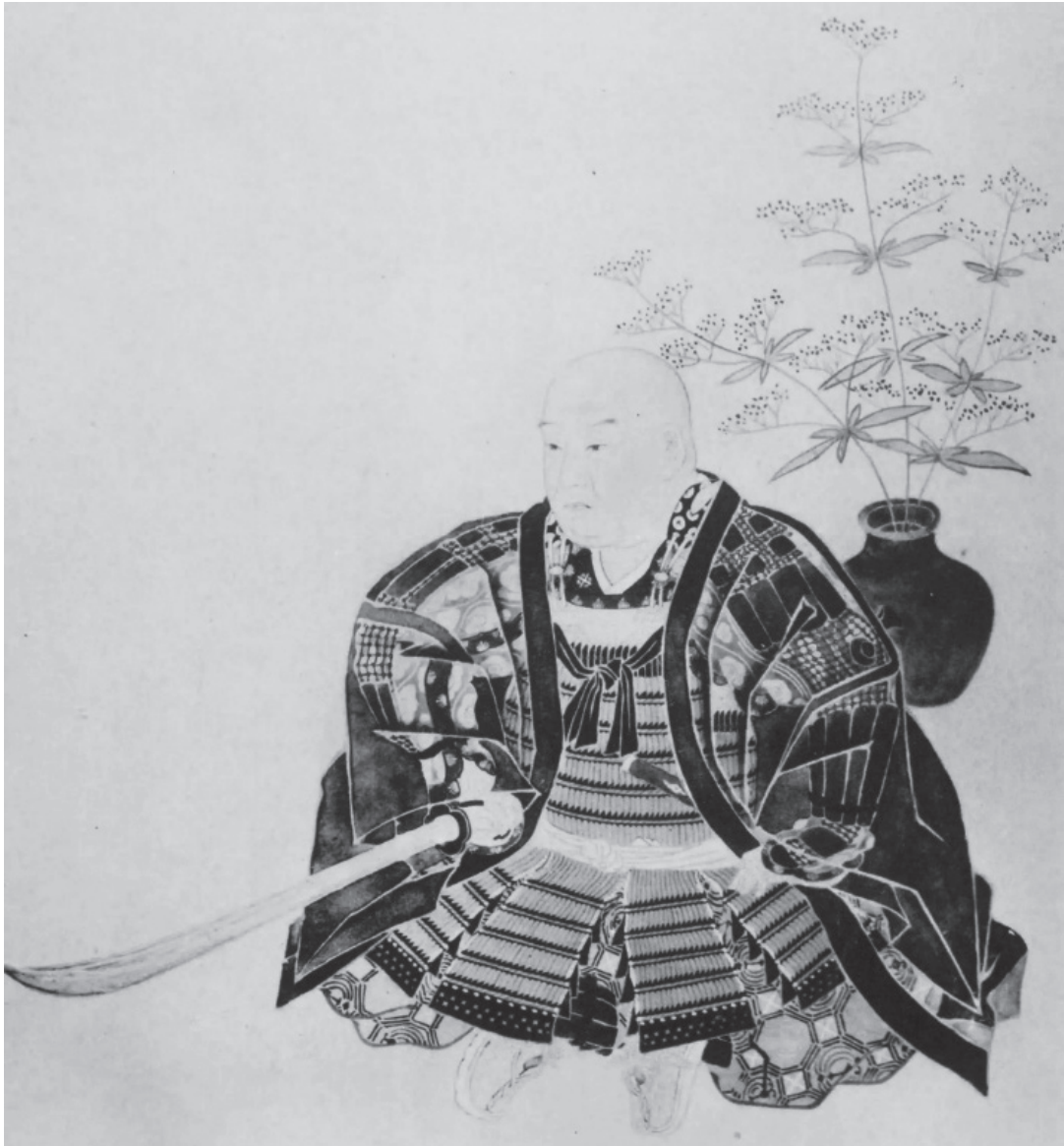


諱は正淑^{いみな まさよし}，字は君明^{あざな}，一字は大亮，衡山^{ふえん}と号す，京都の人。中西深斎の門に入り，更に師説を敷衍修飾して一新面を開きたり。文化六年十二月典薬寮医師に補せられ，文政六年正月従五位下佐渡守に至る，文政九年冬中風を患う，同十一年秋旧疾再発，同八月九日家に卒す，年七十一，鳥部山実報寺に葬る。著す所に，傷寒脈證式傷寒薬品体用，傷寒奥旨，古方拔萃，晩方拔萃傷寒論正文，金匱要略正文あり。

名は正淑^{まさよし}，字は君明^{あざな}，別名大亮，号を衡山という。京都出身。中西深斎の門下に学び，師の説を発展，修飾して，新たな境地を開いた。文化6年(1809年)12月，典薬寮医師に任じられ，文政6年(1823年)正月に従五位下佐渡守となった。文政9年(1826年)冬に中風を患い，文政11年(1828)秋に再発し，8月9日に自宅で没した。享年71歳。鳥部山実報寺に葬られた。著作に，傷寒脈證式，傷寒薬品体用，傷寒奥旨，古方拔萃，晩方拔萃，傷寒論正文，金匱要略正がある。

第九十七 伊沢信恬(いざわ のぶさだ)

1777-1829 古方医, 福山藩医



あざな たんぽ
字は澹甫, 通称辞安, 蘭軒と号す, 其他蓋齋, 都梁笑仙, 逸姑射山人の号あり. 堂を酌源堂, 又三養堂と号す, 福山の人なり. 文化の初年, 柳原主計頭やなぎはらかずえのかみの長崎奉行に随行して期年長崎に遊び, 程赤城ていせきじょう, 胡兆新こちょうしんと風交す. 医は目黒道琢めぐろどうたく, 本草は赤荻由儀あかおぎゆうぎ, 大田長元おおたちようげんに学び, 又多紀桂山に応酬す, 儒学は泉豊洲に学ぶ. 長崎より帰りて福山侯の侍医となる, 後足痛を患い, 遂に痿躄いへきをなす, 因て直医の列に加わり儒官を兼ね, 編選序跋じよばつ等の作文に至りては君侯毎に刪正を命ず. 病用の節は痿躄のまゝにて君前に出ず. 信恬短視にして且つ禪を嫌い帯びざるの癖あり, 或時君前にて莖垂けいすいを現す. 依て自ら被る所の膝掛けを賜りしことあり, 出格の扱なり. 文政十二年三月十七日歿す, 年五十三.

あざな たんぽ
字は澹甫, 通称は辞安, 蘭軒と号した. その他にも蓋齋, 都梁笑仙, 逸姑射山人などの号がある. 居宅は酌源堂または三養堂と称した. 福山の人である. 文化年間のはじめ, 柳原主計頭やなぎはらかずえのかみが長崎奉行となった際, 随行して1年間長崎に滞在し, 程赤城ていせきじょう, 胡兆新こちょうしん [清国の医師]と交流した. 医学を目黒道琢めぐろどうたく, 本草学を赤荻由儀あかおぎゆうぎ, 大田長元おおたちようげんに師事し, また多紀桂山とも交流した. 儒学を泉豊洲に学んだ. 長崎から帰り, 福山藩主の侍医となったが, その後足の痛みに悩まされ, ついには足が萎えて歩けなくなった. そこで侍医の列に加わりながら儒官も兼ね, 主君から序文ばつ, 跋文の作成などに当たって添削を命じられた. 病が重いときには, 足の不自由なまま藩主の前に出仕した. 性格は短気なところがあり, しかも禪ふんじを嫌ってつけない癖があったため, ある時に藩主の御前で陰茎が見えてしまったため, 藩主は自らの膝掛けを彼に賜った. 破格の待遇であった. 文政12年(1829年)3月17日没, 享年53歳.

1755-1819 整骨医. 骨格模型を製作した



あざな
字は子徴，通称相二，大阪の人。先生嘗て概して曰く古に未だ有らずして，今亦未だ行れざるものは整骨科なりと，思を該術に覃し，研鑽数年，大に得る所あり，斯科の泰斗を以て称せらる。先生以為らく，骨節の理を發明するに在らずんば，此術の秘訣を得べかうずと，乃ち自から刑屍に就て，剖きて視ること数十回，以て其運動機能の理を推究し，更に或は器械を製して治方に便し，或は繃帯を裁して揺動を護る，何れも皆創意に出て，古来治し難しとせしもの治せずと云うことなきに至れり。文政十二年十月十四日病んで歿す，年六十五。

先生整骨の術を授くるには真骨に就て深く按撫するに非らざれば則ち得て知るべからざるものあり，然れども真骨を求むることの難きを以て，良匠に命じ木を以て全骨を造らしめ，之を坐側に置きて諸生を教授せり。幕府医官石坂竿齋，之を見て工妙真に逼まれりと歆称し，骨経と題する一書を著せり。先生整骨新書を著し，文化七年五月に成り，其年十二月刊行す，發明の論説治術皆此中に在り。別に各骨真形図一卷を付す凡そ三十三図，皆骨骸の真景を写せり。婦人内景図一卷あり。

あざな
字は子徴，通称は 相二，大阪出身。先生はかつて，古来未だ存在せず今なお十分に行われていないものは整骨術であると言われた。そこで心をこの術に注ぎ，数年間研究を重ね，ついに大きな成果をあげ，整骨科の大家とされるようになった。先生の考えるに骨や関節の仕組みを明らかにしなければ，この術の奥義を知ることにはできないと，自ら刑死者を解剖すること数十回に及んだ。そして運動機能の理を研究し，さらに治療器械を考案し，あるいは新しい包帯を工夫して固定するなど，いずれも創意に満ちたものであった。その結果，古来治療困難とされてきた病や外傷でも，治せないことはなくなった。文政12年(1829年)10月14日病没，享年65歳。

整骨の技術を伝えるにあたっては，本物の骨に触れて，動きを確かめないと理解できない部分があると考えたが，本物の入手は難しいため，名工に命じて木製の全身骨格模型を作らせ，常にそばに置いて門弟を指導した[身幹儀(星野木骨)]。幕府の医官石坂竿齋はこれを見て細工が精妙で真に迫ると感嘆し，骨経という書を著した。先生自身も整骨新書を著し，文化7年(1810年)5月に完成，12月に刊行された。その中には整骨術の發明に関する理論や治療法が記されている。付録として各骨真形図一卷があり，33枚の骨の精密な図があった。また別に婦人内景図一卷も付されている。

1765-1832 古方医



名は維禎^{これさだ}、字は世吉^{あざな よよし}、橘洲と号す。本姓は上林、宇治の人、年十三自ら奮て曰く男子名を成さんと欲せば、何ぞ僻郷^{へききょう}に蟄居^{ちつきよ}すべけんやと、江戸に出でて儒学を修むること数年已にして以為らく、栖々覇旅^{せいせい} [校注：羈旅^{きりよ}の誤] 久しく温情を奉ぜず、京都は父母の居に近し、是れ吾が身を投ずるの地なりと、遂に意を決して京都に帰住す。時に京都、人文濟々互に雄視す、柳泰猶少壮にして其間^{ちく}に馳驅^{すいちよう}し、諸子の推重する所となれり。時に医学院畑黄山^{はたこうざん}医学精妙を以て尚藥奉御となる、子なし柳泰の人となりを愛し養て嗣とす、時に年二十一、享和三年八月十日法橋^{ほつきよう}に敍し、文政十年十月二十九日法眼^{ほうげん}に進む、天保三年三月十日歿す、年六十二。著す所に、素問樞識、傷寒論詮註、心医方考、方鯁あり。

その名は維禎^{これさだ}、字は世吉^{あざな よよし}、号は橘洲という。もとは上林で、宇治の出身である。13歳にして自ら、男子が名を成そうと思うならどうして片田舎に閉じこもってられようかと奮起し、江戸に出て儒学を学んだが、数年後、江戸に長く滞在し、旅先では落ち着かず、人の情にも長くふれていない、両親の居所にも近い京都こそ我が身を投じて立身するべき地であると考え、決心して京都に帰った。当時京都には文人や学者が多く競い合っており、柳泰はまだ若かったが、その中で活躍し周囲から尊重された。当時、医学院の畑黄山^{はたこうざん} [→第七十四] は医学の精妙をもって朝廷に仕え、尚藥奉御の地位にあった。黄山には子がなく、柳泰の人柄を好んで養子とした。21歳であった。享和3年(1803年)8月10日、法橋^{ほつきよう}に、文政10年(1827年)10月29日に法眼^{ほうげん}に昇進した。天保3年(1832年)3月10日没、享年62歳。著作には、素問樞識、傷寒論詮註、心医方考、方鯁がある。

1744-1833 古方医.



名は^{まこと}孚, 通称^{あざな}右内, 字は以隣, 琴溪又は生々堂と号す. 近江の人, 出でて大津医家中神家を嗣ぐ, 居常貧困なり, 年三十余にして発憤, 医を以て名を立てんとす, 偶々^{たまたま}古方便覧^えを獲, 大意を得. 後ち京都に移住す, 時に寛政三年, 先生年四十九, 堺町通四條南入に卜居し, 門戸を張り, 古方家^{じょうほうか}の説を奉ずるも繩墨^{じようぼく}を守らざりき. 後江戸に遊び, 又諸国を遊歴し, 遂に近江の田上に隱る. 更に故里山田に帰り, 天保四年八月四日病んで歿す, 年九十一. 著す所に, 生々堂医談, 生々堂傷寒約言, 生々堂養生論, 生々堂治驗, 生々堂襍記あり.

名は^{まこと}孚, 通称^{あざな}は右内, 字は, 琴溪あるいは生々堂と号した. 近江(現滋賀県の一部)の出身で, 大津の医家中神家を継いだ. 日常生活は貧しかったが, 30歳を過ぎて発奮し, 医業で名を成そうと志した. ちょうどそのころ古方便覧[吉益東洞著]を手に入れ, 独学で概略を会得した. その後, 寛政3年(1791年), 49歳にして京都へ移り, 堺町通四條南入に居を構えて開業した. 古方派の学説を尊重したが, その枠に縛られることはなかった. 後に江戸に出向き, さらに諸国を遊歴したのち, 近江の田上に隱棲した. さらに故郷の山田に帰り, 天保4年(1833年)8月4日に病没, 享年91歳. 著作に, 生々堂医談, 生々堂傷寒約言, 生々堂養生論, 生々堂治驗, 生々堂雜記などがある[いずれも門人による記録].

第百一 賀川蘭齋(かがわ らんさい)

1771-1833 産科医。産科鉗子を発明した



名は満定^{みつさだ}、字は子清^{あぎな}、蘭齋と号す、有齋の次男なり。安永元年十一月生まる、父の術を伝えて其名大に彰わる。文化十二年十一月典薬寮医員^{ぬきん}に擢でられ正七位下に叙し、武蔵大掾^{むさしのだいじょう}に任せらる、翌年二月女医博士に補せられ摂津介に遷任し、従六位下に叙せられ、後累進して正六位下に至る。蓋し女医博士^{にょいほかせ}の官^か関ること久し、是に至りて之を復せるなり。天保四年十月十九日病で歿す、享年六十三。探領器^{たんがんき}〔校注:探領器の誤〕を発明す。

名は満定^{みつさだ}、字は子清^{あぎな}、蘭齋と号した。有齋^{ゆうさい}〔→第六十四〕の次男。安永元年(1772年)11月生れ、父の医術を継いでその名声は大いに広まった。文化12年(1815年)11月、典薬寮の医員に抜擢されて正七位下に叙せられ、武蔵国の大掾^{だいじょう}に任じられた。翌年2月、女医博士^{にょいほかせ}の職につき、摂津介に転任し、従六位下に叙せられ、その後正六位下に昇進した。女医博士の地位は久しく欠員であったが、これで復活した。天保4年(1833年)10月19日、病没、享年63歳。探領器^{たんがんき}〔胎児の顎にかける産科鉗子〕を発明した。

第百二 宇田川榛齋(うだがわ しんさい)

1770-1835 蘭方医. 稲村三伯と和蘭辞書を編纂



旧姓安岡, 名は璘^{りん}, 字は玄真^{あざな げんしん}, 榛齋は其号なり。伊勢の人, 明和六年十二月廿八日生る, 後ち江戸に出て津山藩医宇田川玄随^{げんすい}の門に入り, 後ち大槻玄沢^{おおつきげんたく}に就て蘭医方を学ぶ, 又嘗て嶺春泰^{みねしゆんたい}の家に寓し, 次で桂川甫周^{かつらがわほしゅう}の家に移る, 杉田玄白先生を養うて子となし, 女を以て之に配す, 後故ありて去る。之れより, 困阨^{こんやく}

旧姓は安岡, 名は璘^{りん}, 字は玄真^{げんしん}, 榛齋と号した。伊勢の出身, 明和6年(1769年)12月28日生れ。後に江戸へ出て, 津山藩医の宇田川玄随^{げんすい}〔→第六十七〕に入門し, さらに大槻玄沢^{おおつきげんたく}〔→第九十三〕に師事して蘭学を学んだ。また一時は嶺春泰^{みねしゆんたい}の家に寄寓し, その後桂川甫周^{かつらがわほしゅう}の家に移った。杉田玄白^{すぎたげんぱく}〔→第八十六〕の養子

太甚なり、玄白の子伯元、稲村三伯等憐て之を庇し傭
うて蘭書を訳せしむ。寛政九年宇田川玄随歿して嗣な
し、乃ち親故集り議して先生をして其後を承けしめ、
宇田川氏を冒す。先生の門に來り学ぶもの常に数百人、
名をなせるもの甚だ多し、坪井信道、藤井方亭、箕作
阮甫、青木周弼、戸塚静海等世に鳴れり。

稲村三伯、嘗て蘭学辞書の後進に便すべきものなきを
憂い、はるまの辞書を訳せんとなす、先生乃ち岡田甫説
と力を戮せて三伯を助け、拮据数年にして書成る、世
に所謂江戸はるま之れなり。天保五年十二月四日病で
歿す、享年六十六。弘道院普濟潤生と諡す。著す所に、
遠西医範、医範提綱、和蘭藥鏡、遠西名物考あり。

となり、その娘と結婚したが、後に事情があつて離縁
した。その後は生活が大変困窮したが、杉田玄白の子
伯元や、稲村三伯〔→第八十、海上随鷗〕らがこれを
憐れんで庇護し、蘭書の翻訳をさせた。寛政9年(1797
年)、師宇田川玄随が亡くなり跡継ぎがなかったため、
親族門人が相談して彼にその家を継がせ、宇田川姓を
名乗った。その門下には常に数百人が学び、名を挙げ
た弟子も多かった。坪井信道[1]、藤井方亭、箕作阮甫
〔→第百四十六〕、青木周弼、戸塚静海などは特に名高い。

稲村三伯は、後進が学ぶ助けとなる蘭学辞書が日本に
はないと憂慮し、ハルマのオランダ語辞書の翻訳を企
てた。榛斎は岡田甫説とともに三伯を助け、労苦数年
にしてこれを完成させた。これが世にいう江戸ハルマ
辞書である。天保5年(1834年)12月4日、病没、享
年66歳。おくり名は弘道院普濟潤生。著作に、遠西医範、
医範提綱、和蘭藥鏡、遠西名物考がある。

1. 坪井信道(1795-1848)。美濃出身の蘭方医。江戸で開業。門下から
杉田梅里(→第百四十)、緒方洪庵(→第百四十四)、桑田立齋(→第
百五十二)、広瀬元恭(→第百五十五)、川本幸民(→第百五十七)ら
が出た。

第百三 山脇東海(やまわき とうかい)

1757-1834 古方医. 山脇家五代目.



名は之豹^{しひょう あざな}，字は子弁，東海と号す，後ち玄沖〔校注：元沖の誤〕と改む，山脇第五世道作なり．宝暦七年九月二十二日に生まる，寛政三年三月十一日法眼に敘せらる．数度解剖を行えり．天保五年四月一日夜俄に卒中し，同三日卒す享年七十八歳．

名は之豹^{しひょう あざな}，字は子弁，号を東海という，後に元沖と改めた．山脇道作〔→第二十五〕の第五代にあたる．宝暦7年(1757年)9月22日生れ，寛政3年(1791年)3月11日に法眼^{ほうげん}の位を授けられた．数度にわたって解剖を行った．天保5年(1834年)4月1日の夜，急に中風に襲われ，3日に没．享年78歳．

第百四 奥劣齋(おく れっさい)

1780-1835 産科医. 初めてカテーテルを使用した



名は之基^{これもと}, 字は子讓^{あざな}, 劣齋と号す. 医を山脇東門に学び産術を賀川子玄^{かがわしげん}に受け, 遂に家を興す. 先生世の横産^{おさ}を理むるものの釣^つを用い生を傷つくるを痛む, 深慮^{しんりょ}詳思^{しやうし}, 別に一法を創作し, 名けて雙全術^{そうぜんじゆつ}と云い, 母子の横夭^{おうよう}を救えり. 文政甲申法橋^{ほつきやう}に叙す, 己丑の歳, 准三后^{じゆさんごう}, 産後尿閉, 先生「カテーテル」を用いて効を奏し法眼に進む. 安永九年五月二十八日を以て生まれ, 天保六年九月四日疾を以て歿す. 著す所に, 産論校註, 女科随劉, 達生園産科外科秘録, 産科内術, 産科図記, 回生鉤胞秘訣あり. 又校する所に婦人大全良方, 保産心法あり.

名は之基^{これもと}, 字は子讓^{あざな}, 劣齋と号した. 医術を山脇東門[→第六十]に学び, 産科を賀川子玄^{かがわしげん}[→第五十二]に師事し, ついに一家を成した. 当時一般に行われていた横産を取扱う上で, 鉤を用いて児をひき出すことで傷をつくることを痛み, 熟慮の末に別の方法を考案した. これを雙全術[用手回転術]と名付け, 母子の命を救った. 文政甲申の年(1824年), 法橋^{ほつきやう}に叙せられた. さらに己丑の年(1829年), 准三后^{じゆさんごう}[三後に殉ずる処遇を認められた貴婦人]が産後に尿閉を患った際は, カテーテルを用いて治療し, その功績により法眼に昇進した. 安永9年(1780年)5月28日生れ, 天保6年(1835年)9月4日病没. 享年56歳. 著書に, 産論校註, 女科随劉, 達生園産科外科秘録, 産科内術, 産科図記, 回生鉤胞秘訣がある. また校訂したものに婦人大全良方, 保産心法がある.

第百五 華岡青洲 (はなおか せいしゅう)

1760-1835 外科医. 世界初の全身麻酔に成功



名は震^{ふるう}、字は伯行^{あざな}、通称随賢、青洲と号す。紀州加賀郡西野山村の人、出でて京都に遊び、吉益南涯^{よしますなんがい}に従い、又大和見水^{やまとけんすい}に就きて外治を修め、其他諸家の説を参酌して常師なし、刻苦碎礪すること数年、去て紀伊に帰り、内外合一^{ないがいごういつ}、活物窮理^{かつぶつきゅうり}の説を唱え、古今漢医を折衷して活用し、外治術に大手腕を揮う、医生来り教を請うもの千百三十余人なり。文政二年、紀州侯に辟されて其医員となり後侍医に準じ、其邑に居ることを許さる、蓋し破例の特典なり。天保六年十月二日病で家に歿す年七十六。青洲大手術を施すの前に一種の麻酔剤を発明し、麻沸湯^{まつふとう}と称せり。リストンがエーテル^{エーテル}麻酔を用しに比せば三十六年前のことなり。著す所に、瘍科瑣言、瘍科神書、疔瘡弁明、乳癌弁、天刑秘録傷傷講義、青洲医談、瘍科方笈、膏方便覧、丸散方、青囊秘録等あり。

名は震^{ふるう}、字は伯行^{あざな}、通称は随賢、青洲と号した。紀州加賀郡西野山村 (現和歌山県紀の川市付近) の出身。若くして京都に出て遊学し、吉益南涯^{よしますなんがい} [→第八十三] に師事し、大和見水^{やまとけんすい} に学んで外科を修めた。また諸家の説を広く取り入れ、特定の師に固執せず、苦心研鑽すること数年に及んだ。その後、紀伊に帰り、内外合一^{ないがいごういつ}、活物窮理^{かつぶつきゅうり}の説を唱え、漢方古今の学説を折衷して活用しつつ、特に外科治療において大きな手腕を発揮した。門下を訪れ教えを受けた医師は千百三十余人にのぼる。文政2年 (1819年)、紀州藩主に召されて藩医となり、のちには侍医に準じる待遇を受けながら、郷里の村に居住する特例を許された。まさに破格の待遇であった。天保6年 (1835年) 10月2日、自宅で病没。享年76歳。青洲は大手術を行うにあたり、術前に使う一種の麻酔薬を発明し、麻沸湯^{まつふとう}と称した。これは、リストン [1] がエーテル麻酔を行った36年前のことである。著作には、瘍科瑣言、瘍科神書、疔瘡弁明、乳癌弁、天刑秘録、瘍傷講義、青洲医談、瘍科方笈、膏方便覧、丸散方、青囊秘録などがある。

1. スコットランドの外科医 Robert Liston. 1846年にロンドン大学病院でヨーロッパ初のエーテル全身麻酔下手術を行った。

第百六 華岡青洲(はなおか せいしゅう)(還暦賀像)

1760-1835 外科医. 世界初の全身麻酔に成功



史伝前に出ず.

第百七 橋本宗吉 (はしもと そうきち)

1763-1836 蘭方医, 蘭学者, 天文学, 静電気も研究した



宗吉は初名, 直政後に鄭と改む, 字は伯敏, 伯軒と号す。大阪の人, 北堀江に住む, 小石元俊, 間五郎兵衛の援助により家資学資共に弁ぜられ, 東遊して大槻磐水の門に学ぶ, 実に寛政二年にして, 宗吉時に年二十八なり, 斯年ならずして学大に進みて大阪に還る。同七年宗吉始めて医業を車坂に開き, 且つ蘭語を教授す, 大阪にて蘭学を教授せしは宗吉を以て嚆矢とす。明年囑蘭新訳地球全図を刊行す, 享和二年ウヲムデルハンリース薬剤書を訳して蘭科内外三法方典を著し, 文化の初遂に全部六巻を上梓せり。文政十二年豊田貢の巫女が妖術を行う, 人呼んで切支丹婆と云う, 大坂町与力大塩平八郎捕えて死刑に処す, 宗吉も与党なりとの嫌疑を受け獄に下さる, 後免れて旧業を執る, 天保七年五月一日歿す, 年七十四。著す所に, 西洋医事集成宝函二十四巻, 華蛮通志二巻, 遠西雜俎三巻, 西洋産育全書十巻, 解体書七巻, ショメール奇才四巻, 内景洞視二巻あり。

宗吉はもとの名, 後に直政, 鄭と改めた。字は伯敏, 号は伯軒。大阪, 北堀江に住んだ。小石元俊 [→第七十六] や間五郎兵衛 [天文学者] から生活費と学資の支援を得て江戸に遊学し, 大槻磐水 [→第九十三] の門に学んだ。寛政2年 (1790年), 28歳であった。年を経ずして大いに学識を深めて大阪に帰った。寛政7年 (1795年), 車坂で開業し, 同時に蘭語も教えた。大阪で蘭学を初めて教えたのは宗吉である。翌年, 囑蘭新訳地球全図を刊行した [1]。享和2年 (1802年) にウヲムデルハンリース薬剤書を翻訳し, 蘭科内外三法方典を著した。その後, 文化年間 (1804-18) 初めに全6巻の刊行を終えた。文政12年 (1829年), 豊田貢に仕える巫女が妖術を行い, 人々はこれを切支丹婆と呼んだ。大坂町奉行配下の与力大塩平八郎が彼女を捕らえて死刑にした。このとき宗吉も一味の嫌疑を受けて投獄されたが, のちに許されて以前の業に復した。天保7年 (1836年) 5月1日没, 享年74歳。著作に西洋医事集成宝函24巻, 華蛮通志2巻, 遠西雜俎3巻, 西洋産育全書10巻, 解体書7巻, ショメール奇才4巻, 内景洞視2巻がある。

1. 医学のみならず天文学, 静電気の研究でも知られる。静電気発生装置エレキテルの原理をはじめて理論的に研究し, ライデン瓶など数々の実験を行い, 日本の電気学の祖ともされる。

第百八 竹中南峰(たけなか なんぼう)

1766-1836 池田瑞仙に学んだ痘医



^{いみな}諱は温, ^{あざな}字は子良, 通称文卿, 後文輔と改む, 南峰は其号なり。紀州田辺の人, 明和三年十二月十二日に生まる, 弱冠にして京都に出で和田東郭の門に入り術を修む, 又治痘の術を池田錦橋に受く。天保七年七月八日歿す, 年七十一。其墓は京都烏邊山延年寺にあり。

^{いみな}諱は温, ^{あざな}字は子良, 通称文卿, 後文輔と改めた, 南峰は号。紀州田辺(現和歌山県田辺市付近)出身, 明和3年12月12日生。20歳にして京都に出で和田東郭[→第七十一]の門に入り術を修めた。痘瘡の治療術を池田錦橋[→第八十五]に受けた。天保7年7月8日没, 享年71歳。墓は京都烏邊山延年寺にある。

1754-1836 農民出身, 蝦夷地の探検家



名は常短^{つねのり あざな}, 字は子員^{ぞうざん}, 甕山又は白虹斎と号し, 徳内^{はっこうさい とくない}と通称す。出羽最上の人, 宝暦四年に生まる, 家業農を営む, 年十四, 武士を以て立身せんと志せり, 年二十六江戸に出て幕府医官山田立良の僕となり, 傍ら医業を学び, 本田利明の塾に入り天文暦算を学ぶ。天明四年利明に代り蝦夷視察使の一行に随う, 先生夙に蝦夷開拓の志ありき, 具さに蝦夷の地理風俗^{しもべ}を究め自ら各地を踏調せり。天保七年九月五日歿す享年八十三。本郷駒込蓬来町蓮光寺に葬る。著す所に, 度量衡説, 論語彝訓, 蝦夷草紙, 同後編, 蝦夷島言葉, 孝経古今文異同考, 赤人問答, 八線真数表, 八線対数表, 調剤秘書, 松前史略大測表解あり。

名は常短^{つねのり あざな}, 字は子員^{ぞうざん}, 号は甕山または白虹斎, 徳内^{はっこうさい とくない}は通称である。出羽国最上(現秋田県, 山形県の一部)の出身, 宝暦4年(1754年)生れ。家業は農家であったが, 14歳にして武士として立身を志した[1]。26歳, 江戸に出て幕府医官山田立良の従僕となり, そのかたわら医学を学んだ。また本田利明の塾に入り, 天文や暦算を学んだ。天明4年(1784年), 利明の代理で, 蝦夷地視察の一行に随行した。以前から蝦夷地開拓の志を強く抱き, 蝦夷の地理や風俗を詳しく調べ, 自ら各地を踏査した。天保7年(1836年)9月5日没, 享年83歳。墓は本郷駒込蓬来町の蓮光寺にある。著作に, 度量衡説, 論語彝訓, 蝦夷草紙, 蝦夷草紙後編, 蝦夷島言葉, 孝経古今文異同考, 赤人問答, 八線真数表, 八線対数表, 調剤秘書, 松前史略大測表解がある。

1. 農民の出でありながら, 奉公人として医学, 天文学などを学び, 下人として蝦夷地調査に随行した。蝦夷の専門家として名をなし, 身分制度が厳しい当時において異例の立身出世を遂げ, 幕臣にとりあげられた。シーボルトが最も信頼を寄せた日本人とされる。

1747-1838 晩学の蘭方医



名は春琢^{しゅんたく}、字は元恭^{あざな}、通称春齡^{しゅんれい}、蘭齋^{らんさい}と号す。本姓鷺見^{すみ}、美濃大垣の人、幼にして大垣医官江馬元澄^{えま もとずみ}に養わる、由て江馬氏^{えま}を冒す。前野^{まの}、杉田^{すぎた}の江戸に和蘭医学を唱うるを聞き、憤然として蹶起^{けつき}し、江戸に赴き蘭化の門に入る時に年四十七、居ること年余、帰郷して業を開く。謗訛相告^{ごうし}げて曰く乱暴医術を以て疾病を医すと、蓋し乱暴蘭方^{らんぱう}と国音相近し、故に之に託して彼を罵れり。一人の治を乞うものなし、偶々京都西本願寺法主^{くわんじ}疾篤^{しやくとく}し、先生を召す、先生診して尚治すべしと、即ち薬を進めて治験あり、先生の名大に天下に顕る。天保九年病で歿する時に年九十二。著す所に、五液診法、泰西熱病集訳、水腫全書あり。先生嘗て蒸氣浴を造り、微毒病者を療せり、遺法今尚遺り、大垣に行うものあり。

名は春琢^{しゅんたく}、字は元恭^{あざな}、通称は春齡^{しゅんれい}、蘭齋^{らんさい}と号した。もとの姓は鷺見^{すみ}で、美濃国大垣(現岐阜県大垣市付近)の出身。幼少の頃に大垣藩医江馬元澄^{えま もとずみ}に養われ、江馬氏を名乗った。江戸で前野良沢、杉田玄白らがオランダ医学を広め始めたことを聞いて触発され、47歳にして江戸に上り蘭学を学んだ。江戸に1年余り滞在し、故郷へ帰って開業した。人々は、乱暴な医術で病を治すと言いつて非難した。蘭方と乱暴の読み方が似ていることにかこつけて罵ったりした。誰一人として彼に治療を依頼する者がなかった。たまたま京都西本願寺の法主が重病にかかり、先生を呼び寄せた。先生は診察して、まだ治すことができると言い、薬を与えたところ効果があり、これにより名声が大きく広まった。天保9九年(1838年)病没、享年92歳。著作に五液診法、泰西熱病集訳、水腫全書がある。先生はかつて蒸気浴を考案して梅毒患者を治療した。この方法は今になお伝わり、大垣で行われている。

1774-1839 折衷派医師



諱^{いみな}は俊徳^{あざな}，字は克明，通称内蔵太，確齋と号す。京都の人，安永三年京都に生まる，少して医学を父より受け，傍ら皆川淇園^{きえん}の門に遊ぶ。年二十九，父の命に従い，別に一家をなして刀圭の業を修む，業大に行わる。天保十年四月十三日病で歿す，享年六十六。洛西祐正教寺に葬る。著す所に，医粹類纂，本草綱目類抄，奇効方，未病薬編，医粹約範，校定温疫論，瘟疫論翼訣，漢陰臆乗，田間方叢，医案学歩，確齋暇筆，医粹方函，漢陰存稿あり。

諱^{いみな}は俊徳^{あざな}，字は克明，通称内蔵太，確齋と号した。京都出身，安永3年(1774年)京都に生まれ，若くして父から医学を教わる傍ら，皆川淇園^{きえん}に入門した。29歳のとき，父の命に従って独立し，たいへん盛業した。天保10年(1839年)4月13日病没，享年66歳。洛西祐正教寺に葬られた。著書に，医粹類纂，本草綱目類抄，奇効方，未病薬編，医粹約範，校定温疫論，瘟疫論翼訣，漢陰臆乗，田間方叢，医案学歩，確齋暇筆，医粹方函，漢陰存稿がある。

第百十二 山脇東圃(やまわき とうほ)

1781-1842 山脇玄心六代目



あざな
字は子達，名は玄致，家督後道作と改む。天明元年に
生まる，天保十三年歿す享年六十二。

あざな
字は子達，名は玄致，家督を次いでから道作と改めた
[1]。天明元年(1781年)に生れ，天保13年(1842年)
没。享年62歳。

1. 山脇玄心(→第二十五)を初代とし，第5代東海(→第百三)の子。

第百十三 岩崎灌園(いわさき かんえん)

1786-1842 本草学者，本草図譜を著す



名は常正，一に万，字は土方，通称源蔵，灌園と号す，一に玄堂と別号す。江戸の人，天明六年六月二十六日下谷三枚橋に生まる，小野蘭山の門に入り最も植物に通じ，自ら後園を拓きて多くの草木を栽培澆灌し，積年工夫練熟し其発明する所多し。天明十三年一月二十九日歿す，享年五十七。著す所に，本草図譜，本草穿要，救荒図譜，綱救外論本草綱目通解，救荒野譜通解，梅花写生，草木育種あり。

名は常正，または万ともいい，字は土方，通称は源蔵，号は灌園あるいは玄堂と称した。江戸出身，天明6年(1786年)6月26日に下谷三枚橋(現台東区上野の一部)に生まれた。小野蘭山[→第七十七]の門に学び，植物に深く通じた。自ら栽培園を開いて多くの草木を植えて丹念に育て，長年工夫と修練を重ねて多くの発明を成した。天保13年(1842年)1月29日没，享年57歳。著作に，本草図譜[1]，本草穿要，救荒図譜，綱救外論，本草綱目通解，救荒野譜通解，梅花写生，草木育種がある。

1. 本草図譜。全92冊，2000種の植物の図譜を，李時珍の本草綱目に沿って配列，解説した。

1782-1843 京都の蘭方医



名は初め吉啓^{よしひろ}、義啓^{よしひろ}、後ち任と改む、桃塲^{とうじょう}、又鷗齋^{りょうさい}と号す。美濃外淵^{みのそへつ}の人、天明二年四月三日生まる、本姓大橋氏、伏見に開業する小森吉晴^{つと}に乞われて寛政三年九月其養子となる。夙に医学及び内外学に通じ、蘭学に熟す。寛政十一年江馬春齡^{うみがみずいおう}に接見し西洋医学の精微を知り、海上随鷗^{うみがみずいおう}に従い蘭方を学び、後ち長崎に遊学して益々獲る所あり。文化十一年京都に還り、藤林晋山^{ふじばやしふざん}と交り相共に協心戮力して斯道を起さんと約せり。文政三天年二月召されて侍医となり、従六位下肥後介^{ひごのすけ}（ひごのすけ）に任官し、同十一年維殿助^{いでのすけ}（いでのすけ）に進み、続て正六位下に叙せらる。保十四年三月二十三日病歿す、享年六十二。喪発せず、五月十二日従五位下信濃守に叙せらる。京都禅林寺に葬る。著す所に、蘭方枢機、病因精義、泰西方鑑、病診要訣あり。

名は吉啓、また義啓、後に任と改めた。号は桃塲^{とうじょう}または鷗齋^{りょうさい}。美濃外淵^{みのそへつ}（現岐阜県大垣市付近）出身。天明2年（1782年）4月3日生れ。本姓は大橋であったが、伏見で開業していた小森吉晴^{つと}に請われて寛政3年（1791年）9月に養子となった。若くして医学および内外の学に通じ、蘭学に精通した。寛政11年（1799年）、江馬春齡^{うみがみずいおう}〔→第百十〕に出会い西洋医学の精微を知り、ついで海上随鷗^{うみがみずいおう}〔→第八十〕に師事して蘭方を学んだ。その後、長崎に遊学^{ふじばやしふざん}し多くを学んだ。文化11年（1814年）、京都に戻り、藤林晋山^{ふじばやしふざん}と交わり、協力して医学の道に励む誓いを交わした。文政3年（1820年）2月に召されて侍医となり、従六位下肥後介^{ひごのすけ}に任ぜられた〔1〕。同11年（1828年）に維殿助^{いでのすけ}に昇進、続いて正六位下に叙された。天保14年（1843年）3月23日病没、享年62歳。公の葬儀は行われなかった、同年5月12日従五位下信濃守を追贈された。京都の禅林寺に葬られた。著作に、蘭方枢機、病因精義、泰西方鑑、病診要訣がある。

1. 京都の開業医となったが、名が聞こえて宮中にも取り立てられた。

第百十五 平田篤胤(ひらた あつたね)

1776-1843 国学者, 和方医



通称大角^{だいかく}又大壑^{だいかく}と云う, 気吹廼舎^{いぶきのや}と号す。安永五年八月羽後久保田に生まる, 本姓大和田氏, 幼にして経書を中山菁峩^{せいがい}に学ぶ, 又医を叔父大和田祚胤^{よしたね}に修む。年二十始めて江戸に出でて学事に親しむ, 偶々備中松山藩士平田篤穩^{あつやす}に知られ, 請われて其嗣となる。文化元年惟^{おもい}を垂れ, 徒弟^{おし}を訓え, 天保元年佐竹侯に仕う。天保十四年九月十一日病歿す, 享年六十八。

通称は大角^{だいかく}または大壑^{だいかく}, 気吹廼舎^{いぶきのや}と号した。安永5年(1776年)8月に羽後国久保田(現秋田県秋田市付近)に生まれる。もとの姓は大和田で, 幼いころに経書を中山菁峩^{せいがい}に学び, また医学を叔父の大和田祚胤^{よしたね}について修めた。20歳にして初めて江戸に出て学問に励んだが[1], たまたま備中松山藩士の平田篤穩^{あつやす}に認められ, 望まれてその養嗣子となった。文化元年(1804年)に弟子を教え, 天保元年(1830年)佐竹侯に仕えた。天保14年(1843年)9月11日, 病没, 享年68歳。

1. 20歳にして出奔, 江戸で苦学しながら蘭学, 天文学, 医学などを学んだが, 本居宣長の国学に啓発されて復古神道を研究し, 平田派国学の祖となった。短期間開業し, 医術も神医道と位置づけたが, 西洋医学も認める柔軟な姿勢で名医とされた。

第百十六 宇田川榕菴 (うだがわ ようあん)

1798-1846 蘭方医, 化学者



諱は榕, 榕庵と号す. 大垣の医江沢養樹^{えざわようじゆ}の長子なり, 出でて宇田川榛齋^{しんさい}の養子となり姓を嗣ぐ. 君少くして物産学を好み, 長ずるに及び馬場穀里^{ばばこくり}に就て洋学を受く, オランダ人入貢する毎に, 其客館を訪ね得る所多し. 文政九年幕府の命によりて蘭書を翻譯す. 天保四年植物啓原^{しょくがくけいげん}を著す, 同七月俸五口を受く, 同十年舍密開宗^{せいみかいそう}の刻成る, 弘化三年六月二十二日鍛冶橋邸に於て歿す, 年四十九. 配足立氏^{はだち}, 篠山医員足立長雋^{しのやま あだちちようしゆん}の娘なり, 子なし, 大垣飯沼氏第三子興齊^{こうさい}を養うて嗣とす.

諱は榕, 号は榕庵である. 大垣の医師, 江沢養樹^{えざわようじゆ}の長男として生まれた. 後に宇田川榛齋^{しんさい}の養子となり, その姓を継いだ. 幼少期より物産学に興味を持ち, 成長すると馬場穀里^{ばばこくり}に師事して蘭学を学んだ. オランダ人の来訪の度に外国館をしばしば訪れて知識を得た. 文政9年(1826年), 幕府の命令で蘭書の翻訳にあたった. 天保4年(1833年), 植物啓原^{しょくがくけいげん} [1] を著し, 天保7年(1836年), 月俸5石の待遇を受けた. 天保10年(1839年)に, 舍密開宗^{せいみかいそう} [2] が完成した. 弘化3年(1846年)6月22日, 鍛冶橋邸で死去, 享年49歳. 妻は足立氏の出で, 篠山藩医, 足立長雋^{しのやま あだちちようしゆん}の娘である. 子はなかったが, 大垣の飯沼氏の第三子興齊^{こうさい}を養子に迎えて嫡子とした.

1. 植物啓原^{しょくがくけいげん}, 日本初の植物学書. 従来の本草書とは一線を画し, リンネ分類学, 植物解剖学, 生理学などが体系的に記載されている.
2. 舍密開宗^{せいみかいそう}, 日本初の化学書. 舍密はオランダ語 Chemie(化学)の音訳. 酸素, 水素などの元素名, 産科, 還元などの化学用語が創語されている. 温泉の泉質分析法も記載されている.

第百十七 高良齋(こう りょうさい)

1799-1846 蘭方医, 眼科医



名は淡^{あざな}, 字は子清, 良齋と号す。本姓山崎氏, 寛政十一年五月十九日阿波徳島に生まる, 高錦国^{こうきんこく}に養われて子となる。年十三錦国に侍して眼科を学び, 乾純水^{いぬいじゆんすい}に本草学を受く, 年十九父に請うて長崎に至る, 時に文化十四年十月なり。シーボルトに従い学ぶこと八年, 刻苦研鑽す, 文政十一年シーボルトの冤獄起り, 先生も亦連坐獄に下る, 後許されて天保二年徳島に帰り, 更に大阪に移る, 天保十一年明石侯の医員に挙げらる。弘化三年九月十三日疾暴を發して瞑す。享年四十八。訳する所に, 西医新書, 内科捷徑, 外科精義, 銀海秘録, 薬品撮要, 飲食要訣, 医則, 女科精選, 眼科使用, 薬能識, 蘭薬語用弁駆要法あり。

名は淡^{あざな}, 字は子清, 号は良齋。もとの姓は山崎。寛政11年(1799年)5月19日, 阿波徳島に生まれた。その後, 高錦国^{こうきんこく}に養われてその子となった。13歳のとき, 養父錦国に仕えて眼科を学び, また乾純水^{いぬいじゆんすい}から本草学を学んだ。19歳のとき父に願い出て長崎に赴いた。これは文化14年(1817年)10月のことである。シーボルトの下で8年間, 苦勞して学問を身につけた。文政11年(1828年), シーボルト事件が起こり, 連座して投獄されたが, その後許され, 天保2年(1831年)に徳島に帰った。その後, 大阪に移り天保11年(1840年), 明石藩医に任じられた。弘化3年(1846年)9月13日, 急病にて没した。享年48歳。翻訳に, 西医新書, 内科捷徑, 外科精義, 銀海秘録, 薬品撮要, 飲食要訣, 医則, 女科精選, 眼科使用, 薬能識, 蘭薬語用弁, 驅梅要法がある。

第百十八 小川汶庵(おがわ ぶんあん)

1782-1847 古方医, 奥医師. 傷寒貫珠集を校訂



名は忠実^{ただかね}, 字は意公^{あぎな}, 通称文菴, 後避くる所ありて汶庵に改む, 竹塙は別号なり. 世々幕府医官に列り法眼に叙せらる. 汶庵年七歳にして父母を失う, 伯母円覚愛撫して哺育す. 年十六読傷寒論十巻を著し, 又老子を注す, 文化二年擢せられて侍医となり, 医学助教を兼ね, 同七年西城侍医に転じ法眼となり, 医学教諭を兼ね, 天保九年法印に叙し, 龍仙院と号す. 文化元年, 蘇州の医師胡兆新^{こちょうしん}長崎に来る, 先生即ち千賀柳外, 吉田菊潭と共に, 命を奉じて長崎に赴き, 胡兆新と医を談ず, 弘化二年傷寒貫珠集を医校に納む, 本邦に尤氏^{ゆう}傷寒の書あるは是を以て始となす. 弘化二年秋上書骸骨を乞う幕府厚く礼す. 四年四月六日を以て終る, 享年六十六. 男鳳出でて岡氏^{おか}を冒す.

名は忠実^{ただかね}, 字は意公^{あぎな}, 通称は文菴, 後に事情により汶庵と改めた. 竹塙は別号. 代々幕府の医官の家系で, 法眼に叙せられた. 7歳で父母を亡くし, 伯母の円覚が愛情を注いで育てた. 16歳にして傷寒論全10巻を著し, さらに老子に注釈を施した. 文化2年(1805年), 幕府に抜擢されて侍医となり, あわせて医学助教を務めた. 同7年, 西城の侍医に転じ, 法眼に叙され, さらに医学教諭を兼ねた. 天保9年(1838年), 法印に叙せられ, 号を龍仙院とした. 文化元年(1804年), 蘇州の医師胡兆新^{こちょうしん}が長崎に来日したとき, 忠実^{ただかね}は千賀柳外, 吉田菊潭らとともに命により長崎へ赴き, 胡兆新と医学を論じた. 弘化2年(1845年), 傷寒貫珠集を医学校に納めた [1]. 日本に尤氏^{ゆう}の傷寒の書が伝わったのは, これが始まりとされる. 同年弘化2年の秋, 引退を願う書状を出し, 幕府から厚い礼遇を受けた. 弘化4年(1847年)4月6日没, 享年66歳. 子供の鳳は岡姓を継いだ.

1. 傷寒貫珠集. 清の医師尤^{ゆう}怡による傷寒論の注釈書. 単なる注釈にとどまらず時代に即した臨床解説や応用が盛り込まれ, 数ある注釈書の集大成とされる. 小川汶庵はこれを校訂し, 医学館におさめた.

第百十九 岡節齋（おか せっさい）

1764-1848 漢方医，奥医師



名は度，節齋と号し，良節と称す．明和元年十二月朔日江戸に生まる，本姓北川氏，岡道生に養れて嗣となる．医を山田図南^{となん}に学び書を山本北山^{ほくざん}に習う．天明九年法眼^{ほうげん}に叙せられ，奉職五十一年法印に進み，櫟仙院^{れきせんいん}と号す．弘化二五年二月二日^{えいげん}曳然として逝く，時年八十五．

名は，節齋は号，また良節とも称した．明和元年（1764年）12月1日，江戸に生まれた．本姓は北川．岡道生の養子となり，家を継いだ．医学を山田図南^{となん}に学び，書を山本北山^{ほくざん}に習った．天明9年（1789年）に法眼^{ほうげん}に叙せられ，51年間の奉職を経て法印に進み，櫟仙院（れきせんいん）と号した．弘化2年（1845年）2月2日，静かに没した．享年85歳．

第百二十 宇津木昆台(うつき こんだい)

1779-1848 古方医. 古訓医伝を著す



名は益夫,^{あざな}字は天敬, 俗称太一郎, 昆台は其号なり. 尾張の人, 医を浅井貞庵, 平野龍門に学び, 十八歳のとき笈^{きゅう}を負いて京都に出で諸大家の門に出入し益する所甚多し. 古医方を以て一世に鳴る. 嘉永元年五月八日家に歿す, 年七十. 著す所に, 古訓医伝, 日本医譜, 解莊, 詩文集, 和歌集あり.

名は益夫,^{あざな}字は天敬, 俗称太一郎, 昆台は号である. 尾張出身. 浅井貞庵, 平野龍門に医学を学び, 18歳にして京都に出て幾人もの大家に入門して大いに知識を深めた. 古医方で広く知られた. 嘉永元年(1848年)5月8日家没, 享年70歳. 著書に古訓医伝 [1], 日本医譜 [2], 解莊, 詩文集, 和歌集がある.

1. 古訓医伝. 傷寒論, 金匱要略の解説書. 独自の臨床経験, 理論も述べている.

2. 日本医譜. 全4巻, 古代から幕末まで日本の医師千人以上の伝記集.

第百二十一 宇津木昆台(うつきこんだい)(木像)

1779-1848 古方医. 古訓医伝を著す



史伝前に出ず.

1784-1849 蘭漢折衷医



名は龍，^{げんしゆん}檜園と号す，小石元俊の子なり．年十六父に従い江戸に出でて和蘭医方を，杉田，宇田川，大槻の諸家に学ぶ．後ち西帰して^{ききゆう}箕裘の業を嗣ぎ，術業大に行わる．年五十家事を児紹に付し，別居し著書自ら^{たのし}娛み其居に題して用拙居と云い，自ら拙翁と称す．年六十四の冬中風に罹り，嘉永二年二月十日歿す，享年六十六．著す所に，究理堂方府，究理堂講義，博采録，薬性摘要，蘭薬分量考，東西医説折義，梅毒秘説，権園随筆詩文集あり．

名は龍，号は^{げんしゆん}檜園．小石元俊の子〔→第七十六〕である．16歳のとき，父に従って江戸に出て，蘭医学を杉田，宇田川，大槻らの諸家に学んだ．後に郷里に戻り家の医業を継ぎ盛業した〔1〕．50歳で家督を子の紹に譲り，別居して著述を楽しみとし，住まいを用拙居^{ようせつきよ}と名づけ，自ら拙翁^{せつおう}と称した．64歳の冬に中風を患い，嘉永2年(1849年)2月10日没，享年66歳．著書に究理堂方府，究理堂講義，博采録，薬性摘要，蘭薬分量考，東西医説折義，梅毒秘説，権園随筆，詩文集がある．

1. 新宮涼庭(→第三百十三)とともに京都の二大蘭方医とされる．

1771-1849 蘭方医



名は淳, 又順^{あざな}, 字は素行, 通称方策と呼ぶ, 九和, 半山, 孤松軒の号あり. 周防一本松の人, 明和八年に生まる, 長じて医学を学び, 年十九大阪に出でて小石元俊^{げんしゆん}の門に入り, 後ち江戸に赴き大槻玄沢に師事して蘭医方を修め学成りて大阪に業を開く, 高良齋, 緒方洪庵と相鼎立して名籍甚し. シーボルトの大阪に来りしとき, その誤診を論難して遂に彼を屈服せしめたり. 嘉永二年十月八日病んで歿す, 享年七十九. 天王寺口縄坂梅旧院に葬る. 著す所に巴爾空解剖図譜, 船中備要方, 痘疹紀聞, 肺病養生心得, 孤松軒随筆, 蒲部加児都あり.

名は淳, また順^{あざな}, 字は素行, 通称は方策. 九和, 半山, 孤松軒などの号がある. 周防国一本松(現山口県山口市の一部)の出身. 明和8年(1771年)生れ. 成人して医学を学び, 19歳で大阪へ出て小石元俊^{げんしゆん}[→第七十六]の門下に入り, のちに江戸へ赴いて大槻玄沢[→第九十三]に師事し, 蘭医学を修めた. 学業が成って大阪に開業し, 高良齋[→第百十七]や緒方洪庵[→第百四十四]と並び称され, その名声はたいへん大きかった. シーボルトが大阪に来たとき, その誤診を厳しく論じてついに彼を屈服させたという. 嘉永2年(1849年)10月8日病没, 享年79歳. 墓は天王寺口縄坂^{くちなわざか}の梅旧院に葬られている. 著作に, 巴爾空解剖図譜, 船中備要方, 痘疹紀聞, 肺病養生心得, 孤松軒随筆, 蒲部加児都がある.

第二百二十四 高野長英(たかの ちょうえい)

1804-1850 蘭学者，シーボルト事件に連座して逃亡した。



名は議^{ゆずる}，瑞皐^{ずいこう}と号す。文化元年五月五日陸奥の水沢に生まる，本姓後藤氏，年十四外叔父高野玄齋に養わる。父に強請して江戸に来る時に文政三年秋，年十七なり，堀留町薬舗神崎源造に寓す，源造吉田長^{ちやうしやく}叔の門に入らしむ，苦業三年大に進む，長叔その才を愛し偏字^{へんじ}を与えて長英と改む，留^{こま}まること二年，又駒留^{こまだめしやうけん}正見の門に遊ぶ。天保元年江戸に出て，翻譯に従事す年二十七。後ち長崎に遊びシーボルトとの校舎に

名は議^{ゆずる}，号は瑞皐^{ずいこう}。文化元年(1804年)5月5日，陸奥国水沢(現岩手県奥州市付近)に生まれ，本姓は後藤。14歳のときに母方の叔父高野玄齋に養われた。17歳，文政3年(1820年)の秋，父に強く願って江戸にのぼり，堀留町の薬舗神崎源造のもとに寄宿した。源造は彼を吉田長^{ちやうしやく}叔の門人とした。苦学三年の末に大いに進歩し，長叔はその才能を愛でて，自分の名前の一字をとって長英の名を与えた。その後さらに2年

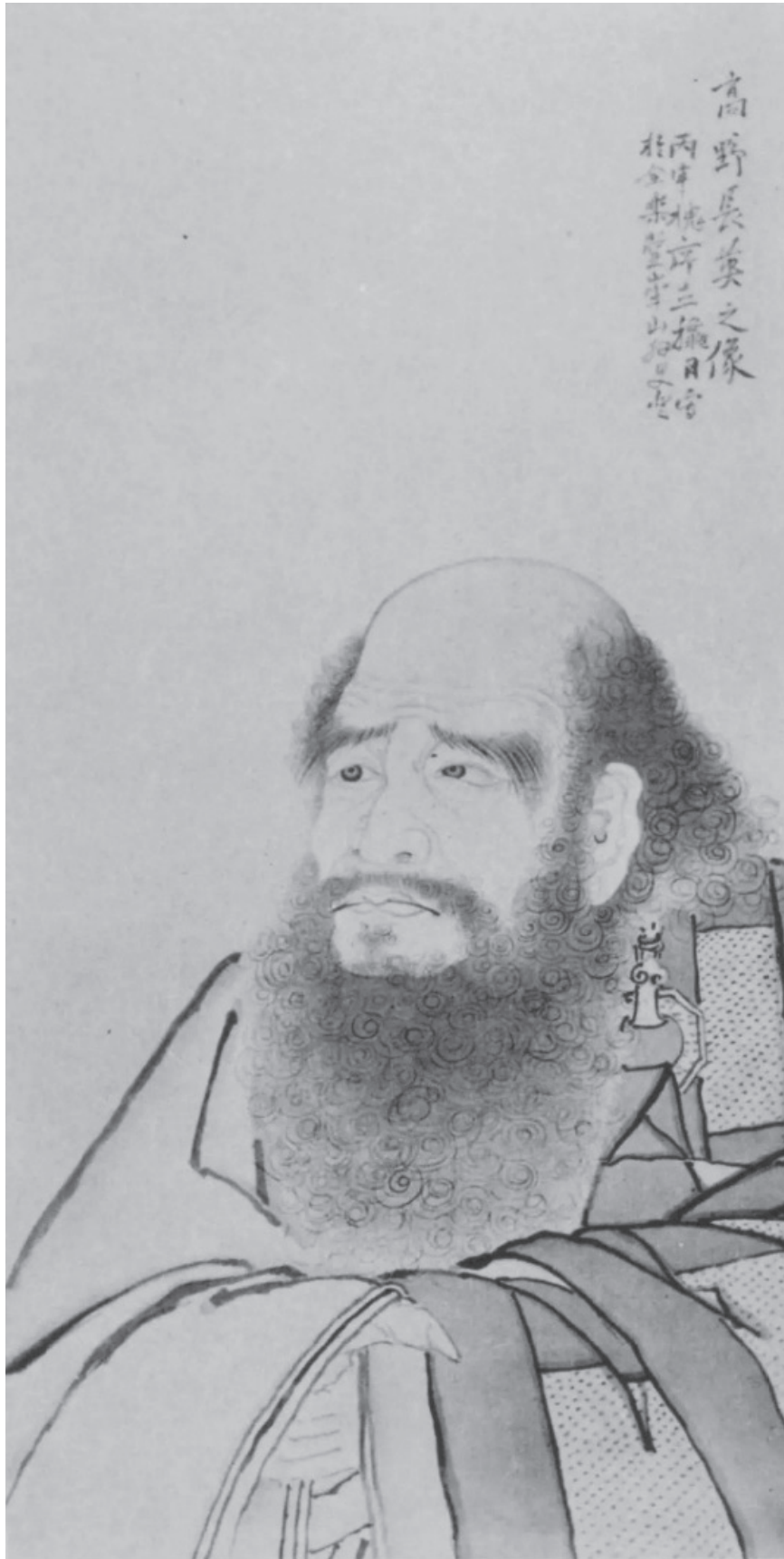
在りて、挺然^{ていぜん}等輩を抜く。先生嘗て渡邊華山^{わたなべかざん}等と結びて尚齒会^{しょうしかい}を作り、時勢を談じて幕府の忌避^{きに}に触れ、獄に下る、天保十二年四月獄火あり、先生遁^にげて、西方に走る、後三年^{そうきゅう}搜求稍弛むと聞き、再び江戸に帰り沢三伯^{さわさんぱく}と変し、青山に家す、嘉永三年五月幕吏^{きずつ}その所在を知り捕えんとす、先生刀を抜き二人を傷け、自ら頸^{つらぬき}を貫て死す、年四十七。

間とどまり、さらに駒留正見^{こまだめしょうけん}の門下に学んだ。天保元年(1830年)、江戸に出て翻訳の仕事に携わり、年27歳であった。その後長崎に遊学してシーボルトの門下に入り、群を抜く才を示した[1]。渡邊華山^{わたなべかざん}らと親しく交わり尚齒会^{しょうしかい}を結成して時局を語り合ったが、それが幕府の反感を買って投獄された。天保12年(1841年)4月、獄が火事となった機に乗じて脱獄し、西方へ逃れた。3年ほどして詮索がやや緩んだと聞き、再び江戸に戻り、沢三伯^{さわさんぱく}の偽名で青山に住んだ[2]。嘉永3年(1850年)5月、幕府の役人がその居所を知って捕らえようとした際、刀を抜いて二人を傷つけ、首を刺して自害した。享年47歳。

1. シーボルトにオランダ語の論文を提出してドクトルの称号を与えられた。
2. 脱獄の直後、大槻俊齋(→第百四十五)に衣服金銭を借りたとされる。また、江戸に舞い戻った際には堀内素堂(→第百三十一)とが匿ったとされ、町医者として開業していたところを捕えられた。

第百二十五 高野長英(たかの ちょうえい)(別個)

1804-1850 蘭学者，シーボルト事件に連座して逃亡した。



史伝前に出ず。本像は渡邊華山の筆なり，最近の発見に係れり。

第二百二十六 中川修亭(なかがわ しゅうてい)

1771-1850 蘭漢折衷医。華岡青洲の初の門弟



名は故(又定故^{あざな}),字は其徳修亭は其号なり,又壺山,又抱神堂主人と号す,通称周貞と云う。紀州橋本の人,明和七年に生まる,鈴木蘭園の門に在りしが,天明八年火災後京都を去り,華岡青洲の門に入り外科学を修む,青洲が最初の門人なり。寛政十五年十月再び京都に來り吉益南涯^{よしますなんがい}を師とす。文化三年九月,海上随鷗^{うみがみずいおう}の門に入り,蘭学を研究し,後ち大阪に徙れり。嘉永三年二月六日其家に歿す,享年七十八。著す所に,瘍科筌蹄,傷寒発微,医道,古今医籍考,医方新古弁東西医談,難波尚齒記,同後記,禁方録,同拾録,賈生載記,芳翁医談あり。

名は故(または定故^{あざな}),字は其徳,修亭は号。また壺山,抱神堂主人とも号した。通称は周貞。紀州橋本(現和歌山県橋本市付近)の出身,明和7年(1770年)に生れ。初めは鈴木蘭園の門下にあったが,天明8年(1788年)の大火後に京都を離れ,華岡青洲[→第百五]に入門して外科を学んだ。青洲の最初の門弟であった。その後,寛政15年(1803年)10月に再び京都に出て,吉益南涯[→第八十三]を師と仰いだ。さらに文化3年(1806年)9月には海上随鷗^{うみがみずいおう}[→第八十]の門下で蘭学を学び,その後大阪に移った。嘉永3年(1850年)2月6日,自宅で没,享年78歳。著書に,瘍科筌蹄,傷寒発微,医道,古今医籍考,医方新古弁東西医談,難波尚齒記,同後記,禁方録,同拾録,賈生載記,芳翁医談がある。

第百二十七 石坂蕙圃(いしざか けいほ)

1786-1851 蘭漢折衷医.



名は良民^{あざな}, 字は蕙圃^{けいほ}, 通称篤太^{そうき}, 晩に桑亀と改む。天明六年^{みまさか}, 美作に生まる年十三, 刀圭の事に志し吉益南涯, 華岡青洲に歴事し, 郷に帰る。一日医範提綱を読み悟る所あり, 長崎に遊び, シーボルトに就き其術を学ぶこと数年, 帰郷其業大に行わる。嘉永四年六月九日歿す, 得年六十四。

名は良民^{あざな}, 字は蕙圃^{けいほ}, 通称篤太^{そうき}, 晩に桑亀と改めた。天明6年(1786年), 美作^{みまさか}(現岡山県美作市付近)に生まれた[1]。13歳にして医学を志し, 吉益南涯, 次いで華岡青洲[→第百五]に師事して帰郷した。ある時, 医範提綱[宇田川玄真著]を読んで悟る所あり, 長崎に遊学してシーボルトの下に数年間学び, 帰郷して盛業した。嘉永4年(1851年)6月9日没, 享年64歳。

1. 生年は1788年とする資料複数あり [<https://www.tsuyama-yougaku.jp/isizakasouki.html>].

第百二十八 帆足万里（ほあし ばんり）

1778-1852 儒学者，経世学者，蘭学者



^{あざな}字は鵬卿，通称里吉，文簡と号す。^{ぶんご ひ じ}豊後日出の人，三浦梅園，^{たんそう}広瀬淡窓と共に九州三偉人と称せらる。晩年専ら文芸學術に従事す。嘉永五年六月十四日歿す，享年七十五歳。著す所に，仮字考，修辞通窮理通，四書標注，五經標注，国語標注，肆学余論，東潜夫論，入学新論井樓纂聞，西崎遺稿あり。

^{あざな}字は鵬卿，通称里吉，文簡と号した。^{ぶんご ひ じ}豊後日出〔現大分県速見郡日出市付近〕の出身，三浦梅園〔→第六十二〕，^{たんそう}広瀬淡窓と共に九州三偉人と称された。晩年は専ら文芸學術を研究した〔1〕。嘉永5年（1852年）6月14日没，享年75歳。著書に，仮字考，修辞通窮理通，四書標注，五經標注，国語標注，肆学余論，東潜夫論，入学新論井樓纂聞，西崎遺稿がある。

1. 医師ではなかったが，後年蘭学にも取り組み，物理学，博物学，医学などを研究した。著書に「医学啓蒙」がある。

1800-1852 漢蘭折衷医.



名は卓^{あざな}、字は子立、省庵は其号なり。相州相原の人、嘗て芳川波山に従う、波山^{はざん}忍^{おし}城^{じょう}侯に聘るや先生往て之を訪う、遂に侍医に召さる。先生初め長沙の法を修め、後西洋の学を攻め、数々人体を解剖して豁然大に悟る所ありて医則發揮を著述す、古医方^{かつげん}の生理書と見るも可なり。蘭説の妄誕を攻む、所説の少々奇怪に渉るは、多くは時勢の罪にして先生の識見を左右するに足らざるなり。嘉永五年八月病で其家に歿す、年五十三、武州^{おしじょう}忍城蓮華寺に葬る。著す所に、医則發揮五卷、内景図一卷、病原叢論五卷、治療大全十卷、眼科方規三卷、胎育全書三卷、動物質論二卷、構物性論五卷あり。

名は卓^{あざな}、字は子立、省庵は号である。相州相原(現神奈川県相模原市付近市)の出身。かつて芳川波山(はざん)に学んだ。波山^{おし}が忍藩(現埼玉県行田市付近)の藩主に招聘されると、省庵はこれを訪ね、やがて侍医として召し抱えられた。はじめ長沙流医学[1]を学んだが、後に西洋医学も学んだ。たびたび解剖を行った結果、大きな悟りを得て医則發揮を著した。これは古医方に基づく生理学書と言える[2]。さらに、当時のオランダ医学の誤りを厳しく批判した。中にやや奇異に見える部分があるのは、当時の時勢の影響によるもので、先生自身の識見を損なうものではない。嘉永5年(1852年)8月、自宅で病没、享年53歳。墓は武州忍城の蓮華寺にある。著作に医則發揮5巻、内景図1巻、病原叢論5巻、治療大全10巻、眼科方規3巻、胎育全書3巻、動物質論2巻、構物性論5巻がある。

1. 長沙太守をつとめた張仲景の傷寒論に基づく医学、つまり古方医学。
2. 医則發揮。医師の心得、漢方の処方、西洋医学的解剖生理学などが漢蘭折衷して書かれている医学教育書。

第三百十 榎林宗建 (ならばやし そうけん)

1802-1852 蘭方医. 牛痘に初めて成功, 種痘の祖



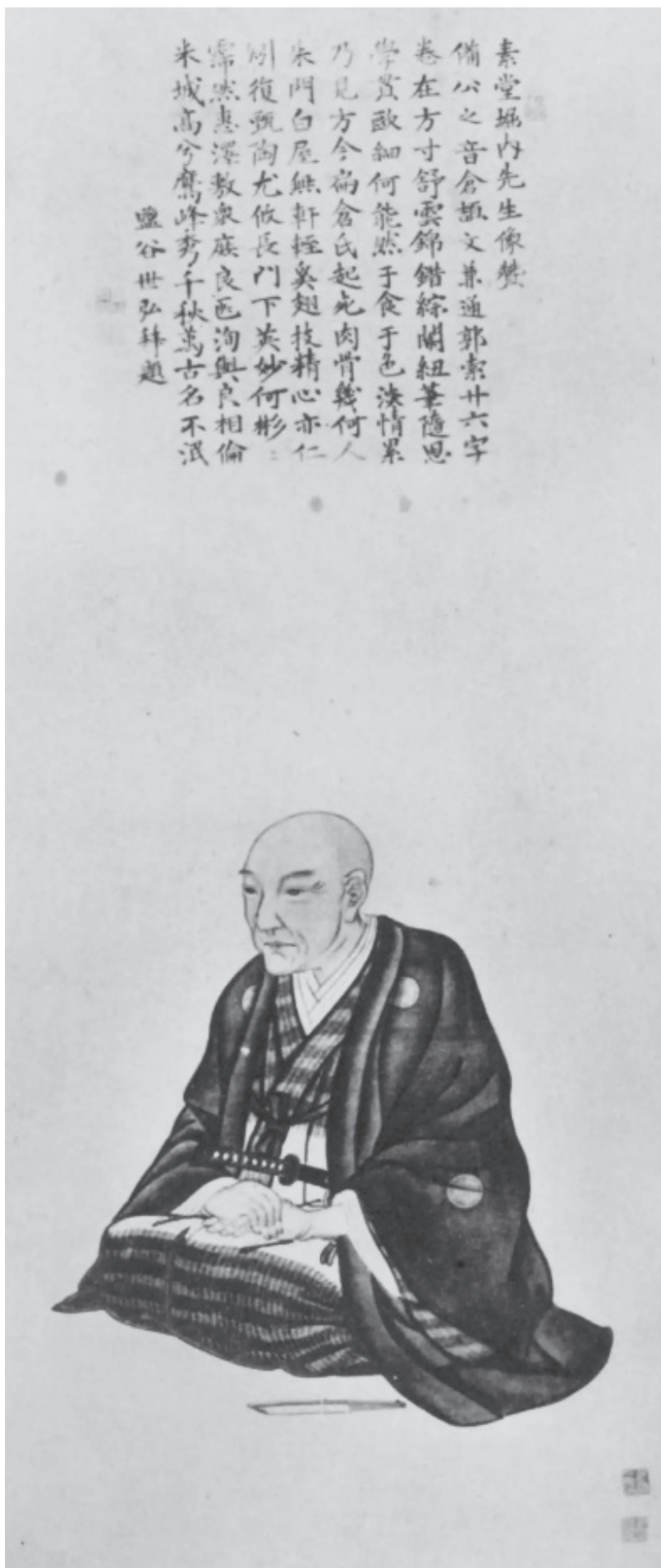
名は高房^{たかふさ}, 字は潜^{あざな}, 通称宗建^{そうけん}, 和山は其号なり. 栄哲の第二子なり, 享和二年生まる, 文政十年四月父の後を襲うて佐賀侯に仕う, 弘化三年二月豊後町に塾舎を設け大成館とし諸生を寄宿せしめて医学を教授す. 鍋島閑叟侯^{なべしまかんそう}西洋牛痘苗を求むるに当り天保二年七月蘭船の之を齎す^{もたら}に及び, 先生その子建三郎に種痘術を受けせしめしに善感す, 是を西洋種痘法伝習の嚆矢とす. 茲に於て先生佐賀に歸り侯に謁し, 更に公子等に種接するに何れも能く萌生^{ほうせい}せり. 先生知験する所を録して牛痘小考を著す, 種痘の祖とす. 嘉永五年十月歿す, 年五十一.

名は高房^{たかふさ}, 字は潜^{あざな}, 宗建^{そうけん}は通称, 号は和山. 栄哲の第二子. 享和2年(1802年)生れ. 文政10年(1827年)4月, 父の後を継いで佐賀藩に仕えた. 弘化3年(1846年)2月に豊後町に塾舎を設け大成館と名付け, 門下生を寄宿させて医学を教えた. 鍋島閑叟侯^{なべしまかんそう}が西洋の牛痘の苗を求めた際に, 天保2年(1831年)7月にオランダ船がこれをもたらし, 子の建三郎に種痘を行ったところ善感した[1]. これは日本における西洋種痘法の始まりとされる. その後佐賀に戻り藩主に謁見し, 家来の子供たちに種痘を接種したところ, いずれも良く着いた. 先生は自らの経験を記録した牛痘小考を著して, 種痘の祖と称された. 嘉永5年(1852年)10月没, 享年51歳.

1. 榎林宗建の依頼によりオランダ商館医モーニケが1848年に持参した痘漿は劣化しており不成功におわった. 翌1849年にあらためて取り寄せた痘癰により成功した.

第百三十一 堀内忠亮(ほりのうち ただよし)

1801-1854 蘭方医. 初の小児科書を翻訳



名は忠亮^{あざな}、字は君栗、一字忠龍、素堂と号す。米沢の人、世医を以て仕う、年十一父を喪い独り母と居る、辛茹^{しんじよ}を嘗めて志操倍潔し、常に江戸に遊ばんと欲するも家貧しきを以て果さず、既にして役都の命あり、乃ち父祖^{はか}の墳に謁して誓て曰く藩中泰西の学をなすものなし、某^{それがし}之を創めんとす、若し成らざれば敢て再び謁せずと。是に於て西上し官暇^こを以て古賀穀堂^{こがこくどう}に従て古文を学び、杉田立卿^{すぎたりゆうけい}、青地芳濤^{あおちほうこ}に就て泰西医術を修む、越て二年擢^{ぬきん}でられて侍医となる、後大夫人侍医に転じ、禄若干を賜う。嘉永六年瘡を患い骸骨を乞うて郷に還る、翌七年三月意に起たず、年五十四。著す所に、幼々精義、保嬰瑣言、外科諸書あり。

名は忠亮^{ただよし}〔読み不詳〕、字は君栗^{あざな}、別の字は忠龍、号は素堂^{そどう}。米沢（現山形県米沢市付近）の出身で、医師として仕えた。11歳のときに父を亡くし、母と二人暮らしで、苦労して志操はますます清くなった。常に江戸に遊学したいと思っていたが、家は貧しく叶わなかった。やがて役所から命があり、そこで父祖の墓に参つて誓った。藩中に西洋の学問をする者がいない。自分がこれを始めよう。もし達成できなければ、二度と墓参しない。そこで西へ上り、官を辞して古賀穀堂^{こがこくどう}に従つて古典を学び、杉田立卿^{すぎたりゆうけい}や青地芳濤^{あおちほうこ}に師事して西洋医学を修めた。2年後に侍医に選ばれ、後に大夫人^{たいふじん}〔天皇の母〕の侍医に転じ、俸禄をいくらか賜った。嘉永6年(1853年)に痘瘡を患い、引退を願い出て故郷に帰り、翌7年(1854年)3月、志を果たせず54歳で没した。著作に、幼々精義〔1〕、保嬰瑣言、外科の諸書がある。

1. ドイツ人医師フーフェランド (Christoph Wilhelm Hufeland) の著書 Makrobiotik oder Die Kunst, das menschliche Leben zu verlängern (1826) の翻訳。日本初の小児科学書。

1762 - 1848 眼科医, 西洋眼科の祖



名は義寿, 桑翁と号す. 安芸の人, 十七歳京都に出て和田泰純に学び, 五年を経て郷に還り, 箕裘の業を嗣ぐ. 文化五年四月広島侯の女, 江戸の邸にあり眼を病む, 侯之を憂い先生を召して治を托す, 未だ幾もならずして全癒す, 恩賞太だ厚し. 居を芝田町に卜す其業益々盛なり. 文化七年七月擢て侍医となる, 十三年十二月法眼に絞せらる. 文政十二年シーボルトに教を聞く. 先生酬ゆるに葵章服を贈る, 其年十一月シーボルトの獄起るに当り, 連坐し官禄を褫かれ, 獄に下る, 時に十二月十六日なり. 是より先, 先生の子玄昌侍医に擢られ西丸に勤仕せしが, 先生の官を奪わるるに際し玄昌亦官を罷めらる. 天保八年將軍家慶, 眼疾を發す. 玄昌をして之を治せしむ, 其年七月二十七日玄昌侍医法眼に進み禄二百石を受く, 將軍玄碩の近状を聞

名は義寿, 号は桑翁. 安芸 (現広島県) の出身. 17歳のとき京都に出て和田泰純 [→第七十一] に学んだ. 五年後に郷里に戻り, 家業を継いだ. 文化5年 (1808年) 4月, 広島藩主の娘が江戸藩邸で眼病を患った. 藩主はこれを心配し, 先生を呼び寄せて治療を任せた. 程なく全快し, 手厚い恩賞を与えられた. 芝田町に住居を定め盛業した [1]. 文化7年 (1810年) 7月, 広島藩侍医に抜擢され, 文化13年12月に法眼となった. 文政12年 (1829年), シーボルトの教えを受け, その恩に報いるために葵の紋のついた衣服を贈った. 同年11月, シーボルト事件が起き, 連座して官禄を奪われ投獄された [2]. 12月16日のことであった. それ以前に, 子の玄昌は侍医に抜擢され, 江戸城西の丸に勤めていたが, 玄碩が官を奪われると同時に玄昌もま

き之を許す。先生獄を出でて深川木場に家居し、大に門戸を張れり。嘉永七年八月十七日病んで其家に歿す、享年八十七。築地本願寺内に葬る。著す所に、獺祭録、師語録、迎翠堂漫録あり。

た罷免された。天保8年(1837年)、将軍家慶が眼の病を患い、玄昌に治療させた。同年7月27日に玄昌は侍医法眼^{ほうげん}に昇進し、二百石の俸禄を受けた。将軍は玄碩の近況を聞き、これを許した。玄碩は獄を出て深川木場に住み、大いに門戸を張り繁盛した。嘉永7年(1854年)8月17日に自宅で病没、享年87歳。墓所は築地本願寺にある。著作に、獺祭録、師語録、迎翠堂漫録がある。

1. 代々眼科を継ぐ家であった。罪人の解剖に立会い、特に眼球を摘出し、日本初の眼球解剖を行った。その後白内障などの手術を修得し、西洋眼科の祖とされる。

2. シーボルトから、眼科手術に必要な散瞳薬ベラドンナを分与してもらう代わりに、将軍から拝領した葵の紋服を贈与し、シーボルト事件を機にこれが発覚し罪に問われた。

第百三十三 新宮凉庭(しんぐう りょうてい)

1787-1854 蘭方医, 順正書院で後進を育てた



名は碩^{せき}, 幼名織造, 通称凉亭, 後凉庭と改む, 鬼国山人は其号なり, 別に馭豎齋^{くじゅさい}と号す. 天明七年三月十三日丹後由良村に生まる, 年甫めて十一, 従兄有馬丹山に就て医を学び, 年十八業を由良に開く, 一日丹波檜山^{ひのきやま}近藤氏の宅に在りて宇田川氏撰内科選要黄疸篇を読み, 大に発憤し, 文化七年八月六日郷を発し, 長崎に赴く, 途次広島に至り恵美三白の門に入る. 長崎に至るや吉雄如淵^{よしおじょえん}に贅を執り大に苦学す後ち蘭医ヘールケに接し, 茲より學術大に進む. 文政元年長崎を去りて郷里に帰る. 翌二年先生年三十三にして始めて業を京都に開く, 名声遠邇^{えんじ}に顕われ, 診を乞うもの門に満つ. 先生, 東山南禅寺畔に贅舎^{ひがしやま}を建て順正書院と曰い, 軒岐交宜^{けんきこうぎ}を祭り, 儒者及び漢蘭医書を貯え, 且つ付するに学田^{がくでん}及び資金若干を付して四方志学の徒^ひを延く. 安政元年正月九日病で歿す, 享年六十八. 南禅寺塔中天授庵に葬る.

名は碩^{せき}, 幼名は織造, 通称は凉亭, 後に量庭と改めた. 号は鬼国山人, 別に馭豎齋^{くじゅさい}とも号した. 天明7年(1787年)3月13日に丹後の由良村(現京都府宮津市由良付近)に生まれる. 11歳の時, 従兄の有馬丹山について医学を学び, 18歳郷里の由良で開業した. ある日, 丹波檜山^{ひのきやま}の近藤家に滞在中, 宇田川氏の内科選要黄疸篇を読み, 大いに触発されて, 文化7年(1810年)8月6日に郷里を出て長崎に赴いた. 途中広島に立ち寄り, 恵美三白[→第五十七, 絵美三伯]に入門した. 長崎に着くと吉雄如淵^{よしおじょえん}[→第六十八, 吉雄耕牛の末子権之助]に入門して苦学し, その後蘭医ヘールケに出会って学問は大に進歩した. 文政元年(1818年)に長崎を離れ, 郷里へ戻った. 翌文政2年(1819年), 33歳にして初めて京都で開業した. その名声は遠近に広まり, 診察を求める人々で門前は溢れた. やがて東山南禅寺のほとりに学舎を建て, 順正書院と名づけ, 医聖を祭り[1], 儒学, 漢方, 蘭方医学の書を多数収め, さらに田地や資金を整えて各地から学問を志す若者を集めた. 安政元年(1854年)正月9日, 病没. 享年68歳. 南禅寺の塔中, 天授庵に葬られた.

1. 軒岐交宜. 軒=軒轅(黄帝), 岐=岐伯(黄帝的臣下, 名医), 交=扁鵲の字, 宜=張宜(張仲景の別名張機の通字)

第百三十四 新宮涼庭(しんぐう りょうてい)(木像)

1787-1854 蘭方医, 順正書院で後進を育てた



史伝, 前に出ず.

第百三十五 原老柳 (はら ろうりゅう)

1783-1854 大阪で緒方洪庵と並び称された名医



名は健^{あざな}、字は天行^{にしのみや}、通称佐一郎と呼び、老柳と号す。摂津西宮の人、天明三年二月生まる、村上玄齡に就き医学を修め業成り伊丹に帰る。偶々一篤疾者あり、先生に治を乞い、又新宮涼庭を招き来診せしめて主治医と面識を請う、涼庭僻地の庸医共に語るに足らずとせり、会々先生入り席に就き備^{たまたま}さに其診案処方^{つふ}を述ぶ、涼庭之を聞き、乃ち主人に諭して専ら其治を受けしむ、先生後ち大阪に移り、諸医の間に崛起し別に一幟^{いっし}を樹てり。安政元年六月熱病を得て歿す、時年七十二。大阪生玉町齡延寺に葬り観音像を建てり、俗に老柳観音と呼べり。

名は健^{あざな}、字は天行^{にしのみや}、通称は佐一郎、号は老柳。摂津国西宮(現兵庫県西宮市付近)出身、天明3年(1783年)2月生れ。村上玄齡に師事し、医学を学び、修業を終えて伊丹に帰った。ある時重病の患者が、先生の治療を求めた。また新宮涼庭[→百三十三]を招いて診てもらい、主治医と面会を求めたが、涼庭は田舎の凡者と話しても無駄と考えた。たまたま先生が席に着き、診断、治療を詳しく説明したところ、涼庭はその話に感心し、主人に彼の治療を受けるよう勧めた。その後大阪に移り、他の医師たちの中で頭角を現して独自の地位を築いた[1]。安政元年(1854年)6月に熱病にて死去。享年72歳。大阪生玉町の齡延寺に葬られ、観音像が建てられ、老柳観音と呼ばれた。

* 大阪で緒方洪庵(→ 第百四十四)と並び称され、学の緒方、医の原ともいわれ、緒方をして老柳こそ真医と言わしめた名医、仁医。老柳の盥^{たらい}：診療所の入り口に水を張った大きな盥があり、患者は名前を書いた紙に金銭を包んで入れた。やがて紙は水に溶けて金額の多寡、貧富は分からなくなり患者は安心できたという[松本順司・原老柳の生涯(創元社)]

第百三十六 水原三折(みずはら さんせつ)

1782-1864 産科医. 産科鉗子を改良



名は義博^{よしひろ}、字は濟卿^{あざな}、三折^{さいけい}は其号なり。本姓最上氏近江八幡の人なり、先生兄弟六あり、季子^{きし}なるを以て本姓を避けて水原と称す、少くして京都に出て奥劣齋^{おくれつさい}を師とし、産術を学び、後ち錦小路東洞院に住みて医業を開く。産術は賀川子玄^{かがわしげん} [校注：玄の意不明] の鉄鉤回生術によりて従来の旧臭を一洗したるも、その術の漸く粗暴に流れ、却て児脳を碎擢^{さいさい}するの弊あり、先生之を見て浩歎^{こうたん}措かず、覃思^{たんし}構巧^{こうこう}、幾んど二十年にして鯨髻^{げいき}を以て探額器^{たんがんき}を作り、産難に試み、悉く奇功を奏せり。産術之れより一変す、先生功德大なり。先生海上随鷗翁^{うみがみずいおう}に従い人身内景を学究し、刑屍に就て親試^{しんし}し、殊に意を陰器の解剖に注ぐ陰器解剖図説あり。先生天明二年に生れ、安政元年七十にして歿す。著す所に、探額図訣三卷、醇生庵産育全書十一卷あり。

名は義博^{よしひろ}、字は濟卿^{あざな}、三折^{さいけい}は号。本姓は最上、近江八幡(現滋賀県近江八幡市付近)の出身。6人兄弟の末子であったため本姓ではなく水原を名乗った。幼少より京都に出て、奥劣齋^{おくれつさい} [→第百四] を師として産科学を学んだ。その後、錦小路東洞院で開業した。産科術は、賀川子玄^{かがわしげん} [→第五十二] が創案した鉄鉤回生術によって古い風習が一新されたものの、この術は次第に粗暴に扱われて、かえって胎児脳を傷つける弊害があった。先生はこれを深く嘆き、試行錯誤^{たんがんき}を重ね、ほぼ20年かけて鯨のひれを使った探額器^{たんがんき}を作り、難産に使用して優れた成果を上げた。産科術は大きく変わり、先生の功績は偉大であった。海上随鷗翁^{うみがみずいおう} [→第八十] のもとで解剖を学び、死体で自ら試験し、とりわけ性器の解剖に力を入れて性器の解剖図説を著した。天明2年(1782年)生れ、安政元年(1855年)、70歳で死去。著書に、探額図訣三卷、醇生庵産育全書十一巻がある。

1795-1857 考証派漢方医，奥医師



校注：この肖像は，実際には多紀柳洪〔→第九十四〕らしい。

名は元堅^{もとかた}，字は亦柔^{あざな}，菡庭^{えきじゆう}と号し，安叔^{さいてい}と通称す，^{もとやす}元簡の二子なり。天保六年内班に挙げられ，医学館教授となる，翌年法印に敍し，楽春院と号す。安政四年二月十四日病歿す，時年六十三。著す所に，傷寒論述義，金匱要略述義，素問紹識，雑病広要，薬治通義，腹診奇侯あり。

名は元堅^{もとかた}，字は亦柔^{あざな}，号は菡庭^{えきじゆう}，通称は安叔^{さいてい}。^{もとやす}元簡の次男。天保6年(1835年)に幕府に登用されて医学館の教授となり，翌年に法印の位を授けられた。楽春院と号した。安政4年(1857年)2月14日，病没，享年63歳。著作に傷寒論述義，金匱要略述義，素問紹識，雑病広要，薬治通義，腹診奇侯がある。

1786-1857 古方医, 吉益家三代目



諱^{いみな}は修夫, 北洲^{ほうしゅう}は其号なり, 通称道立, 後ち正親と改む. 本姓青沼氏出でて吉益南涯^{よしますなんがい}の家を嗣ぐ, 年二十二にして吉益南涯に従う, 南涯老て子なし請うて養子とす. 文化十年六月南涯歿せしとき, 先生年二十六なり, 箕裘^{ききゅう}の業を継ぎ生徒を教授す. 弘化元年北越地方に漫遊し, 翌二年再び金沢に赴き, 弘化四年三月金沢藩侍医となり, 居を金沢に定む. 後ち数年中風に罹り, 安政四年八月遂に歿す, 享年七十二, 金沢寺町国泰寺に葬る. 著す所に, 金匱要略精義傷寒論紀聞, 金匱要略記聞, 続々薬徴, 傷寒論系譜丸散方, 北洲遺稿, 北洲遺草あり.

諱^{いみな}は修夫, 北洲^{ほうしゅう}は号. 通称は道立, 後に正親と改めた. 本来の姓は青沼氏で, 吉益南涯^{よしますなんがい} [→第八十三] の家を継いだ. 22歳の時に吉益南涯に師事し, 南涯が老齢で子いなかったため, 請われて養子となった. 文化10年(1813年)6月, 南涯が亡くなったとき, 先生は26歳にして家業を継いで門弟を教育した. 弘化元年(1844年)には北越地方を遊歴し, 翌弘化2年(1845年)に再び金沢を訪ね, 弘化4年(1847年)3月, 金沢藩の侍医となって金沢に居を定めた. 数年後に中風を患い, 安政4年(1857年)8月に没した. 享年72歳. 金沢寺町国泰寺に葬られた. 著書に, 金匱要略精義傷寒論紀聞, 金匱要略記聞, 続々薬徴, 傷寒論系譜丸散方, 北洲遺稿, 北洲遺草がある.

第百三十九 賀来佐一郎 (かく さいちろう)

1799-1857 蘭方医, 本草学者, 島原藩医



名は佐之^{すけゆき}, 字は公輔^{あざな}, 佐一郎と通称す。寛政十二年に生まる, 年少して父の医業を学び, 十四歳, 帆足万里^{ほあしばんり}より学業を受け, 年二十四杵築^{さつき}に医業を開く。その後, 長崎に遊び, 蘭学^{よしおじょえん}を吉雄如淵及びシーボルトに就きて学ぶこと四年業成りて杵築に帰る。天保十四年島原侯の医員となり常に麻上下^{あさがみしも}を著し, 槍^{ちやく}を樹て往来せり。嘉永二年牛痘法を蘭医に受け偏く国中^{あまね}に行う, 安政四年^{ちし}致仕して, その十一月十八日島原に歿す, 享年五十九。著す所に, 多識図譜, 医原後世方意解, 治痘新書, 救荒本草, 詩文集, 家譜採葉記あり。

名は佐之^{すけゆき}, 字は公輔^{あざな}, 通称は佐一郎 (さいちろう。寛政 12 年 (1800 年) 生れ, 若くして父 [1] から医学を学んだ。14 歳, 帆足万里^{ほあしばんり} [→第百二十八] に指導を受け, 24 歳で杵築^{さつき} [現大分県杵築市] に開業した。その後長崎に遊学し, 吉雄如淵^{よしおじょえん} [吉雄耕牛 (第八十六) の末子, 権之助] およびシーボルトに師事し, 蘭学を 4 年間学んで修め, 杵築に帰った。天保 14 年 (1843 年) に島原藩医となり, 常に麻^{かみしも}の上下をまとい, 槍を立てて往来したという。嘉永 2 年 (1849 年), 蘭医から種痘法を学び藩内に普及させた。安政 4 年 (1857 年) に職を辞し, 同年 11 月 18 日, 島原にて没した。享年 59 歳。著作に, 多識図譜, 医原後世方意解, 治痘新書, 救荒本草, 詩文集, 家譜採葉記がある。

1. 父の賀来有軒^{ゆうけん}は豊後高田の儒医。佐之は長男。三男飛霞^{ひか}は, 全国を逍遙して薬草を研究し, 伊藤圭介, 飯沼慾斎^{よくさい} [→第百五十] と並ぶ幕末の本草学者で, 明治 11 年 (1878 年) 東京帝国大学小石川植物園取調掛となり, 近代植物学の父とされる。植物写生図に秀でた。

第百四十 杉田梅里(すぎた ばいり)

1817-1859 蘭方医, 杉田玄白の孫



諱^{いみな}は信, 字^{あざな}は成卿^{せいきやう}, 梅里^{ばいり}は其号なり. 文化十四年十一月十一日江戸浜町山伏井戸の邸に生まる, 二十歳の時坪井信道の門に入り医学を修め, 和蘭学を窮む. 天保十一年天文台の訳員に補せらる, 宇田川榕菴^{うだがわようあん}, 箕作紫川等^{みつくりしせん}と共に命を奉じて海上砲術全書訳述の業成る, 時に天保十四年なり. 弘化二年十一月父立卿歿す, 先生其禄^{りゆうけい}を襲ぎて, 藩公の侍医に任ぜらる. 嘉永二年済生三方の書を出版し, 大に公に行われたり. 安政元年

諱^{いみな}は信, 字^{あざな}は成卿^{せいきやう}, 梅里^{ばいり}は号. 文化 14 年 (1817 年) 11 月 11 日, 江戸浜町 (現日本橋浜町) 山伏井戸の邸宅に生まれた. 20 歳の時に坪井信道^{しんどう}の入門して医学を修め, 蘭学もきわめた. 天保 11 年 (1840 年), 天文台の翻訳係に任じられ, 宇田川榕菴^{うだがわようあん} [→第百十六], 箕作紫川^{みつくりしせん}らとともに命を受け, 海上砲術全書の翻訳事業を完成させた. 天保 14 年 (1843 年) のことである. 弘化 2 年 (1845 年) 11 月に父立卿^{りゆうけい} [1] が亡くなり, 家禄を継い

訳員を辞し、鉄砲洲に移り、風葉散人と号し、専ら砲術訓蒙を訳す、同三年幕府藩書調所〔校注：藩書調所の誤〕を設くるに当り、先生を挙げて教授職とし、俸米三十口、金二十両を給せられ、此歳十二月將軍家定公に見ゆることを許さる、藩臣にして謁するは特典なり。藩侯特に格を進めて禄五十石を加う、同六年心疾の證加り二月十九日歿す、僅に四十三歳。

先生は独り詩文を善くすることのみならず、又蘭文を綴ること自在にして玉川紀行二篇は最も名文なり。著す所に、済生三方、医戒、済生備考、治痘真訣、海上砲術全書、増補海軍砲術全書、砲術訓蒙、山砲略説野砲演習式、万宝玉手箱、内醫手術解剖刀式、理家必読あり。

で藩主の侍医に任ぜられた。嘉永2年(1849年)、済生三方を著し広く読まれた。安政元年(1854年)に翻訳係を辞して鉄砲洲に転居し、風葉散人と号して専ら砲術訓蒙の翻訳に当たった。安政3年(1856年)、幕府が藩書調所〔海外文献の研究、教育機関〕を設立した際、先生は教授職に抜擢され、俸禄として米30俵、金20両を支給された。同年12月、將軍家定公に拝謁することを許された。藩士が將軍に拝謁するのは異例の特典であった。藩主も特に進めて禄高50石を加えた。安政6年(1859年)、心臓病の症状があらわれ、2月19日に没した。享年43歳。

詩文に優れるのみならず蘭文を自在に綴ることができた。特に玉川紀行二篇は名文とされる〔2〕。著書に、済生三方、医戒、済生備考、治痘真訣、海上砲術全書、増補海軍砲術全書、砲術訓蒙、山砲略説野砲演習式、万宝玉手箱、内醫手術解剖刀式、理家必読がある。

1. 父の立卿^{りゅうけい}は、杉田玄白(→第八十六)の子、天文台訳員、初の蘭方眼科医。

2. オランダ語で書かれた紀行文。二篇からなる。居所の羽沢村(現渋谷区羽沢町)から徒歩で二子の渡し、溝の口を経て蔵敷の長安寺(現川崎市宮前区)に墓参して戻る路程が描かれている〔杉田玄白資料解題・日本医史学会雑誌 8:37,1958〕

1791-1859 蘭方医



名は経恭^{あざな}，字は子敬^{りゅうげん}，抱節は其号なり，又鳩窠^{かながわ}，柯集庵の別号あり，立愿は其通称なり．備前金川村の人，寛政三年に生まる，文化二年京都に出で，八年三月吉益南涯の門に入りて内科を学び，又賀川蘭齋^{かがわらんさい}に就きて産科を学ぶ，文化十一年四月華岡の門に入り，大阪に於て華岡鹿城を師として外科学を修め帰郷して開業す．文政十二年再び京都に出でて古益北洲^{よしますほくしゅう}〔校注：吉益北洲の誤〕に従遊す．門人來り学ぶもの千五百人に及ぶ．安政六年八月二十三日病で歿す，享年六十九．

著す所に，類聚集方，続類聚集方，補正類聚集方，医林類英，環翠叢談，鳩窠雜選傷寒髓，鍼灸提要，散花新書，抱節医言，同後集，方極集覽，観證弁疑補正，胎産新書，胎産余篇，敗鼓小録，橘黄漫筆医林摘要，神遺方傍註，思誠堂方極，瘡瘍新書，医学紺珠，医家碎玉執中館記あり．

名は経恭^{あざな}，字は子敬^{りゅうげん}，号は抱節．また別号として鳩窠^{かながわ}，柯集庵がある．立愿は通称．備前国金川村（現岡山県岡山市北区御津金川付近）の出身．寛政3年（1791年）生れ．文化2年（1805年），京都に出で，文化8年（1811年）3月に吉益南涯^{よしますなんがい}〔→第八十三〕に入門して内科を学び，さらに賀川蘭齋^{かがわらんさい}〔→第百一〕に師事して産科を学んだ．文化11年（1814年）4月には華岡に入門し，大阪で華岡鹿城^{はなおかろくじょう}〔→第九十五〕を師として外科を修め，帰郷して開業した．文政12年（1829年）には再び京都に出で，吉益北洲^{よしますほくしゅう}〔→第百三十八〕と交わり研鑽を積んだ．彼の門を訪れて学ぶ弟子は延べ1500人に及んだという．安政6年（1859年）8月23日病没〔1〕．享年69歳．

著作に，類聚集方，続類聚集方，補正類聚集方，医林類英，環翠叢談，鳩窠雜選傷寒髓，鍼灸提要，散花新書，抱節医言，同後集，方極集覽，観證弁疑補正，胎産新書，胎産余篇，敗鼓小録，橘黄漫筆医林摘要，神遺方傍註，思誠堂方極，瘡瘍新書，医学紺珠，医家碎玉執中館記がある．

1. 1858年に始まった「安政のコレラ」の治療に当たる中で斃れた，

1778-1859 本草学者



名は世孺^{あざな}，字は仲直^{ぼうよう}，亡羊と号す。京都の人，安永七年六月十六日生る，年十六小野蘭山に従い本草学を受く，其医術一家の説に局せず，又広く薬艸を探りて培養せり，安政六年十月十六日旧疾発して十一月二十七日卒す，享年八十二。著す所に，助字註釈備考薬名考，片言録，百品考，格致類編あり。

名は世孺^{あざな}，字は仲直^{ぼうよう}，亡羊と号した。京都の人，安永7年(1778年)6月16日生れ，16歳にして，小野蘭山^{おのらんざん}〔→第七十七〕の下で本草学を学んだが，その医術は一つの理論にだけ基づくのではなく，広く薬草を探し求めて栽培した。安政6年(1859年)10月16日，以前からの病が再発して11月27日没，享年82歳。著作に，助字註釈備考薬名考，片言録，百品考，格致類編がある。

第百四十三 館玄龍(たち げんりゅう)

1795-1859 華岡青洲に学んだ富山藩の外科医



名は成章^{あざな}、字は君慶^{げんりゅう}、北洋と号す、玄龍は通称なり。越中射水郡三十三箇村の人、寛政七年に生まれ、十四歳にして医道に志し、年十九華岡青洲の門に入る、時に文化十一年十一月二十二日なり。居ること八年にして其秘奥を受け京都に遊び更に江戸に僑居^{きようきよ}せり、年三十養父芸陵の病により帰省し、復出せず。安政六年十一月十日病んで歿す、時年六十五。著す所に、瘍科髓、内科髓傷寒論活義、孔富秘訣、封菲医談、北洋漫筆あり。

名は成章、字(あざな)は君慶^{げんりゅう}、号は北洋。玄龍は通称。越中の射水郡三十三箇村(現富山県射水市付近)の出身で、寛政7年(1795年)生れ。14歳にして医学を志し、19歳の時、文化11年(1814年)11月22日に華岡青洲[→第百五]に入門した。8年間学んで奥義を授かり、のちに京都に遊学し、江戸に居を構えた。30歳の時、養父の芸陵の病を機に帰郷し、再び江戸に出ることはなかった。安政6年(1859年)11月10日病没、享年65歳。著作に瘍科髓、内科髓傷寒論活義、孔富秘訣、封菲医談、北洋漫筆がある。

第百四十四 緒方洪庵(おがた こうあん)

1810-1863 大阪の蘭方医, 適塾, 大坂除痘館を開いた



名は章^{あきら}, 字は公裁^{あざな}, 備中足守藩の人, 先生身体羸弱^{るいじやく}武技に勝えず, 常に方伎の志あり, 文政七年, 年十五父に従いて大阪藩邸に在り, 中天游^{なかつてんゆう}に就て西洋医術を学ぶ. 天保二年東遊して坪井信道^{しんどう}の門に入り研鑽怠らず, 学大に進む, 又宇田川玄真^{おおい うだがわけんしん}に就て教を受け, 後七年長崎に出でて蘭人に親炙^{しんしや}し, 凡そ三年にして業を大阪に開く, 時に年二十七. 生徒日に衆し, 藩侯擢^{ぬきん}でて侍医となし俸八口を受く. 文久二年幕府徴^{ちよう}す, 由て江戸に來り侍医となり, 医学所頭取^{とうどり}となる, 文久三年六月十日病で歿す, 年五十四.

名は章(あきら), 字は公裁^{あざな}. 備中足守藩(現岡山県岡山市付近)の出身. 体が弱く武芸には秀でず, 常に医術を志した. 文政7年(1824年), 15歳の時, 父に従って大阪藩邸に滞在し, 中天游^{なかつてんゆう}に西洋医学を学んだ. 天保2年(1831年), 東へ遊学して坪井信道^{しんどう}の門に入り, 研鑽を積み大いに進歩した. また宇田川玄真^{おおい うだがわけんしん}[→第百二]にも師事した. 7年目に長崎へ渡り, オランダ人に直接学び, およそ3年後に大阪に開業した[1]. 27歳であった. 門下生は日ごとに増え, やがて藩主に抜擢されて侍医となり, 俸禄8口を受けた. 文久2年(1862年), 幕府に召し出され江戸に赴き, 侍医となって医学所頭取^{とうどり}を務めた. 文久3年(1863年)6月10日, 病没, 享年54歳.

1. 天保9年(1838年), 開業と同時に適塾を開き, 福澤諭吉初め多くの逸材を輩出した. 嘉永2年(1849年), 江戸に先立って開いた大坂除痘館は, 大阪大学医学部の前身となった

第百四十五 大槻俊齋 (おおつき しゅんさい)

1806-1862 蘭方医, 西洋医学所初代頭取



名は肇^{はじめ}, 字は仲敏^{あざな}, 弘淵^{ものう}と号す, 陸前桃生郡赤井村の人, 出でて沸谷氏を嗣ぎ医たらしむ, 時に年十六なり. 先生窃^{ひそ}に天下の名医たらんと期し, 父に其志を告ぐ, 父之を許さざりしを以て兄龍之進^{ひそ}私かに江戸^{はし}に奔らしめ川越侯の医官高橋尚齋^{たかはししやうさい}の家に仕えて僮僕となり, 閑^{ぬす}を偷みて書を読む, 尚齋其志を感じ門生となし, 更に手塚良仙^{てづかりやうせん}につかしむ. 後数年良仙資を給して天保八年長崎に遊学せしめたり. 緒方洪庵も亦茲にあり相俱

名は肇^{はじめ}, 字は仲敏^{あざな}, 号は弘淵^{ものう}. 陸前桃生郡赤井村 (現宮城県東松島氏付近) の出身 [1]. 16歳のとき沸谷家を継いで医業を営むことになった. ひそかに天下の名医になることを志し, その思いを父に伝えたが許されなかった. そこで兄の龍之進^{ひそ}が彼を密かに江戸へ向かわせ, 川越藩医の高橋尚齋^{たかはししやうさい}の下僕となった. 閑^{ぬす}を見つけてはこっそり書物を読むのを見た尚齋はその志に感じて門下生とし, さらに手塚良仙^{てづかりやうせん}に託した. 数年後,

に研磨せり、長崎に在ること数年、江戸に帰り、天保十一年長沼侯に聘せられて医官となれり。良仙女を以て之に妻し、下谷練堀小路に業を開かしむ。弘化二年三月神田に火災あり、獄舎の四近に迫りたるを以て囚人を開放す、時に高野長英捕れて永囚の身となりしが、長英獄を出でて帰る意なく、俊齋の家に入り強て衣服金銭を借り、其往く所を知らず、此事終に警吏の知る所となり、百日閉門の刑に処せらる。

俊齋セリウス及モストの外科書より銃創療治の要領を抄訳して銃創瑣言一冊を著せり、江川太郎左衛門英龍此書を見て当今の急務なるを嘆称し、自ら官の允許を乞い上梓せり、時に安政元年八月なり。天保十二年痘癰を施し良好を得たり、之を都下種痘の濫觴とす。安政四年八月神田於玉池に同志と共に種痘所を建つ、万延元年十月徴されて官医となり、種痘所頭取に補せらる、翌年西洋医学所と改む、之を西洋医学公行の始とす。文久元年十一月十一日胃硬結腫に罹り、自ら起ざるを知り、家人に告ぐ、文久二年四月九日終に溘焉として逝く、享年五十七、本郷区駒込千駄木町総禅寺に葬る

良仙は彼に資金を与え、天保8年(1837年)に長崎へ遊学させた。そこには緒方洪庵[→第百四十四]もあり、ともに研鑽を積んだ。数年間の長崎修学を経て江戸へ戻り、天保11年(1840年)に長沼藩(現長野県長野市の一部)に招かれて藩医となった。その後、良仙は自分の娘を嫁がせ、下谷練堀小路(現千代田区神田練堀町)に開業させた。弘化2年(1845年)3月、神田で大火があり、牢屋敷にも火の手が迫ったため囚人を一時解放した。このとき囚人だった高野長英[→第百二十四]は牢に戻らず、俊齋の家で入り込んで衣服や金銭を無心して、そのまま行方をくらませた。この件がやがて役人に知られ、俊齋は百日間の自宅謹慎を命じられた。

俊齋はセリウスおよびモストの外科書から銃創療治の要点を抄訳し、銃創瑣言一冊を著した。江川太郎左衛門英龍はこの書を見て、時勢に応じた急務と感じ入り、安政元年(1854年)8月、自ら官許を得て出版させた。天保12年(1842年)、種痘を施行し、良好な結果を得た。これは江戸における種痘の最初の事例とされる。安政4年(1857年)8月には神田於玉池に同志とともに種痘所を開設し、万延元年(1860年)10月、幕府から召されて官医となり、種痘所頭取に任じられた。翌年これは西洋医学所と改称され、西洋医学の公的な普及の端緒となった[2]。文久元年(1861年)11月11日、胃の硬結腫を患い、自ら不治を悟って家人に告げ、文久2年(1862年)4月9日、ついに急逝した。享年57歳。墓は本郷区駒込千駄木町の総禅寺にある。

1. 同姓、同郷の大概玄沢と血縁関係はない。

2. 西洋医学所の初代頭取。西洋医学所は東京大学医学部の前身となり、初代医学部長とされることがある。

第百四十六 箕作阮甫(みつくり げんぽ)

1799-1863 蘭学者, 蕃書調所首席教授



名は虔儒^{けんじゆ}, 字は庠西^{あざな}, 紫川又は逢谷と号す。津山の^{しょうせい}人, 寛政十一年九月六日生まる, 長ずるに及びて京都に遊び, 医書を研究し, 文政五年津山藩侍医^{てき}に擢せられ, 後藩公に従い江戸に祇役す。此時宇田川榛齋^{しえき}の西洋医学の説を聴き, 改めて専ら洋学を攻む, 数年ならずして業大^{おおい}に進む, 天保十年幕府天文台訳員に補せられ, 安政三年洋書調所教授^せに挙げられ, 文久二年幕籍に列なる, 西洋学者の土籍に列するもの、初めなり。文久三年六月十七日病んで終る, 得年六十五, 白山浄土寺に葬る。

名は虔儒^{けんじゆ}, 字は庠西^{あざな}, 号は紫川または逢谷^{しせん}(ほうこく)。津山(現岡山県津山市付近)の出身。寛政11年(1799年)9月6日生れ。成長して京都に遊学し, 医学書を研究した。文政5年(1822年, に津山藩の侍医に抜擢され, その後藩主に従って江戸に仕えた。この時, 宇田川榛齋^{うだがわしんさい}[→第百二]の西洋医学の話聞き, 改めて洋学(西洋学問)に専念し, 数年のうちにその学業が大いに進んだ。天保10年(1839年)には幕府天文台の翻訳員となり, 安政3年(1856年)に洋書調所^{ようしょしらべしょ}[1]の教授に昇進し, 文久2年(1862年)に幕府の正式な役人となった。これは洋学者としては初であった。文久3年(1863年)6月17日病没, 享年65歳。白山浄土寺に葬られた。

1. 海外文献の研究, 教育機関。洋学所^{ばんしよしらべしょ}, 蕃書調所, 洋書調所, 開成所と相次いで改称され, 明治維新後は開成学校となり, 東京大学の前身となった。

第百四十七 鳩野宗巴(七代)(はとのそうは)

1815-1863 外科医, 熊本藩医



文化十二年二月二日熊本に生まる, 肥後神童の名あり, 幼名麒二郎と云い, 諱は宗俊^{いみな あざな}, 字は明卿, 壺井と号す. 又家塾を年十二藩校時習館^{じしゅうかん}に入る, 年十六にして其父病あり儒学を廃て、医学を修む, 後ち豊後竹田の植村文達^{むねとし}に就き華岡流外科を学び, 其術に熟し, 伊予の鎌田, 大阪の華岡と並称して関西の三外科大家と呼ぶる. 又家塾を興し, 生徒を教育し, 牛痘の接種を藩内に奨励す. 文久三年十一月十四日歿す, 享年四十九.

文化 12 年 (1815 年) 2 月 2 日, 熊本生れ [1]. 肥後の神童と呼ばれた. 幼名は麒二郎, 諱は宗俊^{いみな むねとし あざな}, 字は明卿, 号は壺井. 12 歳にして藩校の時習館^{じしゅうかん}に入ったが, 16 歳の時父が病に臥したためため儒学の道を断念し, 医学を学び始めた. その後, 豊後竹田の植村文達^{むねとし}に師事して華岡流外科を学び, 習熟した. やがて伊予の鎌田 [鎌田玄台], 大阪の華岡と並ぶ関西の三大外科と呼ばれるほどになった. また私塾を開いて門人を教育し, 種痘を藩内に広めた. 文久 3 年 (1863 年) 11 月 14 日没, 享年 49 歳.

1. 初代 (→第三十二) から八代まで同じ鳩野宗巴を名乗った.

第百四十八 賀川蘭台(かがわ らんだい)

1796-1864 産科医.



名は満崇，字は子徳，蘭基と号す。名は満崇，字は子徳，蘭基と号す。文政六年三月年二十八にして典薬寮^{かづさのだいじょう}医生に補せられ，正七位下に叙し上総大掾に任ぜらる。嘉永五年三月典薬寮医員に補せられ，尋て女医博士^{にょいはいかせ}となり，従五位下に叙し，筑前守に遷任す。文久四年二月一日歿す，享年六十九。纏頭絹^{てんとうけん}の発明あり。

名は満崇，字は子徳，号は蘭基。文政6年(1823年)3月，28歳にして典薬寮の医師に補され，正七位下に叙されて上総大掾に任じられた。嘉永5年(1852年)3月に典薬寮の医員に補され，やがて女医博士となり，従五位下に叙されて筑前守に遷任された。文久4年(1864年)2月1日没，享年69歳。纏頭絹^{てんとうけん} [1] を発明した。

1. 纏頭絹。詳細不明。鉗子牽引時に児頭を保護する被覆と推測される。

1799-1865 和方医



父吉五郎賭博遊俠を以て事とし、ぐわん吉と呼ぶ、先生は其第一子にして寛政十年三月廿一日駿府に生まる、先生年二十一、家を弟に譲り、江戸に出て和蘭医方を学ぶ、貧苦に堪え精勤す。一時病を以て家に帰り、二十四歳再び江戸に來り小篠先生に医を問ひ傍ら開業す。二十六歳家に帰り業を開く、文政六年二月なり。明年又江戸に出て転じて大阪に行き、橋本曇齋どんさいに医事を問ひ、翌八年郷に歸り駿府安西に居住す。天保七年十二月七日豁然かつぜんとして皇国医方しりぞに志し、医方正伝初篇二卷を著す、文中漢方家を斥くる太甚はなはだしきを以て官開校を許さず。慶応元年十一月二十四日病を以て歿す、享年六十七。静岡市安西一丁目瑞光寺に葬る。著す所に西学便覧、西学断診候精要、内景一覽、経験大同類聚方、薬品名会経過薬録、疫疾先防、群方雑記、薬名韻譜、本草類聚證、神道明弁、圀録あり。

父吉五郎は博打打ちの遊俠人で、ぐわん吉と呼ばれていた。先生はその長男で、寛政10年(1798年)3月21日、駿府生れ。21歳のとき家を弟に譲り、江戸に出てオランダ医学を学んだ。貧苦に耐え学問に励んだ。病気のためいったん帰郷したが、24歳にして再び江戸へ出て、小篠某に師事しながら医業を学び、開業した。26歳で帰郷し、開業した。これは文政6年(1823年)2月のことである。翌年再び江戸に出、さらに大阪へ移って橋本曇齋どんさいに医学を学び、文政8年には郷里に戻って駿府安西に居を構えた。天保7年(1836年)12月7日、突然皇国医方[1]を志し、医方正伝初篇2卷を著した。しかしこれは漢方医を強く批判するものであったため、官許を得て開校することはできなかった[2]。慶応元年(1865年)11月24日、病没、享年67歳。墓は静岡市安西一丁目の瑞光寺にある。主な著作に、西学便覧、西学断診候精要、内景一覽、経験大同類聚方、薬品名会経過薬録、疫疾先防、群方雑記、薬名韻譜、本草類聚證、神道明弁、圀録がある。

1. 皇国医方。和方ともいう。日本古来の民間療法などを重要視する。
2. 外国医学(漢方、蘭方)は効なく、日本の医学は神代から受け継がれた薬方を神髄に従って行うことが正しいとした。

第百五十 飯沼慾齋(いいぬま よくさい)

1782-1865 本草学者，初めてリンネ分類を採用



名は長順，欲齋は其号なり，幼名本平，後専吾と改む，伊勢亀山の西村新右衛門の二男なり．七八歳のとき出でて大都に学ばんことを乞う父母之を許さず，十二歳のとき意を決して単身出でて叔父美濃大垣飯沼長意に投ず，後ち同姓飯沼長頭ちやうけんの家に依食し，孜々精励，比年にして学業大に進む．十四五歳頃小野蘭山翁の濃州に来るに際し，翁の門に入り本草学を修め随所常に従つて跋涉採薬し，其学頓に進む．十八九歳にして京都に遊び，福井丹波守の門に入り医を学び，日夜勉強，学成りて大垣に帰る．次で長頭ちやうけんの嫡女と婚し箕裘を継

本名は長順，欲齋は号．幼名は本平，後に専吾と改めた．伊勢亀山（現三重県亀山市付近）の西村新右衛門の次男．7，8歳の頃に都会で学問をすることを望んだが，両親は許さなかった．12歳にして意を決して単身で家を出て，叔父である美濃大垣（現岐阜県大垣市付近）の飯沼長意を訪ね，その後同姓の飯沼長頭ちやうけんの下に暮らしながら勉学に励み，年とともに学問が大いに進んだ．14，5歳ごろ，小野蘭山〔→第七十七〕が美濃を訪れた時に入門し，本草学を修め，常に同行して分け入って薬草を採集し，学問は急速に進歩した．18，

ぎ名を龍夫と改む。先生の友吉安三栄、蘭医の治術^{はるか} 迥に漢方に優ることを説く、先生之を聞き悟る所あり、断然意を決し家財什具を売り、又友人に謀り書籍講を作りて学資を募り、妻子を親族に托して江戸に出で宇田川榛齋^{うだがわしんさい}に就て蘭学を修む、時に年二十八歳なりき。又傍ら藤井方亭^{ふじいほうてい}に就きて学ぶ。方亭の家は下谷^{したや}に在り、宇田川塾を距ること里余朝に出でて夕に帰る、寒暑風雪会て一日も通学を怠りしことなし、又絶て他の娯楽^{はな}に神思^{おおい}を縦たず、浅草観音の如きも師家藤井通学の日、雷門前を過ぎしこと幾十回なるも、終に賽詣^{さいけい}を果さざりしと。学大に進み郷に帰りて蘭学を唱え、更に医業を始む、声名四方に馳せたり。先生年五十にして義弟健介に譲り、自ら隠退して城西長松村に別業を築きて移り、皇朝草木図説三十巻を著わす、時に七十余歳なり。慶応元年五月五日家に歿す、享年八十四、大垣本街円覚寺^{せんえい}先塋の次に葬る。

9歳で京都を訪れ、福井丹波守の門に入り医術を学び、日夜努力し学問を修めて大垣に帰郷した。長頭の嫡女と結婚し家業を継ぎ、名を龍夫と改めた。友人の吉安三栄から蘭医の治療が漢方により遙かに優れることを聞いて思うところがあり、決然として家財を売り、友人と共に書籍講^{うだがわしんさい}を作^うって学資を募り、妻子を親族に預けて江戸に上り、宇田川榛齋〔→第百二〕のもとで蘭学を修めた。この時28歳であった。また藤井方亭^{ふじいほうてい}にも師事したが、下谷^{したや}の方亭の家から宇田川塾の距離は一里余りもあり、朝早く出て夜遅く帰り、寒暑風雪をものともせずに通った。娯楽に心を奪われることなく、通学の途上雷門の前を何十回も通ったが、浅草観音に詣ることなかった。学業は大いに進み、郷里に帰って蘭学を広め、医業も始め、その名声は広まった。50歳で義弟の健介に家督を譲り、自らは隠居し城西の長松村に別居し、皇朝草木図説三十巻〔1〕を著したのは、既に70余歳の時であった。慶応元年(1865年)5月5日、自宅で没、享年84歳。大垣の円覚寺で祖先の墓の隣に埋葬された。

1. 皇朝草木図説。リンネの分類法を日本で初めて採用した植物図譜。1,250種を収載。生前には草部20巻のみ出版され、全40巻の刊行が成ったのは1977年。

第百五十一 三宅良齋 (みやけ ごんさい)

1817-1867 蘭方医. 英国人医師の医学書を翻訳.



名は温^{あざな}, 字は子厚, 肥前国南高来郡北有馬村の人なり, 十四歳にして父を喪い, 長崎に出でて榎林栄建の門に入り医を学ぶこと八年, 天保十二年歳二十二, 江戸に來り薬研堀^{やげんぼり}に卜居し, 父の名を襲^{おそ}いて英齋と称し, 医を以て行わる. 明年十月下総銚子港に移り, 弘化元年三月堀田侯に聘せられ下総の佐倉に赴く, 安政五年江戸西洋医家五十余人と相共に社を結びて種痘館を建つ. 英医合信^{ホブソン}の著す西医略論, 内科新説, 婦嬰新説を翻刻して世に^{おこなわ}る. 六年土佐侯に召さる, 文久年医学所教授となれり. 慶応四年七月三日病で本所の家に歿す. 本郷区駒込願行寺^{ひいず}に葬る, 年五十二, 今の秀先生はその子なり. 後ち墓を谷中天主寺葬地に移す.

名は温^{あざな}というで, 字は子厚, 肥前国南高来郡北有馬村 (現長崎県南島原市付近) の出身. 翌年十月, 下総銚子港に移り, 弘化元年三月には堀田侯に招かれて下総の佐倉へ赴いた. 安政五年には江戸の西洋医家五十余人と協力して社を設立し, 種痘館を建てた. 英国人医師合信^{ホブソン} [1] の著した西医略論, 内科新説, 婦嬰新説を翻訳出版し, 世に広めた. 安政6年 (1859年), 土佐侯に召し出され, 文久年間 (1861-64) には医学所教授となった. 慶応4年 (1868年) 7月3日, 本所の自宅で病没, 本郷区駒込願行寺^{ひいず}に葬られた. 享年52歳. 現在の三宅秀先生 [2] はその子にあたる. 後に墓所を谷中天主寺の墓地に移した.

1. ホブソン (Benjamin Hobson, 1816-73), 合信はホブソンの中国名. マカオで宣教師, 医師として活動しながら医学書を執筆した. これを中国人医師が中国語訳したものを, 三宅良齋が訓点翻刻を加えて漢文訳した.

2. 三宅秀^{ひいず} (1848-1938). 東京大学病理学教授, 初代医学部長. 肝硬変の三宅分類で知られる病理学者三宅仁^{まさし}は孫.

第百五十二 桑田立齋(くわた りゅうさい)

1811-1868 蘭方医, 小児科医. 7 万人以上に種痘を行った



名は和, 字は好爵, 越後新発田^{し ば た}村松正親^{むらまつまさちか}の第二子なり。年十八, 江戸^{お ー い}に來り坪井誠軒^{せ い け ん}の門に入り居ること多年, 学大に進む, 天保十二年正月誠軒の媒にて桑田玄真^{くわ た げ ん し ん}の嗣となり, 深川万年橋畔に別居し医業を開く。養父玄真の人痘種法を得て施すこと数百人に及ぶ, 後ち牛痘種法を知る, 偶々^{た ま た ま}嘉永二年蘭医モーニツクの齋^{も たら}らせし牛痘苗の長崎に於て奏効し, その伝うる所の苗を得て

名は和で, 字は好爵。越後新発田^{あ ざ な}藩^{し ば た} (現新潟県新発田市付近)の村松正親^{むらまつまさちか}の第二子。18歳のときに江戸に出て坪井誠軒^{せ い け ん} [坪井信道]に入門し, 長年学んで学問は大いに進んだ。天保12年(1841年)正月, 誠軒の仲介で桑田玄真^{くわ た げ ん し ん}の跡継ぎとなり, 深川万年橋の近くに別居して医業を始めた。養父玄真から人痘法を受け継ぎ, 何百人もの人に施した。後に牛痘法について知った。

子児に接種せし以来、連綿保続し、二十年間一日の如く痘前の小児を見れば則ち其家に於て施術し、一心十万児に及さんことを期せり。

天保年間硫黄浴を作り疥癬患者に施し、又沃陣浴を作り梅毒患者に施す。安政四年蝦夷地痘瘡流行す、官命あり先生、蝦夷に赴き屢々危難を冒し全蝦夷を跋涉し、三ヶ月間に六千余人に種痘を施し、十一月四日江戸に歸れり。官其功を賞し、金二百五十兩を賜う。

文久三年七月都下麻疹大に流行し、加うるに虎列刺大に猖獗を究め、痘苗將に絶えんとす、先生の困苦極めて甚し、日夜思慮を勞し辛じて其苗を維持することを得たり。慶応三年六月偶々中風症に罹り半身不随にして治せず、翌四年七月廿七日遂に歿す、享年五十八。此時まで自ら下したる種痘児既に七万余人に及びたれども、十万児を期せし素志を遂げざるを憾とし、種痘針を手にして瞑目せりと、浅草橋場法源寺に葬る。

先生嘗て済幼院(育児院)の設立を企て、安政三年上野門主により之を官に請いしも、遂に実施するに至らざりき。著す所に牛痘発蒙、引痘要略解、愛育茶譚、三済私話、済幼問答、済幼院建設意見書あり。

ちょうど嘉永2年(1849年)に蘭医モーニックが持ち込んだ牛痘苗が長崎で成功し、そこから伝わった痘苗を手に入れて子供に接種したのを機に、以降20年間絶えることなく、種痘を受ける子供を見れば家に赴いて施術し、十万人の子に施すことを目指した。

天保年間(1830-44)には硫黄浴を作り疥癬の患者に、またヨード浴を作り梅毒の患者に施した。安政4年(1857年)、蝦夷(北海道)で天然痘が流行し、官命を受けて赴き、幾多の危険を乗り越え蝦夷全域を巡り、3ヶ月で6千人以上に種痘を行い、11月4日に江戸へ歸った。その功績により、250兩を賜った。

文久3年(1863年)7月、江戸で麻疹が大流行し、さらにこれらも大流行した。種痘苗はほとんど絶え、先生は困難の極みの中で日夜心を砕き、何とか苗を維持した。慶応3年(1867年)6月、中風で半身不随となり、翌4年(1868年)7月27日没、享年58歳。自ら施した種痘児は7万人を超えたが、10万人の志を果たせなかったことを心残りとして、種痘針を手にしたまま瞑目したという。浅草橋場の法源寺に葬られた。

先生はかつて育児院(済幼院)の設立を計画し、安政3年(1856年)に上野門主を通じて願したが、実現することはなかった。著作に、牛痘発蒙、引痘要略解、愛育茶譚、三済私話、済幼問答、済幼院建設意見書がある。

1797-1868 広島^{あさな}の蘭方医



安芸新庄の人、寛政九年十二月十日生まる、幼にして名は精、又惟一、字は子精、六々堂、玄花散人、趣叟と号す。仏門に入りしが、出て他郷に奔り、文化四年新宮涼庭の広島に淹留するを聞き、蘭医方を聞き医に志せり、時に文化十三年大阪に出て、十四年涼庭に面接し、福井棣園に師事し、文政六年帰郷して医業を開く、同八年十一年長崎に赴きシーボルト及び吉雄権之助に従いて蘭医学を脩め、同十一年伊予に遊ばんとし、海路、船難破し、漸くにして宇和島の漁夫に救われ遂に其地に留まりて医療を施せり。十一月大阪に出で、天保十三年十一月安芸竹原に帰り^{ていそう}趣叟と号し再び出でず。明治元年九月十七日病んで歿す、年七十二。竹原町不老長生寺に葬る。著す所に、用薬便覧、变通三十方、種痘新書、種痘実験録、薬草芸法、瘍科精義、異法産論、分離学律、処方律、西洋医事弁惑、三十六方口訣、六々堂薬例、六々堂療法家言方意口訣、眼療提耳、蘭書訣記、たれをかも、弁髦篇類鶯篇あり。

安芸新庄(現広島県北広島町付近)の出身で、寛政9年(1797年)12月10日生れ。幼名は精、または惟一、字は子精、号は六々堂、玄花散人、^{あさな}趣叟などと名乗った。一度仏門に入ったが、還俗して他国へ赴いた。文化4年(1807年)、新宮涼庭[→第133]が広島に逗留していると聞き、蘭方医学に興味を持って医を志した。文化13年(1816年)大阪へ行き、翌年涼庭に直接会い、さらに福井棣園に師事した。文政6年(1823年)、帰郷して開業した。文政8年(1825年)と11年(1827年)に長崎に赴き、シーボルトや吉雄権之助[吉雄耕牛(→第八十六)の子]から蘭医学を学んだ。同年伊予に渡ろうとして船が難破し、宇和島の漁師に救われ、その地に留まって医療を施した。同年の11月に大阪に戻った。天保13年(1842年)11月、安芸竹原に帰郷し、^{ていそう}趣叟と号した。以後は郷里を出ることはなかった。明治元年(1868年)9月17日、病没、享年72歳。竹原町の不老長生寺に葬られた。著書に、用薬便覧、变通三十方、種痘新書、種痘実験録、薬草芸法、瘍科精義、異法産論、分離学律、処方律、西洋医事弁惑、三十六方口訣、六々堂薬例、六々堂療法家言方意口訣、眼療提耳、蘭書訣記、たれをかも、弁髦篇類鶯篇がある。

第百五十四 塩田順庵(しおだ じゅんあん)

1805-1871 函館の医療に尽力した儒医



名は泰^{あざな}，字は順庵^{じゅんあん}，松園と号す。金沢の人，本姓宮河，江戸に來り，増島蘭園^{ますじまらんえん}の門に入り経史を講習し，家に歸り医を業とす。父歿す，幕府医官塩田宗温嗣なきを以て松園を強て養子とす。安政二年幕府の命に応じて函館に居ること六年，学校を興し，病院を建て其他經營する所多し。文久二年召れて江戸に歸り寄合^{よりあい}に進み，医学教諭を兼ね，後処士となり，再び函館に干役^{かんやく}す，幾もなく東京に歸り，明治二年二月七日病で家に歿す，享年六十七。

名は泰^{あざな}，字は順庵^{じゅんあん}，号は松園。金沢の出身。本姓は宮河。江戸に出て増島蘭園^{ますじまらんえん}門下で経書(けいしょ)，史書を学び，歸郷して医業を営んだ。父が没し，幕府医官の塩田宗温に跡継ぎがいなかったため，強く願って養子とした。安政2年(1855年)，幕府の命令で函館に6年間滞在し，学校を創設し，病院を建てるなど多くの事業を手がけた[1]。文久2年(1862年)，召されて江戸に戻り，寄合医師の身分となり医学教諭も兼任した。その後公職を辞して，再び函館の行政に関わったが，ほどなくして東京に戻り，明治2年(1869年)2月7日に自宅で病没，享年67歳。

1. 箱館医学所(現在の市立函館病院の前身)を創立した(1859).

第百五十五 広瀬元恭 (ひろせ げんきょう)

1821-1870 蘭学者。兵書の著作も多い



名は元恭^{げんきょう}、字は礼卿^{あざな}、藤圃、又天目山人と号す。甲斐^{とうだ}藤田村の人なり、年十五江戸に出て坪井誠軒の門に入り蘭医方を修む、又野田笛浦^{のだてきほ}に従て詩文を学ぶ、居ること十余年にして京幾^{けいき}に遊ぶ、後留て業を開く、諸生集まるもの日に多し。津侯の聘に応じ医員となり京に居て二十四口を食む。兵書を訳し、遙に之を侯に献ず、慶応初年砲壘を八幡山崎に築く。明治維新の際、京都病院の長たり。明治三年十一月十七日終に其家に歿す、享年五十、堀河本国寺に葬むる。

著す所に、理学提要、知生論、西医脈鑑三卷、刀圭余事一卷、新訂牛痘奇法一卷、人身窮理三十卷、解剖詳弁八卷、病理正解、窮理対問、三物名義、築城新法、諸器図解、地理志、砲術新書、時習堂実試説あり。

名は元恭^{げんきょう}、字は礼卿^{あざな}、藤圃、天目山人と号した。甲斐^{とうだ}国藤田村（現山梨県中巨摩郡）の出身。15歳で江戸に出て坪井誠軒〔坪井信道〕の門下となり蘭医学を学び、更に野田笛浦^{のだてきほ}について詩文を学んだ。十数年の江戸生活の後、京都に赴き、その後留まり開業した。門人は日々増えた[1]。津藩主の招聘に応じて医員となり、京都に在住し俸24口の身分となった。兵書を翻訳して藩主へ献じ、慶応初年(1865年)に八幡山崎に堡壘を築いた[2]。明治維新には京都病院長を務めた。明治3年(1870年)11月17日、自宅で没、享年50歳。堀河本国寺に葬られた。

著作に、理学提要、知生論、西医脈鑑三卷、刀圭余事一卷、新訂牛痘奇法一卷、人身窮理三十卷、解剖詳弁八卷、病理正解、窮理対問、三物名義、築城新法、諸器図解、地理志、砲術新書、時習堂実試説がある。

1. 時習堂を開き、医学、蘭学を講じた。門下に佐野常民（初代日本赤十字社長）らがいる。

2. 津藩主が京都八幡山崎に堡壘築造を命じられた際、勝海舟とともにこれにあたった。

1800-1871 初めて奥医師にあがった蘭方医



名は淵、字は伯寿、沖齋と号す。肥前神崎郡仁比山村の人、本姓執行、寛政十二年十二月二十八日生まる、年十六、医学に志し、年廿三にして佐賀に出て蘭書を学ぶ、二十四歳のとき長崎に出て、和蘭通詞猪股伝右衛門〔校注：伝次右衛門の誤〕及びシーボルトに就き蘭学及び医学を伝習す。文政九年猪股妻娘兩人の出府に付添い江戸に出で、本所番場町に住み後ち同十二年下谷長者町に転住し、天保四年三たび下谷和泉橋通徒士町に移り医業を開く。同十一年伊東家に由緒あるにより伊東と改む。同十二年鍋島家に召され禄七人口を受く。

弘化二年鍋島閑叟公^{かんそう}とオランダより始めて牛痘苗を取寄す、玄朴娘春子に接種して後ち同公嬢貢子^{みつこ}に種しに兩人とも良結果を得たり。爾來該苗を以て自宅に於て一般人民に接種す。後ち和泉橋通徒士町に広大な種痘所を建設するに至れり。

安政五年七月二日將軍家定公より召され高三十人扶持下され、奥医師仰付らる。同年十一月二十三日法橋に敍し同日法眼に敍せらる、万延二年十二月十六日法印に敍せられ長春院と称う。文久二年三月三日医学所取締を命ぜられ、慶応四年二月十七日願の通隠居聞届けらる。明治四年一月二日死亡す、享年七十二歳。

名は淵、字は伯寿、号は沖齋。肥前国神崎郡仁比山村(現佐賀県神崎市)の出身で、もとの姓は執行。寛政12年(1800年)12月28日生れ。16歳にして学を志し、23歳の時に佐賀に出て蘭書を学んだ。24歳の時に長崎で、通詞の猪股伝次右衛門およびシーボルトに、蘭学と医学を習った。文政9年(1826年)に猪股の妻と娘の二人の江戸出府に付き添い江戸に行き、本所番場町(現墨田区本所付近)に住んだ。文政12年(1829年)に下谷長者町(現台東区上野の一部)に転居し、天保4年(1833年)に再び下谷和泉橋通徒士町(現台東区台東、同上野の一部)に移り開業した。同11年(1840年)に伊東家との縁から姓を伊東に改めた。同12年(1841年)に鍋島家に召されて禄七人扶持を受けた。

弘化2年(1845年)に鍋島閑叟公^{かんそう}がオランダから牛痘の痘苗を初めて取り寄せ、玄朴の娘春子、後に同公の嬢貢子^{みつこ}に接種し、いずれも好結果であった。以来この痘苗を使って自宅^{いずみぼしどおりおかちまち}で一般の人々に種痘を施した。やがて和泉橋通徒士町に広大な種痘所を設けた。

安政5年(1858年)7月2日、將軍家定公に召されて高三十人扶持を下され、奥医師に任命された[1]。同年11月23日に法橋、同日法眼に叙せられた。万延2年(1861年)12月16日、法印に叙せられ、長春院の号を賜った。文久2年(1862年)3月3日に医学所取締を命じられ、慶応4年(1868年)2月17日、願いにより隠居が認められた。明治4年(1871年)1月2日没、享年72歳。

1. 家定が重症の脚気に罹り、伊藤玄朴、戸塚静海の2人が、蘭方医として初めて奥医師に任じられた。

第百五十七 川本幸民(かわもと こうみん)

1810-1871 蘭方医, 日本の化学の祖



名は裕^{ゆたか}, 裕軒^{ゆうけん}と号す, 通称幸民^{こうみん}, 摂津三田^{さんだ}の人, 十八医を学び, 後ち江戸に出でて足立長雋^{あだちちやうしゆん}の塾に寓し, 蘭学を修む, 後坪井誠軒^{せいいけん}の門に入り切磋四年学大(おい)に進み, 京阪に遊ぶ. 天保五年九鬼侯^{くき}の医官となり, 侯に従て再び江戸に來り, 芝露月街^{しばろうげつちやう}に卜居して医業を開く. 安政三年幕府洋書調所教授となり, 文久二年幕籍に列す, 明治元年三田に歸り, 明治三年又東京に來り, 翌四年六月一日病を以て其家に歿す.

著す所に, 気海観瀾広義, 遠西奇器述, 理学原始, 地球理説, 舍密読本, 舍密真言, 化学初教, 化学通, 依百乙人身窮理, 藥治溯原, 硝石考, 暴風説, 汽船説あり.

名は裕^{ゆたか}, 号は裕軒^{ゆうけん}, 幸民^{こうみん}は通称. 摂津国三田^{さんだ} (現兵庫県三田市) の出身で, 18歳で医学を学んだ. 後に江戸に出て, 足立長雋^{あだちちやうしゆん}の塾に住み込み, 蘭学を修めた. さらに坪井誠軒^{せいいけん} [坪井信道] の門に入り, 4年間切磋琢磨して学問を深め, 京都, 大阪にも遊学した. 天保5年(1834年), 九鬼侯^{くき}の医官となり, 侯に従て再び江戸へ行き, 芝露月町^{しばろうげつちやう} (現港区新橋付近) に住んで医業を開業した. 安政3年(1856年), 幕府の洋書調所^{しらべどころ}の教授となり, 文久2年(1862年)に幕府の役人に列せられた. 明治元年(1868年), 三田に歸り, 明治3年(1870年)に再び東京に出て, 翌明治4年(1871年)6月1日に病没. 著作に, 気海観瀾広義, 遠西奇器述, 理学原始, 地球理説, 舍密読本, 舍密真言, 化学初教, 化学通, 依百乙人身窮理, 藥治溯原, 硝石考, 暴風説, 汽船説がある [1].

1. ここには挙げられていないが, ドイツの化学書の蘭語版からの訳書「化学新書」(1861)を著し, ここでそれまで使われていた「舍密」にかわって「化学」という言葉が初めて使われた. 宇田川榕菴(→第百十六)の舍密開宗と並ぶ江戸時代の化学書の代表とされる.

第百五十八 本間棗軒(ほんま そうけん)

1804-1872 蘭方医, 水戸徳川斉昭の侍医



初の名は資章, 後ち救と改む, 字は和卿, 通称は玄調, 棗軒は其号なり. 母本間氏, 宗家本間資成子なし先生を養子とす. 年十七文政三年, 初めて医学に志し, 原南陽に師事し, 更に笈きゆうを負おいて江戸に出て杉田立卿すぎたりにゅうけいに従い, 西洋医術を学び, 傍ら大田錦城おおたきんじょうに経書を問う時に年十八なり, 居ること三四年未だ之に満足せず, 長崎に遊び, 蘭人シーボルトえいらんに贅しを執る. 先生の志, 漢洋はくそうを博綜し, 其長所を択えらんで以て一家をなすに在り, 而

もとの名は資章, 後に救と改めた. 字(あざな)は和卿, 通称は玄調, 棗軒は号である. 母は本間氏で, 宗家の本間資成に実子がなかったため養子とした. 17歳, 文政3年(1820年), 初めて医学を志し, 原南陽はらなんよう[→第八十九]に師事した. その後さらに学問を深めようと江戸に出て, 杉田立卿すぎたりにゅうけいに西洋医学を学び, 同時に漢学者大田錦城おおたきんじょうに経書けいしょを学んだのは18歳の時であった. 江戸で3~4年学んだが満足できず, 長崎に赴き, オ

して専ら心を外科に用う。遂に京都に來り高階枳園^{たかしなきえん}を師とし、紀伊に赴きて華岡青洲を師とす、時に年二十、其門に止まること数年の後、再び江戸に來り、日本橋樽正町^{くれまさちよう}に於て治術を施す。召されて水戸侯の侍医となり水戸に赴く、医学校教授となり名声駿発す。天保八年十二月瘍科秘録を著わし、安政六年続瘍科秘録成る。学説治術^{こうえき}の人世に鴻益^{せめ}する所多し、之より先き水戸に正奸兩党ありて互に相闘^{せめ}ぐあり、先生正党に属するを以て之に坐せられ幽禁を受く。元治元年先生年六十一にして内科秘録の著あり、明治五年二月八日年六十九疾で卒す。

著す所に右三書の他、傷寒論類積、医方纂要、療治知要、經穴撮要、藥宝雜識保嬰須知、乳癌新割図賦膀胱結石治驗、皇朝医林談、日新医談詩文集等あり。

ランダ人医師シーボルトに入門した。先生の志は、漢医学と西洋医学を広く学び取捨し、その長所を選び取って独自の医学を築くことにあった。そして特に外科の研究に心を用いた。その後京都に出て、高階枳園^{たかしなきえん}に学び、さらに紀伊に赴いて華岡青洲に師事した [1]。20 歳であった。その門に数年留まったのち、再び江戸に出て日本橋樽正町^{くれまさちよう} (現中央区日本橋の一部) に開業した。やがて招かれて水戸藩主の侍医として水戸に移り、藩校の医学教授となつて一躍名声を高めた。天保 8 年 (1837 年) 12 月、瘍科秘録を著し、安政 6 年 (1859 年) に続瘍科秘録を完成させた。その学問と治療は世に大きな利益をもたらした。以前から水戸藩では正党と奸党とが対立抗争しており、先生は正党に属していたため罪に問われ、幽閉された。元治元年 (1864 年)、61 歳にして内科秘録を著した。明治 5 年 (1872 年) 2 月 8 日、69 歳で病没。

著作には、前述の 3 つ書の他、傷寒論類積、医方纂要、療治知要、經穴撮要、藥宝雜識、保嬰須知、乳癌新割図賦、膀胱結石治驗、皇朝医林談、日新医談、詩文集』などがある。

1. 華岡青洲門下で最も優秀ともいわれるが、その著書で門外不出の麻醉藥の調合法を公にして破門された。

第百五十九 竹内玄同(たけのうち げんどう)

1805-1880 蘭方医, 奥医師



名は幹,^{あざな げんどう}字は玄同, 西坡と号す。賀州大聖寺の人, 叔父玄秀の家を嗣ぐ, 玄秀^{よよ}世々越前丸岡侯の医官たり。先生^{ふじばやし ふざん}壮年京都に遊び藤林普山に従いて蘭学を攻め, 後長崎に至りシーボルトに就く。学成りて郷に帰り侍医となる。天保六年江戸に移り, 十三年蘭書翻譯手伝を命ぜらる。安政五年將軍家定公病あり, 乃ち先生及び伊東玄朴, 戸塚静海を挙げて侍医となす, 實に是れ幕府の西洋内科術を採用せるの始めなり。後ち進みて法印に敘せられ^{いせんいん}渭川院と号す, 西洋医学所長を兼ね。文久三年將軍家茂公に従て京都に入る, 既にして公病篤し, 先生夙夜侍奉^{しゆくやじほうじよくそく}側を離れず, 時に適^{たま}ま眼を病めるも治するの暇なく遂に明を失う。慶応二年一月家茂公遂に薨^{こう}ず, 是に於て仕を致し, 懷を風月に寄せて, 復た世事を問ず。明治十三年家に歿す, 享年七十六, 青山梅窓院に葬る。

名前は幹,^{あざな げんどう}字は玄同, 号は西坡。賀州大聖寺(現石川県加賀市)の出身。叔父玄秀の家を継いだ。玄秀は, 代々越前丸岡藩の医師であった。若くして京都に出て, 藤林普山^{ふじばやし ふざん}に師事して蘭学を学び, その後長崎でシーボルトに学んだ。学問を成して郷里に帰り, 侍医となった。天保6年(1835年), 江戸へ出て, 13年(1842年)に蘭書翻譯手伝いに任じられた。安政5年(1858年), 將軍家定が病に臥した時, 伊東玄朴, 戸塚静海とともに侍医となった。これは, 幕府が西洋内科医学を採用した最初である。その後昇進して法印に叙され, 渭川院と号し, 西洋医学所長を務めた。文久3年(1863年)には將軍家茂に従って京都へ入った。間もなく家茂が病状が重くなり, 先生は昼夜を問わず枕元に仕え, またま自身が眼病にかかったものの治療する暇もなく, 遂には失明した。慶応2年(1867年)1月, 家茂が亡くなり, これをもって職を退き, 悠々自適の暮らしに入った。その後は世事に関わらず, 明治13年(1880年), 自宅で没, 享年76歳, 青山の梅窓院に葬られた。

1807-1885 幕末の漢方医



字は立夫^{あざな}、名は立之^{りっし}、枳園^{きえん}と号し、通称養真と呼ぶ。文化四年十一月江戸に生まる、世々医を以て福山侯に仕う、文政四年年十五父を喪い養竹と改む。天保八年二月故ありて禄を失い、相州に落魄^{らくはく}すること十二年その間半ば儒となり、半ば医となりて辛苦せり。弘化五年五月許されて再び江戸に住む、嘉永七年医学館講師となり、医心方を校正せり。慶応四年備後福山に移り、明治五年五月東京に來り文部省の小吏となり、十二年大蔵省に入る。明治十八年十二月六日歿す、享年七十九、池袋丸山洞雲寺に葬す。

著す所に遊相医話、素問攻註、千金方筆記、外台秘要筆記、玉機微義筆録、五臟六腑和名攻、溫和藥宝開蔵図譜、新編本草經義註、桂川医話、禽譜積魚譜あり。

字は立夫^{あざな}、名は立之^{りっし}、枳園^{きえん}と号し、通称は養真。文化4年(1807年)11月に江戸に生まれた。代々医者の家系で、福山藩主に仕えていた。文政4年(1821年)、15歳のときに父を亡くし、養竹と改名した。天保8年(1837年)2月、事情があり禄を失い[1]、相模(現神奈川県)で零落した暮らしを12年間送った。その間、儒学者と医者^{いしや}の両方を半ばとして苦勞を重ねた。弘化5年(1848年)5月、許されて再び江戸に住み、嘉永7年(1854年)には医学館で講師となり、医心方を校訂した。慶応4年(1868年)、備後福山(現広島県福山市付近)に移り、明治5年(1872年)5月、東京へ出て文部省の役人、明治12年(1879年)からは大蔵省に入った。明治18年(1885年)12月6日没、享年79歳。池袋丸山洞雲寺に葬られた。

著作に、遊相医話、素問攻註、千金方筆記、外台秘要筆記、玉機微義筆録、五臟六腑和名攻、溫和藥宝開蔵図譜、新編本草經義註、桂川医話、禽譜積魚譜がある。

1. 歌舞伎に熱中して自ら舞台上で演じたことを咎められた。

第百六十一 権田直助 (ごんだ なおすけ)

1809-1887 幕末明治期の和方医，国学者



名越廼舎と号す，武蔵毛呂本郷の人。年十九，幕府医官野間広春院に就き修学三年，後ち帰郷して開業す。年二十三平田篤胤の門に入り治療を門人に，家事を妻に托し一室に籠り著述に従事す。文久三年上洛し緒紳と交り勤王の道を説く，維新の後監察司知事大学中博士医道御用掛に任せらる。明治四年四月嫌疑の事あり官を罷められ前田邸に幽閉せらる。明治六年相模の阿夫利神社に奉仕す。明治二十年六月八日歿す，時年七十九。著す所に，古医方経験略，大同類聚方考，古医道治則，古医方薬方略，古医道沿革考，くすしの一言，心の柱名越廼舎老後集あり。

名越廼舎と号した。武蔵国の毛呂本郷（現埼玉県毛呂町付近）出身。19歳のとき，幕府の医官である野間広春院のもとで3年間医学を学び，その後郷里へ戻って開業した。23歳のとき平田篤胤〔→第百十五〕の門下となり，治療は門人に，家事は妻に任せ，部屋にこもって著述に専念した。文久3年（1863年），京都に上り，貴人と交流して勤王思想を説いた。明治維新後は，監察司知事，大学中博士，医道御用掛に任じられた。明治4年（1871年）4月，嫌疑をかけられて官職を辞め，前田邸に幽閉された〔1〕。明治6年（1873年），相模（現神奈川県）の阿夫利神社に奉仕した〔2〕。明治20年（1887年）6月8日没，享年79歳。著作に，古医方経験略，大同類聚方考，古医道治則，古医方薬方略，古医道沿革考，くすしの一言，心の柱，名越廼舎老後集がある。

1. 西洋文化と相容れない国学，国学者が政治，社会から排除される風潮の中で，理由なく国事犯の嫌疑をかけられたという〔毛呂山人物伝—権田直助。広報もろやま。2012年12月20日号〕

2. 大山阿夫利神社（現神奈川県伊勢原市）の祭官として，その後三嶋大社（現静岡県三島市）の宮司を務めた〔同上〕

1814-1890 漢方医. 明宮の侍医



名は亮^{りょう}, 祇郷, 又は復庵と号す, 山県少貳^{やまがたしょうに えい}の裔なり。天保元年佐藤一齋に就き経学を修め, 同三年多紀安叔^{た き あんしゆく}に従いて医学を修め, 安政五年江戸瀬戸物街^{せとものまち}に開業す。幾^{いくばく}もなく医学館講師に補せられ, 明治二年大学に於て漢医学を講筵す, 十二年八月明宮^{あきらのみや} 拝診医に挙げらる。明治二十三年一月十三日歿す, 年七十七, 谷中天王寺葬地に葬る。著す所に, 医事啓源, 脚気鈎要, 脚気新論, 鍼灸指掌三病考, 洋方医伝, 脚気摘要, 日本医道沿革考, 医事問答. 杏林余興, 西医指要, 麻疹袖暦, 医案類篇, 癰疾新論, 医穀, 了庵膳稿あり。

名は亮^{りょう}, 祇郷または復庵と号した。山県少貳^{やまがたしょうに}の子孫。天保元年(1830年), 佐藤一齋(いっさい)に師事して経学を学び, 天保3年(1832年)に, 多紀安叔^{た き あんしゆく}[→第百三十七]について医学を修めた。安政5年(1858年), 江戸瀬戸物街(現中央区日本橋の一部)で開業した。まもなく医学館の講師に任じられ, 明2年(1869年)には大学で漢方医学を講じた。明治12年8月, 明宮^{あきらのみや}[後の大正天皇]の担当医に任じられた。明治23年1月13日, 77歳で没。谷中天王寺の墓地に葬られた。著作に医事啓源, 脚気鈎要, 脚気新論, 鍼灸指掌三病考, 洋方医伝, 脚気摘要, 日本医道沿革考, 医事問答. 杏林余興, 西医指要, 麻疹袖暦, 医案類篇, 癰疾新論, 医穀, 了庵膳稿がある。

第百六十三 林洞海 (はやし どうかい)

1813-1895 蘭方医, 奥医師, 陸軍軍医総監



名は彊^{あざな}, 字は健卿, 洞海は其号なり, 後ち通称とす, 別に存誠齋, 梅仙, 茶農の号あり. 文化十年三月三日豊前篠崎村に生まる, 年十三, 軒岐(けんき)の術を修め, 天保三年年二十, 江戸に來り足立長雋^{あだちちょうしゆん}の門に入り蘭医方を学ぶ. 佐藤泰然^{たいぜん}長崎に到るとき伴うて同行す, 二年を経て再び共に江戸に歸れり, 時に天保十三年, 年三十一なり. 泰然佐倉侯^{きゆうろう}に召さるゝとき, 其長女子を先生に嫁し, 泰然の旧廬に業を開かしむ. 万延元年幕府に召され奥詰^{おくづめ}医師となり翌二年法眼に敍せらる. 明治三年大学中博士^{ちゅうはかせ}となり, 大阪府医学校長となる, 後ち権大典医^{ごんのたいてんい}となり, 皇太后付を命ぜられ, 陸軍々医総監となる. 明治二十八年一月二十三日偶偶肺炎に罹り, 二月二日遂に歿す, 享年八十三, 本郷区駒込吉祥寺に葬る. 著す所に, 宏篤児薬性論内科簡明, 成誠齋歌集, 目代耳代, 茶農漫録, 衣裳私説あり.

名は彊^{あざな}, 字は健卿. 洞海^{どうかい}は号. 後には通称とした. 別号に存誠齋, 梅仙, 茶農. 文化10年(1813年)3月3日, 豊前国篠崎村(現北九州市小倉区)に生まれる. 13歳のときに医学を修め, 天保3年(1832年), 20歳にして江戸に出て, 足立長雋^{あだちちょうしゆん}に入門して蘭方医学を学んだ. その後, 師の佐藤泰然^{たいぜん}が長崎に赴いた際に同行して, 2年後に再び共に江戸へ戻った. 天保13年(1823年), 31歳であった. 泰然が佐倉藩に召し出されたとき, その長女を先生に嫁がせ, 泰然の旧宅で開業させた. 万延元年(1860年), 幕府に召されて奥医師となり, 翌年には法眼^{ほうげん}に叙せられた. 明治3年(1870年), 大学中博士^{ちゅうはかせ}となり, 大阪府医学校長に任ぜられる. のちに権大典医^{ごんのだいてんい}となり, 皇太后付きの医師を命じられ, さらに陸軍軍医総監を務めた. 明治28年(1895年)1月23日に肺炎を患い, 2月2日逝去, 享年83歳. 墓は東京本郷区駒込の吉祥寺にある. 著作として, 宏篤児薬性論内科簡明, 成誠齋歌集, 目代耳代, 茶農漫録, 衣裳私説がある.

第百六十四 浅田宗伯 (あさだ そうはく)

1815-1894 最後の漢方宮中侍医



名は^{あざな}惟常，字は^{そうはく}識此，通称宗伯，栗園は其号なり，文化十二年生まる。年十三，松本藩儒臣木沢^{てんげい}天倪に詩文を受け，後出でて^{たかとう}高遠藩に遊び中村中^{ちゅうそう}倮に就て儒医の要義を問う，年十八，京都に行き中西，吉益，川越の諸門を叩き，年二十二江戸に來り，^{もとやすそうえん}本康宗円の門に入る，^{たきさいてい}多紀^{こじまがっこ}菑庭，^{きたむらこうそう}小島^{しんしや}学古，^{きとむらこうそう}喜多村^{しんしや}栲窓と親炙す，安政五年疫痢流行す，先生此歳病を診する凡そ二千九百九十三人なりき。六年幕命により医心方を校訂し，文久元年

名は^{あざな}惟常，字を^{そうはく}識此，通称を宗伯，号を栗園と称した。文化12年(1815)生れ。13歳のとき，松本藩の儒臣木沢^{てんげい}天倪に師事して詩文を学んだ。その後，^{たかとお}高遠藩に遊学し，中村中^{ちゅうそう}倮に就いて儒医の修行をした。18歳で京都に出て，中西，吉益，川越らの諸家に師事した。22歳で江戸にのぼり，^{もとやすそうえん}本康宗円に入門した。宗円のもとで，^{たきさいてい}多紀^{こじまがっこ}菑庭〔→第百三十七〕，^{きたむらこうそう}小島^{しんしや}学古〔→第百六十五〕，^{きとむらこうそう}喜多村^{しんしや}栲窓らと親しく交わった。安政

徴士^{ちようし}に列せらる。慶応元年八月仏国公使レオン・ロセツ病あり衆治効なし、先生招かれ治療を施して効を奏す。幕府賞するに白銀二十錠^{りんまい}を以てし、仏帝亦賞を贈れり。慶応二年世俸三十口廩米^{ほうげん}二百苞を受け、法眼に叙せらる。明治四年職を辞し牛込に卜居す、明治十二年明宮^{あきらのみや}尚薬医となれり、二十一年五月東宮侍医^{たちま}を辞す、時に年七十四。二十七年二月病家より帰り忽ち病を獲、三月十六日家に歿す、享年八十二。

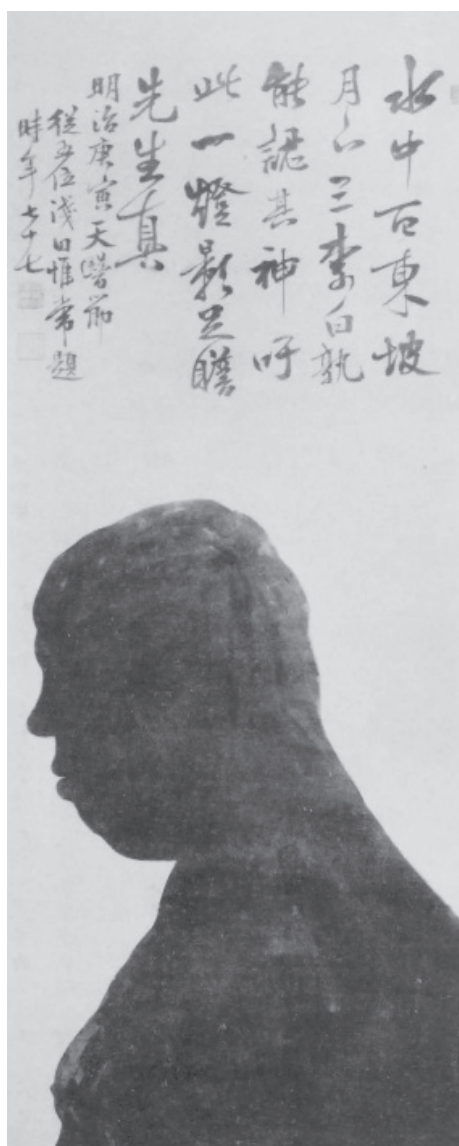
著す所に、皇国名医伝、杏林風月、先哲医話、傷寒弁術、脈法私言、雑病弁要、傷寒論識、雑病論識、古方薬註、橘窓書影、牛渚漫録医学典型、暴瀉須知、傷寒翼方、雑症翼方読史間話、治瘰編、警医紀事、原医、西医指要、脚気提要あり。

5 年 (1858 年)、疫痢が流行したとき、この年に延べ 2993 人の患者を診療した。翌 6 年には幕府の命により医心方を校訂し、文久元年 (1861 年) に徴士^{ちようし}に列せられた。慶応元年 (1865) 8 月、フランス公使レオン・ロセツ [Léon Roches, レオン・ロッシュ] が病にかかり、他の医師は治せなかったが、先生が招かれて治療に成功した。これにより幕府から白銀 20 錠を与えられ、さらにフランス皇帝からも賞を贈られた。慶応 2 年には禄高 30 口、廩米^{りんまい} 200 俵を受け、また法眼^{ほうげん}に叙せられた。明治 4 年 (1871 年) に職を辞し、牛込に居を定め、明治 12 年 (1879 年)、明宮 (あきらのみや) [後の大正天皇] の侍医となった [1]。明治 21 年 (1888 年) 5 月、東宮侍医を辞した。74 歳であった。明治 27 年 (1894 年) 2 月、患家から戻って急病となり、翌 3 月 16 日に自宅で没した。享年 82 歳。

著作に、皇国名医伝、杏林風月、先哲医話、傷寒弁術、脈法私言、雑病弁要、傷寒論識、雑病論識、古方薬註、橘窓書影、牛渚漫録医学典型、暴瀉須知、傷寒翼方、雑症翼方読史間話、治瘰編、警医紀事、原医、西医指要、脚気提要がある。

1. 漢方医として、最後の宮中侍医となった。今に伝わる浅田飴[®]は、1887 年に浅田宗伯の処方をもとにその書生であった堀内伊三郎が「御薬さらし水飴」として製造販売し、1889 年に浅田飴と改称された。

1797-1849 医学館の考証派医師



字は学古^{がくこ}，名は尚質^{なおかた}，通称喜庵，後ち春庵と改む，宝素はその号なり。寛政九年生まる，母は前野蘭化の娘なり。享保三年〔享和の誤〕九月家督を嗣ぎ，文化十年十月医学館薬調合役を命ぜられ，文政四年四月二日番医師となり，天保六年八月十六日奥詰に進み，同七年十二月十六日法眼^{ほうげん}に叙せらる，同十一年三月二十四日奥医師に進む，弘化三年五月十二日医学館世話役を命ぜられ，嘉永元年十二月七日歿す，享年五十二。

宝素一日伊東三溪^{いとうさんけい}を訪う，三溪偶々浴を進む，宝素浴^{おわ}畢り燈前に佇立すその真影^{しそう}紙窓の間に映す，三溪直ちに筆を下して此図を作れり。

字は学古^{がくこ}，名は尚質^{なおかた}，通称は喜庵で，のちに春庵と改めた。宝素は号である。寛政9年(1797年)生れ，母は前野蘭化〔→第七十〕の娘である。享和3年(1803年)9月に家督を継ぎ，文化10年(1813)10月，医学館の薬調合役に任じられた。文政4年(1821年)4月2日，番医師となり，天保6年(1835年)8月16日に奥詰に進み，同7年(1836年)12月16日に法眼^{ほうげん}に叙せられた。天保11年(1840年)3月24日には奥医師に進み，弘化3年(1846年)5月12日には医学館世話役を命じられた。嘉永元年(1848年)12月7日没，享年52歳。

ある日伊東三溪^{いとうさんけい}を訪ねたところ，三溪がたまたま入浴をすすめた。宝素は入浴を終えて灯火の前に立ったが，その姿がちょうど紙障子に影のように映し出された。これを見た三溪はすぐに筆を取り，この図を描いたという。